

外来語研究の 新展開

Jinnouchi Masataka

陣内正敬

Tanaka Makiro

田中牧郎

Aizawa Masao

相澤正夫

▼
編

おうふう

外来語研究の 新展開

Jinnouchi Masataka

陣内正敬

Tanaka Makiro

田中牧郎

Aizawa Masao

相澤正夫

▼

編

おうふう

まえがき

日本語の外来語研究は、西洋由来の語彙が急速に増加した大正時代ごろから盛んになった。西洋文化の流入のありように関係づけて、原語を探ることから始まり、原語と日本語の語形や意味のずれなどについての研究が盛んに行われた。新村出、榎垣実、荒川惣兵衛などの研究が外来語研究の基盤を築いた。第二次世界大戦後は、英語由来の外来語ばかりが急増していくのに伴い、原語を調べる必要性よりも、英語からどのようにして日本語に入るのか、それはどのような価値を伴って日本語の語彙になるのかといった関心が強くなった。戦後設置された国立国語研究所を中心に、日本語の語彙の中で外来語がどの程度の位置を占めるのかについても特に計量的な側面からの説明が進んだ。

以上のような、国語学・日本語学の分野を中心とした伝統的な流れの中にある外来語研究は、現在ますます盛んである。近年は、言語コーパスを用いるなど研究の方法が精密化してきているほか、中国語や韓国語における外来語と比較したり、日本語から外国語に出て行く外行語と対比したりと、研究の視野も大きく広がってきている。こうした言語文化論的なアプローチによる外来語研究は、今後さらなる成熟が期待される。

ところで、近年は、言語文化論的アプローチとは異なる視野に立った研究も目立つようになってきている。それは、外来語が取り込まれる社会的な事情を探ったり、その背景にある人々の外来語への意識をとらえたり、外来語の増加が引き起こしている言語問題を明らかにしてその解決を目指したりする研究である。「外来語の氾濫」と言われるようにその急増ぶりに眉をひそめる世論は以前から強く、マスコミでも外来語の扱いに独自の工夫を行ってきたし、外国人が日本語を学んだり日本人が英語を学んだりする際に外来語が障壁になることを問題視する意見も以前からあった。しかし、人々の言語生活に深く関わる語彙としての外来語を、言語研究として本格的に対象化するようになったのは、実はこの10年ほどのことである。

こうした言語生活論的なアプローチが前面に出てくるようになったきっかけ

には、国語審議会が外来語の過度な使用に注意を喚起し、国立国語研究所が外来語の言い換えを提案するなど、公的な機関が具体的な外来語対策を打ち出すようになったことがある。そして、その背景には、日本社会の国際化や情報化によって英語の比重が高まる一方で、高齢化や格差社会化などによって外来語弱者が増えていることなど、社会構造の急激な変化がある。このような流れは今後もさらに進行すると考えられるから、言語生活論的アプローチによる外来語研究は、いっそう重要なものとなっていくだろう。

本書は、近年急速に成熟し視野を広げた観のある外来語研究の分野を広く展望し、外来語をめぐる新しい日本語研究の姿を提示しようとするものである。そのため、外来語研究のさまざまな領域で活躍している第一線の研究者に寄稿を依頼するとともに、全体を、言語文化論的アプローチと言語生活論的アプローチの二部に分け、冒頭に全体を展望する総論を掲げる形で取りまとめた。

言語文化論的アプローチには、構造、歴史、語彙交流を扱う2編ずつを置いた。言語構造論的な外来語研究は、従来、語形や意味を原語と対比しながら分析するものが多かったが、本書におさめた金論文・茂木論文は、いずれも日本語の語彙構造、文法構造の中での外来語の位置を、コーパスも駆使して見定めようという視座からの研究である。また、言語史的観点での外来語研究は、これまでは、外国語の語彙から日本語の語彙へという語史的な関心が強かったが、米川論文・小川論文は、外来語を受容する日本文化の問題へと射程を広げ、言語史と文化史との融合を試みている。語彙交流の研究は、近年とくに盛んになってきているものだが、外行語を扱う井上論文は、インターネットの特質を生かして語彙の世界進出をとらえる手法を提案し、中国語の外来語状況を記す荒川論文は、漢字を媒介とした日中の語彙接触が、それぞれの言語の近代史に深く影響を与えている様子を浮かび上がらせている。

言語生活論的アプローチには、社会、マスコミ、教育を論じる2編ずつを配した。国立国語研究所が外来語の言い換え提案を行った背景や実施の難しさを解説する相澤論文は、日本社会における外来語問題の本質を考えさせられるものになっており、意識調査に基づいて日韓の外来語受容の態度を比較する梁論文は、人々の意識が社会における外来語の位置を決めることを教えてくれる。

早くから外来語問題への対応策を蓄積してきたマスコミの外来語について、関根論文と塩田論文では、語彙と表記の両面から幅広い問題を分かりやすく整理している。そして、教育に関して、中山論文は、原語と関連付けて外来語を扱う日本語教育を批判し、日本語の語彙として教えるべきことを提唱し、田中論文は、外来語の性質を類型化して国語教育で積極的に扱っていくべきことを主張している。

このように、第一部・言語文化論的アプローチは、従来の研究を踏まえつつも、方法を磨き射程を広げることで、豊かに成熟している外来語研究の現在の到達点を示す内容になっている。また、第二部・言語生活論的アプローチは、これまで十分に目が届いているとは言い難かった言語生活における外来語の問題を解明し、その改善策を提示していく研究の重要性を示す内容になっている。冒頭に掲げた総論としての陣内論文は、そうした言語文化と言語生活の両面での外来語研究の意義と可能性について考えるための導きとして、最初に読んでいただければ幸いである。

本書が、外来語研究の現在を知るための見取り図として役立つと同時に、この分野にさらなる展開を呼び起こす起爆剤となることを願うものである。

編 者

外来語研究の新展開 目次

目 次

まえがき1

総 論

外来語研究の意義（陣内正敬）11

1. 南蛮菓子エピソード
2. 文化の混種性と日本人
3. 外来語研究の意義
4. おわりに

第1部 言語文化論的アプローチ — 構造・歴史・語彙交流 —

————— (構造) —————

外来語の基本語化（金愛蘭）29

1. 20世紀後半における外来語の増加
2. 外来語の基本語化
3. 抽象的な外来語の基本語化
4. 増加傾向を見せる外来語
5. 基本語化する外来語とその類義語
6. 意味の拡大（多義語化・上位語化）
7. 用法の拡大（形式名詞化）
8. 基本語化の要因

文法的視点からみた外来語

— 外来語の品詞性とコロケーション —（茂木俊伸）46

1. はじめに
2. 外来語の文法的性質
3. 程度名詞と形容詞のコロケーション
4. コーパスを用いた外来語程度名詞の探索的分析
5. おわりに

————— (歴史) —————	
言葉の西洋化－近代化の中で－(米川明彦)	62
1. 日本の近代化と外来語研究	
2. 日本モダニズムと外来語	
3. おわりに	
キリシタン語彙の歴史社会地理言語学	
－ oratio オラシヨを例にして－(小川俊輔)	78
1. はじめに	
2. オラシヨの歴史	
3. まとめ	
————— (語彙交流) —————	
日本語の世界進出－グーグルでみる外行語－(井上史雄)	97
1. 外行語・外来語と借用語	
2. 外行語の世界分布データ	
3. 外行語の国家順位と文字の制約	
4. 外行語の世界順位	
5. 外行語の語彙論的性格	
6. アメリカ日系人調査との対応	
7. 外行語の性格 結論	
中国における外来語受容の歴史的・地域的変異(荒川清秀)	112
1. はじめに	
2. 少ない音訳外来語	
3. 半意識	
4. 音訳から意識へ	
5. 音訳と意識の合体	
6. 外国地名と人名	
7. 台湾、香港の音訳語の特徴	

目 次

8. 漢語訳語の創られ方—直訳と中国的訳
9. 意識から音訳への逆流
10. 日本外来語の問題
11. おわりに

第2部 言語生活論的アプローチ—社会・マスコミ・教育—

————— (社会) —————

- 『『外来語』言い換え提案』とは何であったか (相澤正夫) …………… 133
1. はじめに
 2. 「外来語の氾濫」という言語問題—何を挙げたのか
 3. 「外来語」言い換え提案—どのように対処したのか
 4. 公共哲学と福祉言語学—今後の研究活動に向けて
 5. おわりに

日本語と韓国語の外来語の受容意識

- イメージ調査の分析— (梁敏鎬) …………… 148

1. はじめに
2. 歴史的な背景と外来語の受容
3. 実態調査による外来語の受容
4. 外来語の受容とイメージの変化
5. おわりに

————— (マスコミ) —————

- 新聞の外来語はどのように生まれるか (関根健一) …………… 168

1. 二つの側面
2. そのまま使うか言い換えるか
3. 新聞は外来語を多用しているか
4. 拡大する意味・用法

5. 語形のゆれ

放送の外来語－傾向と対策－（塩田雄大）	185
---------------------------	-----

1. テレビの外来語は「多い」のか
2. 外来語使用／不使用の問題
3. 外来語の発音・表記の問題

 （教育）

日本語学習者の外来語意識

－日本語教育における外来語教育を考える－（中山恵利子）	207
-----------------------------------	-----

1. 日本人の外来語意識
2. 分析の対象
3. 日本語学習者の外来語意識
4. 日本語教育における外来語教育
5. おわりに－原語主義からの脱却を求めて

国語教育における外来語

－コーパスによる類型化を通して－（田中牧郎）	224
------------------------------	-----

1. はじめに
2. 国語教育における外来語の扱いの現状
3. コーパスでとらえる外来語の位置
4. 国語教育での外来語の扱いを考えるために
5. おわりに

あとがき	243
------------	-----

編者・執筆者紹介	245
----------------	-----

外来語研究の意義

陣内 正敬

キーワード：外来語 言語文化 言語生活 日本人論 混種文化

1. 南蛮菓子エピソード

外来語研究の意義を論ずる前に、外来文化受容の一側面として、南蛮菓子に関するエピソードを紹介したい。

そのひとつは、シルクロードならぬ「シュガーロード」という言葉の存在である。江戸時代の長崎街道（長崎市～北九州市：国道34号線+国道200号線）を指して、「砂糖の行き来した路」の意である。当時は鎖国時代であり、長崎（出島）で輸入された白砂糖や南蛮菓子の製法指南書などにより、他の街道には見られない独特の菓子文化が形成されたという。旧長崎街道の主要な都市では当時からの南蛮菓子やそれをアレンジした多様な菓子が製造販売されており、また、古文書に書かれた材料や製法をもとに一度は製造を中止した南蛮菓子を新たに復活させるという動きもある（佐賀・鶴屋菓子舗の「肥前ケシアド」など）。八百（2011:12）によれば、シュガーロードという言葉は、1987年に新聞紙上ですでに用いられ、その後、河村（1995）、村岡（2005）などを通して一般の目に留まることになったという。いずれにしろ、この語の造語・普及により、広くは歴史学、狭くは、菓子文化についての議論が活発になったことは疑いのないことである。

一方、全国菓子博覧会という名の全国規模の菓子展示・品評会が約5年に1回開催されており（全国菓子工業連絡会HP、以下「全菓連」）、前回2008年には兵庫県の姫路市で行われた。世界遺産の姫路城をお菓子で作って展示するという触れこみもあり会場は連日賑わった。筆者もそれを見ることを第一の目的に入場してみたが、そのついでに全国の都道府県の展示コーナーにも足を運んでみた。実にさまざまな菓子に出会う中で、ひとつの傾向のあることに気付い

た。それは、カステラが多くのコーナーにあったことである。カステラはいわば全国区であり、どの地域の人たちにも好まれていることがわかった。同類の南蛮菓子「丸ボーロ」（佐賀）や「鶏卵素麺」（博多）などと比較するとその知名度は群を抜いている。また、いわゆる棹状のカステラ以外にも、「カステラ饅頭」「カステラ煎餅」「カステラ巻き（かす巻き）」などのカステラ系お菓子を加えると、その種類は相当な数に上る。

かくも日常化したカステラは、周知のごとく、安土・桃山時代にポルトガル人、スペイン人がもたらした、いわゆる南蛮菓子のひとつである。当時は南蛮文化が流行し、上層階級を中心にいわゆる南蛮趣味が愛好された時期である。それまで海外からの受容文化と言えどもっばら漢文化だった日本に、それとは異質の文化が初めてもたらされたのであり、このポルトガル人、スペイン人のもたらした南蛮文化は「西洋の衝撃」と言えるものであったろう。カステラについていえば、周知のとおり、「カスティリアのパン」、あるいは「カスティリアのボーロ」が縮まってカスティリアだけが残り、さらにそれがなまってカステラとなったものだが、材料といい製法といい、当時としては非常に珍しいお菓子であった。元来西洋起源でありながらも、安土・桃山から江戸を経て400年ほど経つうちに土着化し、もはや日本の菓子文化の中で、もっとも日常的な位置を占めるに至っている。

以上、日本の菓子文化の時代性と地域性に関わるエピソードを取り上げたが、これらは「外来語文化」という点からも興味深い。ここでの外来語文化とは、外来のものごとそのものではなく、その名称としての外来語関わった言語文化をいう。たとえば、菓子文化に関して言えば、日本には「和菓子」「洋菓子」という大きな分類があるが、カステラを始めとする「南蛮菓子」はいずれに属するか、ということを考えてみる。全菓連によれば、原則は「和菓子」に入れるが、必ずしも「洋菓子」から排除するものではない、という曖昧な判断が述べられている。この曖昧さは南蛮菓子の名称という点から眺めると、まさにその本質が見えてくる。おもな南蛮菓子の例を、現在一般に流通している名称を表記によって分類すると、1) 漢字・かな表記（金平糖 *confeito*、鶏卵素麺 *fios de ovos*、かす巻き）、2) カタカナ表記（カステラ *castella*、タルト *torta*）、3) 混種的表記（丸ボーロ *bolo*、ザボン漬 *zamboá*）の3種類になる。

すなわち、南蛮菓子の中には、1) 原語を音訳、意識して、いわば和語化したもの、2) カタカナ表記による外来物扱い、の2つのタイプが並行して存在するのに加え、3) 名称そのものが和語・漢語とカタカナ語の混種語となるものがある。名称からみた南蛮菓子は、まさに、「あられ」「饅頭」など専らひらがなと漢字で表記される「和菓子」名称と、専らカタカナで表記される「ケーキ」「チョコレート」などの「洋菓子」名称の間を感じさせるものとなっている。南蛮菓子は外来語文化を実感できる日常卑近な例である。

2. 文化の混種性と日本人

前節、南蛮菓子のエピソードから言えることは、菓子文化の混種性は現代の菓子名称の中に表象されており、またそれは、その名称を書き表す文字の字種からもうかがえるということである。言葉はあらゆるものごとのラベルとしてあるわけだから、このことは文化全般についても言える。

日本文化が、およそ、江戸期までの在来文化に明治期以降の西洋文化が混じり合った「雑種文化」ということについて、加藤（1955）が指摘している。加藤は、日本文化は根本が雑種であり、英仏や中国、インドなどの枝葉が雑種であるのとは異なる、とする。そもそも長い人類の歴史の中で純粋文化というのは稀有なことであるが（純粋文化であるためには、完全に孤立した社会か、常に一方的に文化を発信し続ける社会が必要である）、文化の中心部と周辺部とでは、雑種の質が異なるとする考え方である。

加藤の雑種文化論に対しては、同時代人で、生態学的観点から文明・文化論を展開した梅棹忠夫も加藤に賛成し、次のように述べている（梅棹 1967:78）。

現代日本文化を形づくっている諸要素の中には、西欧伝来のものがおびただしい程度にはいつている。明治以来の、日本近代化にともなって、そういう要素が、とうとうとながれこんだ。それをもはや、無視することはできない。その点をどうあつかうか、そこが、現代日本文化論の、かなめの点になるところだと思う。

ところで、雑種というのは異種のものの掛け合わせによる2次的な存在で

あるから、どこか純粹種に劣るという先入観がある。「雑種」という言葉は、不当にマイナスのイメージを喚起すると思われる。加藤自身は「雑種ということばには、良い意味も悪い意味も与えない」（加藤同：9）としているが、一般的にはそうは受け取らない。そこで文化論においては「雑種」ではなく「混種」という、より中立的な言葉を用いてはどうか。いろいろな要素が混じり合った結果としての日本文化という趣旨である。加藤の用いた「雑種」という言葉については、青木（2011:28）でも言及されており、そこでは日本文化の特徴を指して、「混成性」ないし「混成文化」という言葉が提案されている。この言葉は現代日本の衣食住すべてを見渡した上で、1980年代から用いてきた用語であるらしい。もちろん「混成」でも構わないが、どのような種類の文化であるのかという点を強調する用語として、以下では「混種」（「混種語」とも相性がいい）という言葉を用いることにする。

さて、文化の混種性、あるいは混種文化が出現するには、その社会が優勢な文化の周辺部に位置することが必要である。あまり中心に近くてもいけないし、あまり奥まってもいけない。そのような状況で複数の優勢な文化の狭間にあることが重要である。その意味で日本は地政学的に、程よく中華文明から隔たっていたということが言えるであろう。陣内（2007）では、現代日本社会や日本語を観察し、「日本列島はハワイ沖に達している」という比喩を用いたが、これは現代日本語における外来語の急増に象徴される日本の社会・文化の姿を表そうとしたものであった。周辺文化にとっては、どの文化要素をどの程度持っているかは時代により変化するわけで、その意味で、現在の日本列島は太平洋を西から東へと漂流していると考えられるのである。

周辺文化に関して、内田（2009）の「辺境人論」が参考になる。内田の言う「辺境人」とは、次のような人である（内田同：44）。

ここではないどこか、外部のどこかに、世界の中心たる「絶対的価値体」がある。それにどうすれば近づけるか、どうすれば遠のくのか、専らその距離の意識に基づいて思考と行動が決定されている。そのような人間のことを（略）「辺境人」と呼ぼうと思います。

そして、「とことん、辺境人で行こう」（内田同：100）という、いわば「辺境人の勧め」を展開している。古来よりこれまでの日本人、日本語、日本文化を眺めると、まことに的を射た主張だと思う。また、この主張には、かつて加藤（1955）が提示した「雑種性の肯定」につながるものを感じる。

さて、外来語は、外来の物事を外来の物事として意識させる効果を持つ（コンビニ、トイレなど、いわば和語化した外来語は除く）。日本語の語彙の中で外来語という語種が増加しているということは、それだけ在来のものではない、（西洋起源の）外来のものとして意識したい（意識させたい）という欲求があるのだろう。例えば、最近では「グローバル」という外来語を聞かない日はないが、「国際的」「世界的」では伝えられない「舶来性」があるのだろう。また、直近の出来事としては、東大が先導して提案している大学の秋学期入学に関して、日本の場合3月に卒業して秋の入学までおよそ半年の待機期間のことを、「ギャップターム」と呼んでいる。イギリスの「ギャップイヤー」（gap year）に倣った命名だそうだが、これなども、「待機学期」で良さそうなものをわざわざ外来語で言うのは、外に絶対的権威を求める心理からくるものであろう。「ピタゴラスの定理」、「ニュートンの万有引力の法則」、「ロックの人権思想」、「レヴィ・ストロースの構造主義」など、圧倒的な西洋思想の学識と権威は、主として教育を通して子供のころから日本人の背骨に染み込んでおり、欧米人の名前の付いた学説があると無意識かつ盲目的に納得してしまうきらいがある。これが上述の例のような固有名詞に留まらず、グローバル、ギャップタームなどの普通名詞の新語（借用外来語）を作り出すところまで及んでいるということである。

このような外来語現象を見るにつけ、柳父章（1982）の「カセット効果」（宝石箱効果）を連想せざるを得ない。宝石箱はその中に入っているものがわからなくても（何も入っていないかもしれない）、中には何か素晴らしい宝石があるに違いないと思わせるものを持っている。つまり、言葉の姿かたちを宝石箱に見立てた命名である。柳父は「社会」「科学」など幕末から明治期にかけて多数造語された翻訳借用としての「和製漢語」に対してこの効果をみたが、現代日本語においては、外来語がこの役を担っている。そして辺境人であればあるほど、このカセット効果は威力を発揮するものなのである。

文化の混種性を語形成的に論じるという意味で、外来語が含まれる混種語について考えたいと思う。たとえば、「プロ野球」「カス巻き」「脱サラ」など典型的な混種語はもとより、「がんばリズム」（頑張る＋ism＝頑張り主義）、「～しまくリング」（～しまくる＋ing＝しまくっている）、「ノー政」（no 政＝無策の農政）など、時代の流行語や駄洒落、一時的な若者語まで、その取り込み方はさまざまである。また、文法的にみると、以前は自立語としての外来語使用であったものが、近年では、後半の3例のように、付属語用法も現れてきた。冒頭で紹介した和洋折衷のお菓子があるように、ことばの世界でも和洋折衷語が多様に存在し、またこれは「プロ野球」のようにごく自然に造語され実用的、機能的に使用されているものと、「がんばリズム」のように、意図的に造語され、広告的、装飾的に使用されているものがある。日本文化の混種性や周辺性を考えたときに、このような言語現象は当然のことであって、日本人はむしろ、このような混種化を志向し、さらにはそれを楽しむ民族性を持っているのではないかと感じる。

混種語があまり抵抗なく受け入れられることについては、加藤（1975）による日本文化の累加性という考察が参考になる。加藤は日本文学史の特徴として、「一時代に有力となった文学的表現形式は、次の時代にうけつがれ、新しい形式により置き換えられるということがなかった。新旧が交替するのではなく、新が旧につけ加えられる。」（加藤同：14）という。そしてさらに、「今日なお日本社会に著しい極端な保守性（天皇制、神道の儀式、美的趣味、仲間意識など）と極端な新しい物好き（新しい技術の採用、耐久消費財の新型、外来語を主とする新語の濫造など）とは、おそらく楯の両面であって、同じ日本文化の発展の型を反映しているのである。」と述べている（加藤同：16）。おそらくこのような累加性が、日本語においては、和語に漢語、さらに外来語を併存させており、また混種語というちゃんぽん語を融通無碍に作り出す要因となっていると思う。これは、表現の論理性よりは、表現の彩を重視する日本人の志向性と関わりがあるだろう（後述）。

3. 外来語研究の意義

以下の議論では、外来語研究の意義や目標を考えたい。これについては、陣

内（2007）で設定した外来語研究の枠づけとも関連する。本論では、これまでの研究では手薄であった分野、つまり、外来語から見えてくる日本人や日本文化の考察に重きを置きたい。

さて、外来語研究の意義には、大きく二つあると思う。

- 1 言語文化論的意義
- 2 言語生活論的意義

おそらくこの二つは、外来語に限らず、どのような言語現象を研究対象にしようとして存在しているものであって、その選択やバランスは研究者の関心に依るところが大きい。また一つの研究が両方のものを含んでいる場合もある。以下、それぞれについて説明していく。

3.1. 外来語研究の言語文化論的意義

ここでの言語文化論とは言語が関わった文化を論じるということである。またここでの文化の意味は、日本人、日本文化、日本語などおよそ日本語が関与した広範なものを含む。また方法としては、日本人とはどういう人間か、日本文化の型は何か、日本語の構造はどうなっているか、といった真理探究型の研究である。この中でも、外来語が絡んだ現象の言語文化論的アプローチとしては、次のふたつの下位分野が設定されると考える。

- (1) 民族性の解明
- (2) 言語特性の解明

3.1.1. 民族性の解明

民族性（国民性）の解明というのは、外来のものが入ってきたときに、それを受け入れる集団がどのような反応をするかによって、その民族性を明らかにすることである。これは、以下に引用する加藤（1975:533）の提唱する3つの方法の3番目に当たるものである。

土着の世界観を発見する方法には三つがある。第一、外部からの影響がおよばなかったと推定される古代文献（の部分）を検討すること、第二、

地理的に（離島）、または社会的に（地方の大衆）、外国文化の影響の少ない集団の表現を観察すること、第三、外来の体系の「日本化」の過程を分析し、「日本化」の特定方向から、「日本化」を実現した土着世界観の力の方向を見つけることである。

現代は世界的に「英語化」の波が押し寄せている時代であるが、その影響への反応に関しては、さまざまな事例が観察される。たとえばフランスのように、バ＝ロリオル法（1975年成立）やトゥーボン法（1994年成立）という外来語規制法をつくり、フラングレ（仏製英語）を始めとする英語化（Anglicism）の波を阻止しようとする国があるかと思えば、日本のように、戦後ほとんど野放し状態が続き、21世紀に入ってからやっと外来語の検討を開始した例もある（国立国語研究所2006など）。日本は英語化については基本的に抵抗がなく、これはドイツでも同様である。

中国語の受け入れ方法には音訳、意識いずれもあるが、基本的には意識（＝翻訳借用）という手段を用いている。日本人が辺境意識で米欧のものを「有難く」受容するのに対し、中国人は、おそらく歴史文化的優越感もあり、米欧文化（とくに米文化）の侵入に対しては、それを文化の根幹的なものではなく、便宜的・実地的なものとしてとらえていると感じられる。英語化に対しては、フランスと中国（いずれも第2次大戦の戦勝国側）が対抗的あるいは超然としているのに対し、日本やドイツ（いずれも敗戦国側）が無抵抗に受け入れているのは、たまたま戦後の政治・軍事体制と奇妙に一致するが、本質はそうではなくて、従来から言われている歴史意識のせいであろう（中華思想）。

一方、韓国はまた一味違う反応をしている。ハングルという表音文字を使用することから、たとえば英語をそのまま外来語的に導入する（単純借用）のは容易であり、事実その傾向がある。試みに、佐々木瑞枝（監修2001）でリストされている日本語と韓国語の外来語語彙の対応を調べてみると、実に8割以上が同一である（陣内2008）。ただし、韓国では民族意識が強く、言語純化運動もなされており、日本ほど無造作に（節操なく）単純借用はしない風土がある。以上のように外来語化（英語化）に対する反応は、民族性、国民性によって多様である。

また、次のことはさらなる吟味・検討を要することであるが、外来語化観察を語彙レベルで行うことによって、また違った日本人の民族性が見えてくるのではないかと思われるふしがある。外来の概念がどのように受容されたかを検討するために、まず、幕末から明治にかけて多数造語された和製漢語の中の「文化」という言葉について考えたいと思う。

柳父（1995）によれば、「文化」にはふたつの意味が混在しているという。ひとつは、西洋語の翻訳語として使われる以前から漢籍で用いられていた「文治教化」のことで、いわば「武」に対する「文」という意味である。もうひとつは、ドイツ語 Kultur の訳語で、大正時代から用いられたという。これは現在、文化人類学で定義されるような意味での「文化」（たとえば、タイラー（1962）の「知識、信仰、芸術、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合総体」など）であり、現代日本人の抱く意味とほぼ同様である。もっとも、現在一般には英語からの訳語と意識され、「文化」の原語は「カルチャー」と意識されている。

さて、柳父（同：54）によれば、「文化」という言葉は、大正時代に「文化住宅」「文化学院」「文化生活」「文化鍋」「文化饅頭」など、さまざまなものに使われたという。この現象は、抽象的な意味の言葉が、「近代的」「先進的」という修飾語として、かなり具体的で日常的なものにも利用されたという意味でおもしろい。現代語の「カルチャー」はどうであろうか。カルチャー・センター、カルチャー・スクール、カルチャー・アワーなど、もっぱら「教養」という意味で、それがやはり具体的な事物を修飾する形で使われている。日本人は、外来の抽象概念を受容してもそれを具体的、実践的なもの（技術や技能）へと転換する傾向があるようだ。これがいわゆる「和魂洋才」（ないし「和魂漢才」）と言われるもののひとつなのかもしれない。

これに関して、中国社会科学院の李兆忠氏が興味深い意見を述べている（李 2001）。それによると、日本の「書道」や「茶道」はもともと中国の「書法」「茶芸」から来ているが、なぜ日本では「道」となったのだろうか、中国人にとっては、「道」は大げさすぎて、なぜ日本人はまじめくさるのだろうか、という思いを抱くという。中国人の観念では「道」は形而上的なもので、宇宙の万物の根本であり、普遍的な法則であって、日本人の「道」は実は「技」であり、これ

は形而下的なもので、職人臭さのある、一段低いものとみなされているという。

李氏の抱く感覚は、おそらく、日本人が「コーヒー道」とか「紅茶道」を聞いた時の反応に近いものではないか。普通には、嗜好品のコーヒー、紅茶に「道」はないと思うだろう。ただ、よく考えると、コーヒーの種類、淹れ方、飲み方、器との相性などなど、その道は深そうである。コーヒーの専門家、コーヒーバリスタまでいるくらいだから。ちなみに、コーヒーの上にミルクで絵を描く「ラテアート」というのがあり、2012年のシアトル大会では、日本人のバリスタが優勝している。「コーヒー道」があると言えそうだ。

「柔道」や「剣道」は、もともとは「柔術」「剣術」と言われていたものが、ある時期に名前を変えたものである。したがって従来は「技」「術」の習得が中心であった。それが「道」を得ることによって、その技を通したその世界の追求、あるいは、たとえば弓道の「矢は当てるものではなく、当たるものだ」という精神の陶冶を目指したものと広げられたと思われる。つまり日本語の「道」は、ある程度抽象的な概念を含むが、その修飾するものからわかるように、具体的・実践的なものから派生し、それなしでは成り立たない概念であることも事実である。日本人の具体化・実践化傾向はここでも見られる点で、李氏の指摘は興味深い。

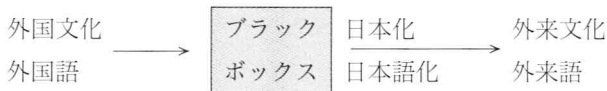
このような現象は、宗教思想の受容というかなり深い精神世界においても同様の指摘がなされている。末木（2006）によれば、仏教というのは本来高度の理論体系や深い思索、あるいは内在的原理を含むものであるが、それが日本に伝来すると、現実重視の実践思想に変容されたと述べている（本覚思想）。また、儒教の受容についても、「日本近世の儒教の言説は、多くその宗教性や形而上学に踏み入らず、倫理を表に出し、あるいは治世の政治論へと展開する。」という（末木同：147）。加藤（1975：38）も、「外来思想が高度に体系的な観念形態であった場合には（儒・仏・キリスト教・マルクス主義）、その日本化の傾向は常に一定していた。抽象的・理論的面の切り捨て、包括的な体系の解体とその実際的な特殊な領域への還元、超越的な原理の排除、したがってまた彼岸的な体系の此岸的の再解釈、体系の排他性の緩和。」と断言する。韓国人からの指摘として、李（1982：108）でも、同様の意見が述べられている。

またきわめて最近のことであるが、東日本大震災の復興報道に関する外国人

の見方について興味深いものがあった。つまり震災復興の迅速さ（とくにインフラ整備）について日本はおそらく世界一であり、北米であれば、誰が（どの組織が）何をやるかについて、相当議論があり、物事がなかなか前に進まない、少なくとも日本人の2倍の時間は要するであろう、というものであった（NHKラジオ深夜便 2012.2.16 放送、カナダ・モントリオールよりの報告）。原理原則や体系を重視する民族性と、それにはあまりこだわらず、とにかく目の前の問題を解決しようとする現実的・実践的志向の民族性の違いではないだろうか。

ひるがえって、現代日本語における外来語の多用の由縁を考えると、次のようなことではないだろうか。外来語（カタカナ語）はそのまま借用でき便利である。この実用性、利便性は日本人にとって大きな魅力である。それは、翻訳の手間、つまり、在来の語彙との体系的調整は要らない。もうひとつは、技術・技法に関わることであって、外来語をうまく使うことがその言語表現の意匠性（表現の彩）を高めることになる、ということである。前述の日本人の民族性から論じれば、おそらくこのような理由が考えられるであろう。もちろん、外来語の多用には、他にも、卓立性や婉曲性あるいは先進性など、知的・情動的両面でのさまざまな要因がある（陣内 2007：130）。しかし、民族性との関わりはこれまであまり議論されておらず、私見を述べてみた。

以上、述べてきたことを図式的にまとめれば次のようになるであろう。ある集団の民族性や国民性は、外来の事物を受け入れる際に発露するものであり、図のブラック・ボックスを経て出て来たものによって、その特徴が判断されるということを示している。なお図の「外来文化」は日本化された外国文化の意味で使っている。



3.1.2. 言語特性の解明

このテーマは、基本的には純粋に言語に関する問題である。ただし、その発想に関しては、自然科学とも連なり、研究対象ないし分野を越えた問題意識が設定される（たとえば、「外来生物規制法」（環境省 2004）が制定されるに至

った生態系の問題など)。

言語は体系をなしている。音韻体系、語彙体系、文法体系など考えてみても、どの要素も何らかのネットワークの場で存在し機能している。そこに新たな要素が入ってきたらどうなるか。1) その場を広げる形で新しい生息場所を確保する、2) その場は広げないが在来要素と棲み分ける、あるいは、3) 在来の要素を排除して、その場所を占有する、などが考えられる。

たとえば、1991年に出された国語審議会答申『外来語の表記』(文化庁1991)を考えてみる。戦後は英語や外来語の浸透が目覚ましく、また英語教育も一般化するにつれて、日本語の音声としてはそれまでにはなかった原語に近い発音がなされるようになってきた。ピーチーエー (PTA) がピーティーエーとなったり、ビルヂングがビルディングになったりするような例がある。これは新たに「ティ」「ディ」という発音が外来語 (=日本語) として行われていることであり、これには表記面でも対応する必要があった。そこで『外来語の表記』は、新たな音声に対応する表記を追加し、従来表記との併存を図ったのである。前述の分類でいえば、1) のタイプである。

外来語化は音声・音韻と語彙にとくに影響を与えるものであり、文法現象においてはあまりない。英語の文法が日本語の文法に置き換えられて (変換されて)、気づかない形で外来語として入ってくるからである。たとえば、スモークサーモン (smoked salmon)、サングラス (sunglasses) などのように、過去分詞形の -ed や複数形の -es は、日本語では無視される。ただし、最近では前述の音声レベルと同様に原語志向が見られ、インフォームド・コンセントは informed の -ed が残っている。ちなみに一般に通用している翻訳では「説明と同意」とされており、原語の「説明された同意」という受け身的意味は含まれていない。

3.2. 外来語研究の言語生活論的意義

これまでの議論のように、言語文化論は日本人のアイデンティティーや日本語の言語的関心に関わるものであるが、言語生活論の方は、日常の言語生活に関わる外来語現象を解明する分野である。言語文化論が、どちらかというところ、学術真理探究型のアプローチであるとするれば、言語生活論は、日常生活に即し

た実践的・問題解決的特徴がある。昨今の、学術研究の社会的貢献を求める時代環境においては、重要性を増した研究分野といえるであろう。

言語生活研究は、日常の具体的場面においてことばがどのように機能しているか、あるいは運用されているかについて、現場に分け入って調査をすることが多い。話者からの聞き取り資料を取ることもあれば、アンケート調査によって統計的考察に耐え得る大量の資料を取ることもある。文化庁が毎年行っている「国語に関する世論調査」は後者の例である。この文化庁調査では、日本人の多様な属性ごとに、外来語の理解や使用について定期的、経年的な結果が得られており貴重な資料といえる。

われわれはいったいどのような外来語環境の中で暮らしているか。それをどの程度認知し、理解し、また使用しているのか。マスメディア、官公庁、商店、あるいは屋外の言語景観など、調査対象は幅広くまた常に変化して止まない。マス・コミュニケーションあるいは対人（パーソナル）コミュニケーションにおいては、どのような問題が生じているのか、ということも避けて通れない話題である。

最後に教育について触れておきたい。日本語の語彙を全体として眺めた時に、将来的には漢語が減り代わって外来語が増加するという見方がある（樺島2004）。

現代日本語の新語における外来語の割合をみていると、その傾向はますます顕著になっていると感じる。翻訳借用によるものは少なく、ほとんどがカタカナ語（単純借用）である。このような日本語の現状をみれば、国語教育や日本語教育における外来語教育は、当然現状に見合った改定が必要となる。国語教育においては、言語文化論的内容に偏っており、もっと言語生活論的内容を入れて両者のバランスを取る必要があるだろう。また日本語教育においては、カタカナ文字や外来語彙の習得にもっと時間を割くべきであろう。

4. おわりに

陣内（2007）では、外来語研究の枠を「思想・文化」「言語」「社会・政策」の3つに設定した。本論では、前2者を「言語文化論」、第3者を「言語生活論」という枠で論じた。従来の外来語研究は、石綿（2001）でもわかるように、

言語文化論的研究、中でも言語的研究（語源学、語彙論、文字表記など）が圧倒的に多かった。近年では言語的側面とともに、言語生活や言語行動の関わる外来語現象の研究もなされており、外来語自体のしくみ（「構造」）と外来語の社会生活の中での働き（「機能」）という、いわば車の両輪となる、バランスのとれた外来語研究がなされるようになってきたと思う。なお、本論では、これまで手薄であった思想・文化的な面を中心に外来語現象を考察した。これは日本語から日本人を知るという点で、日本文化論や日本人論に貢献するものである。

外来語研究の意義とは、外国語・外国文化との接触の中で、日本語、日本人、日本文化がどのような変貌していくのか、そしてそのメカニズムは何か、などを明らかにし、その知見を必要なところで有効利用するところにあるのではないかと思う。

【参考文献】

- 青木保（2011）『「文化力」の時代 21世紀のアジアと日本』岩波書店
石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版
内田樹（2009）『日本辺境論』新潮社
梅棹忠夫（1967）『文明の生態史観』中央公論社
加藤周一（1955）「日本文化の雑種性」『思想』372 岩波書店（『加藤周一著作集7 近代日本の文明史的位罫』平凡社、1979に再録）
———（1975）『日本文学史序説 上』筑摩書房
———（1980）『日本文学史序説 下』筑摩書房
樺島忠夫（2004）『日本語探検 一過去から未来へ』角川書店
河村健太郎（1995）「肥前シュガーロードを行く」『月刊佐賀文化』
国立国語研究所（2006）『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』ぎょうせい
佐々木瑞枝（監修）（2001）『よく使うカタカナ語』アルク
陣内正敬（2007）『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』世界思想社
———（2008）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』
11 関西学院大学・言語教育研究センター
末木文美士（2006）『日本宗教史』岩波書店
文化庁（1991）『外来語の表記』第18期国語審議会答申
八百啓介（2011）『砂糖の通った道 菓子から見た社会史』玄書房

- 村岡廣安 (2005) 『肥前の菓子 シュガーロードを行く』 佐賀新聞社
- 柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』 岩波書店
- (1995) 『一語の辞典 文化』 三省堂
- 李御寧 (1982) 『「縮み」志向の日本人』 学生社 1984年講談社学術文庫
- 李兆忠 (2001) 「中国の「道」と日本の「技」」 『人民中国』 2001.8 東方書店 <http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/fangtan/200108.htm>
- タイラー、E.B. (1962) 『原始文化』 比屋根安定抄訳 誠信書房

【基本文献】

- ◎加藤周一 (1975) 『日本文学史序説』 (上) 筑摩書房
- ◎—— (1980) 『日本文学史序説』 (下) 筑摩書房
- 古代から現代までの日本の文学・思想を見渡す大部の本である。歴史を貫く日本の文学・思想の特徴を、文化の安定期と転換期という時代背景から説き起こす。日本人論とも呼べる論点が豊富である。
- ◎柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』 岩波書店
- 幕末から明治にかけて、西洋の文物を受け入れるにあたって、大量に作られた「和製漢語」(翻訳語)について、「社会」「科学」「恋愛」などの具体例を挙げて、それらの誕生から定着に至る様子を詳細に記述している。その中で、本文でも引用した「カセット効果」(宝石箱効果)に関する解釈は注目に値する。
- ◎石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
- 20世紀までの外来語研究を整理・検討したものである。現代日本語の中の外来語、歴史的視点から見た外来語、対照言語学的視点からの外来語など、言葉の語源面や構造面からのアプローチが主である。

第1部 言語文化論的アプローチ
—構造・歴史・語彙交流—

外来語の基本語化

金 愛蘭

キーワード：基本語化 語彙体系 新聞 コーパス 20世紀後半

1. 20世紀後半における外来語の増加

外来語（洋語）は、これまで、日本語の語彙において周辺的な存在として位置づけられてきた。樺島忠夫（1981）は、語彙は星雲のような点の集まりとイメージできるとして、中心部に日本古来の和語が多く位置し、周辺部に行くに従って漢語が多くなり、最周辺のところどころに欧米語系の外来語が混じる、としている。

外来語に対するこのような見方は、もちろん、現実の語彙の実態に裏付けられたものであった。今から半世紀前（1956年）に行われた国立国語研究所の「雑誌九十種の語彙調査」では、外来語の使用率は、異なりでは10%ほどを占めるものの、延べでは3%弱にすぎない（国立国語研究所1964）。

しかし、この調査から半世紀以上を経て、日本語語彙における外来語の位置は、徐々にではあるが、確実に変わってきた。そのことは、まず、外来語の量的な増加として現れている。1906～76年の雑誌『中央公論』を10年おきに調べた国立国語研究所の語彙調査は、20世紀の後半における外来語の確実な増加を報告している（国立国語研究所1987）。また、『現代用語の基礎知識』の見出し語を1960年版と80年版とで比較した野村雅昭（1984）の調査、戦後の朝日・読売両新聞の社説を対象とした橋本和佳（2010）の経年調査なども、外来語のとくに20世紀の後半における確実な増加を明らかにしている。

このような外来語の量的な増加は、さらに、一部の外来語が（一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられるという意味での）「基本語彙」の中にも進出するという結果をもたらしている。実際、1994年の「月刊雑誌70誌の語彙調査」でも、広範囲・高頻度に使用される「基本語」群の中に数多

くの外来語を見出すことができる（国立国語研究所 2005）。同じ資料の上位 1,000 語を、「雑誌九十種」の上位 1,000 語と比較した宮島達夫（2008）は、外来語の比率が 1.8%から 7.1%に「激増している」こと、すなわち、この 40 年ほどの間に、雑誌の基本語彙に外来語が進出していることを報告している。また、20 世紀後半の「毎日新聞」を 10 年間隔で調査した金愛蘭（2011）も、各年の上位 2,000 語における外来語の比率が延べ・異なりとも 3 倍弱増加していると報告している。

2. 外来語の基本語化

こうした外来語の基本語彙への進出＝基本語化は、かつては想定されていなかった事態である。

森岡健二（1977）は、「外来語というのは、受入れても科学・技術・音楽・美術・スポーツ・料理・医薬・ファッション・美容などの特定の領域だけに行われることが多く、一般の社会に入ってくるには時間がかかる。しかも、漢語よりは日本語に定着しにくい性質があり、生活に浸透して基本語になるものは限られてくる」とした。

樺島（1981）は、「将来の日本語語彙がどのようになるかといえば、……語彙の基本的な部分、つまり種々の文章に広くわたって使われ使用率も大きい語は、和語と使い慣れた漢語であり、これらが語彙を構成する見出し語（異なり語数）の四〇から五〇パーセントを占めるだろう。……残りの比較的使用率が小さい五〇―六〇パーセントは、現在ではその三分の二以上を漢語が占めている。この部分では、先に述べた言葉に対する日本人の態度が続く限りは、次第に外来語が勢力を伸ばすだろう」とした。

石綿敏雄（1988）も、「よくいわれることであるが、語彙も構造をもっている。非常にしばしば使われることばとそうでないことば、つまりいわゆる基本語彙とそうでないものがある。基本的な用語は社会的な情勢に左右されることが少ないが、基本的な用語のそとにあるものは、その影響を受けることがしばしばある。漢語の大部分や外来語は、影響を受けることが大きいところで使われている。したがってこれからの外来語を考える場合には、このことを考えなければならない」としている。

1970年代から80年代当時は、外来語が増えるとしても、それは、社会的な情勢の影響を受けて基本語彙の外側で起こるものであり、外来語が基本語彙の中に進入してくることはないと考えられていた。

しかし、2000年代に入って、樺島(2004)は、日本語の基本的な語の用法が外来語に「侵されている」事実を指摘している。

このような現象が、日本語の基本的な語と外来語との間で生じるかもしれません。例えば、「ひらく」は基本的な語で、／花が開く。／本を開く。／店を開く。／口を開く。／歓迎会を開く。／などと使われますが、この中で、「店を開く」場合には、／店は、午前九時にオープンします。／新しい書店がオープンする。／と言うのが、最近は普通になっています。「けずる」「きる」についても、／宝石をカットする。／賃金をカットする。／ヘアをカットする。／テープをカットする。／のように使われます。「開く」「けずる」「きる」は、日本語の基本的な語で、これから一〇〇〇年後まで使われ続けるでしょうが、基本的な語の一部を外来語によって「カット」されることが生じ、この「カット」される用法がさらに大きくなると、日本語にとって基本的な語であっても、ほそぼそと生き残っているに過ぎない状態になり、やがては死語となりかねません。

こうした、使う必要がなく、ほうっておけば基本的な日本語を侵すおそれがある外来語は、「コスト、カラー、サイド、ヤング、パワー」などの名詞、「アップする、ダウンする、エンジョイする、キャッチする、ゲットする、マッチする、ミックスする」などの動詞、「アバウトな、カジュアルな、シビアな、ソフトな、パワフルな、ビッグな、フリーな、フルに、リッチな、ルーズな」などの形容動詞・副詞、その他日常の会話を観察しているとたくさん見つかります。

樺島(2004)は、それを使わなくてもこれまでにある日本語で表せる外来語や、日本語の基本語彙に属する語で表現できる外来語は、使用しないことが望ましいと結論づけている。しかし、外来語の基本語化は、樺島が指摘する「日常の会話」にとどまらず、新聞記事などの書きことばでも進行している可能性

がある。

3. 抽象的な外来語の基本語化

先に見たように、最近の語彙調査では、高頻度・広範囲に使用される語群（基本語彙）の中に数多くの外来語を見出すことができる。そこには、生活の近代化という言語外的な条件によってその使用が増え、基本語化したと考えられる「エンジン」「スキー」「ホテル」「テレビ」「ビル」などの具体名詞のほかに、「タイプ」「システム」「バランス」「ケース」「トラブル」のような抽象的な意味を表す名詞が少なからず認められる。たとえば、「トラブル」という外来語の次のような使用は、現在の新聞では、ごく普通のものになっている（個人名はイニシャルに変更）。

- (1) 調べでは、A容疑者らは女性関係のトラブルから先月29日午前2時ごろ、Bさんら少年2人を公園に連れ出して暴行、Bさんの足元にライターで火をつけた疑い。[毎日新聞2000年7月9日朝刊社会面]

ただ、ここで「トラブル」が表している意味は、生活の近代化に伴って新たに生じた意味とはいえないし、また、「アイデンティティー」や「セクハラ」などのように、それ以前に日本人に自覚・共感されていなかった概念でもない。実際、ほぼ半世紀前の新聞記事では、これと同様のことがらを次のように表すことが一般的であったと考えられる。

- (2) W助教授の事件につき本富士署の捜査本部では、16日5時50分警視庁R捜査一課長から正式に『事件はHの犯行でありその動機は金と女のもつれから』と発表。[毎日新聞1950年1月17日]

このことは、「トラブル」が、この半世紀の間に、それまで使われていた「もつれ」などの類義語に代わって使われるようになった可能性を示すものである。とすれば、「トラブル」は、樺島（2004）のいう「使用しないことがのぞましい外来語」ということになるが、2000年の『毎日新聞』の全記事を取めた『CD

『毎日新聞 2000 データ集』を調べると、「トラブル」の用例数は、自立用法・結合法をあわせて1,184例にもなり、平均して1日に3例以上、1年のうち300日以上で使われている。さらに、上記『データ集』が付与する記事種別分類ごとにみても、「トラブル」はすべての「紙面」で用いられている。これらの結果は、「トラブル」が、新聞記事という書きことばでも、高頻度・広範囲に使われる基本語になっていることを示唆している。

20世紀の後半においては、具体名詞の外来語だけではなく、ある程度抽象的な意味を表す外来語もまた、樺島(2004)のいう「日常の会話」とどまらず、新聞や雑誌などの書きことばの基本語彙の中にも進出したのではないかと予想される。とすれば、それはどのような外来語であり、また、そうした基本語化がどのような過程を経て行われたのか、さらに、それはなぜ起こったのかということ、具体名詞の外来語とは違って、言語内的に明らかにすることが求められる。

筆者は、上記のような現象を「抽象的な外来語の基本語化」と呼び、現在その記述を目指している。なお、以下では、抽象的な意味を表す外来語を単に「外来語」と記すことにする。

4. 増加傾向を見せる外来語

基本語化した外来語には、どのようなものがあるのだろうか。それらを正確に把握するためには、大規模な通時的語彙調査が必要になる。筆者は、それに代わるものとして、20世紀後半の通時的な新聞コーパスを作成し、増加傾向を見せる外来語をとりだしてみた(金2011)。そこには、基本語化した外来語も含まれているはずである。

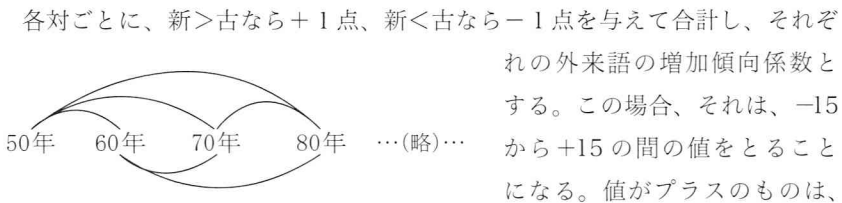
コーパスは、1950年から2000年までの『毎日新聞』から、ほぼ10年おきに、毎月2日分(5日と25日)、各年24日分(全体では144日分)の朝刊全紙面の記事を、1950年・60年・70年・80年は『縮刷版』から新たに入力し、1991年と2000年については『CD-毎日新聞データ集』を利用して作成した。データの規模は、全体で1,000万字を超え、ページ数の極端に少なかった1950年、やや少なかった1960年を除けば、各年ほぼ200万字程度となり、20世紀後半の通時的な新聞コーパスとしては、他に例を見ない大規模なコー

パスを構築することができた。

このコーパスから得られたすべての外来語^(注1)について、それが20世紀後半を通して増加傾向にあるかどうかを調べるために、次のような手順で調査した。

まず、各外来語の生の出現度数を「100万字あたりの出現度数＝出現率」に換算した。作成したコーパスでは、各年の（ページ数の違いにより）データ量が異なるため、生の出現度数では増減の正確な変動を見出せないからである。

次いで、雑誌『中央公論』の経年的語彙調査（国立国語研究所1987）に従い、各外来語の各年の出現率を、下のように全6カ年の間で比較し、増減の傾向を「増加傾向係数」として算出した。



増加傾向にあり、マイナスのものは、減少傾向にあることを示す。

以上の手順で、コーパスから得たすべての外来語について、出現率の増加傾向係数を求めた。増加傾向係数がいくつ以上であれば増加しているとみるか、ということに客観的な基準はなく、また、どのくらいの使用度数があれば、そうした傾向が確かなものといえるか、ということにも客観的な基準はない。以下には、便宜的に、通年度数30以上、増加傾向係数8以上のものを、増加傾向にある外来語として示す（先頭の< >内の数字は、増加傾向係数）。その際、宮島達夫（1967）にならって、『分類語彙表』の「1.1 抽象的關係」と「1.3 人間活動」に所属する語を、抽象的な意味を表すものとみなした。なお、同じ外来語でも意味の異なる場合には、直後に分類番号（中項目）を示して区別した。

<15>レベル、データ、イメージ、タイプ、スペース、コピー

<14>ソフト、デジタル、コミュニケーション、アドバイス、デビュー、フォーラム、グランプリ、イラスト、エリア、ガイドライン、クレーム、ドリーム

<13>サービス（1.38）、システム、テーマ、ビジネス、ページ、アンケート、

シンポジウム、キャンペーン、コメント、ドラマ、セミナー、グラフ、リーダーシップ、チャーター、プラス、メーン、カレンダー、プロセス

<12>サミット、シェア、ツアー、ストレス、ニーズ、メニュー、コンサート、スキャンダル、ネットワーク (1.31)、バーディー、ビザ、ブロック、ネットワーク (1.17)、トラブル (1.13)、エッセー

<11>ゴルフ、スタート、ケース、ゼロ、ポイント、トップ (1.11)、ポスト、インタビュー、カップ、アピール、ルール、マルク、パワー、マイナス、ブランド、プレゼント、チェック、トラブル (1.35)、チャンネル、ショート、リズム、ヒット、ショッピング、モラル、アプローチ、パット、カット、ジョーク

<10>プロジェクト、メリット、イベント、ケア、ペア、リース、セーブ、コンセンサス、マニュアル、サイズ、サポート、シート、プレッシャー、ボギー、リゾート

<9>トップ (1.16)、ボール、ミス、ラウンド、リスト、メディア、モデル、テニス、レート、ランク、パー、リサイクル、シナリオ、サービス (1.35)、シングル、コントロール、ハイテク、エピソード、ワーク、ハンディ、マジック、ジャンル、ジレンマ

<8>ユーロ、パターン、レンタル、スライダー、ジョギング、アクション、バドミントン、アート、ポルノ

ここには、スポーツ関係の用語や通貨単位なども含まれており、なお改善の余地を残すが、先に見た「トラブル」なども含まれており、ひとまず、基本語化した外来語の候補とみなしてもよいだろう。

5. 基本語化する外来語とその類義語

しかし、そのことを裏付けるためには、同義・類義の和語・漢語の変動傾向もあわせて見る必要がある^(注2)。そこで、これらのうち、遠藤織枝他編『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』(2006年、小学館)にあり、かつ、同辞典でその類義語をあげている外来語(36語)に限って、外来語とその類義語の、コーパスにおける出現率の変動を調査した。

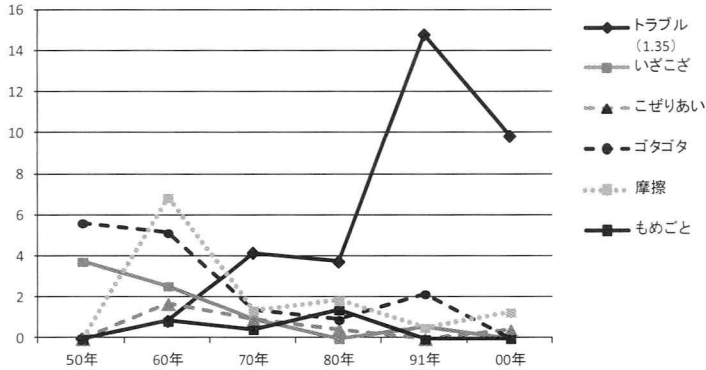


図1 「トラブル」と類義語の出現率

たとえば、「トラブル (1.35)」と、同辞典がその類義語としてあげる「いざこざ」「こぜりあい」「ゴタゴタ」「摩擦」「もめごと」の出現率の変動は、図1のようになる。これを見れば、他の類義語がその使用を減らす一方で、「トラブル」のみがその使用を増やしていることが明らかである。「トラブル」は、20世紀後半の新聞において、これらの類義語に代わって使われ、基本語化したと考えられる。

このようにして調査した36語は、その類義語との関係において、次のように分類することができた（／の右側に類義語を示した）。

【類義語を上回る外来語 (19語)】

トラブル (1.35)／いざこざ・こぜりあい・ゴタゴタ・摩擦・もめごと、
トップ (1.11)／最高責任者、ストレス／気苦労・心痛・心労、コピー／
 写し・複写・複製・模写、チャーター／借用・貸切・拝借、スキャンダル／
 醜聞、トップ (1.16)／一番・先頭、コメント／寸評・論評、テーマ／
 主題・題材・題目・話題、イベント／行事・催し・催し物、タイプ／型・
 類型、ドラマ／演劇・劇・芝居、ケース／事例・場合・例、コミュニケーション／
 伝達、コントロール／加減・制御・統御、メリット／利点、アドバイス／
 助言・忠告、イメージ／印象・感じ・感触、パワー／活力・原動力・
 精力・体力・動力・馬力

【類義語に近づく外来語 (10語)】

ポスト／地位・役職、ルール／規則・規定・規約・規律・きまり・定め、

スペース／空き・空間、サービス (1.35)／奉仕、トラブル (1.13)／故障、レベル／水準、プレッシャー／圧力・外圧・重圧、スタート／開始・出動・出発・門出、クレーム／苦情・文句、モラル／道徳・徳・倫理

【類義語に及ばない外来語 (7 語)】

プロセス／過程、デビュー／台頭・登場、ビジネス／家業・仕事・商売、インタビュー／会見・顔合わせ・対面・面会・面接、プロジェクト／計画・構想・企画・事業、コンセンサス／合意、データ／情報・資料

このうち、外来語の使用が類義語を上回るものには、類義語にとってかわる可能性があるものも多いと考えられる。また、外来語の使用が類義語に近づいているものには、外来語と類義語とが、おそらくは何らかの形でその役割を分担するような関係にあるものも多いと考えられる。そして、これら二つの傾向は、外来語の基本語化にみられる類型の一端を示すものかもしれない。しかし、そのことを明らかにするためには、個々の外来語とその類義語との関係の推移を、それぞれの意味・機能を詳細に分析しながら、具体的に把握する必要がある。

6. 意味の拡大 (多義語化・上位語化)

基本語化した外来語には、その意味が拡大して多義語となり、その結果として、類義語の上位語の位置に立つものがある。「トラブル」は、その代表的な例である。

コーパスによれば、「トラブル」の意味は、2000 年時点で、「トラブル」がどこに (何に) 発生するか、および、発生した「トラブル」の内容がどのようなものであるかという観点から、以下の 3 種 6 類に分類できる。

I. ヒトとヒトとのトラブル

- ① [デキゴトのトラブル] (例) R 容疑者が 1 週間前にホテルで従業員と トラブル を起こし「火をつける」と騒いだことがあり、……
- ② [関係のトラブル] (例) M さんは交友関係で トラブル を抱えていたとみられることから、捜査本部は交友関係を中心に捜査していた。

II. モノのトラブル

- ① [機械のトラブル] (例) 42 秒後、第 1 段ロケットに トラブル が起き、打ち上げは失敗。

- ②〔身体のトラブル〕(例) 春先はにきびなど肌のトラブルが起きやすい季節。

III. モノゴトのトラブル

- ①〔運営・運用のトラブル〕(例) 今月から導入された介護保険で、全国の現場で生じたトラブルについて報告を求めている厚生省は4日、……
- ②〔事故・事件のトラブル〕(例) 午前10時ごろには新幹線の新大阪駅ホームから乗客が線路内に降りるトラブルがあり、上下7本が10～13分遅れた。

しかし、「トラブル」は、これら2000年時点での意味を、はじめから持っていたわけではない。この3種6類の意味の、コーパスにおける出現状況を調査すると、表1のようになる。これによれば、新聞における「トラブル」の意味は、そのすべてが初めからそろっていたわけではなく、1960年ごろまでは〔デキゴトのトラブル〕の意味で使われ始め、続いて70年ごろに〔関係のトラブル〕〔機械のトラブル〕〔運営・運用のトラブル〕〔事故・事件のトラブル〕が現れ、80年ごろには〔身体のトラブル〕の意味でも使われるようになっていく。すなわち、「トラブル」の意味は、20世紀後半、とくに1960年から80年にかけて拡大したことがわかる。

表1 意味・用法別の使用量の変化 (左: 自立用法、右: 結合用法)

		60年		70年		80年		91年		00年	
ヒトと ヒトとの	デキゴトの	17		43		46	1	50	6	41	5
	関係の			1		13		5		18	2
モノの	機械の			2		10	3	4	3	102	18
	身体の					4		5		3	
モノゴトの	運営・運用の			1		3		8		11	
	事故・事件の			2		12		15	2	23	2
計		17		49		88+4		87+11		198+27	

こうした「トラブル」の意味拡大(多義語化)は、それまで個々の意味を表していた類義語に代わって「トラブル」が使われることにつながっていく。た

たとえば、〔デキゴトのトラブル〕では「もめごと」「悶着」「けんか」「口論」「いさかい」「殴り合い」「衝突」など、〔関係のトラブル〕では「もめごと」「いざこざ」「ごたごた」「もつれ」「不和」「不仲」など、〔機械のトラブル〕では「故障」「不調」「不具合」など、〔身体のトラブル〕では「不調」「悩み」「疾患」「故障」など、〔運営・運用のトラブル〕では「障害」「支障」「混乱」など、〔事故・事件のトラブル〕では「事故」「(緊急)事態」「事件」「不祥事」など、それぞれの類義語が分担した意味を、すべて「トラブル」で表すことができるようになるのである。

このことは、かつて多くの類義語で書き分けられていた事態が、現在では「トラブル」一語で表現される可能性が高まっていることを示すものである。しかも、「トラブル」は、そうした事態を個々の類義語のように具体的・限定的に表すのではなく、それらの上位語の位置に立って、より概略的に表すようになっている。その概略的な意味とは、上記の3種6類に共通する《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常的な事態》とでも言うべき抽象的な意味である。こうした概略的・抽象的な意味を持つ「トラブル」は、その事態が結局は何であるか（たとえば、故障なのか不調なのか、事件なのか事故なのかなどということ）がわからない段階でも使うことができる、きわめて便利な単語なのである。

7. 用法の拡大（形式名詞化）

基本語化した外来語には、その用法が拡大して、類義語と文法的な面において分担する傾向を見せるものがある。「ケース」は、その代表的な例である。

先に見たように、「ケース」は、「事例」「例」「場合」といった類義語に対して、その使用量を増加させているが、量的な拡大と同時に、用法の面での拡大が認められる。「ケース」には、大きく、次のような4つの用法がある。

A. (指示詞以外の) 修飾部をとらない単独の用法

(例) 女性の平均賃金は男性より低いため、男女の賠償額にケースによっては1000万円近い差が生じている。

B. 合成語の構成要素となる用法

(例) 「特殊ケース」「虐待ケース」「例外的ケース」「モデルケース」

C. 名詞句において被修飾語となる用法

(例)「仙台地裁のケース」「悪質なケース」

D. 連体修飾節構造において被修飾語となる用法

(例) 東京都生活文化局が出した「幼児の危害・危険情報アンケート調査報告書」にも、母親がシャンプー中に1歳9カ月の子が溺れたケースがある。

コーパスで、これら4つの用法の（出現率の）割合がどのように推移しているかを調べると、図2のようになる。「ケース」は、20世紀後半をとおして、連体修飾節構造の被修飾名詞となる用法が増えてきたことがはっきりとわかる。

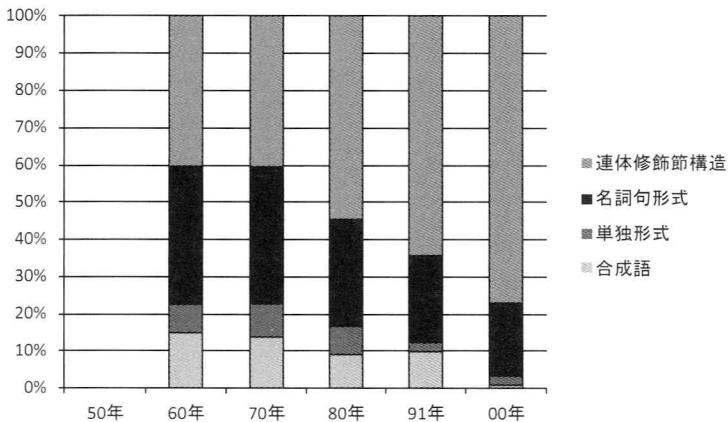


図2 「ケース」の各形式の出現率の変動

また、各用法別にその推移をみると、合成語の用法は、「ケース」が減って「例」が増え、「例」に集中する傾向のあること、単独用法も、「場合」「ケース」が減って「例」に集中する傾向がある。一方、名詞句の用法は、「場合」「例」が減り、「ケース」が増えて、「ケース」と「例」が同程度に用いられ、連体修飾節構造の用法は、「場合」が減り、「例」は横ばいで、「ケース」が大きく増えている。

このように、「ケース」「例」「場合」の間には、用法上の分担の傾向が見られるのである。とくに、「ケース」と「例」との間には、かなりはっきりとした分担がある。一方、「場合」は、全体的に、その使用を減らしており、この

類義語群から徐々に消えようとしているのかもしれない。「場合」は、「仮定条件」「仮定的なとき」を表す用法や「提題」的な用法を中心としつつあり、その用法において、「ケース」「例」の機能分担が進行中、ということなのかもしれない。

なお、連体修飾節構造の用法のうち、奥津敬一郎（1974）のいう「同格連体名詞」の用法に限って、「ケース」に後続する主節述語の意味的な範囲を調べてみると、1960年ごろには、（～ケースが）「ある」「多い」など〈有無〉や〈多少〉に限られていたものが、1970年ごろ以降は、「多い」「目立つ」「少ない」「珍しい」「ある」「ない」といった〈多少〉や〈有無〉のほかにも、「起きる」「増える」「減る」といった〈生起〉や、「想定する（される）」「考えられる」等の〈想定〉、「挙げる」「取り上げられる」等の〈報告〉、「絞る」「除く」等の〈限定〉、「同様」「異なる」等の〈異同〉など、多様な意味範囲の主節述語と共起するようになる。こうしたことから、「ケース」は、20世紀後半の新聞で、形式名詞的な用法を充実させつつ基本語化していったものと考えられる。

8. 基本語化の要因

抽象的な外来語が、同義・類義の和語や漢語があるにもかかわらず、基本語化するのなぜだろうか。残念ながら、いま、そのことに明確に答える用意はないが、新聞コーパスを調査したかぎりにおいては、新聞という「テキスト」がそうした基本語化した外来語を必要としている、ということが考えられる。

半世紀前の新聞は、今と比べて、「描写的（物語的）」な色彩の強い文体であった。次の例は、1950年7月14日付『毎日新聞』の「京都で偽装心中」という見出しのある記事である（住所・人名は適宜省略した）。

- (3) 13日午前二時過ぎ京都右京区嵐峡館に血まみれの若い女が救いを求めて来たので第二日赤病院へ担ぎ込んだが、同女は舞踊師匠IことA子で同女の語るところによれば愛人の日本舞踊師匠WことK男が情婦の女弟子N子と12日朝京都についたあとを追い一列車おくれて入洛、駅であったその足でK男と嵐山に遊び、同夜付近の山中で服毒心中をはかったが失敗、13日午前1時ごろ同女がさめると横に寝ていたは

ずの男の姿が見えず右けい部その他23ヵ所に安全カミソリの刃で切られベツトリと血ぬられており苦痛にたえかねて救いを求めたものとわかった。一方K男は12日夜11時ごろ中京区伊藤旅館に待たせてあったN子連れて何れかへ逃走。一人の舞踊師匠をめぐり女師匠女弟子といった多角関係のもつれを清算すべく女を京都へ連れ出しての犯行と見られる。(以下略)

これに対して、現在の新聞記事は、次のように事実を淡々と「概略的(要約的)」に報道する文体で書かれることが普通である(改行も省略した)。

- (4) 東京都E区のホテルで、フィリピン国籍の無職、Uさん(33)が刺殺されていた事件で、警視庁捜査本部は30日、交際相手の静岡県T、漁業、N容疑者(35)を殺人の疑いで逮捕した。N容疑者は「Uさんに結婚を断られ、お金を要求されたので殺して自分も死のうと思った」と供述しているという。調べでは、N容疑者は26日午後3時ごろ、同ホテル2階の客室で、Uさんのわき腹や首を果物ナイフで刺して殺害した疑い。N容疑者は30日夕、神奈川県F市の同県警に出頭し、逮捕された。調べでは、N容疑者は昨年夏ごろからUさんと交際し、結婚話をめぐってトラブルがあった。N容疑者が、事件直後に実家に「自分がやった」と電話をしていたことが分かり、捜査本部は殺人容疑で逮捕状を取って行方を追っていた。N容疑者はUさんを殺害後、ホテル客室内で果物ナイフで手首を切って自殺を図ったが死にきれなかったという。[2000年1月31日朝刊社会面]

描写的な文体では、よく似た事態であってもその意味やニュアンスの細かい違いを表わし分けるために多くの類義語が必要になるが、概略的な文体では、そうした事態を概略的に表わす抽象的な基本語があれば間に合うのである。和語や漢語の類義語には、そのような概略的・形式的な基本語がなかったために、「トラブル」のような外来語が必要とされたと言えるだろう。外来語の意味は、とくに漢語と比べて、「総合的」「非分析的」であるところに特徴があるので(宮

島 1977)、こうした基本語に外来語が選ばれるのも、ある意味で自然なことである。

また、新聞が抽象的な外来語を必要とする背景には、それらが新聞のテキストにおいて何らかの文法的な機能や文章論的な機能を果たすようになっていくという可能性も考えられる。「ケース」の同格連体名詞としての用法は、そうした文法的な機能の一つであろう。文章論的な機能には、Halliday and Hasan (1976) のいう「語彙的結束性」や McCarthy (1992) のいう「談話構成語」などにかかわる機能が考えられる。たとえば、結束性の語彙的な表示である「再叙 (語彙的指示の同一性)」には、同一語の繰り返し、同義語や近似同義語、上位語、一般名詞 (general noun)、人称指示語などがあるとされるが、「トラブル」は、このうちの上位語および一般名詞^(注3)としての特徴を持っていると考えられる。実際、通時の新聞コーパスからは、次のような例が得られる (氏名のイニシャルおよび下線は筆者)。

- (5) 大阪地裁で 23 日あった殺人事件の論告求刑公判 (K 裁判長) で、殺された娘の遺影を手に傍聴していた母親 (53) が、持ち込んだコードで被告の男性 (20) の首を絞めたり、遺影の額のガラスを割って破片を法廷に投げつけたりする騒ぎがあった。関係者にけがはなかった。刑事裁判での遺影の持ち込みは、先月から各地で相次いで許可されているが、こうしたトラブルは初めて。大阪地裁は「遺族としての気持ちの高ぶりもある。法的に事件にするかどうかは分からない」と話している。[2000 年 10 月 24 日朝刊社会面]

ここで、「トラブル」は、「こうした」とともに指示語句 (高崎みどり 1988) を形成しつつ、先行する「騒ぎ」の上位語としてそれを指示するという談話構成機能を発揮している。筆者は、このような「トラブル」の談話構成機能がいつごろから、また、どのように獲得されてきたのかを明らかにすることも、「トラブル」の基本語化の要因を考える上で重要なポイントになるものと考えている。

注

- 1) 作成したブレンコーパスに対して、自動で形態素解析（解析器には「MeCab（和布蕪）」、解析辞書には語種情報が付与される「UniDic1.3.8」を使用）を行ない、その結果に基づき簡易的な語彙調査を行なった。また、UniDicが付与した「外来語」の中から、漢字やアルファベット表記、数字・記号類を除いたのち、同語異語の判別を行なった。
- 2) ここでは、簡便な方法として、類義語の範囲を辞書に準拠する調査方法を採用したが、実際の類義語はそれより多い可能性が高い。1950～2000年の『毎日新聞』の社会面記事を資料に、【ヒトとヒトとのトラブル】に限った、外来語「トラブル」とその類義語の使用状況の調査（金愛蘭 2011）によると、この他にも「あつれき、争い／争う、暗闘、言い争い／言い争う、いがみあい、いさかい、内ゲバ、内輪ゲンカ、内輪もめ、葛藤、口ゲバ、激突（する）、けんか（する）、口論（する）、衝突（する）、つかみあい、内紛、殴り合い、ひともめ、ひと悶着、不和、紛争、もつれ／もつれる、もみ合い／もみ合う、もめごと、もめる、乱闘」の類義語が得られた。しかし、得られた類義語群が「トラブル」の増加に反比例するようにその使用を減らすか、停滞させている傾向は合致していた。
- 3) Halliday, M.A.K., and Hasan, R. (1976) などのいう「general noun」のこと。総称語（McCarthy, M. (1992)）ともいう。一般にいう、固有名詞に対する一般名詞の意味ではない。

【参考文献】

- 石野博史（1983）『現代外来語考』大修館書店
- 石綿敏雄（1988）「外来語のゆくえ」『言語生活』436
- （2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論一名詞句の構造一』大修館書店
- 樺島忠夫（1981）『日本語はどう変わるか一語彙と文字一』岩波書店
- （2004）『日本語探検 過去から未来へ』角川書店
- 金愛蘭（2011）『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化（阪大日本語研究別冊3）』大阪大学日本語学講座
- 国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字（3）分析』秀英出版
- （1965）『類義語の研究』国立国語研究所報告28
- （1987）『雑誌用語の変遷』秀英出版
- （2005）『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌一』国立国語研究所報告121
- （2007）『公共媒体の外来語—『外来語』言い換え提案を支える調査研究一』

国立国語研究所報告 126

- 高崎みどり (1988) 「文章展開における指示語句の機能」『国文学 言語と文芸』103
- 野村雅昭 (1984) 「語種と造語力」『日本語学』3-9、明治書院
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
- Halliday, M.A.K., and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*, 安藤貞雄ほか訳 (1997) 『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房
- 飛田良文編 (1981) 『英米外来語の世界』南雲堂
- McCarthy, M. (1992) *Discourse Analysis for Language Teachers*, 安藤貞雄・加藤克美訳 (1995) 『語学教師のための談話分析』大修館書店
- 宮島達夫 (1967) 「現代語いの形成」『ことばの研究 第3集』国立国語研究所
- (1977) 「語彙の体系」『岩波講座日本語9 語彙・意味』岩波書店
- (2009) 「語彙史の比較(1) - 日本語(雑誌90種と70誌)」『京都橋大学研究紀要』35
- 森岡健二 (1977) 「命名論」『岩波講座日本語2 言語生活』岩波書店
- 山田雄一郎 (2005) 『外来語の社会学—隠語化するコミュニケーション』春風社
- 米川明彦 (1984) 「近代における外来語の定着過程」『京都府立大学生活文化センター年報』9
- 「特集 語種論」(1984) 『日本語学』3-9、明治書院

【基本文献】

- ◎石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 外来語(漢語を含む広義の立場)に関する主要な話題を網羅的に取り上げた外来語研究の集大成。外来語に関する概説をはじめ、歴史的・対照言語学的な観点からも「総合的に」アプローチする必読書。
- ◎樺島忠夫 (2004) 『日本語探検 過去から未来へ』角川書店
- いわゆる「外来語(氾濫)問題」を、日本語の文章や表記も一緒に取り上げて考察する本。「日本語を育てていこう」という立場から、「外来語の基本語化」問題の実態や原因、またその対策が論じられている。
- ◎国立国語研究所 (2007) 『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』国立国語研究所報告 126
- 公共的な媒体において問題となる外来語(基本語化しない外来語)を対象に行われた、国立国語研究所の「外来語言い換え提案」についての報告書だが、それを支えてきた世論調査やコーパス言語学的な調査研究の成果がまとめられている。ウェブでの公開は、次の通り。<http://www.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/report126.html>

文法的視点からみた外来語 —外来語の品詞性とコロケーション—

茂木 俊伸

キーワード：外来語の文法 品詞 コロケーション 程度名詞 形容詞

1. はじめに

現代日本語の外来語研究の課題として、既に日本語に十分に定着している基本的な語に関する分析が遅れているという点が挙げられる（例えば、石野1996、金2011）。個々の語の意味や類義語の使い分けのような意味的側面の分析だけでなく、日本語の中で外来語がどのような文法的性質を獲得し、文中で具体的にどのように使われているのかという文法的側面の分析に関しては、特に研究が手薄な状態にあると言える。

このため、まずは、個々の外来語の品詞（例えば、動詞として使えるか）や構文（どのような文型や他の成分との共起関係の中で使われるか）を詳しく記述していき、意味的な分析と対応づける形で、さらには和語や漢語との比較も行いながら、研究事例を蓄積していくことが重要であると言える。これらの成果は、現代日本語における外来語の実態を明らかにすることだけでなく、辞書編集や日本語教育といった応用分野への基礎資料を提供するという点でも不可欠なものである。

本稿ではこのような視点に立ち、大規模なコーパス（電子化されたテキスト）を用いて、これまでほとんど扱われてこなかった外来語の名詞の分析を行う。

2. 外来語の文法的性質

外来語の品詞性、すなわち外来語が文中でどのような形をとり、どのような文法的役割を果たすのかに関しては、漢語とほぼ同様であるとされる。

次頁の〔表1〕のように、外来語は基本的に、そのままの形で名詞として、「～する」（まれに「～る」）が付けば動詞として、「～だ／な／に」といった語尾

が付けば形容動詞として、文中に現れる。ただし、漢語が単独で副詞や接続詞として用いられるのに対し、外来語ではそのような例がほとんど見られない(例えば、石野 1983:153)^(注1)。

表1 漢語と外来語の品詞と形態

	漢語	外来語
名詞 (φ)	○	○
動詞 (+する)	○	○
形容動詞 (+な)	○	○
副詞 (φ)	○	×

また、漢語の「超～」 「～的」のように語を派生する「スーパー～」 「～チック」といった接辞 (cf. 北澤 2012、村中 2012) も見られるなど、外来語は生産的な語形成にも関与している。

これらのことから、外来語は原則として、漢語の文法的な型に沿った形で日本語の文法体系に組み込まれていると言える。ただし、興味深いことに、個々の外来語の文法的な振る舞いは、次の (1) のように類義の和語や漢語と一致する場合もあれば、(2) のようにずれが見られる場合もある。

- (1) a. 1分 {きっかり／ちょうど／ジャスト}
 b. {きっかり／ちょうど／ジャスト} 1分
 (2) a. ここ最近の {はやり／流行／ブーム}
 b. 次に {はやる／流行する／*ブームする} のはこれだ！

したがって、先にも述べたように、外来語を記述する際には、意味記述だけでなく、文法的な側面を合わせた「意味と形式の対応」を考える必要があると言える。例えば、動詞の場合であれば、意味・用法の分類だけでなく、その分類ごとに、自動詞と他動詞のどちらになるのか、共起する格成分に違いはあるか (cf. 茂木 2011)、「～する」形の外に「メモをとる」のような動詞相当の意味を表す句はあるか (cf. 村木 1982)、といった点を、具体的なデータに基づいて明らかにしていくことが求められる。

では、〔表1〕で見たように語形が単純な外来語の名詞を文法的に考えると、

どのようなことが問題となりうるだろうか。以下では、具体的な事例として、外来語の名詞と形容詞述語との組み合わせについて見ていく。

3. 程度名詞と形容詞のコロケーション

本節では、議論の前提として、以下で分析の対象とする程度や尺度を表す名詞に関する研究の流れを概観する。

3.1. 「程度名詞」に関する研究

國廣(1982)は、次の(3)のような「程度差を含む」(同:90)漢語名詞を「程度名詞」とし、これらの名詞と形容詞との組み合わせを例示している(カッコ内に共起する形容詞を示す。以下同様)。

- (3) 「印象」(深い、強い、薄い)、「確率」(高い/低い、大きい/小さい、多い/少ない)、「公算」(大きい、高い、強い)、「成長率」(大きい、低い)、など

名詞の意味的な下位分類の一つとして「程度名詞」というカテゴリーを提唱する秋元(1985)は、次の(4)のような「最も抽象化された意味の程度や度合・尺度などをあらわす名詞」(同:107)の一群を示している。これらの名詞は、「対立した二つの意味が中和されて形容詞の「-」「+」の両義を内包している」とされる(同:109)。ただし、接尾辞「～さ」を伴う「高さ」「速さ」のような和語名詞は程度名詞に含められていない。

- (4) 「強度」(強い/弱い)、「時期」(早い/遅い)、「尺度・寸法」(長い/短い)、「身長(背)・高度」(高い/低い)、「深度」(深い/浅い)、「距離」(遠い/近い)、「面積・幅」(広い/狭い)、「速度・スピード」(速い/遅い)、「量」(多い/少ない)、「価格・値段」(高い/安い)、など

また、秋元(1999)は、「密度」「比重」「公算」「確率」「可能性」の5語が複数の形容詞と共起すること、その場合には基本的に名詞の意味に依存した使

い分けがあることを指摘している。

3.2. 漢語名詞と形容詞の共起に関する研究

次に、「程度名詞」という用語は用いていないものの、これに相当する名詞を扱っている先行研究を見る。

服部(2002)は、名詞「可能性」「公算」と「存在量(の大小)」を表す形容詞(「多い／少ない」「大きい／小さい」等)の共起に関して、コーパス(新聞記事)において量が「大」であることを表す形容詞の例に偏る傾向にあることを指摘している。

また、服部(2011a)は、国会会議録データを用いて、程度的属性を表す「二字漢語＋性／率／度／量／力」形の漢語名詞と尺度的な形容詞類(「高い／低い」「大きい／小さい」等)との共起傾向、およびその通時的な変化の調査を行っている。これらの語はさまざまな形容詞と共起するものの、特に「～性／率／度」が「高い」と(語によっては「低い」とも)共起する傾向が強くなっているとされる。

さらに服部(2011b)は、漢語に限定せず、程度的属性を表す名詞一般と尺度的な形容詞の共起傾向、およびその変化を分析している。ここでは、「～性／率／費」といった接尾辞を伴う漢語だけでなく、「規模」「種類」「物価」等の漢語、「幅」「疑い」「開き」等の和語、「コスト」「リスク」等の外来語(後述)も扱われている。

3.3. 程度名詞と外来語

以上の先行研究の内容をまとめると、次のようになる。

まず、「程度名詞」と呼ばれる語群は何らかの尺度を表す抽象名詞であるが、具体的にどの語がこのカテゴリーに該当するかは明確でなく、その性質や認定方法も十分に明らかになっていない。そこで本稿では便宜的に、程度的な意味を表す名詞の総称としてこの用語を用いることにする。

次に、程度名詞は個々の語ごとに共起する形容詞が決まっている。これは、名詞と形容詞のコロケーション(連語)の問題として捉えられる。ただし、一つの名詞が「高い」「大きい」等を中心とした複数の形容詞と共起するケース

も一般的に見られるため、一語ごとの実態や全体的な傾向を詳しく見ていく必要がある。

また、従来の程度名詞の分析は漢語を中心に行われてきており、和語系の「～さ」との違いなど、語種によってこの種の名詞に何らかの振る舞いの差があるのかは明らかではない。特に、どのような外来語が程度名詞に相当するののかという点については、これまでほとんど直接的に問題にされてこなかった。

例えば、秋元(1985)が「程度名詞」として挙げる外来語は「スピード」(速い/遅い)のみであり、コロケーションを扱った教材である神田ほか(2011:149)でも、「コスト」(高い/低い)、「スタイル・センス」(いい/悪い)、「インパクト」(大きい/小さい、強い/弱い)、「ストレス」(大きい、強い)を挙げるにとどまっている。

一方で、宮田・田中(2006)と宮田(2007)ではそれぞれ「リスク」「メリット」が形容詞と共起することが指摘され、先に触れた服部(2011b)のデータからは、この他にも「ウエート」「シェア」「トラブル」「パーセンテージ」「レベル」が尺度的な形容詞と共起することが見て取れるなど、実はかなりの数の外来語程度名詞が存在する可能性がある。

そこで次節では、大規模なコーパスを用いて、外来語程度名詞をできるだけ多く抽出し、そこにどのような特徴が見出されるのかについて分析を行うことにする。

4. コーパスを用いた外来語程度名詞の探索的分析

本節では、前節の課題を踏まえ、大規模な書き言葉コーパスを用いた調査を行う(4.1節)。さらに、得られたデータから、コロケーションの多様性と程度名詞の性質について、3つの視点から観察と分析を行う(4.2～4.4節)。

4.1. 調査の対象と方法

ここで調査対象とするコーパスは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』モニター公開データ2009年度版である(以下、単にBCCWJと呼ぶ)。このコーパスは、書籍、白書、Yahoo!知恵袋、国会会議録といった多様な媒体で構成されており、全体の規模は約4,500万語である。

用例の検索には、同コーパスに同梱されている「全文検索システム『ひまわり』BCCWJ パッケージ」を使用した。検索条件は、服部 (2011a) 等を参考にし、「カタカナ文字列 (長音記号「ー」と中点「・」を含む) + 助詞「が／は／も／の」 + 形容詞活用形」のように設定した。これは、外来語名詞と形容詞が主述関係にある「[外来語]が高い」のような連続を抽出することを意図したもので、「[外来語]がとても高い」のように副詞等が介在する例や「高い [外来語]」のような連体修飾の例は分析対象外となる^(注2)。また、形容詞は、次の 10 系列それぞれの「程度大／小」を表す各 2 語を設定した。

- (5) 高低 (高い／低い)、大小 (大きい／小さい)、多少 (多い／少ない)、遅速 (早い・速い／遅い)、強弱 (強い／弱い)、長短 (長い／短い)、広狭 (広い／狭い)、濃淡 (濃い／薄い)、軽重 (重い／軽い)、深浅 (深い／浅い)

なお、上の条件の「形容詞活用形」には、終止形や連用形のような各活用形のほか、派生語の「～すぎる」「～め」および「大きな」のような連体詞を含めた。一方、動詞 (「～を高める」「～が高揚する」) や名詞・形容動詞 (「～の高さ」「～が高価だ」) と共起する例は、今回は分析対象から除外した^(注3)。

次に、上の条件によって得られた形容詞と共起する外来語から、程度名詞と判断できる語を人手によって抽出した。先に見たように、程度名詞を厳密に定義することは難しいが、抽象名詞であり、何らかの尺度を表す外来語を広く採

表2 BCCWJにおける外来語程度名詞

系列	高低		大小		多少		強弱		遅速	
形容詞	高い	低い	大きい	小さい	多い	少ない	強い	弱い	はやい	遅い
異なり語数	59	30	44	15	15	17	24	5	8	5
延べ語数	494	145	298	57	52	70	88	10	64	32
	639		355		122		98		96	
系列	長短		広狭		濃淡		軽重		深浅	
形容詞	長い	短い	広い	狭い	濃い	薄い	重い	軽い	深い	浅い
異なり語数	7	5	7	4	0	3	0	0	0	0
延べ語数	10	14	14	4	0	4	0	0	0	0
	24		18		4		0		0	

ることとした。ただし、事態の数の多寡を表す抽象名詞、例えば、「～するケースは少ない」「トラブルが多い」のような例は除外した。

以上の作業によって抽出された BCCWJ における外来語程度名詞の数は、前頁の〔表2〕のとおりである（異なり語数は、単独の名詞と複合名詞を特に区別せず、例えば「輸入コスト」「インフラコスト」等はすべて「コスト」1語としてカウントしている）。

ここから、10系列の形容詞のうち「高い／低い」と共起する外来語が、延べ語数でも異なり語数でも最も多いことが分かる。

次に、〔表2〕の外来語のうち、すべての系列を合わせた総用例数が10以上の語を具体的に示したものが次の〔表3〕である（10以上の共起例がある形容詞には網掛けを付した）。

表3 BCCWJにおける高頻度の外来語程度名詞

	高低		大小		多少		遅速		強弱		長短		広狭		濃淡		用例数計
	高い	低い	大きい	小さい	多い	少ない	はやい	遅い	強い	弱い	長い	短い	広い	狭い	濃い	薄い	
リスク	61	12	52	5	4	19											153
レベル	81	55															136
ウエイト	62	5	31	12	1	1											112
コスト	50	17	1	2	1	5											76
シェア	35	6	10	4	2												57
サイズ			41	14							1						56
スピード							29	22				2					53
スケール			43	6													49
イメージ	1	1	1			1			40							1	45
ニーズ	28	1	5		1	1			4							1	41
プライド	40								1								41
カロリー	15	11			2	5											33
ストレス	4		2	1	16	6			4								33
エネルギー	12	4	7	1	2	4			2								32
メリット	1		21	2	4	4											32
ショック			21	2		4											27
テンポ		1					20	6									27
インパクト			8	2					6	3						2	21
スペース			4	2	2	3							5	1			17
サイクル	1						2				1	10					14
コレステロール	3	1			8												12
ギャップ			9	1									1				11
ロス			4		4	2											10

ここでは、全体的に、「程度大」を表す形容詞と共起しやすい傾向はあるものの、「程度大／小」いずれの形容詞とも共起する語が多いことが見てとれる。

一方で、「イメージ」と「強い」、「プライド」と「高い」のように「程度大」の形容詞と非常に強く結び付く語は例外的である。

また、漢語を中心とした先行研究の結果と同様、複数の系列の形容詞と共起する語が多いことも分かる（この点については4.3節で検討する）。

4.2. 分析1：「高い」と共起する外来語程度名詞

具体的な分析として、まず、最も用例数の多かった形容詞「高い」とどのような外来語程度名詞が共起するのかを見る。分析の枠組みは、国立国語研究所(1972:367-390)の「たかい」の詳細な意味分類を用いる。基本的意味の「空間的な量」を表す用法を除いた意味分類と、それぞれの語義で共起するとされている名詞の例を示すと次のようになる（分類記号は一部改めた）。

[1] ものごとの質がすぐれている。価値が大きい。(例：水準、段階)

- a. 社会的な地位・格式が上位にある。対人的に優越している。(例：地位、誇り)
- b. 人間が求め努力して実現しようとする目標が上方にある。(例：理想)
- c. 能力的に優秀である。すぐれた能力によって大きい価値が実現・達成されている。(例：能力、知性)
- d. 人間の内的・精神的な価値が達成されている。(例：人格、教養)

[2] 量的・程度的にいちじるしい。

- a. 測定できるような尺度的な性質などに関して、尺度上の目盛りがかなり上方である。ふつうは計量されることのないような性質の程度が大きい。(例：温度、血圧、需要、エネルギー、～度、～率、野球熱)
- b. 音や声について、周波数が大きい。強い。(例：音、声)
- c. 広く知られている。名高い。(例：評判、ほまれ、悪名)
- d. においが著しくめだって感じられる。(例：香り)
- e. その他 (例：意気)

[3] 売り買いされる時の金額が大きい。(例：値段、月給、～料)

このうち、「高い」と共起する主な名詞の例として挙げられている外来語は、語義〔2a〕の「エネルギー」のみである。一方、BCCWJから実例が得られた外来語程度名詞（用例数3以上）を上語義別に示すと、次の〔表4〕のようになる。

表4 「高い」と共起する外来語程度名詞（語義別）

語義	外来語名詞	用例数	
〔1〕	-	レベル	81
		クオリティ	6
		ランク	5
		グレード	4
	a	プライド	40
c	スペック	3	
〔2〕	a	ウエイト	62
		リスク	61
		シェア	35
		ニーズ	28
		カロリー	15
		エネルギー	12
		コストパフォーマンス	5
		エントロピー	4
		スコア	4
		ポイント	4
		ストレス	4
		コレステロール	3
	e	テンション	4
〔3〕	-	コスト	50
		ギャラ	5
		ロイヤリティ	4
		レート	3

語義〔1〕の「高い」では、共起する外来語程度名詞として「レベル」「ランク」「グレード」といった段階性を表す類義語が抽出されている。一方、語義〔2a〕は、漢語で言えば「～値／率／度／性」等で表されるさまざまな外来語が混在している。これは、〔2a〕の定義が広く解釈できるためであるが、やはり「10%」のような具体的な値で示すことができるタイプの尺度とそうでない尺度があり、詳しい検討が必要である^(注4)。語義〔3〕の欄の外来語は「安い」の対義語としての「高い」と共起する名詞であり、金銭に関わる語が複数得られた。

このように、「高い」という形容詞1語に限定しても、外来語程度名詞は実

態として多様に見られることが分かる。

4.3. 分析2：複数の系列の形容詞と共起する外来語程度名詞

先に〔表3〕で見たように、外来語程度名詞の多くは、複数の系列の形容詞と共起する。このような外来語程度名詞について、実数ではなく抽象化した形で共起関係を示し、傾向が見やすいように左側の系列からソートしたものが、次頁の〔表5〕である。

ここからまず、「レベル」（高低）、「スケール」（大小）のように特定の1系列の形容詞としか共起しない外来語程度名詞は少数派であることが読み取れる。この他の語は、用例数にばらつきや偏りは見られるものの、基本的に複数の系列の形容詞と共起している。

次に、〔表5〕で網掛けを付した、「程度大／小」の両方の形容詞と共起し、かつそれが複数の系列にわたる外来語程度名詞は、次の12語である。

(6) 3系列の形容詞と共起する外来語程度名詞：

- a. 高低+大小+多少： ウェイト、エネルギー、コスト、リスク
- b. 大小+多少+広狭： スペース

(7) 2系列の形容詞と共起する外来語程度名詞：

- a. 高低+大小： シェア
- b. 高低+多少： カロリー、ニーズ
- c. 大小+多少： ストレス、メリット
- d. 大小+強弱： インパクト
- e. 遅速+長短： タイム

これらのデータから、外来語程度名詞のコロケーションに見られる最も一般的な尺度は、「高低」「大小」「多少」の3系列であると言える。これら3系列の尺度は、例えば(6b)(7d)のようにこれら以外の尺度と組み合わせたり、(6a)(7a-c)のように3系列の中で相互に乗り入れたりする形で分布している。

このような形容詞の系列の組み合わせを分類すると、次の(8)のようになる。

表5 複数系列の形容詞と共起する外来語程度名詞

	高低	大小	多少	遅速	強弱	長短	広狭	濃淡
リスク	●	●	●					
ウエイト	●	●	○					
シェア	●	●	△					
エネルギー	●	○	○		△			
コスト	●	○	○					
カロリー	●		○					
ニーズ	●	△	○		△			△
レベル	●							
プライド	▲				△			
セキュリティ	○				△			
コレステロール	○		△					
イメージ	○	△	△		▲			△
メリット	△	●	○					
サイズ		●				△		
スケール		●						
ショック		●	△					
ストレス	△	○	●		△			
スペース		○	○				○	
インパクト		○			○			△
ギャップ		○					△	
ポテンシャル	△	○						
デメリット		△	○					
ボリューム	△	△	○					
ロス		△	○					
ダメージ		△	△		△			
スピード				●		△		
テンポ	△			●				
タイム				○		○		
サイクル	△			△		●		

※「●」…「程度大/小」の両方の例があり、かつどちらかが10例以上

「○」…同、かつどちらも10例以下

「▲」…「程度大/小」のどちらかの例があり、かつ10例以上

「△」…同、10例以下

- (8) a. タイプA： 遅速、長短
 b. タイプB： 高低、大小、多少
 c. タイプC： 強弱、濃淡（、広狭）

タイプAの系列の形容詞と共起する外来語程度名詞は、「遅速」「長短」の

両方にまたがって用例が見られる一方で、同時にタイプ B の形容詞と共起する例はあまり見られない。そのタイプ B は先に指摘した一般性の高い系列の形容詞であり、これらの形容詞と共起する名詞は、同じタイプ内の別の形容詞とも共起するケースが多い。タイプ C の系列の形容詞と共起する名詞は、「広狭」を除いた「強弱」「濃淡」にまたがって分布する例が見られるが、同時にタイプ B の形容詞とより多く共起する傾向にある。

また、名詞の性質から見れば、タイプ A の形容詞と共起する外来語程度名詞は、「スピード」「タイム」のように「時速何 km」「何分」といった具体的な値を問うことのできる尺度を表すものが多い。タイプ B の形容詞と共起する名詞は、「コスト」「カロリー」のように具体的な値を算出することができるものと、「リスク」「ショック」のように抽象度が高く値でははかれないものが混在している。後者と共通するのが、タイプ C の形容詞と共起する「イメージ」「インパクト」のような名詞である。

したがって、外来語程度名詞は、(8) のタイプ A の形容詞と共起するものからタイプ C の形容詞と共起するものに行くにしたがって、より抽象度の高い「程度」を表していると考えられることができる。

なお、今回の調査の範囲では、「ボリューム」((音が) 大きい、(量が) 多い)を除き、形容詞の系列による意味の違い (cf. 秋元 1999) は見出しにくかった。例えば、次の (9) の「ウエイト」の例では、「高い」「大きい」「多い」を相互に入れ替えても解釈は変わらないと思われる。

- (9) a. 都市計画費では、街路費、公園費のウエイトが高くなっている。
 (平成 6 年版地方財政白書)
- b. 国保は負担超過となる年齢層のウエイトが小さく、給付超過となる
 高齢層のウエイトが大きいことが分かる。(昭和 60 年版経済白書)
- c. 食料費でも外食のウエイトが多いなど選択的支出へもかなりの支出
 をしている。(昭和 56 年版国民生活白書)

4.4. 分析 3: 「程度大」を表す用法を持つ外来語程度名詞

最後に、程度名詞の「程度」の性質と用法についてももう少し考えてみたい。

程度性を持つ名詞としてよく知られるのは、「前／後」「上／下」「奥」のような時間・空間の相対的位置関係を表すタイプの名詞と、「大勢」「多数」のような数量を表すタイプの名詞である。これらの名詞は、「もっと上」「かなり大勢」のように、程度副詞で直接修飾することができる (cf. 佐野 1997)。一方、本稿が問題としている程度名詞の場合、次の (10) のように、程度副詞の直接の修飾を受けず、「の」の介在が必要である。

- (10) a. *かなり {高さ／確率／レベル}
b. かなりの {高さ／確率／レベル}

秋元 (1985) が「中和」と表現しているように、程度名詞には程度性が内包されるものの、基本的にその役割は尺度そのものを示すことのみであり、尺度上のどのような位置にあるのかという方向性や具体的な値は問題にしないという性質を持っていると言える。

ただし、その例外とも言える現象が、和語系の「～さ」や漢語程度名詞には見られる。森田 (1980) は、接尾辞「～さ」に「程度性を表す用法」(ここで言う尺度のみを表す用法) と「あるレベルにあることを示す用法」(「程度大」もしくは「程度小」を表す用法) があることを指摘しており、秋元 (2000) も「重量」のような漢語について同様の用法があることを示している。

ここではこの問題を、テストの枠組みとして「～がある」構文を用いて考えることにする。和語や漢語のこの構文では、例えば「重さがある」「重量がある」で「重い」に相当する「程度大」の解釈を生じるためである。

このテストを先の〔表5〕の外来語程度名詞に当てはめてみると、「ギャップがある」「ストレスがある」のような通常の「存在」が表される名詞の他に、次の (11) のように「程度大」の解釈を示す語を見出すことができる。

- (11) インパクトがある (強い)、パワーがある (同)、カロリーがある (高い)、
スキルがある (同)、スピードがある (速い)、ボリュームがある (多い)

このように、外来語程度名詞でも、「～さ」や漢語程度名詞と同様、特定の

環境で「程度大」の解釈を生じるという意味的特徴を示す語が見られることが指摘できる。現象の範囲や条件については分析の余地が残されているが、森田(1980)が指摘する用法は、語種を超えて一般的なものであることになる。

5. おわりに

本稿では、「文法的に外来語を考える」という視点の必要性を提起したうえで、その一例として程度名詞と形容詞のコロケーションの問題を見てきた。

今後は、紙幅の都合で示すことのできなかった名詞も含め、より網羅的な外来語程度名詞のリストを作成する必要がある。また、今回は省略した「高いコスト」のような「形容詞＋[外来語]」の連体修飾構造の分析や、名詞と「高まる」「上がる」等の増加・減少を表す動詞類、「ある」「ない」のような存在述語との共起関係の分析も、課題として残されている。

近年では、大規模なコーパスに基づいて外来語の文法的側面を見る研究が増えつつある(例えば、外来語の品詞性に関する浅山2012、北澤2012など)。しかし、外来語全体としては、個別的な語法研究も包括的な研究も未だ不十分な状態にある。分析事例の積み重ねにより、日本語に定着した外来語から和語・漢語を含めた一般的な性質が見えてくれば、外来語の研究が語彙の体系的な分析に貢献できる可能性は十分にあると考えられる。

注

- 1) 副詞の例として、「ガンツ」(楳垣1963:27)、「リアル」(藤原2011)、「MAX」(北澤2012)などが指摘されているが、浅山(2012)も指摘するように、外来語の副詞的用法は口語性が強く、定着した用法とは言いにくい。北澤(2012)に指摘が見られる接続詞に関しても同様である。
- 2) 「[外来語]＋き」形の派生名詞(cf. 玉村2011)も尺度を表すと考えられるが、これも分析対象外である。
- 3) 例えば「ムードが{高まる／*高い}」のように、形容詞よりもその派生動詞と共起しやすい名詞も見られるが、その分析は今後の課題となる。
- 4) 尺度を表す名詞と値の関係については、数量詞の連体修飾構造を分析した江口(2002)でも論じられている。程度名詞との関わりについては、今後の検討課題となる。

【参考文献】

- 秋元美晴 (1985) 「「程度名詞」設定に関する試論」『甲子論集 林巨樹先生華甲記念国語論文論集』武蔵野書院
- (1999) 「程度名詞と形容詞の連語性」『日本語教育』102、日本語教育学会
- (2000) 「形容詞派生名詞と程度名詞の談話上の分布」『2000年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 浅山佳郎 (2012) 「日本語における外来語の使用状況とその文法的機能についての報告」、高野繁男・徐萍飛(監修)『日本語・中国語における欧米語受容の現状とその比較研究—英語世紀における日本語の外来語急増と中国語の対応をめぐって—』大空社
- 石野博史 (1983) 『現代外来語考』大修館書店
- (1996) 「辞典における外来語の語義記述—「オープン」の場合—」『言語学林 1995-1996』三省堂
- 榎垣実 (1963) 『日本外来語の研究』研究社出版
- 江口正 (2002) 「遊離数量詞の関係節化」『福岡大学人文論叢』33-4
- 神田靖子・佐尾ちとせ・佐藤由紀子・山田あき子 (2011) 『連語を使おう—文型・例文付き連語リストと練習問題—』古今書院
- 北澤尚 (2012) 「現代日本語における外来語の品詞性について」『学芸国語国文学』44、東京学芸大学国語国文学会
- 金愛蘭 (2011) 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3
- 國廣哲彌 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 国立国語研究所 (西尾寅弥) (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 佐野由紀子 (1997) 「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16
- 玉村禎郎 (2011) 「現代日本語における外来語の浸透—外来語系形容動詞(ナ形容詞)と接尾辞「-さ」の結合—」『杏林大学外国語学部紀要』23
- 服部匡 (2002) 「多寡を表す述語の特性について—肯定／否定関係との平行性を中心に—」、玉村文郎(編)『日本語学と言語学』明治書院
- (2011a) 「程度の側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係—通時的的研究—」『言語研究』140、日本言語学会
- (2011b) 「名詞と尺度的形容詞類の共起傾向の推移—国国会議録のデータから—」『同志社女子大学学術研究年報』62
- 藤原浩史 (2011) 「真の情報を導く副詞の形成」、中央大学人文科学研究所(編)『文法記述の諸相』中央大学出版部
- 宮田公治・田中牧郎 (2006) 「外来語「リスク」とその類義語の意味比較—既存の類義

語を持つ外来語の存在理由一』『言語処理学会第12回年次大会発表論文集』言語処理学会

宮田公治 (2007) 「外来語「メリット」とその類義語の意味比較—新聞を資料として—」

『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』国立国語研究所

村木新次郎 (1982) 「外来語と機能動詞—「クレームをつける」「プレッシャーをかける」

などの表現をめぐって—』『武蔵大学人文学会雑誌』13-4

村中淑子 (2012) 「接尾辞「チック」について—「CD-毎日新聞」(1991-2005) および

BCCWJ を用いて—』『国際文化論集』45、桃山学院大学総合研究所

茂木俊伸 (2011) 「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—「カットする」を例として

—』『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ(研究成果報告会) 予稿集』文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」総括班

森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店

森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店

〔付記〕

本稿の内容の一部は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会(2010年2月1日、於：国立国語研究所)、および第58回中部日本・日本語学研究会(2011年5月21日、於：刈谷市産業振興センター)における口頭発表に基づいている。席上、有益なコメントを下された皆様に御礼を申し上げる。

【基本文献】

◎石野博史 (1983) 『現代外来語考』大修館書店

一般向けの概説書だが、外来語の品詞に関する節が立てられており、原語とのずれについても取り上げられている。動詞や形容動詞として使われる外来語について、約30年前の意識調査のデータを見るだけでも面白い。

◎田野村忠温 (2009) 「コーパスからのコロケーション情報抽出—分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作—』『阪大日本語研究』21

本稿で扱った「コロケーション」を、コーパスを使って、何のために、どのように抽出するかを論じた論文。挙げられているデータをどのように読み解くかを考えながら読むと、より理解が深まると思われる。

◎小内一(編) (2010) 『てにをは辞典』三省堂

延べ60万例を載せた日本語のコロケーション辞典。意味説明は一切ないが、本稿で扱ったようなコロケーションが名詞(「リスク」)からも述語(「高い」)からも引ける。

言葉の西洋化 —近代化の中で—

米川 明彦

キーワード：近代化 モダニズム アメリカニズム 言葉の西洋化

1. 日本の近代化と外来語研究

日本の近代化を述べる前に、当然のことだが、そもそも近代化とは何かを述べなければならない。それを述べる中でヨーロッパの近代化が先にあったこと、また、それがどのようなものであったのかが明らかになり、そして、それが日本の近代化にきわめて多大な影響を及ぼしていることを確認することができる。ただし、本論考は歴史学でもなければ、経済学や社会学でもなく、日本語学なので要点のみを簡潔に記すことにする。

1.1. 外来語研究の視点

とはいえ、従来の日本語学は「言葉」「語」にばかり目が向き、歴史・経済・社会など、その周りや背景、それらの学問研究成果を十分に考慮せずにやってきた。特に外来語の歴史や移入・普及・定着などの問題はこれらをないがしろにして議論することはできないので筆者はそれを心がけて研究してきたつもりであったが不十分であった。なぜその時期に外来語が生まれるのか、使われるのか、増えるのか、意味が変わるのか、また、ある分野・領域の外来語がまともに出て現れ、定着するのはなぜなのか、などの多くの基本的な問いに対して十分に答えられていないのが現状である。

さて、次の会話を読んで、いつ頃のものかを推測してもらいたい。

「只今ア、ママ。」

「遅かったのね。暗くならないうちに、帰って来なければいけませんよ。」

「え、御飯まだ？ お腹ペコペコなのよ。」

「なんです、お行儀の悪い。パパがお風呂からお上がりになるまで、お待ち

なさい。」

「ママ」「パパ」だけを見れば戦後のものかと思いがちであるが、これは獅子文六『青春売場日記』（1937年）の一節である。この3年前の1934年8月29日に日本精神の鼓吹者である松田源治文相が家庭で流行している「パパ」「ママ」は日本の家庭構成と調和がとれないので、この呼称を駆逐しなければならないと発言した（「パピママ論争」については米川（1989）を参照のこと）。外来語「パパ」「ママ」の使用の是非は単なる言葉の問題ではない。本論考のテーマである近代化にかかわることがらである。しかし、今まで日本語の研究者はこういうことをこの観点を中心に据えて論じることはなかった。

外来語研究のアプローチについて、石綿（2001）や陣内（2007）にまとめられているが、上記の視点が欠けている。そこで本論文は「近代化」「モダニズム」という新たな視点で、かつ先の不十分な点を補う形で外来語の問題を論じることにする。

なお、近代化についての記述は富永（1996）を参考にする。

1.2. 近代化とは

「近代化」（modernization）とは字義的には近代的（modern）になること。近代化は15世紀のルネッサンス、1492年のコロンブスのアメリカ大陸発見と1497年のバスコ・ダ・ガマのインド航路発見などの地理上の発見、1517年のマルティン・ルターの宗教改革に始まる。しかし、この頃の政治・経済・社会は中世そのものであった。18世紀に始まったイギリスの産業革命がヨーロッパ全体を覆うようになったのは19世紀になってからで、近代化もその時期から本格化した。これは「産業化」（産業革命に始まって生活形態をそれ以前と根本的に変えてしまった技術的・経済的な変動過程）が近代化の重要な一部であることを示す。近代化され産業化された社会を近代産業社会という。

しかし、近代化にはこれ以外の領域もある。富永（1996）によれば近代化は大きく四つの領域（技術的経済的領域・政治的領域・社会的領域・文化的領域）から成っている。近代化はそれぞれの領域の伝統的形態から近代的形態への移行である（矢印で示した）。これらの四つの領域は相互に依存し合い、影響し合いながら進んでいった。したがって、近代化とはこれらの領域の総括概

領域	伝統的形態	近代的形態
技術的・経済的領域	技術	人力・畜力 → 機械力 $\left\{ \begin{matrix} \text{動力革命} \\ \text{情報革命} \end{matrix} \right\}$ (産業化)
		経済
政治的領域	法	伝統的法 → 近代的法
	政治	封建制 → 近代国民国家 専制主義 → 民主主義 (市民革命)
社会的領域	社会集团	家父長制家族 → 核家族 機能的未分化 → 機能集团 (組織)
		地域社会
	社会階層	家族内教育 → 公教育 身分階層 → 自由・平等・社会移動
文化的領域	知識	神学的・形而上学的 → 実証的 (科学革命)
	価値	非合理主義 → 合理主義 (宗教改革/啓蒙主義)

図 近代化の諸領域 (富永健一 (1996) 『近代化の理論』講談社学術文庫、p.35 より転載)

念である。

この四つの領域から日本の外来語を考えると政治的領域から出た外来語は他の領域に比べかなり少ないことが推測されるが、四つの領域での外来語についてさまざまな観点から実証的に研究しなければならない大きな課題が残っている。1例あげるならば政治的領域の近代化の何がどう影響してどの領域の外来語の移入・普及・定着につながったのかなどの問題である。本論考でもそれについてわずかであるが言及した。

1.3. 日本の近代化

近代化はヨーロッパの発祥のものなので日本はヨーロッパから取り入れることになるが、鎖国していた日本は2000年前の儒学の中に閉じこもり、近代化を19世紀半ばまで知らなかった。これを打ち破り近代化と産業化を受け入れる道を開いたのは福沢諭吉をはじめとする啓蒙思想家であった。特に福沢が文

久年間に幕府の遣欧使節に同行した際の見聞や西洋の書物をもとに書いた『西洋事情』（初編 1866 年、外編 1867 年、二編 1870 年）は西洋文明とその歴史を紹介し、日本を近代化に向けてることを目的としたもので知識人や指導者に大きな影響を与えた。本書は広く受け入れられて初編の発行部数は 15 万部、偽版を加えれば 20 万部以上とも言われている。

富永（1996）によれば、西洋の近代化を西洋と違う（＝非西洋）文化と社会の日本に受け入れるということは、西洋内での受け入れとは違った問題が生じる。すなわち「西洋化」という問題に直面する。しかし、その西洋化は西洋のまったくの模倣、コピーではない。そこには西洋のすべてを受け入れるのではなく、選択して受け入れる「選択的受容」があり、また受容したのも日本に適応しやすいように変える「適応的受容」がある。

日本の外来語の問題はこれと深くかかわる。生活の西洋化、衣服の西洋化、建物の西洋化などがあるように「言葉の西洋化」として外来語の移入・普及・定着を考えなければならない。フランス語からの外来語の占める割合が高い英語の外来語の問題と日本の場合とは根本的に違う。なぜなら英語は同じ西洋内での問題であるが、日本の場合は非西洋に西洋の言葉を受容する問題だからである。また、外来語は英語でもなければフランス語でもなく日本語であるのは、外国語そのものではなく選択的受容と適応的受容の結果だからである。したがって、日本の近代化における外来語の問題は西洋化とその受容の仕方と深くかかわると言える。

さて、日本の近代化の歴史は富永（1996）によれば、幕末から現代に至るまでいわゆる欧化主義（西洋主義）とその反対の国粹主義（ナショナリズム）の交代の歴史でもあった。

まず、幕末の尊皇攘夷の時代はナショナリズムが支配した。政治改革の明治維新は近代化に向かうのではなく王政復古という古代化に向かうものであった。

明治前半の 20 年間は文明開化の欧化主義の時代であった。明治 6 年の政変（1873 年）によって大久保利通を中心とする近代化派が西郷隆盛を中心とする伝統主義派に勝利し、明治政府は急速に近代化・産業化に向かう政策をとるようになった。大久保の殖産興業政策は上からの産業化であった。また鹿鳴館が

開設され（1883年）、福沢諭吉が脱亜入欧を主張した時代であった。

明治後半は大日本帝国憲法（1889年発布）と教育勅語（1890年発布）が天皇制と儒教を強調し、日本は日清戦争（1894～5年）と日露戦争（1904～5年）に勝利し、三宅雪嶺の雑誌『日本人』（1888年創刊）と陸羯南の新聞『日本』（1889年創刊）とが国民精神の発揚を説き、ナショナリズムの時代となった。

大正時代となり、藩閥政府から政党政治になり、吉野作造が民本主義を提唱し（1916年）、大正デモクラシーと呼ばれる自由主義・民主主義の西洋主義の時代が花開いた。

昭和前期に入り、関東軍による張作霖爆殺（1928年）、満州事変勃発（1931年）、5・15事件（1932年）、2・26事件（1936年）など軍部が政治を支配する時代になり、敗戦（1945年）までナショナリズムが支配した。しかし、後述するようにこれらの不安の要素がある中で大正中期から昭和初期にかけて、「日本モダニズム」と呼ばれるアメリカニズム（アメリカ化・アメリカニゼーション）があった。

戦後、1945年8月、アメリカ軍を主力とする占領軍が日本に進駐し、アメリカニズムの新しい西洋主義の時代を迎えた。

以上の近代化の歴史を見ると、外来語の移入・普及・定着が欧化主義（西洋主義）か国粋主義（ナショナリズム）かによって大きく左右されることは予想がつく。しかし、西洋主義の時にいつも外来語が移入・普及・定着し、ナショナリズムの時にはそうではないとは必ずしも言えない。そこには近代化の進展の度合い、特に経済的発展が非常に密接に関係している。経済の発展・成長は第一次産業から第二次・第三次産業へと移行、増大し、職業が多様化し、分化・専門化する。また、経済力は高等教育を支える力であり、高学歴は外国語に対する抵抗をなくし、より受容する力をつける。さらに経済力は消費・娯楽と結びつく。これらの観点から外来語を考察することはきわめて重要であり有益であるため以前に米川（1985、1991）で少し述べた。今後、一層詳細な研究を要する。

2. 日本モダニズムと外来語

日本の近代化の歴史は百数十年に渡る長いものなので、限られた紙数でその

間の外来語を論じることは到底できない。そこで、ここでは「日本モダニズム」と呼ばれた時代にしばって近代化と外来語を考察することにする。その理由は、この時代が戦後に次ぐいわゆる「外来語が氾濫」した時期で、外来語辞典、新語辞典が次々に出版され、近代化と外来語を考察するいい対象だからである。荒川（1932）によれば、1932年3月26日大阪朝日新聞・大阪毎日新聞・読売新聞の朝・夕刊には平均1日に954語、『婦人倶楽部』『婦人公論』『主婦之友』『中央公論』『改造』の雑誌では1頁平均19.2語使われていたという。このように外来語が多く使われているが、近代化との関係で言えば、そこに使われている外来語がどういう領域のものか、どういう種類のものか、なぜ使われているのかなどを検討する必要がある。当時、外来語研究が盛んになったときではあるが、近代化との関係で考察することはできていなかった。

なお、以下の「日本モダニズム」についての記述は南（1982）を参考にする。

2.1. 日本モダニズムとは

まず、「モダニズム」(modernism)とは「一般的には、伝統社会の社会的・文化的構造からの脱却を企図する精神的傾向を指す語で、〈近代主義〉と訳される。」(山田登「モダニズム」『世界大百科事典 第28巻』平凡社、2007年改訂新版)。「近代主義」「現代主義」「現代式」「当世風」などと訳されたが、「モダニズム」と原語のまま使用するのが一般的である。なお、昭和初期には俗に「普通には「何でも新らしがること」。又は、さうした傾向を指して云ふので、モボ、モガ、不良マダム、とっちゃんボーイ等の、信仰浅からぬものである」(『モダン語漫画辞典』1931年)という意味でも使われた。

次に、「日本モダニズム」とは1920年代初め(大正中期)～1937年頃(昭和十年代初め)に日本に現れた近代化現象である。文明開化と戦後のアメリカ化の近代化との中間に見られる近代化である。アメリカが第一次大戦に参戦して大きな力を発揮した時期から日本にアメリカ化が生まれた。文化的には大正の文化主義(明治期の文明開化思想が強調した物質文明から離れ、精神的価値を重く見る文化の主張)から生まれ、1930年の雑誌『モダン日本』の創刊から本格的なモダニズムが始まり、エロ・グロ・ナンセンスに特徴づけられる1930年代前半に全盛期を迎え、1937年のダンスホール禁止の頃から衰退し

た。政治的には吉野作造が民本主義を説き、大正デモクラシー（1918～21年）が盛んになった後に生活・風俗に多大な影響を与えた社会現象である。経済的には日本が第一次大戦を契機に経済規模を拡大し、資本主義を飛躍的に発展させ富んだことに伴う現象である。したがって、日本モダニズムは大正デモクラシーと資本主義の発展を背景にしていると言える。

以上のことは先の近代化の分類によれば、技術的経済的領域で人力・畜力から機械力へと産業化したこと、自給自足経済から市場の交換経済へと資本主義化したこと、第一次産業から第二次・第三次産業へと形態が変わったこと、政治的領域で大正デモクラシーにより自由主義・民主主義へと変わったこと、社会的領域で村落共同体から近代都市へと都市化したこと、文化的領域で非合理主義から合理主義へと変わったことを意味している。

2.2. 生活風俗モダニズム

このモダニズムは社会意識的側面、生活風俗的側面、芸術的側面、思想的側面などがあるが、ここでは紙数の都合で中心的な生活風俗的側面を取り上げる（例をあげながら実証していくなら、これだけで1冊の本になるほどのものである）。

さて、大正時代に「文化」が流行語になっていた。『近代文学用語辞典』（1926年）に「文化 クルツールの訳語。人格が向上して完成し、最後に到達すべき生活。」とあり、生方敏郎『明治大正見聞史』（1926年）に「大正六七年頃から新たに改造だの文化だの、赤化だのと云ふ言葉が出来て、二十世紀はその流行をこれ等の新造語に譲つたが」とあり、1917、8年頃から盛んに使われたという。この「文化」はドイツ語の Kultur の訳語でドイツの文化哲学から来たものであった。この「文化」は生活にも及び、生活を向上させ改善する「文化生活」も流行語になった。これを後押ししたのが好況であった。第一次大戦によって日本はヨーロッパからの大量の需要に対して供給するかたちで好況を呈し、労働者が都市に急激に集中する都市化が起き、都市化は消費のあり方を変え、都市がモダン化した。人々が街に出、デパートや商店街、盛り場で楽しむ娯楽、ライフスタイル、享楽主義が生まれた。また、文化が個性を求め、それによって個人主義または個人主義的傾向が形成され、個人生活面での充足が

目標となり、大量消費に結びついた。

このような消費スタイルを象徴するものとしてデパートがある。橋爪(2003)に「大量生産を前提に、都市が「工業化」する過程にあって、百貨店はあふれるほどに商品を陳列しつつ、さまざまな欲望を喚起する「消費の殿堂」であった。加えてモダニズムが喧伝された大正から昭和初期の日本では、単なる消費の場ではなく、遊園地や催事場を飲み込みつつ、コンパクトな都市型アミューズメント施設という側面も強調される。また家族を単位とする余暇を提供する「娯楽の殿堂」でもあった。」とあり、デパートは今の言葉で言えば複合商業施設であった。これは初田(1993)によれば、食堂が充実し、子供向けにランチも用意されていることも加えて、日本のデパートの特徴であった。デパートは都市の新中間層(サラリーマン層)を顧客のターゲットにワンランク上の文化生活を提供し、かつ流行・文化の発信基地として機能していた。『モダン語漫画辞典』(1931年)に「デパる(略)デパートに入ることで」と「デパート」を動詞化(「る」言葉と呼ぶ)しているほど、デパートが流行の「消費の殿堂」「娯楽の殿堂」であった。また、「デパートガール」が「職業婦人」として話題になっていた。たとえば獅子文六は『青春売場日記』(1937年)や『悦ちゃん』(1936～7年)などに登場させている。デパートは「生きた都会の縮図」であったため外来語はデパートの至るところに見られた。昭和初期の三越の展示・陳列された商品名・施設名などを調査することは近代化と外来語の研究に大いに役立つであろう。

ところで、日本の目をヨーロッパからアメリカに転換させる一大契機になった大きなできごとが大正期に二つある。一つは先にあげた第一次大戦であり、もう一つは関東大震災である(1923年9月1日発生)。関東大震災はそれまでの文化や経済を破壊し、ヨーロッパ文明からアメリカ文明へ一挙に方向転換させる大事件であった。復興計画において、建築・道路・上下水道・自動車・鉄道・ラジオ・通信など、すべてアメリカ文明を採用し、映画・音楽・スポーツなどの娯楽もアメリカのものを求めた。アメリカニズムが急速に進行したのがこの時期から昭和初期にかけてである。安藤更生『銀座細見』(1931年)に「昨日までの銀座は、フランス文化、即ち欧羅巴文化の光被の下にあつたのである。ところが、今日の銀座はそれと面目を全く異にしてゐる。今日の銀座に君

臨してゐるものはアメリカニズムである。先づ其処のペエヴメントを踏む男女を見るがいゝ。彼等の扮装は、彼等の姿態は、何れもアメリカ映画からの模倣以外に何かがあるか。ヴレンチノ出づれば銀座の青年の揉み上げは一斉に長くなつた。コーリン・ムーアの映画来れば銀座の女性は一斉に断髪した。銀座の女性はアメリカ映画のシーンによつて男性に対する応酬のテクニツクを覚え、アメリカ女の如くタクシイの中で恋をすることを見習つた。今日銀座のレストランに最も多いのはフランス料理に非ずして、水を以て葡萄酒に代へるアメリカ風ランチである。至るところのカフェに鳴る音楽はアメリカ好みのジャズである。」とあり、昭和初期の銀座を支配していたのがアメリカニズムであるという。それは銀座ばかりではない。『モダン用語辞典』（1930年）の「アメリカニズム」の項に「現代日本のモダンの源泉は、このアメリカであつて、昨日のアメリカの流行は、今日の日本の流行となる。単にわが国のみではない、このアメリカ主義は、今や全世界を風靡してしまつた。」と述べている。アメリカニズム、中でもアメリカ映画は女性の風俗や女性の解放に多大な影響を与えた。大正デモクラシーに始まりアメリカ映画によって決定的な影響を受けて女性解放の意識が生まれ、「職業婦人」が生まれた。こうして世相風俗モダニズムが出現した。

昭和初期になると、人々はより新奇なものを求め、マスメディアは尖端的な風俗を取り上げることが増え、「尖端的」「モダン」が流行語になった。『新時代の尖端語辞典』（1930年）と名づけられた辞典があつたほどである。小生夢坊『尖端をゆくもの』（1930年）には「尖端新用語」が15語掲げられている。その中に後述する「～ガール」の「カルピスガール」（恋愛期に到達した娘）「ラディカルガール」（断髪、脚線美、反戦物の演劇に興味を有つ女）がある。このような語が「尖端的」だったのである。また、『モダン語漫画辞典』（1931年）に「尖端商売往来」のコラムがあり、「アナウンサー」「美容院」「麻雀クラブ」「ベビー・ゴルフ」「雨傘預り所」「商戦定期券月賦販売」「メッセンジャー・ボーイ」「性病予防具の自動販売器」「自転車預り所」「自動車ホテル」が並んでいる。さらに「尖端珍商売」には「移動式マネキン」「飴屋の紙芝居」「空から無料入場券」「ノーチップタイム」「デパートの催物」「百貨店の演芸会」「チンドン屋」「マッチ宣伝」「不景気対抗珍宣伝」「マネキン・レビュー」があがっている。また「尖端的だわネ」の欄には「春はうれしい目黒の競馬 ふたり揃つて買ふ馬券 馬

は穴馬 アングロ・アラブ 第三カーブでちよいと抜いて につこり見かはす 顔と顔 オヤ 尖端的だわね」と、当時流行の競馬を歌うほか、麻雀・ダンス ホール・スキー・トーキー・カフェー・飛行機など最新流行物を取り上げている。これらから外来語が入り、広がることは言うまでもない。そもそも外来語を使用すること自体が「尖端的」「モダン」であった。『モダン用語辞典』（1930年）に「もだる 近代型、当世風、モダン振るの意。」と「モダン」を動詞化した「る」言葉「モダる」が生まれた。昭和初期に流行した「モダン語」とは最新流行語、尖端語という意味であり、多くは外来語であった。またそれは外来語に限らず、言葉の「尖端的」使用もあった。言い換えれば言葉の享楽化、俗語化が一気に進んだ時代であった。外来語が増えたのはこういう背景があつてのことである。

南（1982）には言及されていないが、関東大震災もまた娯楽についても大きな影響を与えた。石川（1981）によれば、「関東大震災は、東京から江戸を葬り去っただけでなく、娯楽の面からいうと、一瞬のうちに娯楽施設を消滅させた」「娯楽を人々から奪い去ることによって、逆に娯楽の必要性を人々に認識させたといえよう」という。また、関東大震災の困難な生活から従来の生活を改め、生活の簡素化・合理化・機能化が叫ばれ、これを機に洋服化や洋食化が進んだ。当然、これらからも外来語が入り、普及する。

では、日本モダニズム、アメリカニゼーションは何によってどう伝えられたか。それは大衆雑誌・新聞、またラジオ・映画という新媒体によって大量に、視聴覚に、即物的に、同時代的に生活風俗に及んだ。明治時代の西洋文化の流入は活字により、少量で遅く、生活文化よりも政治・経済・学問分野のものが主であった。一方、大正中期から昭和初期にかけて大衆雑誌のブームとなり、読者層が広まり、新聞も発行部数が飛躍的に増大した。1925年に始まったラジオ放送は1928年には全国ネットが完成し、聴取契約は1931年には100万、1935年には240万に達した。ラジオはスポーツ中継に人気があった。荒川（1932）によれば、松内則三アナウンサーの放送速記「早慶大野球戦放送記」（『文藝春秋オール読物号』1931年12月号）に試合時間2時間37分に用いられた外来語総数は2368語で、1分間平均15語もあったという。こうして視聴覚を通じて外来語が大量に生活に入ってきた。

2.3. 生活風俗モダニズムに見る外来語

生活風俗モダニズムの典型的な外来語の例を二つあげる。ひとつは「～ガール」であり、もうひとつは「る」言葉である。これらによって外来語が単に言葉の問題だけではなく、近代化と深くかかわっていることを示し、またそれを抜きにしては成立していないこと、さらにそれを指摘せずに言葉だけを扱ってあまり意味がないことを述べる。

まずは「～ガール」について述べよう。昭和初期のモダニズムを代表するものに「モダンガール」がある。本来は近代思想にめざめた教養ある若い女性のことであるが、当時、洋装・断髪の若い女性、また軽佻浮薄、享樂的な若い女性を指して使われた。もとは北沢秀一が本来の意味で欧米のそのような女性を指す言葉として1924年に紹介したが、1926年頃、新居格が日本に出現した洋装・断髪 of 若い女性をそう命名し、流行して広まった言葉である。その後、1927年には「モガ」と略された。詳しくは米川(1983b)を参照のこと。

昭和に入ると「職業婦人」が社会に進出して、彼女たちを「～ガール」と呼んだ。「モダンガール」から始まった「～ガール」にはさまざまなものがあった。高田義一郎「ガール全盛時代」『婦人画報』(1930年2月1日号)にその状況がよく表されているので引用しておこう。

ステツキ・ガール

ワンサ・ガール

ストリート・ガール

ガソリン・ガール

ボート・ガール

円タク・ガール

マネキン・ガール

エンゲルス・ガール

シヨツプ・ガール

タイピスト・ガール等、等、等一々数へれば限りない位、街上に、店頭、実在的にはた又架空的に、おゝ何とガールの種類の多いことよ！何でもいゝ、ガールとさへ云へば時代の尖端に立つものとして注目されるかの観があつて、正にガール全盛時代といふことが出来るであらう。諸々のガ

ール達が百花爛漫の春の趣を呈して居るのが、一九三〇年の情景である。

ガールの命名が日に日に新しく、目まぐるしい程に出来て来る関係から、以上の中にも奇怪なのや、意味の不明なものなどがある。

職業以外にも何でも「ガール」と名づけ、「ガール」が合成語の後項要素として盛んに使われた。ただ語が流行したのではない。この背景には先述したようにアメリカニズムがあった。特に女性解放と享楽主義と、より新奇なものを求め、マスメディアが尖端的な風俗を取り上げる傾向とがあった。決して明治時代や大正初期、また戦時中には出現し得ないのはそのためである。具体的にどんな語があったかという点、『現代新語集成』(1931年)の付録「日米モダンガールエロエロ集」に57語の「～ガール」が挙げられている(『社会百科尖端大辞典』(1932年)も同一)。また『モダン語漫画辞典』(1931年)にも多くを見出す。以下にその他の資料からも合わせて50音順に列挙する(111語)。

青バスガール・案内ガール・イットガール・ウーピーガール・ウォークガール・ウルトラガール・エアガール・エキストラガール・エログール・エレベーターガール・エンゲルスガール・円タクガール・オーケーガール・オーライガール・オシャクガール・オフィスガール・オペチョコガール・カードガール・カウンタガール・ガソリンガール・カフェガール・カルピスガール・キスガール(キスガール)・ギャソリンガール・キャンプガール・クッションガール・ゲイシャガール・コーラスガール・サーカスガール・サービスガール・サインガール・座談会ガール・シークガール・シックガール・ショップガール・水泳ガール・スキーガール・スクールガール・スタンドガール・ステッキガール・ストリートガール・スピーキングガール・スポーツガール・セネットガール・タッチングガール・ダンスガール・チケットガール・ディコイガール・碇泊ガール・テケツガール・デパートガール・テレフォンガール・ドアガール・トップガール・トラムガール・トレインガール・トンボリガール・ニュースガール・ノーズロガール・ノズガール・バーガール・バーバガール・博愛ガール・バスガール・バックガール・パラシュートガール・ビジネスガール・ピストガール・ビラガール・ビリヤードガール・ビルガール・ファクトリガール・フービーガール・フ

オリール・ガール・プラットガール・フラワーガール・フレッシュガール・文筆ガール・ボートガール・ポスタガール・ポストガール・ボックスガール・ホテルガール・ホワイトガール・麻雀ガール・マチガール・マッチガール・マニキュアガール・マネキンガール・マリーンガール・丸ビルガール・ミシンガール・ミスターガール・メールガール・メッセンジャーガール・モーターガール・モダンガール・モデルガール・ヤンキーガール・有閑ガール・ライブラリガール・ラディカルガール・ランチガール・リップガール・流行ガール・旅行ガール・レストランガール・列車ガール・レビューガール・ワンサガール・ワンパスガール

もうひとつの生活風俗モダニズムの典型的な例に、先にあげた「デパる」「モダる」のように外来語（その省略形）を使った「る」言葉がある。外来語（その省略形）に和語の「る」という動詞化する接尾辞をつけた「る」言葉は語形・意味・用法・使用者のいずれの点でも俗語化している。本来の外来語の語感はいい・かっこいい・優秀・高価・学問的」など良いものであるが、「る」言葉になったとたん、俗語になって、「荒い・汚い・幼稚・下品・俗っぽい・くだけた・軽い・ふざけた」などの語感となり、もともと外来語とは思えないほど日本語化してしまう。こういう外来語を使った「る」言葉は古く明治時代の女学生言葉や男子学生言葉に見られ、「エンビる」(envyから妬む意)「バイオる」(violateから犯す意)「コンパる」(コンパする)「テニる」(テニスをする)「ピンポる」(ピンポンをする)「ハイカる」(ハイカラから)などがあるが、わずかである。大正時代になると次のような語がある。

オペる (オペラ女優を追い回す)・コスめる (めかす)・サボる・ジゴマる (活動写真のジゴマから悪いいたずらをする)・デカる (デカダンから怠ける)・デコる (デコレーションからベタベタ飾る)・デモクラチる (デモクラシーから意味不明)・ノラる (『人形の家』ノラから妻が夫をおどすために家出する)

昭和初期になると、この5倍の語がある（詳しくは米川 (1983a、1989)を参照のこと）。

アジる (扇動する)・エスる (エスケープから授業をサボる)・エロる (エロチックからエロを発散する)・ジブる (ジブシーから野宿する)・ジャズ

る（ジャズから騒ぐ・でたらめな生活をする・ジャズに合わせて踊る）・ジュネブる（ジュネーブ会議からくだらぬ会議・相談をする）・ショーる（バーナード・ショーから皮肉る）・ステくる（ステッキから散歩する）・スペくる（スペキュレーションから投機する）・ソプラる（ソプラノで歌う）・タクる（タクシーに乗る）・タゴる（タゴールから居眠りをする）・ダブる・チップる（チップほしきのサービスをする）・ツーモる（麻雀のツーモから）・デパる（前出）・デマる（デマを飛ばす・扇動する）・デモる（デモをする）・テロる（暴力行為に出る）・トーキる（トーキーから騒々しくする）・ドツペる（ドイツ語ドツベルンから落第する）・トロットる（フォックストロットからふらりと歩き回る）・ニヒる（ニヒリズムから否定し去る）・バーバる（バーバリズムからめちゃくちやにがんばる）・バンプる（バンパイアから妖婦のようにふるまう）・ヒスる（ヒステリーになる）・ファウる（ファウルする）・ブロカる（ブローカーから仲介報酬を得る）・ベガる（ドイツ語ベガトウングから交接する）・ペダる（ペダンチックから物知りぶる）・ヘビる（ヘビーから馬力をかける）・モダる（前出）・モデる（モデルになる）・モノボる（モノポリから独占する）・リベる（ドイツ語リーベから愛する）・ルンペる（ドイツ語ルンペンから浮浪生活をする・失職する）・ロケる（ロケーションから遠出の逢引きをする）

このように昭和初期のモダニズムの時代に大量に造られたことにはいくつかの理由があるが、ここではふたつ理由を指摘しておく。ひとつは大正時代の中等・高等教育の普及・拡大である。各学校の生徒数は以下の通り。

	中学校	高等女学校	高等学校	大学
1913年(大正2)	131946人	68367人	6409人	9572人
1926年(大正15)	316759人	299463人	18107人	52186人

学校教育の普及・拡大は大正デモクラシーの風潮と第一次大戦を契機とする経済発展を背景としている。学校教育の普及・拡大は文化の大衆化、西洋主義の受容の拡大、英語やドイツ語などの外国語の知識を持つ層の拡大、インテリ層の拡大などにつながり、外来語を使った「る」言葉の創造・使用・受け入れにつながった。もうひとつは近代化、特に工業化・機械化が人間の内部にもたらした変化、すなわちスピード化によって時間と空間が縮まり社会が複雑化する

ことにより生じる精神の変化である。それはかつてなかった頹廢である。「ナンセンス」が流行語となった時代の精神である。ばかげたおかしさを求め、その結果、言葉の意味は希薄化し、言葉は娯楽の手段に落ちる。外来語を使った「る」言葉はこのようなところから生まれた。

3. おわりに

以上、限られた紙数で日本の近代化と外来語の問題を日本モダニズム、生活風俗モダニズムを中心に論じた。生活風俗モダニズム全般に関するだけでもまだこの数倍のことが研究対象として残っている。さらにモダニズムの他の領域、さらには明治時代の近代化と外来語の問題は種々あり、このように言葉の西洋化の研究は多くの課題が残っている。

【参考文献】

- 荒川惣兵衛 (1932) 『外来語学序説 (「モダン語」研究)』 自家版
石川弘義 (1981) 『娯楽の戦前史』 東書選書
石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』 世界思想社
富永健一 (1996) 『近代化の理論』 講談社学術文庫
橋爪紳也 (2003) 『モダン都市の誕生』 吉川弘文館
初田亨 (1993) 『百貨店の誕生』 三省堂選書
南 博 (1982) 『日本モダニズムの研究』 プレーン出版
米川明彦 (1983a) 「近代語彙考証1 “る” ことば」 『日本語学』 第2巻4号、明治書院
—— (1983b) 「近代語彙考証4 モボ・モガ」 『日本語学』 第2巻7号、明治書院
—— (1985) 「近代における外来語の定着過程」 『京都府立大学生活文化センター年報』 第9号
—— (1986) 「近代における外来語とスポーツ」 宮地裕編 『論集日本語研究 (2) 歴史編』 明治書院
—— (1987a) 「近代の衣服と外来語」 『梅花女子大学文学部紀要 (国語・国文学)』 22
—— (1987b) 「近代の外来語と映画 I~IV」 『日本語学』 第6巻1~4号、明治書院
—— (1988) 「近代外来語の用法 I~III」 『日本語学』 第7巻2、4、5号、明治書院

院

- (1989) 『新語と流行語』南雲堂
- (1991) 「現代の外来語の流入」『日本語学』第10巻4号、明治書院
- (1996) 「外国文化の移入と外来語」『国文学 解釈と教材の研究』第41巻11号、学燈社
- (2004) 「外来語一言い換えと俗語化」『出版ダイジェスト』第1983号

【基本文献】

◎荒川惣兵衛 (1932) 『外来語学序説 (「モダン語」研究)』自家版

昭和初期の「モダン語」氾濫時代に、その発生・流行・意義・必要性・国語性などを豊富な語例をあげて述べた本。同時代に生きる者が記した実例が生き生きしている。ただし、近代化の視点が欠けている。

◎米川明彦 (1985) 「近代における外来語の定着過程」『京都府立大学生生活文化センター年報』第9号

近代における外来語の定着過程を近代化の視点から、経済・教育・メディアなどを考慮して受容期・浸透期・発展期・最盛期の四つの時期に時代区分して論じた。わが国では初めてのもの。

◎—— (1991) 「現代の外来語の流入」『日本語学』第10巻4号、明治書院

現代における外来語に流入を経済の発展・成長・安定、工業化、第三次産業の増大、職業の多様化・分化・専門化など経済を中心に時代区分して述べた。

キリシタン語彙の歴史社会地理言語学—oratio オラシヨを例にして—

小川 俊輔

キーワード：オラシヨ キリシタン 受容史 九州地方 歴史社会地理言語学

1. はじめに

1.1. 目的

まず、次頁の地図1をご覧ください。この言語地図は、2003（平成15）年から2005（平成17）年にかけて行われた調査の結果を示したものである。調査文は「カクレキリシタンの人々が唱える呪文のようなお経を何と言いますか?」「オラシヨ」「モンジャモンジャ」「ゴメイサン」などと言いませんか?」である。これに対して、長崎県の離島・沿岸部を中心とする地域で「オラシヨ」「オラッシヨ」「ウラッシヨ」「オライソ」などの語が、また、長崎県北部の平戸島と生月島において「モンジャモンジャ」「モノモノ」という語が回答されている。

本稿で問題にしたいのは、このオラシヨである。オラシヨの語源は何か、また、どのような歴史を経て地図1のような分布領域を持つに至ったのか、さらに各時代・各地域におけるオラシヨの社会的な評価や価値はどのようなものであったのか——これらの間に答えることが本稿の目的である。

1.2. 方法

以上の目的に照らし、本稿では、歴史的文献資料におけるオラシヨの用例を年代順に記述し（歴史言語学の視点）、芸術作品におけるオラシヨの利用や資料館におけるオラシヨの展示・保存などの事実から、オラシヨに対する社会的な評価について整理していく（社会言語学の視点）。また、以上の歴史的文献資料や資料館建立場所の地域性について触れ、かつ、オラシヨに関する言語地図（地図1）の解釈を行うことにする（地理言語学の視点）。

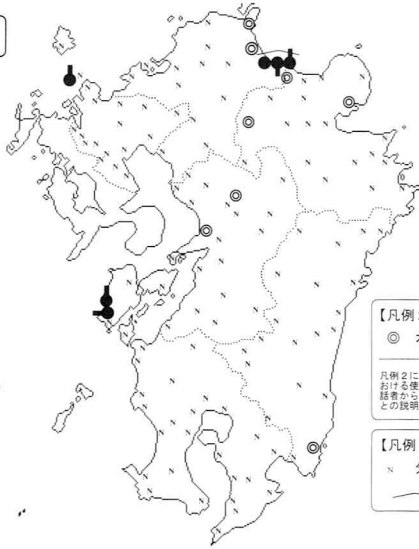
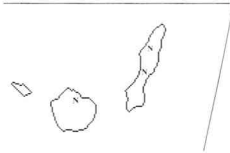
九州地方域言語地図(臨地調査)
A Linguistic Atlas of Kyushu District (Field-Survey)

項目名:
oratio オラシヨ

【凡例1】

- オラシヨ
- オラッシヨ
- ウラッシヨ
- オライソ
- モンジャモンジャ
- ◆ モノモノ
- * ゴメイサン

凡例1に示されたものは、回答地点における使用がみられる語形



【凡例2】

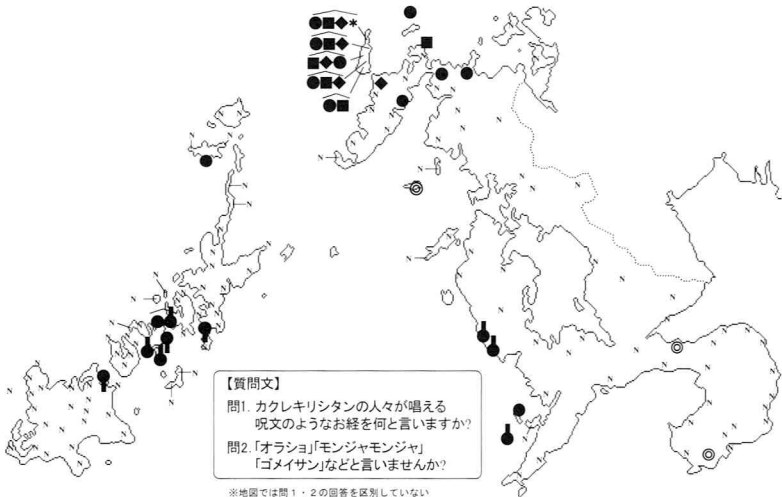
- ◎ オラシヨ

凡例2に示されたものは、回答地点における使用はみられない語形。即ち、筆者から「オラシヨや本などで知った」との説明があったもの。

【凡例3】

- N 分からない

— 併存事象



地図1

1.3. キリシタン・潜伏キリシタン・カクレキリシタンの定義

本論に入る前に、オラシヨの歴史の変遷と深く関わるカトリック改宗者の呼称について整理しておこう。基準となる年は、①フランシスコ・ザビエル Francisco de Xavier が来日した 1549 (天文 18) 年、②迫害の中、日本に最後まで残っていた宣教師小西マンショが殉教したとされる 1644 (寛永 21) 年、③キリシタン禁制の高札が撤去された 1873 (明治 6) 年である。

1549 年から 1644 年の間にカトリックに改宗した人々をキリシタン、その人々の子孫で 1644 年から 1873 年の間、組織下において密かにキリシタン信仰を続けていた人々を潜伏キリシタン、1873 年以降も同種の信仰を続けた人々をカクレキリシタン、1873 年以降、カトリック教会の洗礼を受け、カトリックに帰依した人々をカトリック信者と呼ぶ。以上について図示したものが図 1 である。これは、宮崎(2002)に示された図をもとに筆者が作成したものである。なお、潜伏キリシタンとカクレキリシタンの区別は、姉崎(1925)、片岡(1967)、宮崎(1996、2002)に従うものである。

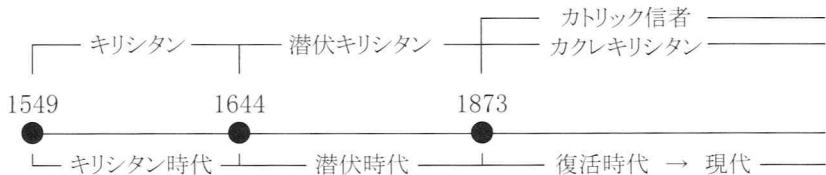


図1 キリシタン・潜伏キリシタン・カクレキリシタンの定義

2. オラシヨの歴史

2.1. キリシタン時代のオラシヨ

2.1.1. 『バレット写本』^(注1)におけるオラシヨ

オラシヨの初出文献は、1591 (天正 19) 年に書かれた『バレット写本』だとみられる。2つ用例をあげよう (キリシタン文化研究会編 (1962) による。○数字と下線は筆者が付したものである。以下同様)。

①ゼズス オラシヨの為に山へ登り給ひ、夜もすがらデウスにオラシヨを申

し給ふ

- ②イゲレイジヤへ参りオラシヨを申し上ぐる事憚り多しと雖も 信心の時は悪を忘れて、善き望みに移り 心肝にオラシヨ申し上ぐる処に。サンタ・マリヤおん身の光り耀き給ひて 夜中のことなるが現の如く直に見え給ひ

「オラシヨ」は「祈り」の意味で用いられている。その語源はラテン語の oratio（「祈り」の意）であろう。中世末期に來日した外国人宣教師たちは、キリスト教の教義の本質に関わる概念についてはラテン語やポルトガル語を日本語に翻訳することなく使用した^(註2)。こうして、中世末期から近世初期にかけてオラシヨが日本のキリシタンに受容されていった^(註3)。

しかし、豊臣時代・江戸時代を通じて徹底された禁教政策の結果、表面上、キリシタンは日本史の舞台から姿を消すことになり、それに伴ってオラシヨも忘れ去られていった。その例外が禁教時代にあっても潜伏形態でのキリシタン信仰が続けられた長崎・天草であった。

2.2. 潜伏時代のオラシヨ

2.2.1. 『こんちりさんのりやく』におけるオラシヨ

『こんちりさんのりやく』は、1603（慶長8）年に長崎で印刷されたとみられるキリシタン版である。イエズス会士セルケイラ Luis de Cerqueira が出版に関わったとされる。現在、刊本の存在は確認されていないが、長崎県の外海・五島・長崎地方の潜伏キリシタンが秘かに暗唱口伝したこと、また、彼らが複数の写本を所持していたことが知られている（片岡 1970）。ここでは近世末期の写本からオラシヨの用例を確認してみよう（海老澤ほか校注（1970）による）。

- ③でうすにたちかゑり奉る罪人の申上べきこんちりさんのおらつ所の事

オラシヨが「おらつ所」と表記されている。このように、潜伏キリシタンの残した写本からは、キリシタン語彙の変容・土着の様子を知ることができる。ところで、書名ともなっている「こんちりさん」の原語はポルトガル語 *contrição* である。その意味するところは「まごころより罪を悔い、再び犯さ

ぬと決心してその赦しを祈ること」である（海老澤ほか校注 1970）。神父不在のためにコンヒサン confissão（神父への罪の告解）をすることができなかった潜伏キリシタンたちは、『こんちりさんのりやく』に記されたオラシヨによって罪のゆるしを祈ったという（片岡 1970）。また、この『こんちりさんのりやく』は、彼らの精神的支柱であったとの見方もある（川村 2001）。この見方に立つならば、潜伏時代におけるオラシヨは、禁教前のキリシタン時代におけるオラシヨとは、その価値や重みが異なっていたと言える。

2.2.2. 『対治邪執論』におけるオラシヨ

潜伏時代、キリシタン排斥を目的とした数多くのテキストが書かれた。その中にオラシヨの用例がみられる。雪憲宗崔著『対治邪執論』（1648（正保5）年刊）においては次のようである（引用は海老澤ほか校注（1970）による）。

- ④日用中の所作・行法、茶飯に逢ふ時、手を以て十文字を画きて飲食す。また背後を打ち血を出す。この功力を以て罪障を滅す。また朝暮数珠を持ち、於辣諸を唱ふ。

淡々とした記述である。禁教時代に「邪宗門」とされた「切支丹」を批判する立場で書かれたテキストにおける「於辣諸」と、信仰のよすがとして先祖代々受け継がれた潜伏キリシタンの「おらつ所」（2.2.1）は、言語的な意味（語義）に差はなくとも、その価値——その語を口にする、あるいは表記する人間の、その語に対する心的態度のようなもの——は、異なるものであったろう。

2.3. 幕末維新時代のオラシヨ

2.3.1. プチジャン版『^{るざりよ}玫瑰花冠記録』^(注4)におけるオラシヨ

1854（嘉永7）年に締結された日米和親条約を契機として、多くの外国人が開港地に居住することとなった。そして、1862（文久元）年には横浜に、1864（元治元）年には長崎にカトリックの天主堂が建設された。表向きは居留外国人のための教会として建てられたが、長崎大浦天主堂に赴任したプチジャン Bernard Thadée Petitjean 司教は、キリシタン時代の改宗者の子孫（す

なわち潜伏キリシタン)との出逢いを密かに期待していた(純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編1986)。そして、大浦天主堂の竣工から間もない1865年3月17日(元治2年2月20日)、潜伏キリシタンがプチジャンに信仰を打ち明けるといふ出来事が起きるのである。以後、長崎、五島、平戸、生月、天草、今村(福岡)等々の潜伏キリシタンが次々に発見され、200年以上の宣教師不在の時代を経て、日本人は再び正式なカトリック信仰に帰依することとなった。

プチジャンは、潜伏キリシタンを教会に呼び戻すため、潜伏キリシタンが伝えたキリシタン語彙を用いた教理書の編纂・出版を思いつく。そして、彼らが密かに伝えてきた『こんちりさんのりやく』『天地始之事』などのテキストを収集し、また、口伝されてきた祈祷文(=オラシヨ)を記録し、そこで使われていたキリシタン語彙を用いて教理書を作成していった(松崎1928、ラウレス1940、海老澤1943)。『^{ろざりよ}改魂花冠記録』(1869(明治2)年、長崎刊)では次のようなオラシヨの用例がみられる(引用は明治文化研究会編(1928)による)。

⑤御母聖瑪利亜をろざと号し奉り、又十五の玄義の百五十遍のおらしよをろざりよといふ謂れのこと

ところで、筆者は先に、「再び正式なカトリック信仰に帰依する」と書いた。ここで「正式な」と書いたのには理由がある。というのは、潜伏キリシタンたちは、キリシタン時代の信仰を密かに伝えてきたわけだが、宣教師が不在であったため、信仰の対象や態度、方法がカトリック教会のそれと大きく乖離してしまっていた(田北1970、宮崎1995)からである。それはオラシヨにおいても同様であった。そのことを示すプチジャンの書簡(1865(元治2)年4月25日の記事)をみてみよう(引用は純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編(1986)による)。

⑥私たちは彼の式文は疑わしいと思いましたのでそれを訂正し、又、訂正された式文に忠実に従って、洗礼の務めを続行するように、それから、出来

るだけ度々司祭館に私たちを訪ねて来るよう勧めました。

2.3.2. オラシヨのねじれた価値

潜伏キリシタンにとって、オラシヨは、先祖代々受け継いできた信仰の証であり、よすがであった(2.2.1)。他方、プチジャンら宣教師にとってのそれは、潜伏キリシタンがキリシタン時代の改宗者の子孫であることを示す確かな証拠であり、かつ、彼らを教会に呼び戻すための道具として利用できるものであった(2.3.1、より詳しくは小川(2011))。しかし、彼らが受け継いできたオラシヨは、正式なカトリックの祈祷文とは乖離しており、矯正すべきものであった(2.3.1)。すなわち、宣教師にとって、潜伏キリシタンのオラシヨは、利用価値のあるものでありつつ、矯正すべきものであるという、ねじれた価値をもっていたのである。

プチジャンらは、やがて、潜伏キリシタンが伝承したラテン語・ポルトガル語の使用をやめ、オラシヨは「祈り」という和語に置き換えられていく。その結果、カトリック教会からオラシヨが次第に姿を消していくことになる。しかし、1873(明治6)年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあって維持し続けたカクレキリシタンは、オラシヨを今日にまで伝えることになる。

2.4. 復活時代→現代のオラシヨ

2.4.1. カクレキリシタンのオラシヨ

ここで再び地図1に戻る。まず、調査について簡単に触れておこう。

- (1) 話者の条件：原則として2005年11月時点における60歳以上の生え抜き(言語形成期の外住歴3年以内、言語形成期を含めて外住歴10年以内)
- (2) 県別調査地点数：福岡16、佐賀20、長崎162、熊本33、大分20、宮崎20、鹿児島29。合計300地点。

話者の生年については、最年長が1906(明治39)年生まれ、最年少は1948(昭和23)年生まれである^(注5)。以上のことを踏まえたうえで、再び地図1に目

を移そう。

1.1 に記したとおり、●系の符号が与えられた「オラシヨ」「オラッシヨ」「ウラッシヨ」「オライソ」(◎の「オラシヨ」を除く)は主に長崎県の離島・沿岸部を中心とする地域に分布している。この分布領域は、宮崎(2002)に示されたカクレキリシタン組織の存在が確認された地域と重なっている。福岡県にも1地点●が分布しているが、ここは、潜伏キリシタンを先祖にもつ五島列島のカトリック信者が集団で移住した土地である^(注6)。調査文は「カクレキリシタンの人々が唱える呪文のようなお経」の名称を尋ねたものであり、オラシヨが、カクレキリシタンの人々が暮らしてきた地域において回答されたことには、地理的な必然性があるといえる。

ところで、筆者の設定した調査文に対して、「カクレキリシタンの」という修飾語がついていることに疑念を抱かれている読者が多いのではないかと思われるが、そのことについては第3章で触れることにし、ここではオラシヨに対する話者(地図1における各地点の話者)の説明をいくつか引用してみたい(○数字以下が1人の話者からの説明である。()内に調査日と調査地を記す。以下同様)。

- ⑦ 「「オラシヨ」を唱えて」と小さい頃から聞いていた。カクレキリシタンの祈りのこと。仏教ともキリストともつかない読み方。(2004.3.26、長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷新町)
- ⑧ 生月に「オラシヨ」を唱えたら水が出てきたという話がある。(2004.6.19、長崎県平戸市田平町山内免)
- ⑨ カクレキリシタンの人が「オラシヨ」を唱える。(2004.7.26、長崎県長崎市伊王島町船津)

2.4.2. カクレキリシタン研究書におけるオラシヨの記述

明治時代以降、カクレキリシタンの習俗は学問研究の対象として取り上げられるようになっていった。現地調査に基づく総合的なカクレキリシタンの研究書として、田北(1954)、片岡(1967)、宮崎(1996、2002)などが書かれた。やや長くなるが、これらの研究書にみられるオラシヨについての記述をみてみ

よう。

⑩片岡（1967）の記述

オラシヨは、ウラッシヨ、オラッシヤなどと訛ったり、或は正しくオラシヨのまま、かくれキリシタンたちに用いられることもあるが、長い潜伏時代に形成された秘匿性は、その名称にも、概念にも少なからぬ変化を来した。

生月では、オラシヨのことを「ご経文」「ごしょう」とも、また「ご恩札」ともいう。「ごしょ」は「御誦」であろうか。堺日のごっしやでは、昭和40年、それまで口伝していた「ごしょう」を活字にした。表題は「旧キリシタンの御書」とある。

しかし、生月でオラッシヤといっているのはこの「ごしょう」といわれる一まとめの祈り全部を指すのではなく、その終わりの部分をなしている「ラウダテ」や「グルリオザ」などの歌オラッシヨだけを指しているのである。このオラッシヤは、かどある儀式や集会のとき、「ごしょう」につづけてとなえられる。

根獅子ではオラッシヨや、オラッシヤでは通じない。「おつとめ」である。また「お仕事」ともいう。「オラシヨしまししょう」とうながすのを「お仕事をはじめましよう」という。(pp.120-121)

⑪宮崎（1996）の記述

オラシヨとはラテン語の Oratio に由来する言葉で、キリシタン時代より親しく用いられ、現在にいたるまでカクレの間で用いられている。オラッシヨとかオラッシヤとかウラッシヨ等と発音されることもある（中略）。生月ではオラッシヤと言えば歌オラシヨのことを指し、（中略）「一通り」のオラシヨの中で、歌オラシヨの部分のをぞいたものを「御誦^{ごしょう}」という。

生月の人々の中ではオラシヨが何を唱えているかよくわからず、口の中で何かもじゃもじゃ唱えているということで、俗に「もんじゃもんじゃ」とか「ものもの」を言うともいわれる。また「ゴメイサン」という言い方もある。ゴメイサンはラテン語のミイサ (Missa) に丁寧語の「御(ご)」

が付与され、さらになまったものであろう。山田ではオラシヨを唱えることを「お務めする」とか「ゴメサ」という。(p.76)

⑫宮崎 (2002) の記述

根獅子ではオラシヨは「拝み事」といい暗誦する。(p.169)

有福 (中略) オラシヨのことは「ウラッシヨ」と発音 (下略)。(p.213)

宮原 (中略) オラシヨのことは「ウラッシヨ」という。(p.227)

黒崎 (中略) オラシヨは「ウラッシヨ」という。(p.273)

言語地図には現れていないが、オラシヨには「オラシヨ」「オラッシヨ」「ウラッシヨ」「オライソ」の他にもいくつかの異称が存在していたようである。また、言語地図に現れた「モンジャモンジャ」「モノモノ」の語源については、⑪の説明のとおりであろう。

2.4.3. カトリック教会ではいつまで「オラシヨ」と言っていたか？

幕末維新時代、長崎大浦天主堂のプチジャン司教がオラシヨなどのキリシタン語彙を用いて教理書を作成し、やがてキリシタン語彙を廃し、翻訳語（日本語）を用いるようになっていったことについては、2.3.1 および 2.3.2 に記したとおりである。そもそも、教理書におけるキリシタン語彙の使用については、プチジャン版の出版当時からカトリック教会においてもこれを問題視する人々がいた（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編 1986）。その後、キリシタン語彙によって書かれたプチジャン版には問題があるとの見方が広がり、信者から回収されたという^(註7)。

しかし、そのことによって、直ちにカトリック教会からオラシヨが失われたわけではなかった。そのことを示す話者の説明を引用しよう。

⑬私の小さい頃、母親が「オラシヨ」と言っていた。カトリックのお祈りのこと。(2004.5.11、長崎県平戸市宝亀町)

⑭かつてはカトリックでもお経のことを「オラッシヨ」と言っていた。今はカクレだけが言う。(2004.7.24、長崎県長崎市西出津町)

この2人はともにカトリック信者で、⑬の話者は1923（大正12）年生まれ、⑭の話者は1932（昭和7）年生まれである。⑭の「カトリックでも」という発言については、知識に基づくものなのか体験に基づくものなのかが判然としない。他方、⑬の説明は、カトリック信者である話者の母親が確実に「オラシヨ」を「カトリック教会の祈り」を表す語として使用しており、おそらく話者自身はそれを理解語として知っているが、使用してはいなかったというようなことだろう。

ところで、筆者は2012年の2月14日から29日まで、南米のボリビア多民族国サンファン日本人移住地を訪問した。ここは、第二次大戦後に移住が始まったいわゆる「戦後移住地」で、⑬・⑭の話者の出身地である平戸、外海その他、長崎県人が集団で移住したことが知られている（国本1989）。移住者の半数が長崎県出身者で、その多くがカトリック信者であった。この度の訪問では長崎県出身のカトリック信者の方を中心に聞き取り調査を行ったのだが、生月島出身の移住者から、「生月では終戦後もオラシヨなどのキリシタン語彙をカトリック教会の中で使っていた」との教示があった。

最後のプチジャン版と呼ばれる『切支丹の聖教』の出版は1883（明治16）年であるが、それを以てすぐにカトリック教会からオラシヨが消えたわけではなかった。終戦後も信者の中で使用され続けていたのである。

2.4.4. 芸術作品におけるオラシヨ

2.4.4.1. 文学作品におけるオラシヨ

ここでは、芸術作品において利用され、消費されるオラシヨについて整理する。諸芸術の中で、早くからオラシヨに注目し、利用してきたのは文学であった。その最も早い例の1つに、芥川龍之介が1924（大正13）年に発表した「糸女覚え書」がある（引用は芥川（1968）による）。

⑮然れば澄見の下がり候後は「まりや」様の画像の前に、凡そ一刻に一度づつは「おらつしよ」と申すおん祈りを一心にお捧げ遊ばされ候。何も序ゆる申上げ候へども、秀林院様の「おらつしよ」は日本国の言葉にては無之、羅甸らてんとやら申す南蛮国の言葉のよし、わたくしどもの耳には唯「のす、

のす」と聞え候間、その可笑しさをこらふること、一かたならぬ苦しみに御座候。(p.143)

芥川にはキリシタン時代の史実に想を得て書かれた「切支丹物」と呼ばれる作品群があり、「糸女覚え書」はその1つである。それらの作品には多くのキリシタン語彙が登場する。芥川の「切支丹物」の前にもキリシタン時代を題材にした作品として北原白秋の『邪宗門』や木下杢太郎の『南蛮寺門前』（ともに1909（明治42）年刊）などがあり、これらは「南蛮趣味文学」と呼ばれるが、それらの作品群の特徴の1つとして、キリシタン語彙の使用が挙げられる。遠藤周作の『沈黙』（1966（昭和41）年刊）も、「南蛮趣味文学」の系譜に連なるものだが、この作品では、次のような用例がみられる（引用は新潮文庫版（1981（昭和56）年刊）による）。

⑩きつかやろうね。辛抱するとよ。バードレさまもわしらもみんなオラシヨば祈りよるけん、二人がパライソ（天国）に行くやろうって思うるとよ
(p.73)

「南蛮趣味文学」と呼ばれる作品群は、専らキリシタン時代（中世末から近世初頭）を舞台としているので、作品中に現れるオラシヨは「キリシタンの祈り」という意味で使用されている。

一方、2001（平成13）年に第124回芥川賞を受賞した青来有一の「聖水」の舞台は平成の長崎で、登場人物のほとんどが潜伏キリシタンの子孫という設定となっている。作品中に幾度も登場するオラシヨは、「潜伏キリシタン・カクレキリシタンの祈り」として描かれている。以下は語り手の恋人であるカヤノさんがオラシヨを口にした直後の場面である（引用は文春文庫版（2004（平成16）年刊）による）。

⑪彼女は記憶しているオラシヨの一節だと語った。「ばらいぞうは天国、いんへりどは、たぶん、地獄でしょう？ 地獄と天国のあり様を伝えていのでしょうかね」（中略）「覚えてどうしますか？」「この地の人々は

二百五十年もそれを口移しに伝えてきたのですよ。意味もよくわからないまま……」「それこそ、ただの迷妄でしかない」「そうでしょうか？」とカヤノさんは言った。「何代にもわたって口移しに伝えていけば、そこには意味が生まれるのではないですか」「今では浦上の信徒は誰もが教会に通っている。もはや、オラシヨの歴史的な役割は終わっているのではないですか。教会も、今頃、それをカトリック信仰の祈りの言葉だといっても認めるわけがないでしょう。もし、今、オラシヨを唱える人々がいるとしたら、それは、カトリックとは別のなにかだ。(下略)」(pp.300-301)

この他にもオラシヨを利用した文学作品は多い。最近の例を挙げれば、なかにし礼(1999)『長崎ぶらぶら節』、飯嶋和一(2008)『出星前夜』などがあり、前者は第122回直木賞、後者は第35回大佛次郎賞を受賞している。このことは、オラシヨが作家にとって有用で魅力的な題材であり続けていることを示している。

2.4.4.2. 合唱作品におけるオラシヨ

文学作品に次いでオラシヨを多く取り上げてきた芸術は合唱である。ここでは、簡単にその歴史を記しておこう(詳しくは小川(2011)を参照)。

まず、全体的な傾向として、キリシタン時代のキリシタン版のオラシヨよりも、潜伏キリシタン・カクレキリシタンが伝えた変容したオラシヨの方が利用される。今、その別は措くとして、オラシヨが利用された最も古い合唱曲は柴田南雄(1979)『宇宙について』である。その後、大島ミチル(1984)『男声合唱曲 組曲「御誦^{おらしよ}」』、千原英喜(1999)『混声合唱のための「おらしよ」』、同(2003)『混声合唱のための どちらなきりしたん』、同(2007)『混声合唱のための きりしたん 天地始之事』などの作品が作られている。どの作品も高い人気を獲得し、現在でも多くの演奏会で取り上げられ、歌われ続けている。

2.4.5. 文化遺産としてのオラシヨ

幕末維新時代のカトリック宣教師にとって、潜伏キリシタン・カクレキリシ

タンのオラシヨは、利用価値のあるものでありつつ、矯正すべきものであるという、ねじれた価値をもっていた(2.3.2)。しかし、そのオラシヨは、やがて多くの芸術家の感性を刺激し、結果として多くの優れた文学作品・合唱作品が生み出された(2.4.4)。これは、芸術家にとって、オラシヨは利用価値の高いものであったということである。そして、今、それは「文化遺産」として位置づけられ、積極的な記録・保存活動が行われている。

1977(昭和52)年以降、キリシタン信仰の歴史を持つ長崎県・熊本県に多くのキリシタン資料館が建てられ(小川2011)、書き写されたオラシヨが展示されている。また、キリシタン資料館天草ロザリオ館(熊本県天草市)や平戸市生月町博物館「島の館」などではカクレキリシタンの祈りの部屋が再現され、録音されたオラシヨを耳にすることができる。さらに、インターネットの動画サイト「YouTube」では、「島の館」が編集した生月島カクレキリシタンのオラシヨが全世界に向けて公開されている。

また、国立劇場では1977(昭和52)年以降、たびたびカクレキリシタンの人々が招かれオラシヨの口演が行われている。2000(平成12)年には「文化財保護法50年記念」の名を冠する催事の中で口演された。オラシヨを録音したCDも複数発売され、民放テレビでも特集が組まれた(小川2011)。

過疎化や近代化を背景とするカクレキリシタン組織の崩壊・消滅が進んでいることもあり、オラシヨの社会的な価値はいよいよ高まっている。ここでもう一度地図1に目をやると、◎で示された理解語としてのオラシヨ(話者自身は使用しないが、テレビや本などで知っていると言明があったもの)が広い地域に散在して分布していることに気がつく。これは、上で見てきたようなオラシヨの利用や価値の向上を背景とするものであろう。

2.4.6. ポリビア多民族国サンファン日本人移住地におけるオラシヨ

戦前・戦後を通じ、長崎、福岡から多くのカトリック信者が新天地を求めて南米へ渡った。南米への移住は経済的な理由から行われたとする見方が一般的であるが、宗教的な理由、すなわちカトリック国での自由なカトリック信仰を求めての移住も行われた。さらに、移住者の中にはカクレキリシタンの人々もいた。その詳細については別稿で詳しく述べる予定である。ここでは、南米日

系移民とオラシヨとの関わりについて記しておきたい。

2.4.3に概要を記した2012(平成24)年に筆者が行ったボリビア多民族国サンファン日本人移住地での現地調査では、2つのカクレキリシタン家族の存在が確認された。いずれも五島からの移住者であった。F家の主人(物故者)は、妻にも自分がカクレキリシタン信仰を持つ者であったことを告げず、密かにオラシヨを唱えていたという。また、K家の老主人は「トマどん」というカクレキリシタンのものとおぼしき洗礼名を持ち、小さい頃にカクレキリシタンの洗礼を受けたという。但し、オラシヨについては何も知らないとのことであった。

また、私がお目にかかった長崎(生月、平戸、外海)出身のカトリック信者の方は、例外なく、すべての方が、移住前にカトリック教会の中で「オラシヨ」という言葉を口にしていたと懐かしそうに話された。ボリビアに移住してからは「オラシヨ」を口にすることはなくなったが、スペイン語で「祈り」のことを *oración* (現地語の音声をカタカナ表記すると「オラシオン」となる)といい、この言葉を耳にして、「自分たちは、確かに、聖フランシスコ・ザビエルの教えに従ってカトリックに改宗した者の子孫であることを自覚した」という逸話を、これも多くの方が口にされた。オラシヨを媒介に、キリシタン時代の先祖の姿が、400年の時を越え、地球の裏側で、彼らの心によりありと現れたのである。

3. まとめ

以上、オラシヨについて歴史的、社会的、地理的な視点から記述してきた。オラシヨを唱えていた主体とオラシヨの意味との関わりについて補いながら、記述の要点を整理しよう。まず、オラシヨの意味する概念については、時代的な変遷があった。オラシヨの元となったラテン語 *oratio* は「祈り」を意味する語であった(2.1.1)。しかし、それが外国人宣教師により日本に持ち込まれたとき、オラシヨを唱える主体はキリシタンであったことから、「キリシタンの祈り」という意味で使用されたものと思われる。潜伏時代、オラシヨは潜伏キリシタンによって密かに伝承された。幕末維新時代・復活時代には、宣教師の言語戦略によって潜伏キリシタンのオラシヨが利用され、一時、カトリック

教会においても「オラショ」という語形が使用された(2.3.1)。この時、オラショを唱えていたのはカトリック信者とカクレキリシタンであった。このため、この時代のオラショは、「カトリックの祈り」、「カクレキリシタンの祈り」の意味で使用されていたことになる。その後、カトリック指導者がオラショを含むキリシタン語彙の使用を止めた(2.3.2)ことにより、昭和になると、オラショは次第に「カクレキリシタンの祈り」としてのみ使用されるようになっていった。調査文に「カクレキリシタンの」という修飾語がつけられたのはこのためである。表1は以上の記述を整理したものである。但し、これは語義の変化ではなく、オラショを唱える主体の歴史の変遷に伴う文脈的な意味の変化ととらえることもできる^(注8)。

表1 時代別にみたオラショの意味

時代	キリシタン時代・潜伏時代	復活時代	現代
意味	キリシタンの祈り	カトリックの祈り カクレキリシタンの祈り	カクレキリシタンの祈り

次に、地図1のとおり、今日、オラショは「オラショ」「オラッショ」「ウラッショ」「オライソ」「モノモノ」「モンジャモンジャ」など、様々な語形を持っている。ここで、語形相互の歴史的先後関係について考えてみよう。まず、「オラッショ」→「ウラッショ」については前者から後者が生まれたと考えてよいだろう。しかし、「オラッショ」という語形が「オラショ」が変化して生まれたのか、あるいは、キリシタン時代にラテン語 oratio が日本語化するときに(「オラショ」を経由せずに)生まれたのかどうかは分からない。なお、「モノモノ」と「モンジャモンジャ」誕生の経緯は、⑪の宮崎の推論のとおりである。

最後にオラショの社会的位置、価値について整理しよう。「祈り」が果たす役割の大きさについては、キリシタンに限らず、あらゆる宗教・信徒に共通のものであろう。しかし、禁教という社会状況下にあつてオラショが担った役割はとりわけ大きなものだったと考えられる(2.2.1)。その後、潜伏キリシタンの伝えたオラショは、幕末維新時代に来日した宣教師に利用される。しかし、長い年月に渡って密かに口伝されたことによって生じた訛り・変容については、注意深く修正された(2.3.1)。昭和の時代になり、オラショは芸術家によって

繰り返し利用され、また地方自治体・国家によって保護され、記録・保存される存在となった。

他方、キリシタンの子孫にあたるボリビア移住者は、現地語であるスペイン語 *oración* オラシオンとの邂逅により、日本で耳にしていたオラショの歴史性をおのずから悟り、自らのアイデンティティを見つめ直すこととなった(2.4.6)。

注

- 1) 最も古いキリシタン資料。『聖書』の福音書、聖人伝などからなる。ローマ字綴りの日本語で書かれている。
- 2) 布教用語や翻訳の問題については、土井(1933)、米井(1998、2009)など多くの研究がある。
- 3) 1600(慶長5)年には、「おらしよ」を書名に冠するキリシタン版『おらしよの翻訳』が出版されている。この書は、キリシタンが日々祈るべき祈祷文を集成したものである。収められている祈祷文は、そのほとんどが邦訳されたものであるが、ラテン語の祈祷文を仮名表記したもの(Paternoster「主祷文」、Ave Maria「天使祝詞」など)も含まれている。
- 4) 今日のカトリック教会においても重要な祈祷文と位置づけられている「ロザリオの祈り」の祈り方、またその功德について解説したテキスト。
- 5) 但し、1915(大正4)年から1945(昭和20)年の30年の間に生まれた方が多い。なお、(1)の条件から外れる話者については小川(2012a)、(2)の具体的な調査地点については小川(2007a)を参照。
- 6) なお、天草に1地点「オライソ」という語形が分布している。管見の限り、これは文献には見当たらない語形である。話者からは「昔の人が言っていた」との説明があり、話者の記憶違いの可能性も否定できないが、オラショと同じく今日まで伝えられたキリシタン語彙である *paraiso* パライゾとの関係も視野に入れつつ、追加調査によってその来歴を明らかにしたいと考えている。
- 7) 聖心女子大学名誉教授・聖心会シスター山崎渾子先生のご教示による(直話:2011(平成23)年9月16日)。但し、筆者はその事実を示す史料を確認できていない。
- 8) これは、「神父」を意味するポルトガル語 *padre* パードレが、キリシタン時代の神父が外国人ばかりであったことから、やがて「外国人宣教師」という意味で使用されるようになったことと類似の事象である。

【参考文献】

- 芥川龍之介（1968）『奉教人の死』新潮社
- 姉崎正治（1925）『切支丹宗門の迫害と潜伏』同文館
- 海老澤有道（1943）『切支丹典籍叢考』拓文堂
- 海老澤有道・チースリク，H.・土井忠生・大塚光信校注（1970）『キリシタン書 排耶書』日本思想大系 25、岩波書店
- 遠藤周作（1981）『沈黙』新潮社
- 小川俊輔（2007a）『九州地方域方言におけるキリシタン語彙の受容史についての地理言語学的研究』学位論文、広島大学大学院教育学研究科
- （2007b）「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史についての地理言語学的研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』55-2
- （2011）「日本社会の変容とキリスト教用語」『社会言語科学』13-2
- （2012a）「九州地方における「天国」の受容史—宗教差、地域差、場面差—」『日本語の研究』8-2
- （2012b）「九州地方におけるキリシタン語彙の受容史」『日本キリシタン墓碑総覧』長崎文献社
- 片岡弥吉（1967）『かくれキリシタン』日本放送出版協会
- （1970）「収載書目解題 こんちりさんのりやく」『キリシタン書 排耶書』日本思想大系 25、岩波書店
- キリシタン文化研究会編（1962）『キリシタン研究』7、吉川弘文館
- 川村信三（2001）「『こんちりさんのりやく』の成立背景と意義—キリシタンの精神的支柱としての特異性—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』9
- 国本伊代（1989）『ポリビアの「日本人村」 サンタクルス州サンファン移住地の研究』中央大学出版部
- 米井力也（1998）『キリシタンの文学』平凡社
- （2009）『キリシタンと翻訳』平凡社
- 純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編（1986）『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学
- 青来有一（2004）『聖水』文藝春秋
- 田北耕也（1954）『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会
- （1970）「収載書目解題 天地始之事」『キリシタン書 排耶書』日本思想大系 25、岩波書店
- 土井忠生（1933）「日本耶蘇会の用語に就いて」榎垣実編『外来語研究』3
- 林重雄編（1981）『ぼうちずもの授けやう おらしよの翻譯 本文及び総索引』笠間索

第1部 言語文化論的アプローチ

引叢刊 77、笠間書院

松崎實（1928）「天主教の部解題」明治文化研究会編『明治文化全集 19 宗教篇』

日本評論社

宮崎賢太郎（1995）「キリシタン他界観の変容 キリシタン時代より現代のカクレキリシタンまで」『純心人文研究』1

———（1996）『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会

———（2002）『カクレキリシタン オラショ—魂の通奏低音』長崎新聞社

明治文化研究会編（1928）『明治文化全集 19 宗教篇』日本評論社

ラウレス、ヨハネ（1940）「プチジャン司教とキリシタン伝統」『カトリック研究』20-2、カトリック研究社（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編（1986）に再録）

〔付記〕

本稿は平成 20・21 年度科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）（課題番号 20820061）「九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」（研究代表者：小川俊輔）による成果の一部である。

【基本文献】

◎純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編（1986）『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学

パリ外国宣教会のプチジャン Bernard Thadée Petitjean（1829-1884）司教の書簡を和訳翻刻したもの。キリスト教用語に対する社会的評価が幕末維新時代の長崎と横浜で異なっていたこと、宣教師が効果的に布教を進めるために採用した言語戦略などについて知ることができる。

◎米井力也（2009）『キリシタンと翻訳』平凡社

キリシタン版の多くは欧州で出版された原典を翻訳したものである。本書は、原典とキリシタン版とを対照し、一つひとつの言語表現から翻訳の意図、意味、背景を探る。議論は翻訳論から異文化接触論へと展開していく。なお、同氏には関連する書籍として他に『キリシタンの文学』がある。

◎小川俊輔（2011）「日本社会の変容とキリスト教用語」『社会言語科学』13-2

日本におけるキリスト教用語の歴史を特にその社会的位置や価値付けに重点を置いて記述したもの。キリスト教用語に対する評価は、時代、地域、評価する人の立場や職業などによって異なることが具体的な資料に基づいて示されている。

日本語の世界進出 ―グーグルでみる外行語―

井上 史雄

キーワード：外来語 外行語 グーグルインサイト 初出年 日系人

1. 外行語・外来語と借用語

1.1. 外来語と外行語

この論文では、二つの新鮮な視点を取り入れる。一つは「外来語」と反対の方向で、国外で使われる日本語への着目であり、もう一つは、インターネットによる全世界の使用状況の把握である。

以下では「外行語」という用語を使う。「外来語」の対として作られた用語で(三輪 1977)、日本語中心に「外来語」を論じることの多い日本人読者向けには、その逆方向の命名「外行語」が分かりやすい(田中 2012)。「キモノ、ゲイシャ、カミカゼ、ネマワシ」などの類である。上位概念の「借用語」の2方向を区別して扱うには便利である。なお、借用語を「輸入語」対「輸出語」または borrowing 対 lending に分けるのは、日本語以外のすべての言語に適用可能な相対的な命名である。

日本語への借用語、つまり外来語についての研究は多いし、体系的なものもある。日本語中心の外来語論の中で外行語について言及されることもある。両者は、借用関係という点では同じ理論的水準にある。外行語と対立させると、外来語の性格が浮き彫りになる。同様に日本語以外の言語での相互借用関係も考慮に入れると、日本語の外来語の特殊性が浮かび上がり、他方借用語としての普遍的特徴も出てくる。視野を広げると、景色が別に見えるのだ。

1.2. 外行語研究史

日本語から英語への外行語は研究が多く(Cannon 1996、加藤・熊倉 1999、早川 2003、同 2006、原口他 1998)、最近では英語辞典・英和辞典が CD-ROM

などの形で売られるようになったので、検索が楽になり、論文も各種出ている。最近のアメリカ英語ではスペイン語から次いで、日本語から入った単語が多いそうである。アジア諸国にも日本語の単語が入っていて、台湾（おでん）、韓国（するめ、つめきり）、ミクロネシア＝旧南洋（さしみ、ぞうり）など、豊富な例が記録されている。日本文化独自のものを表す語（特有語）が多い。国によってメーカー名だったり、日本文化の特有語だったり、あいさつだったりで、違いがあるのが面白い。

英語への外行語の多さは例外的で、他のヨーロッパ諸言語への外行語は少ない。交流の少なさを反映する。ポーランドで会った英語の観光ガイドは「私は日本語も知っている」と言ったが「ホンダ、トヨタ、スズキ」の類ばかりで、ジョークと分かった。電気製品や自動車メーカー名は世界に広がっているが、広告などでは「日本隠し」の形で広げることもあり、日本語進出とはいえない。

これまでの外行語の実証的研究は、英語中心のものが多く、他にヨーロッパのいくつかの言語やアジア近隣諸国のいくつかの言語について行われているにすぎない。世界的分布に関しては、いくつかの単語について世界各地で使われているという指摘はあるが、統一的条件で全世界を見渡した研究は未見である。日本語の単語がアメリカ（英語）に入り、アジア諸国や移民の多い南米で使われることについて、個別の国家の報告や調査はあったが、多数の国家についての同一条件での報告は、これまでなかった。また個々の単語についての研究が多く、多数の単語についての一般傾向を探るという研究も、まれである。

わずかに国立国語研究所の「日本語観国際センサス」の4語28カ国のデータが、グローバルな研究といえる（新プロ「日本語」総括班編1999）。各国ともかなりの人が日本語の単語や表現を答えている。井上（2001）では結果を地図にした。全体として、キモノ、ショウゲン、サクラ、スキヤキの4語は欧米と東南アジアでよく知られており、インドとアフリカでは知られていない。日本語学習への関心とよく一致する。しかしこのデータはシンポジウム（国立国語研究所2002）で紹介された以外、活用されていない。

「水と外来語は高きから低きに流れる」という一般法則があって、2言語間で相互に借用語（外来語・外行語）の数をくらべれば、お互いにどちらの影響が大きかったかが分かる。英語はじめヨーロッパの諸言語については、外行語

は少なく、日本語は入超で、下位にたっている。アジア諸国から日本語に入った外来語は少ないので（韓国からの「チマ・チョゴリ、チョンガー、メンタイコ」は多い方）、日本語が優位である。もっとも韓国のように、その後の国語純化運動により、日本語からの語を排除している国もある。いずれにしろ昔に比べて日本の様々な面がことばを通じて世界に広がっている。国際化にともなって、日本に海外の文化がなだれこむだけではない。お互いに門戸を開放しあって、国外との交渉を広げる現象が言語面に反映しているのである。

この論文で扱うのは、日本語の単語が海外で（世界で）どう使われているかを示すもので、これまで目にできなかった世界言語データである。個々の世界分布図を見るだけでなく、多くの分布図の共通傾向を見ようと努めた。

2. 外行語の世界分布データ

2.1. グーグルマップの「サムライ」

以下のグーグルマップ Google maps およびグーグルインサイト Google insights for search は、ここ数年のインターネットの発展によって可能になった画期的研究技法といえる。全世界の最近の言語使用状況が分かる。それぞれの実例を掲げる。

図1はグーグルマップ Samurai の世界分布である（2010.11.8 検索）。使用地点が点でプロットされる。図左の文と写真で分かるように、Samurai と名乗る店が世界各地にある。図左下をみると、66000 件以上ヒットした。ただし店などのクチコミ情報も入っていて、外国人の旅行者が書きこむこともあるので、その国の使用率を直接反映するわけではない。しかし外行語 Samurai は全世界に広がっている。欧米と東アジアに多いのは、多くの図に共通な傾向である。ロシアやアジア諸国は、後述のように文字の制約があって、少ない。アフリカの空白は識字率やパソコン普及率も関係する。

またグーグルマップの限界だが、使用地点が多い場合は1枚の地図にすべてがプロットされるわけではない。ただ各大陸などの大きさに分けると、その範囲内の語は詳しく表示されるので、その地図をパソコンの画面上で並べれば、全世界のもっと詳しい地図を作れる。

後述のように単語によって使用率・普及率が違うが、類似の地理的分布が観

Google maps samurai

Get Directions My Maps

Samurai 3912 N Oracle Rd # 100, Tucson, AZ
 (520) 293-1963
 ***** 13.6/19.0
 They have awesome sticky rice, their homemade ginger sauce is tasty and the ...

Samurai 425 Hill Avenue, Mill Valley, CA
 (415) 361-3680
 3.4/5.0 (1 review)
 I think this place is great. The Prawn Tempura Special Roll is DIVINE!!!!

Samurai 2718 Scottsville Road, Bowling Green, OH
 (770) 792-5004
 1.1/5.0 (1 review)
 "All in all, S"

Samurai Boston 327 Boylston Street, Boston, MA
 (617) 236-7672
 ***** 13.6/19.0
 They have a nice dim decor and great drinks so it's a perfect pre-party dinner!

Samurai Sushi & Korean BBQ 1100 Southeast 14th Street, Bentonville, AR
 (479) 273-1000
 3.1/5.0 (3 reviews)
 You can order they bring out various kimchis (pickled vegetables)

Samurai Sushi Bar and Restaurant 405 Spray Ave. Barrif, AB T1L 1J4, Canada
 +1 403-762-8890
 I enjoy cooking Japanese food at home, so I really don't warm to the idea of ...

66.974 results

図1 グーグルマップの「サムライ」

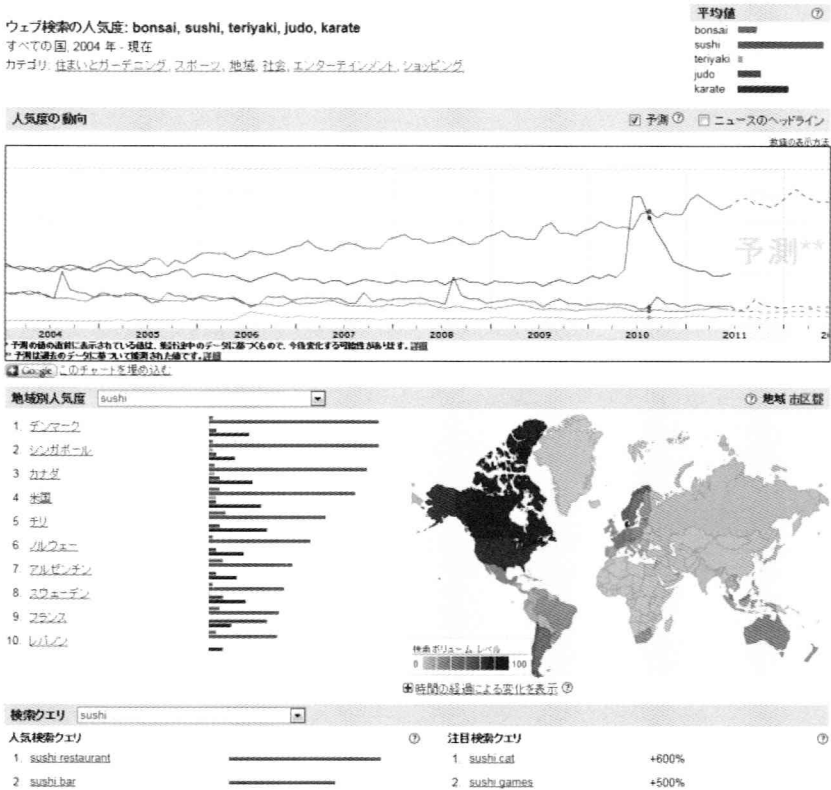


図2 グーグルインサイトの「スシ」

察される。外行語は、これまでの断片的指摘どおり、世界各地で広く使われているのだ。

2.2. グーグルインサイトの「スシ」

グーグルインサイトでは、使用率が国ごとに濃淡で示される。グーグル検索の使用率としてなので、一般のホームページでの書き込みと違う。インターネットでアクセスの多い事件や人のランキングが表示されることがあるが、そのデータの7年分と考えればよい。

グーグルインサイトの1例を掲げる。図2はSushiの世界分布とトレンドである。デンマーク、シンガポール、カナダを筆頭に、欧米と東南アジアに多

い。図2上の折れ線グラフで7年間のトレンドを見ると、着実に増えている。他に bonsai, teriyaki, judo, karate など多数の語も検索して地図とグラフを保存した。ここに掲げた世界地図は、貴重な新情報である。

グーグルマップおよびグーグルインサイト地図の作製は、簡単である。慣れれば、1分もかからない。グーグルマップの利用法については井上（2010a、2010b、2011a、2011b、Inoue 2012）で述べた。インターネットでも検索して読める。

3. 外行語の国家順位と文字の制約

3.1. 上位 50 国家の説明要因

以下では、さらに発展させた研究について述べる。グーグルインサイトの高度な技法として、数値データをダウンロードして、多数の地図を総合的に分析する手法について論じる。

以下では、外行語 120 語のデータを扱う。2011 年 12 月にダウンロードした結果である。120 語は、井上（2012）を拡充し、前掲の諸研究で指摘された語を集めたものである。グーグルインサイトでは 1 度に 5 語のデータを同

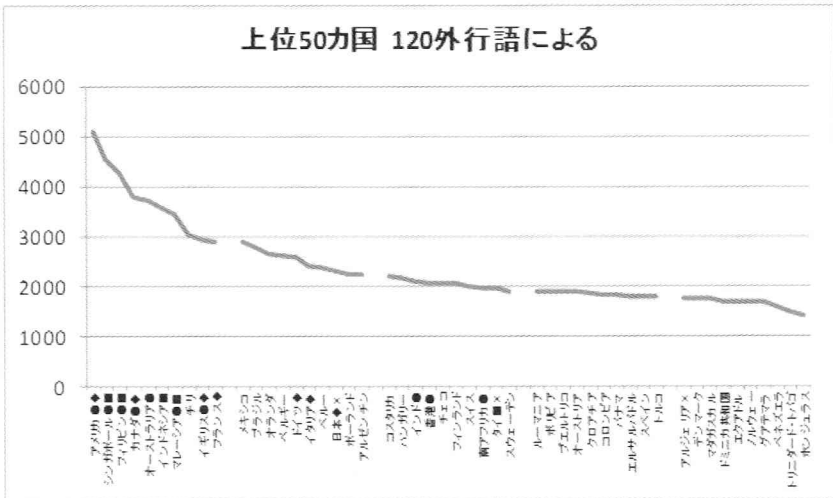


図3 グーグルインサイトの国家別外行語使用率

時に扱うことができるので、世界中で多く使われる外行語 anime をいつも入れて検索した。この工夫によって、他の4語の数値がいつも anime を基準にしたものになり、相互の比較が可能になり、かつ全データを行列として並べるときも問題が起こらない。行として縦に国家、列として横に単語を並べた表を作り、ソートした。

まず図3で上位50国家について概要を見る。下端の国名で、●は英語を公用語にする国、■はASEAN諸国、◆はG8の国家である。上位10カ国にはこれらの記号が重なることが多い。言語と経済の2要因が外行語使用の国家順に強く働くことを示唆する。

アメリカをトップに、東南アジア諸国が並び、南アメリカ、(西)ヨーロッパ諸国が続く。これは前述「日本語観国際センサス」で見られた傾向(井上2012)が全世界に拡大適用できることを意味する。外行語はまずアメリカ英語に入って他国に普及するとも考えられるので、英語を公用語にする国の末尾に●を付けた。確かに最上位の国と一致する。しかし、英語を公用語とするアフリカの国は下位の国家のグラフ(省略)の末尾になるので、英語だけの問題ではない。少し下の国家までみると、多様な要因がからむので、もっと別の要因を考えるべきである。単純な地理的近接効果とも読み取れず、日本との経済交流の多さが関わると考えられる。

3.2. 文字の制約

ただし言語的制約要因を考える必要がある。まず外来語受容に関する傾向(または言語政策)である。中国語では外来語を避けて翻訳語を使う傾向がある。また文字も影響する^(註1)。英語のグーグルインサイトでアルファベットで検索したデータだから、表意文字(漢字)・表音文字(音節文字(かな)・音素文字(ロシア文字・タイ文字など))による検索をする国のデータは反映されない(ただしグーグル検索が民族文字でできない言語では、アルファベット検索を使う)。つまりアジア大陸のエスニック文字を使う多くの国家には、制約がかかり、外行語が使われていてもグーグル検索には反映されない。これは日本語観国際センサスの結果と照合して確認できる。

4. 外行語の世界順位

4.1. グーグルインサイト外行語の総合順位

次に単語の違いを考察する。外行語を具体的に示すために、比率を補正した表の単語を、折れ線グラフ3枚に分けて示す。

4.2. 企業名6個の順位

企業名6個が飛びぬけて大きい数値を示して上位を占めるので^(注2)、図4に取り出して示す。

企業名では、電気製品など家庭でなじみの会社で一般人に手の届く商品売るSONYがトップで、そのあとに自動車会社TOYOTA, HONDA, NISSAN, SUZUKIと、ゲームのNINTENDOが続く。

4.3. 上位54単語の性質

図5と図6に企業名6語を除く外行語を二つのグラフに分けて順位を示す。見やすさのために約10単語ごとに切れ目を入れた。図5に外行語上位54語の順位を示す。企業名6語を除いてもなお上位5語ほどは比較的使用率が高い。

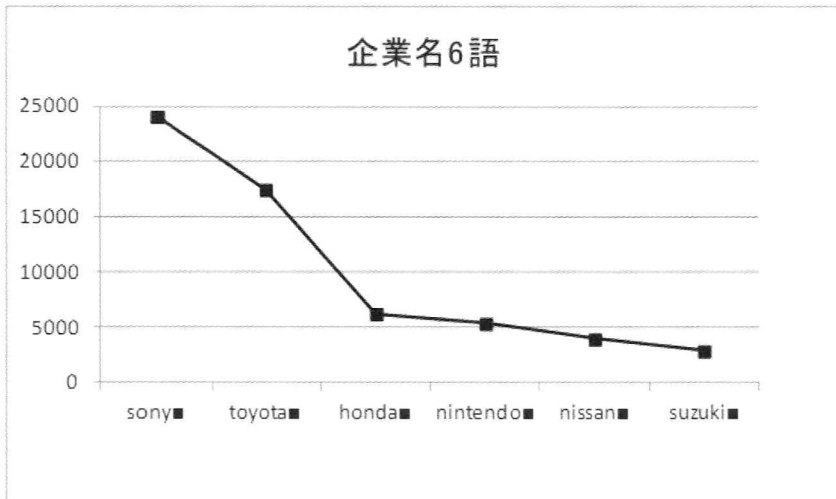


図4 企業名6外行語の成立

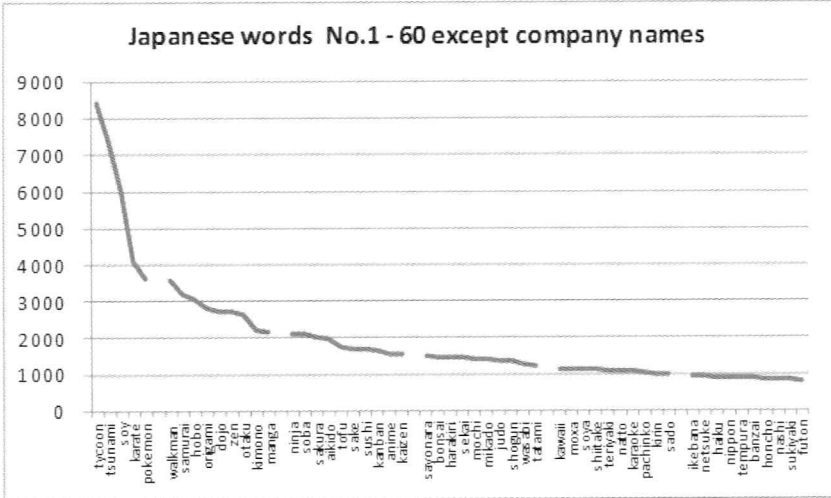


図5 外行語の順位1-60 企業名を除く

20位までは、以下の順番である。Tycoon（タイクン大君＝徳川将軍、権力者の意味）、tsunami、soy（醤油）、karate、pokemon、walkman、samurai、hobo（方々からという、浮浪者の意味）、origami、dojo、zen、otaku、kimono、manga。タイクン、ツナミ、ソイが高いが、これは、animeとの掛け算後の数値で偏りが出たためである。空手とポケモン、ウォークマンが続く。日本のコンピュータゲームや大衆文化に関わる語が上位である。現代的な海外進出であり、海外旅行で看板、広告などの言語景観に気をつけると、確かによく目につく。そのあとには伝統文化 samurai、origami、zen、kimono や、現代文化と関わる dojo、otaku、manga が続く。20位以下には食品 sushi、娯楽 karaoke、自然 sakura などが続く。

4.4. 下位60単語の性質

図6に外行語下位60語の順位を掲げる。右下がりの傾向はゆるやかで連続的で、境目を見つけるのが難しい。20世紀末期に世界進出した日本語が上位になる。現代や戦後に広がった語が多いが、江戸時代または明治時代に英語に入ったと思われる古い外行語が混じる。19世紀以前または江戸時代以前に海外で使われた語は、今はあまり使われない。

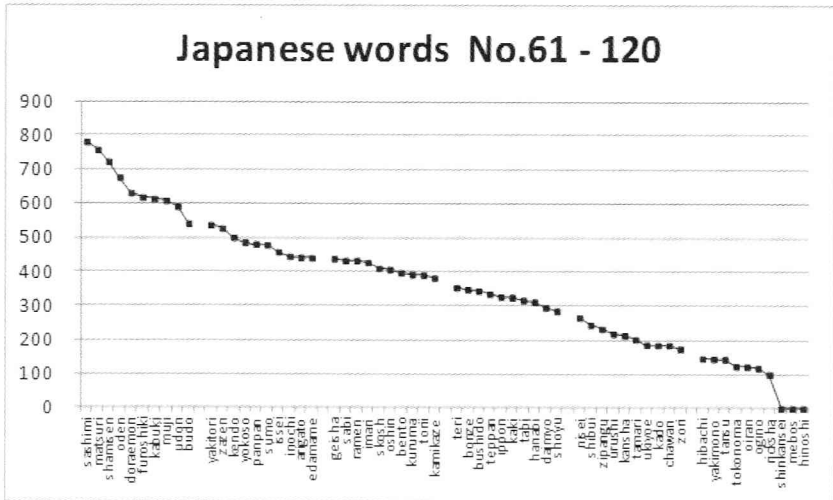


図6 外行語の順位61-120

5. 外行語の語彙論的性格

5.1. 借用の段階

外国語が借用されて落ち着くまでには、どんな言語でも様々な連続的段階を経る。表記や発音、意味などを手がかりとして以下の状況を踏まえることができる。様々な段階を踏み、それぞれの基準で受け入れ言語にどの程度同化したか、なじんだかを判定できるが、順番は様々である。

つづり	原語のまま⇒受け入れ語に同化
表記	" "付き⇒イタリック⇒受け入れ語と同じ
発音	原語のまま⇒受け入れ語に同化
意味	説明解説あり⇒翻訳付き⇒語義説明なし

5.2. 外行語の再翻訳

なお外行語はさらに別の観点からランク付けできる。他の言語で1単語で訳せるか、2単語以上(複合語)になるか、説明的なパラフレーズが必要かという観点である。インターネット上に様々な翻訳ソフトが出回っているので、そこに外行語のリストを入れて訳し戻せば(再翻訳すれば)、たちどころに分

かる。「翻訳」ソフトだから外行語がそのまま残っては利用者の要望に合わないこともある。120語のうち一部の再翻訳を試したところ、企業名を除くと、次の11語が訳されずにそのまま出てきた。karate, samurai, kimono, ninja, aikido, sushi, judo, karaoke, shamisen, kabuki, toriiである。これらは、(英語への)外行語として確立したものと考えていい。もっとも翻訳ソフトによっては、辞書に登録されていない語はそのまものつづりで「訳す」ことがあるので、この両極端に注意しなければならない。

5.3. 外行語の初出年

OED (The Oxford English Dictionary) 初版 (1928) には日本語からの外行語が約60語載っていた。第2版 (1989) では約400語になった。その後の追加と派生語を入れると約550語が収録されていた。早川は、派生語を含め外行語905語形の初出年の修正版を提示した (早川2003)。そのデータを50年ごとに区切って、図7に%を示した。19世紀後半の初出語がピークで、3分の1近くを占める。江戸末期の開国期と明治の文明開化期にあたり、新興国日本を紹介する英語本が出版された時期である。その後20世紀前半の富国強兵、日露戦争、第1次世界大戦、第2次世界大戦の時期は落ち込み、1950

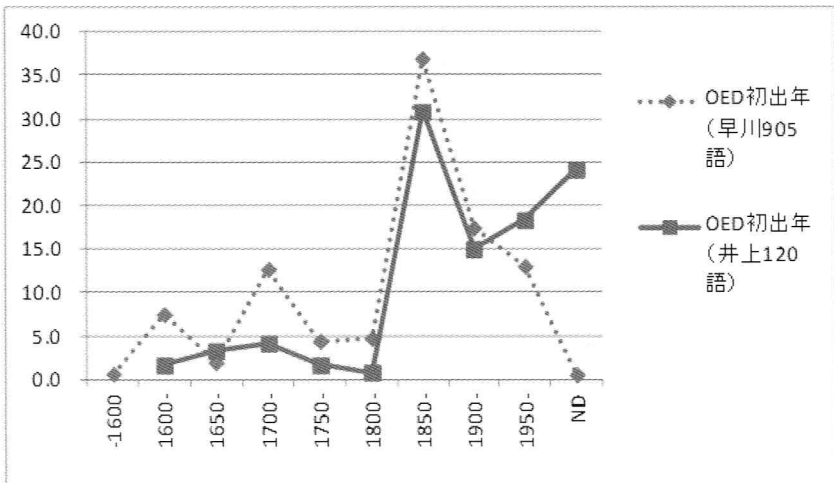


図7 OEDの初出年

年以降にやや増える。多くは20世紀末期からの経済成長、エコノミックアニマルやアニメブームに関わる現代の単語である。一方1850年以前（江戸期）の英語文献を初出とする外行語は、数は少ないが1類型として取り上げるべきだろう。以上を踏まえ、類型としては「近世・近代・現代」に3分していい。

これを踏まえ、今回の全世界調査の120語について、OED電子版を利用して英語での初出年を調べた。同じく図7に示す。50年ごとにみると、同様に19世紀後半が一番多い。井上の120語には1950年以降に使われはじめた語、またはアメリカ英語に入り、イギリスのOEDで採用が控えられた語が多い。初出年の載らない単語またはOEDに採録されていない単語(No Date)も多い。

5.4. 語彙論的な性格まとめ

このほかにも120語について、使用頻度、意味分野などの様々な観点からの考察を行った。語彙論的な性格のまとめとして、グーグルインサイトで全世界でよく検索される日本語は、近代技術に関わるものが多いことが分かった。江戸時代以前の日本文化を示すような「歴史語」は、辞書には載っているが、現代の検索ではあまり使われないことが分かった。以前から日本語学習の目的が変化したことが指摘されているが、それに対応する。教養語学から実用語学への流れの反映でもある。

次に意味論的な性格をみると、ほとんどの語は日本に特有のものである。「特有語」つまり某文化特有の現象をさすことば（料理や民族衣装など）である。基準は別の言語で言い換え・代替 alternative があるかどうかで、新語論における「新物新語」（旧物新語の対義語）に相当する。これらは多くの文化で外行語になると考えられる。英語の単語が現在世界各地の現地語の単語を置き換える形で普及しているのと、性格が違う。日本語には和語・漢語の代わりに（威光、かつこよさから）英語からの外来語（洋語）が広がっている。

この観点からいうと、日本語と英語の借用語には大きな違いがある。日本語から他言語への外行語は、新物新語、かつ特有語が大部分で、知的要因により、語彙の拡大として進出する。これに対し日本語に入る外来語は、旧物新語として、従前の和語・漢語を置き換える形で、情的要因によって流入している。

6. アメリカ日系人調査との対応

グーグルインサイトで得られたデータが信頼できるかについて、いくつかの実態調査や他のインターネットサイトの検索結果と照合して検討した。結論として、信頼していいと思われる。一番信頼できそうなのは、日本語観国際センサスの4語である。井上(2001:67)の地図は、井上(2012)の地図と対比できる。映画名にもなったショウグンの例外はあるが、かなり似る。他のデータと対比しても、信頼性の高さが確認できる。

ほかに、例えばアメリカ日系人の使用する外行語の調査とも対照した。詳論は他の機会に譲る。モチはハワイでもサンフランシスコの学習者でさえも100%近くが使う。安定した外行語として認定できる。ニセイは、ハワイでは9割前後が使い、サンフランシスコで半数が使う。イノチとカンシャは、使われ方が似ていて、ハワイの日系人はサンフランシスコと同程度、3分の1くらいの人しか知らない。

グーグルインサイトでアメリカの使用状況を見ると、ニセイが検索のトップ。モチはかなり上位で、よく知られている。イノチ、カンシャは程度が落ちるが他国にくらべると多い。グーグルインサイトの世界全体の検索使用状況ではモチは35位で、かなりよく知られている。イノチ78位、ニセイ101位、カンシャ105位で、ほとんど知られていない。これらはほぼ対応し、使用率とは違う数字だがかなり信頼できる

7. 外行語の性格 結論

以上の考察の結果、次のようなことが分かった。

(1) 外来語との違い

外行語は、意味分野に偏りがあり、特有語に多い。つまり、知的要因による受容が多い。日本語への外来語がスマートさ、かっこよさという情的要因によって、従前から存在する語を置き換える形で普及しているのと、様相が異なる。

(2) 信頼性の高さと言文字

グーグルインサイトのようなインターネット検索に頼ると、文字の違う(アルファベットを日常インターネットで使わない)国の情報が欠落する恐れがある。一般庶民の外行語知識の程度を知るのには、かつての「日本語観国際セン

サス」による世界約30カ国の状況が手がかりになる。

(3) 外行語の広がり

国際センサスで見当がついていたことだが、外行語はアメリカなどの英語国以外に世界各国に広がっている。企業名や、コンピューターゲーム関係の語などは全世界で使われる。これを除く一般語は、欧米と東アジアで広く使われることが確認できた。

日本語が確かに全世界に進出していることが読み取れた。ただ、現代の日本には、英語以外からの外来語も増えつつあり、世界各国で借用語の相互進出が起こりつつあるといえる。貿易や旅行などで国際交流の機会が全世界で広がつつあることの反映である。ただし差別、格差、高低差があり、貿易と同様に入超・出超がある。大きく見ると、外行語を含めた借用語はやはり水と似て、高いところから低いところに流れるのである。

注

- 1) 漢字などのアルファベット以外の民族文字の検索も可能である。翻訳サイトを使って、文字をコピーすれば、世界中のどの地域（中国語圏があるところとか、華僑の多い地域とか）でどのようにその綴りが使用されているかなどが分かる。
- 2) 井上（2012）のデータと順番が違った。これは、以前は anime との掛け算による数値で偏りが出たためである。

【参考文献】（*印はインターネットで公開。井上の英語論文の大部分もインターネットで公開。）

Cannon, Garland (1996) *The Japanese Contributions to the English Language, An Historical Dictionary* (Wiesbaden)

井上史雄（2001）『日本語は生き残れるか—経済言語学の視点から』PHP 新書

———（2010a）「Google マップで見る関西弁の世界進出」『地域語の経済と社会』第127回 三省堂 word wise web *

———（2010b）「「体操服」の Google マップ」<ことばの散歩道> 151 『日本語学』29-15

———（2011a）「Google マップによる「モータープール」の世界分布」『地域語の経済と社会』第132回 三省堂 word wise web *

———（2011b）「Google 言語地理学入門」『明海日本語』16 *

- (2012) 「日本語世界進出のグーグル言語地理学——グーグルインサイトにみる外行語総合分布——」『明海日本語』17 *
- Inoue, Fumio (2012) “Improvements in the sociolinguistic status of dialects as observed through linguistic landscapes” *Dialectologia* 8 *
- www.publicacions.ub.edu/revistes/ejecuta_descarga.asp?codigo=713
- 加藤秀俊・熊倉功夫 (1999) 『外国語になった日本語の事典』(岩波書店)
- 国立国語研究所 (2002) 『東アジアにおける日本語観国際センサス』(国立国語研究所)
- 新プロ「日本語」総括班編 (1999) 『日本語観国際センサス 単純集計表 (暫定速報版)』(国立国語研究所)
- 田中章夫 (2012) 『日本語雑記帳』岩波新書
- 早川勇 (2003) 「英語に入った日本語語彙の初出年調査」『日本語科学』13
- (2006) 『英語になった日本語』春風社
- 原口庄輔・原口友子編訳 (1998) 『新「国際日本語」講座』洋販出版
- 三輪卓爾 (1977) 「外行語の昨日と今日—海を渡った日本語—」『言語生活』312

【基本文献】

- ◎井上史雄 (2001) 『日本語は生き残れるか—経済言語学の視点から—』PHP 新書
外行語の世界地図を掲げて論じ、各国で使われる日本語の写真を載せてある。Honto で電子書籍として購入可能。
- ◎加藤秀俊・熊倉功夫 (1999) 『外国語になった日本語の事典』(岩波書店)
海外で使われる 50 語についてのエッセイの集成で、使用状況を論じ、参考文献を掲げている。また英仏独伊露の辞書への記載状況を表にしてある。品切れ。
- ◎早川勇 (2006) 『英語になった日本語』春風社
個々の外行語の例をあげて解説し、また来歴や特徴についてまとめる。巻末には「英語になった日本語」の索引を付す。一部はインターネットで読める。

中国における外来語受容の歴史的・地域的変異

荒川 清秀

キーワード：中国語 外来語 音訳語 意識語 逐語訳

1. はじめに

中国語における外来語について時代を遡れば、仏陀、羅漢、伽藍、菩薩といった仏教用語がサンスクリット語起源の外来語であることはもちろん、葡萄、琉璃、駱駝、麒麟や琵琶、それに、苹果（リンゴ）、菠菜（ほうれん草）のような野菜や果物も外来語と言われている。こうした古くから中国語に入った外来語については、高名凱・劉正琰『現代漢語外来詞研究』（文字改革出版社 1958）という古典的名著があるし^(注1)、近くは史有為（2000）、同（2004）という専著も出ている。高名凱・劉正琰らは1984年に、上記の著を大幅に増補し『漢語外来詞詞典』（上海辞書出版社 1984）を出した。ここに取められた外来語のうち、日本起源とされるものが、実は中国が先であったという沈国威（1994）による批判があるものの、これまでの外来語研究については高らの著を見ればおよその概観が得られる^(注2)。そこで、本稿では19世紀から21世紀における英語あるいは日本語からの外来語を中心にすえ、合わせて現代の外来語事情について書くことにしたい。というのは、外来語というのは、それを受け入れる層＝受容層の有無、広さに大きくかかわっているからである。つまり、中国語の外来語といっても、時代によって様相を異にするし、大陸における外来語と香港マカオ、台湾における外来語も同じようにはあつかえない。本稿では大陸の外来語を中心に述べるが、合わせて香港、台湾の外来語事情についても触れることにする。

周知のように、大陸中国では、1978年以後の改革開放政策により、外来のものがそれまでに比べ容易に入るようになってきた。一方、香港は1997年までイギリス領であり、台湾は1945年以降アメリカの影響を強く受けていた。

つまり、香港も台湾も英語（文化）の影響を大きく受けていて、大陸に比べ外来のもの、とりわけ英語文化にかかわるものが入りやすかったということがある。それは、香港人、台湾人の多くが中国名以外に英語名をもっていることにも表れている。アグネス・チャンはアグネス・陳であり、テレサ・テンはテレサ・鄧である。それぞれ陳美齡、鄧麗君という中国名はあるものの、英語名の方が一般的には知られている。台湾では、英語名のイメージまで書いた本も出ていて、台湾人は、英語名をつけるときにこうした本を参考にするという^(注3)。また、大陸では、姓名を英語で表記する場合は、Mao Zedong（毛泽东 = 毛沢東）のように姓名の順におくが、香港、台湾では、ふつう名姓の順におく。たとえば、Ying-che Li（英哲李→李英哲）のようである。こうした違いは、英語文化に対する受容度に大きくかかわるものである。

2. 少ない音訳外来語

外来語が流入するときの第一段階では、ほぼ音訳語が現れる。たとえば、

デモクラシー 德谟克羅西 démókèluóxī →民主

サイエンス 賽因斯 sài'ensi →科学

ブルジョアジー 布尔乔亚 bù'ěrqiáoyà →资产阶级（資産階級）

プロレタリアート 普罗列塔利亚 pǔluóliètiáiyà →无产阶级（無産階級）

テレフォン 德律风 délǜfēng →电话（電話）

などは、まず音訳語で入り、のちに右の意識語がそれにとって替わった。しかし、つぎにあげるように、とってかわるべきふさわしい意識語がない場合は音訳語がそのまま定着した。英語文化にあまり親しみのなかった大陸中国語では、純粋の音訳語はそれほど多くないと言われるものの、それでも、比較的よく使われるものに、以下のようなものがある。

沙发 shāfā（ソファ） 咖啡 kāfēi（コーヒー） 布丁 bùdīng（プリン）

三明治 sānmíngzhī（サンドイッチ） 派 pài（パイ） 巧克力 qiǎokèlì（チョコレート）

开司米 kāisīmǐ（カシミヤ） 尼龙 nílóng（ナイロン） 沙拉 shālá（サラダ）

的士 dìshì（タクシー） 桑拿 sāngnǎ（サウナ） 摩登 móděng（モダン）

模特 móte（モデル） 探戈 tàngē（タンゴ） 迪斯科 dìsikē（ディスコ）

马拉松 mǎlāsōng（マラソン） 拷贝 kǎobèi（コピ

一) 卡通 kǎtōng (漫画) 吉他 jítā (ギター) 幽默 yōumò (ユーモア)
逻辑 luójì (ロジック) 歇斯底里 xiēsīdǐlǐ (ヒステリー) 奥林匹克
àolínpìkè (オリンピック) 马达 mǎdá (モーター) 吉普 jípǔ (ジープ)
麦克风 màikēfēng (マイクロフォン) 浪漫 làngmàn (ロマン) 伊妹儿
yīmèir (Eメール) 克隆 kèlóng (クローン)

これらの出自を一つ一つたどっていくことは興味あることであるが、ここではそれだけの余裕がない。ひとつ補えば、ある原語に対する音訳語でも、大陸と台湾、香港では違いがあるものがそれなりに多いことである。たとえば、sandwich は大陸、台湾では“三明治” sānmíngzhì だが、香港マカオ等では“三文治” sānwénzhì であるとか、salada は、大陸では“色拉” sèlā、台湾等では“沙拉” shālá が使われる、といった違いが見られる。これらは音訳化のときの方言音とも関係がある。また、sauna は台湾では音訳+意識の“三温暖” sānwēnuǎn が広く使われているが、大陸では音訳語の“桑拿(浴)” sāngnǎ(yù) の方が使われるという場合もある。taxi は、香港では音訳語の“的士”を使っているが、台湾、大陸ではそれぞれ“計程車”“出租车”と意識語を使っている^(注4)。E-mail は当初、英語のままか音訳語の伊妹儿 yīmèir などが使われたが、その後、意識語の“电子邮件”“电子邮箱”が強くなり、その略語である“电邮”が将来は使われるであろうという予測もある^(注5)。

なお、本来大陸では純粹音訳語が少なかったが、改革開放政策以後、これまでの意識語が音訳語に取って代わられるという新たな傾向が出てきている。それについては、9節で述べることにする。なお、扑克 pūkè (ポーカー) は本来ポーカー (poker) の音訳だが、意味はトランプのことである。

3. 半意識

上でも述べたように、音訳語は社会にその原語を理解する素地がなければ、定着が容易でない。そこで大陸中国語では、当初多くの音訳語に「中国化」を施した。その一つは、音訳に上位概念を加えるというものである。たとえば、
啤酒 (ビール) 威士忌酒 (ウイスキー) 鸡尾酒 (カクテル)
香槟酒 (シャンペン) 白兰地酒 (ブランデー)
乒乓球 (卓球) 保龄球 (ボーリング) 高尔夫球 (ゴルフ)

吉普车（ジープ） 卡车（トラック） 的士车（タクシー）

爵士乐（ジャズ）

芭蕾舞（バレエ） 探戈舞（タンゴ） 桑巴舞（サンバ）

比萨饼（ピザ）

霓虹灯（ネオンランプ）

嬉皮士（ヒッピー） 披头士（ビートルズ） 雅皮士（ユッピー）

丁克士^(注6)（ディンクス）

もっとも、“啤酒”の“啤”は、“扎啤”（ジョッキビール→生ビール）“听啤”（缶ビール）のように、他の語素と結びつけばそれだけで「ビール」の意味で使われるし、“威士忌”“白兰地”のように“酒”を必要としない語もでてきている。ところで、総じて見れば、これらは漢字の形声文字の構成原理に似ている。つまり、漢字では、

青 清 精 晴 静 請

のように、カテゴリーを表す意符＋音符という構造の字が大量に存在するが、その原理は音訳外来語についても言えるということである。もっとも、形声字の音も単なる音を表すのでなく、たとえば「青」なら「すみきっている」という抽象的な意味をもっていると言われている^(注7)。

さて、上に上げた語は、それぞれ“酒”“球”“车”（車）…が上位概念を表している。このうち、“啤酒”は「ビール」のことだが、音の上で、啤 pi ビーは beer には結びつきにくい。しかし、“啤”の口編をとった部分をもつ漢字の多くが本来濁音声母（並母）であり、この語が濁音を残した上海語から入ったと考えるとわかりやすい。以下、“～球”で球技、“～乐”（楽）で「音楽」、「～舞」で「踊り」を表す。このうち、“卡车”の“卡”は car であり、それが「車」の仲間であることを示すために屋上屋を架し「車」がついているのだが、全体の意味は「トラック」に狭まってしまった。なお、これ以外で、“冰淇淋”（アイスクリーム）は“冰（氷）”＝iceで、この部分は意識、“淇淋”が cream で音訳部分を構成している。逆に、“因特网（網）”（インターネット）は「音訳＋意識」の例である。

4. 音訳から意識へ

外来のことばは最初は音として入って来る。ところが中国語では、それはある年月を経てだんだん「中国化」していく。3節では、主に音訳語に上位概念がつくパターンをみたが、音訳語を廃し、完全に意識されるものもある。2節でも見たが、以下の語は、最初、音訳語として受容されたが、やがては意識されてしまった。

德谟克拉西（デモクラシー）→民主

赛因斯（サイエンス）→科学

德律风（テレフォン）→电话

ただ、意識語が生まれると音訳語がすぐに廃されてしまうかという点、そうでもなく、ある時期併存状態が続く場合も多い。たとえば、“电话”（電話）は最初“德律风”（德律風）とか“得律风”（得律風）などと音訳された。その発音はまさにテレフォンに近い。一方、意識語である“电话”は荒川（2009）で問題にしたように日本語から入ったものだが、趨振環（2002）が指摘するように、「電話」が入ってきても、それが“德律风”や“得律风”にとって代わるにはそれなりの時間を要した。とりわけ、ハイカラ好きの上海人においてはそうであった。

5. 音訳と意識の合体

中国語の音訳語の真骨頂を示すものは、単に音訳あるいは意識するのではなく、つぎのように、音訳と意識を合体させるものである。

引擎 yīnqīng（引っ張る エンジン）★发动机

引得 yǐndé（引くと得られる インデックス）★索引

可口可乐 kěkǒukělè（おいしいし、楽しい コカコーラ）→のち単に“可乐”

维他命 wéitāmīng ウェイターミン(人の命を保つ ビタミン)→のち“维生素”

幽默 yōumò（密かで静か ユーモア）

马达（馬達）mǎdá（馬が達する モーター）★“电动机”

几何（幾何）jǐhé（どのくらい ジオメトリー）

俱乐部（俱樂部）jùlèbù（共に楽しむ所 クラブ）

黑客 hēikè（黒い客=いかがわしい客 ハッカー）

香波 xiāngbō (香りのよい波 シャンプー) ★“洗发露”

迷你裙 míníqún (あなたを惑わすスカート ミニスカート)

最後の“迷你裙”は音訳・意識+上位概念の例である^(注8)。

純粹の音訳語は、6節でみる外国地名、人名に顕著にみられる。しかし、中国語としては、上のように音と意味を語の中に同時に塗り込めるのがもっとも理想的なカタチである。もっとも、この中でも、そのまま定着したのもあれば、★印をつけた語のように併存状態にあるもの、“维他命”(ビタミン)→“维生素”のように、もとの音訳+意識語が使われなくなり、完全に意識語に取って代わられたものがある。ここには、類似の音をめざすよりも、より正確に意味を伝えようという姿勢が感じられる。

6. 外国地名と人名

国名は、

阿富汗 Āfūhàn (アフガニスタン) 澳大利亚 Àodàliyà (オーストラリア)

巴西 Bāxī (ブラジル) 埃及 Āijī (エジプト) 俄罗斯 Éluósī (ロシア)

土耳其 Tǔěrqí (トルコ) 加拿大 Jiā'nádà (カナダ)

のように、たいていは音訳である。音訳は原音主義であるが、これを聞いて必ずしも英語名が浮かぶわけでもない。たとえば、“加拿大”は共通語の音では Jiā'nádà (ヂアナーダー) であり、カナダという音からは距離があるが、広州音で読めばカナダに近くなる。当初の外国名は広州や上海を経由して入ることが多かったため、北京語の音体系を採用している共通語の音とは差異がある。

また、略称として、

英国 美国 德国 法国

のように、音訳+意識(国)のものがある。これらのうち、たとえば、「英国」は日中共通だが、

アメリカ→(日)米国 (中)美国

ドイツ →(日)独国 (中)德国

フランス→(日)仏国 (中)法国

のように分かれてしまったものもある^(注9)。アメリカとフランスについては、もともと中国での音訳語があって、その後、日本と中国で受容が違ってしまっ

た。アメリカの音訳語は、まず広州方言で“米利堅”のようにメの音に近い“米”の字が使われたが、アヘン戦争後（1842年）交易の中心が上海へ移ると、上海方言では“米”はミのような音であったため、メ（アメリカのメ）により近い“美”の字が選ばれることになった。字のもととは中国であるが、「米国」という略称は日本のものであろう^(註10)。フランスの「仏」と「法」の場合は、「仏」が広州音では無声のfであったが、上海音では有声のvになるので、上海音のf音の“法”にとって替わられた^(註11)。ドイツについて中国は“德意志”を、日本は「独逸」の略称を採用した結果、現在のような違いを生んだ^(註12)。こんなふうに、用字の違いは歴史的な要因によることが多い。

都市名は、

伦敦 Lúndūn (ロンドン) 巴黎 Bāli (パリ) 纽约 Niùyue (ニューヨーク)
柏林 Bólín (ベルリン) 慕尼黑 Mùníhēi (ムーニヘイ→ミュンヘン)
夏威夷 Xiàwēiyí (ハワイ)

のように、日本と似たものもあるが、用字に違いもある^(註13)。このうち、“巴黎” Paris はフランス語式に語末のsを読んでいない。“纽约”の“約”は北京音では yue ユエだが、ヤツというつまる音（入声音）を当てている。ミュンヘンはドイツ語式ではなく、英語式の Munich（ムーニック）に漢字を当てたもの。“夏威夷”は正しい言い方である Hawaii（ハワイイ）を写したものである。こんな風に、中国での都市名の漢字表記はその来源がさまざまである。

人名も音訳の世界であり、

Obama 奥巴马 Àobāmǎ Cameron 卡梅隆 Kǎmélóng

のように、現地音に近い音を当てようとしているが、ヒヤキは中国語の音節にない音なので、ヒ→シ、キ→ヂのような置き換えが起こる。たとえば、

Hillary → 希拉里 (シラリー) Kissinger → 基辛格 (ヂーシンゴー)

こんなふうに、西洋人の人名や地名を中国語で表そうとすると、いきおい純粋音訳になる^(註14)。しかし、地名の中には、意味をこめた意識も以下のようにないわけではない。

牛津 (オックスフォード)
剑桥 (劍橋) (ケンブリッジ)
马特峰 (馬特峰) (マッターホルン)

緑威（グリーンニッジ）

新西兰（蘭）（ニュージーランド）

紅海（レッドシー 紅海）

旧金山（サンフランシスコ）

漢城（漢城 ソウル）→首尔

“牛津”（オクスフォード）や“劍橋”（ケンブリッジ）も当初は、

オクスフォード アス佛 アス福 敖斯佛 阿哥斯佛尔

ケンブリッジ 堪比日 冈比黎日 坚不列痴

などの音訳語が使われていたが、のちに“牛津”に定着した^(注15)。“津”は『論語』（微子編）に“問津”があるように、渡し場のことで、『外国地名語源詞典』（上海辞書出版社、1983）によれば、Oxfordという都市名は、テムズ川がこのあたりでは浅く、牛が渡ったことからきているという。なお、この語が日中どちらでできたかについては、荒川（2000）、千葉（2010）に議論がある。

“劍橋（劍橋）”“馬特峰（馬特峰）”は音訳+意識の例、“緑威（緑威）”（グリーンニッジ）“新西兰（新西蘭）”（ニュージーランド）は意識+音訳の例であるが、グリーンニッチは現在意識を捨て、純粋に音訳の“格林威治”Gélinwēizhiになっている。

“旧金山”はサンフランシスコで1848年に金鉱が発見されたことにちなむが、のち新金山がオーストラリアで発見されたことに伴い「旧」の字が被せられたものである。当初は音訳である“桑方西斯科”（『地理全志』1853）が使われ、日本ではこれを略して「桑港」とさえ呼んだ時代があった。現在では音訳としての“圣弗朗西斯科”があるものの、意識の1種である“旧金山”が最もよく通用する^(注16)。

ソウルは李氏朝鮮王朝以来“漢城”（漢城）が使われてきたが、この名称が中国の都市にまぎらわしいということから、韓国は、2005年1月に“首尔”に変更した。“首尔”は音訳ではあるが、“首”には主要なという意味も含まれている。

人名、地名にはそれぞれ命名の起源がある。しかし、起源は現実に使う場合には忘れ去られる。それは人名、地名の宿命のようなもので、一々漢字の選択によって意味づけをしてはいけなからである。フォックスさんというときに、

わたしたちは一々狐を思い浮かべたりはしないし、オクスフォードというときにそこには牛が多いのかという連想もしないであろう^(註17)。

なお、外国人名を中国訳するとき、マテオ・リッチ→利玛竇 Li Mǎdòu のように、リッチ=利、マテオ=玛竇のように姓と名前をうまく当てはめる場合もあるが、たいていは、カール・マルクス→马克思（马克思）のようになる。これは、あくまで姓のみの音訳であるが、その構造はあたかも、「马（姓）＋克斯（名）」のようになっている。外国語をよく知らない人であれば、马克思 Mǎ Kèsi はあたかも中国人の名前のように響くであろう。カナダの医師で共産党員、抗日戦争時に中国で八路軍とともに行動したベチューンの中国名は白求恩 Bái Qiú'en であるが、この場合も白は姓として通用する。ゴーリキ→高尔基 Gāo Ērjī の高もそうである^(註18)。

社名、商品名やブランド名の中には、ソニー 索尼 Suǒní シャープ 夏普 Xiǎpǔ のように純粹に音訳のものもあるが、一般には音訳と意識を合わせたものが多い。たとえば、

ベンツ→奔驰 bēnchí（疾走する） サントリー→三得利 sāndéli

マツダ→马自达（馬自達）mǎzidá キヤノン→佳能 jiānéng

のように^(註19)。

7. 台湾、香港の音訳語の特徴

香港（マカオ）、台湾で生まれた音訳語の特徴は、選択される漢字に意味を塗り込めようとする傾向があることである。たとえば、“波”は ball の音訳語で、これを使った複合語も、“波场”（球技場 香港マカオ）“波楼”（ビリヤード場 香港マカオ）のように存在するが、“波”という字から ball を連想するのは難しい。“合皮”は happy の音訳語で、“合皮扭耳（new year）”“合皮 birthday”のように使う。“合皮”という字の連続からは happy の ha の意味も想像がつかない。以下の語も、漢字からはとても意味を連想できない。これらは純粹に音を提供しているだけである。

“波士” boss（ボス、上司） “飞士” face（フェイス 顔）

“基吧” gay bar（ゲイバー） “花生骚” fashion show（ファッションショー）

“拉臣” license（ライセンス 免許） “沙展” sergeant（サージャン 警官）

“士多宝” store (ストア 店) “听尼士” tennis (テニス)

“派士钵” passport (パスポート)

なお、これらの音は多分に広東語音の影響を受けている。また、“安哥” encore (アンコール) は香港以外にシンガポール、マレーシアでも、“血拼” shopping は、台湾、シンガポール、マレーシア、タイでも使われる。“荷尔蒙” hormone は大陸では旧称に属し、大陸では“激素”という。“马杀鸡” massage は大陸以外でよく使われる音訳語である。台湾だけで通用する音訳語には、“轰趴” home party (ホームパーティ) “蕾丝边” lesbian (レスビアン) などがある^(注20)。これらは漢字だけを見ていると、さも恐ろしげに見える。

8. 漢語訳語の創られ方—直訳と中国的訳

外来語を自国の言語にとりいれる場合、一番原始的な方法は、直接音訳という形で入れることである。しかし、原語に親しんでいなければ理解しづらい。それで、一般に理解させるためには上位概念をつけたり、意識という方法がとられた。では意識語はどのようにしてつくられるのか。

意識の中で、原語の構造、要素の意味に一対一対応で翻訳する方法を calque と呼ぶ。なぞり語、あるいは逐語訳とも言うべきものである。つぎのように、中国語でもこうした造語法による造語は少なくない。

generation gap → 代沟 (世代間の溝)

black tea 黑茶 → のちに红茶^(注21)

hot dog 热狗

hot line 热线

コンピューター用語も基本的には calque である。

mouse 鼠标 shǔbiāo (マウス)

down load 下载 xiàzài (ダウンロード)

hard wear 硬件 yìngjiàn (ハード)

soft wear 软件 ruǎnjiàn (ソフト)

しかし、中国人の訳語は原語の直訳よりも、形象的、即物的なものを好むように見える。たとえば、「酸素」「水素」「窒素」は日本人がオランダ語からそれぞれ、

酸素 zuurstof (『遠西医方名物考』補遺)

水素 waterstof (『遠西医方名物考』補遺)

窒素 stikstof (『遠西医方名物考』補遺)

のように、calque によって直訳したものであるが、中国では、最初

酸素→“养气”(『天文略論』1847) 窒素→“淡气”(『天文略論』1847)

水素→“轻气”(『博物新編』1855)

と訳された。これらは現在ではそれぞれ、“氧气”“氢气”“氮气”と書かれるが、生まれたときの姿から言えば、“养气”は「万物を養う気」、「氢气」は「軽い気」、「淡气」は「“养气”を薄めるための気」という意味であった^(注22)。原語の構造よりも、そのものをいかにわかりやすく伝えるかという発想がみられる。『格物入門』(1868)に由来する“电池”(電池)の原語 battery は本来「打つこと→組みになって力をだすもの」という意味であり、野球のバッテリーはまさにその意味なのだが、こうした原語の意味からは「電の池」は生まれようがない。しかし、「電池」の初出資料である『格物入門』(1868)の図を見ると、中国語の“池”の「(溶液を)ためるところ」というイメージが生きていることがわかる^(注23)。コンピューターは正式には“电子计算机”だが、俗称は“电脑”(電腦)である。なお、“电视”(テレビ)と“电话”(電話)はともに日本製漢語であるとみなされているが、この場合も、造語法は calque ではない。なぜなら、television、telephone の tele(遠い)に対応するものがなにもないからである。これは、「電気」の時代であるがために「電」を被せられたのである^(注24)。

9. 意識から音訳への逆流

中国語の外来語は、これまで述べてきたように、音訳語を避ける傾向があった。ところが、近年は、意識語であったものが音訳語になるという、逆流現象が起こっている。これは、やはり、改革開放経済の影響で英語文化に対し一般大衆の抵抗が少なくなってきたこととかかわる。たとえば、party は従来“晚会”と言われていたのが、音訳語の“派对”pàiduì が進出してきた。しかし、まったく同義ではなく、小規模の集まりに限られるので、誕生日パーティー＝“生日派对”には使えても、日本の紅白歌合戦に当たる“春节晚会”には使えない。show は本来“表演、演出”と言っていたのが、近年“秀 xiù”がよく使

われるようになった。“脱口秀”はtalk showのことである。Fanは従来“～迷” mí という言い方が広く行われていたが、最近では“粉丝” fēnsī（文字通りは春雨）がよく使われる。もっとも、これも使い分けがあって、“～迷”は“歌迷”（歌謡曲ファン）“影迷”（映画ファン）“球迷”（球技ファン）“戏迷”（演劇ファン）のように前に対象を示す語をつけないといけないし、「熱狂的な」という意味も加わる。また、どんな語と組み合わせることができるわけでもない。ところが、“粉丝”だと、“我是～的粉丝”（わたしは～のファンだ）と自由に言える便利さがある。これが“粉丝”が広まった原因である^(注25)。このような逆流が起こった例としては、ほかに、copy“复印”→“拷贝” kǎobèiがある。

さらに、音訳→意識→音訳と変化したものに、

cartoon 卡通 kǎtōng → 动画 → 卡通（漫画 動画）

cookie 曲奇 qūqí → 小甜饼 → 曲奇（クッキー）

がある^(注26)。

なお、上でも少し触れたが以下のように音訳語が接辞化する現象も見られる。

○ “啤酒”（ビール）→ “啤”

扎啤（ジョッキビール） 听啤（缶ビール） 黑啤（黒ビール）

○ “卡片”（カード）→ “卡”

信用卡（信用カード） 交通卡（交通カード） 书卡（書店カード）

○ “酒吧”（バー）→ “吧”

水吧（飲料水コーナー） 话吧（公衆電話） 网吧（インターネットカフェ）
氧吧（酸素カフェ）

○ “巴士”（バス）→ “巴”

大巴（大型バス） 中巴（中型バス） 小巴（小型バス）

○ “的士”（タクシー）→ “的”

的哥（男性タクシー運転手） 打的（タクシーに乗る） 面的（ワゴン型のタクシー）

アルファベットとの混種語には、もともと“X光”（X線）“BP机”（ポケベル）などがあったが、近年、以下のような語を生んでいる。

B超（Bスコープ） U盘（USBフラッシュメモリー） T恤（Tシャツ）

AA制（割り勘）

10. 日本外来語の問題

日本人が中国起源の漢語を外来語と認める意識が薄いように、中国人にとっても、日本起源の漢語ははたして外来語かという問題がある。そこには、近代漢語の起源はそもそも中国にありという民族意識が潜在的にある。“経済”や“社会”のように本来中国語に存在し、それに日本人が新しい意味を付与し、さらに中国語の中へ「里帰り」した場合、それを外来語と言うべきかという疑問である。今“経済”について言うと、それが「経世済民」の略語であるとすれば、それは本来「政治学」のことである。そうでなくその語を economy の訳語にしたのが日本人だとしたら、それはやはり日本からの外来語と見なすべきであろう。そういう問題が、日本起源と言われる外来語にはつねにつきまとう。

そもそも、実際ある漢語が日本製かどうかは、よほど構造の違いがはっきりしていないかぎりわかりにくい。いや、造語の原理の違い、構造の違いがはっきりしていても、“場合”（場合）“立場”（立場）“手続”（手続き）“取消”（取り消し）のように、中国語として受容するケースもある。また、“調査”のように、“調”の意味がわからなくても、“査”の方で「調べる」と理解し受容した語もある^(注27)。

日本起源の外来語についても一つ述べておきたいことがある。それは、一般に、近代漢語は日清戦争後に日本から中国へ流入したと言われることがあるが、これはまちがいである。というのは、西洋からの衝撃は日本よりも中国が先に受けているからである。ただし、その受容は中国人よりも日本人の方が積極的で、その結果、江戸から明治初期に日本で受容された語が、日清戦争後に再び中国へ里帰りし、中国人にあたかも日本人がつくった漢語であると錯覚させることになった。ただし、近代における日本語の中国語への流入は、より正確には日清戦争後ではなく、堀達之助の『英和对訳袖珍辞書』（1862）の語の一部（たとえば「半島、結晶」等）をロブシャイトがその英華字典に採用したときから始まる^(注28)。

近年の日本外来語としては、“料理”（料理）“人気”（人気）“写真”（写真）“过劳死”（過劳死）“安乐死”（安楽死）“卡拉 kǎlāOK”（カラオケ）をはじめ、“～屋”“～族”のような接辞的なものもある。“入口”（入口）“出口”（出口）“玄关”（玄関）も日本外来語と言われているが、これらはまだ書き言葉の範囲にある^(注29)。

日本語起源の音訳外来語は、大陸よりも台湾の方がはるかに多い。たとえば、“榻榻米”（タタミ）“欧巴桑”（おばさん）“欧吉桑”（おじさん）“沙西米”（さしみ）が有名だが、“阿沙力”（あっさり）（香港マカオも）、“卡哇伊”（かわいい）（他に香港マカオ、シンガポール、マレーシア、タイ）などもある。

台湾限定使用の語には、注記はなくても、日本語起源と覚しきものが目立つ。その一つは野球用語で、“安打”“暴投”“捕手”などがある。また、つぎにあげる語は『全球華語詞典』から拾ったものだが、注記はないものの、どれも日本語起源の可能性が高い。

暴走族 貝塚 観覧車 陸橋 脳死 内規 卓球 譲渡 忍者 通学生
同人誌 万年筆 洗脳 洋裁 車掌 風呂屋 始業式 手巻

11. おわりに

外来語というのは、どの言語でもそれが受容されるには、ある程度の透明性と、ある程度好奇心をくすぐる未知の音連続という不透明性が求められる。後者は柳父章のいう「カセット効果」である。総じていえば、中国語は他の言語に比べ、透明性をより要求した言語と言える。しかも、その導入は逐語訳という形式もあったが、より形象的、即物的な翻訳がしばしば行われた。もっとも、同じ中華圏でも、香港台湾のように、音訳語が多く用いられ、しかも、大陸のように意味の付加をほとんど要求しない地域が存在することにも注意する必要がある。要するに、中国の外来語と言っても、英語文化の普及と比例して、時代、また地域によって受容の度合いが違うということである。ことばや漢字そのものに造語力があるというのは一種の比喻で、本当はことばや漢字の使い手によってそれは変わる。同じように、外来語もそれを受容する人々の意識が変われば、今後も変わり続けていくであろう。本稿ではその一端を紹介した。

注

- 1) 本書には鳥井克之氏による邦訳『現代中国語における外来語研究』（関西大学出版部、1988）がある。
- 2) 沈国威（1994）：p62-65、p352-385。その原因は、高らがいわゆるイエズス会やカトリック宣教師たちと中国人協力者による漢訳洋書（洋学書）をほとんど利用でき

なかったことによる。

- 3) たとえば張瑪麗『超吉好洋名』(三思堂、2005)がある。
- 4) “的士”は大陸の共通中国語で発音するとティ・シ(dishi)だが、広東語ではティックシーに近くなる。中華圏の中国語を集めた李宇明主編『全球華語詞典』(商務印書館、2010)によれば、“的士”は香港起源とはいえ、大陸、香港マカオでも通用するという。なお、『全球華語詞典』が収める語は、10000語で、その範囲は、大陸以外に、香港、マカオ、台湾、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア等の東南アジア地区、それに日本、オーストラリア、アメリカ、カナダ等の地区も含まれる。ここでの記述は本書並びに『外来語趣輯』(捷太出版社、2004)による。後者は台湾国語の外来語を大陸、香港等のことばと比べたものである。
- 5) 鄒嘉彦・游汝傑編著『全球華語新詞語詞典』(商務印書館、2010)は大陸(北京、上海)、香港マカオ、台湾、シンガポールの新聞雑誌に現れる新語を1995年から2008年まで毎週定期的に集めたもので、外来語がどのような変遷を経て定着していくかを読み取ることができる。
- 6) “丁克夫婦”(子どもをもたない夫婦の意)ともいう。
- 7) 藤堂明保『漢字語源辞典』(学燈社、1965) p488～。これはかつて右文説と言われた。つまり、「はじめにことばありき」ということで、漢字はその抽象的なことばを形の上でより厳密化していったということである。
- 8) “迷你”は“迷你汽车”(ミニカー)“迷你游戏”(ミニゲーム)“迷你论坛”(ミニ論壇)のように単にミニの音訳としても使われる。(李艶・施春宏、2010:p62)
- 9) 興味あることは韓国でも“美国”を使うことである。おそらくは、中国から韓国という流れではあるまいか。もっとも、韓国ではドイツはトギル(独逸の韓国漢字音)、フランスはフランスというふうに純粹に音訳語で、なぜこのようなことになったのか歴史的に追究してみる必要がある。
- 10) 「米国」については『講座日本語の語彙 11 語誌Ⅲ』(明治書院、1983)の荒尾禎秀「米国」が詳しい。
- 11) 以上、国名全般は王敏東(1995)が詳しい。音韻的な解釈は千葉謙悟(2010): p72-78を参照。
- 12) この点は王敏東(1995)が詳しく考証している。
- 13) 日本の外国地名の漢字表記の変遷は『宛字外来語辞典』(柏書房、1984)に詳しい。
- 14) なお、こうした人名、地名の中国訳について、古く『学部審定 外国地名人名辞典』(新学会社蔵版、1904光緒30)がある。これは日本人坂本健一の『外国地名辞典』の翻訳だという。さらに、『英語姓名訳名手冊(第二次修訂本)』(商務印書館、1985)、『外国地名訳名手冊』(商務印書館、1983)、『外国地名訳名手冊』(商務印書館、1993)、『外

- 国地名訳名』(台湾商務印書館、1957)等が出ている。
- 15) 荒川 (2000) : p102-105 を参照。
- 16) 詳しくは荒川 (1997) : p280-286 を参照。
- 17) 名前が意味を捨象するという現象については田中克彦 (1996) が論じている。
- 18) 荒川 (2000) : p95 参照。史 (2000) : p115 にも別の角度からの指摘がある。
- 19) 中国人の命名の特徴については莫邦富 (2008)、博報創名プロジェクト他 (2005) が参考になる。
- 20) 以上は主に『全球華語新詞語詞典』による。
- 21) black tea は最初中国で「黒茶」と直訳されたが、これでは売れないということで、のちに「紅茶」に改名された。この用語の変遷過程については内田慶市 (2001) : p241-270 に詳しい考証がある。
- 22) 荒川 (2001) を参照。
- 23) 荒川 (2001) に図をあげておいた。中国語の「池」は「楽池」(楽池—オーケストラボックス)「舞池」(ダンスホール)のように「まわりよりくぼんだところ」という意味である。
- 24) 「电视」が和製漢語であることは宮島 (2008) を、「电话」については荒川 (2009) を参照。
- 25) 陳麗君 (2005) による。
- 26) 陳麗君 (2005) による。
- 27) 中国語の「調」は「調子」以外に「移動する、移動させる」という意味があるが、「調べると」という意味はない。中国語で「調べる」を意味するのは「查」の方である。「調査」については荒川 (2012) を参照願いたい。
- 28) 荒川 (1997) : p19-22。なお、「結晶」は木村秀次氏よりの教示。
- 29) 近年の日本外来語については彭広陸による研究がめざましいが、とりあえずは彭広陸 (2005) ならびに、北京日本学研究中心の教員院生を中心にした『日源新詞研究』(学苑出版社、2011) を参照願いたい。「入口」「出口」については荒川 (2011) で問題にした。

【参考文献】

- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社
- (2000) 「外国地名の意識—「劍橋」「牛津」「聖林」「桑港」—」『文明 21』第 5 号 愛知大学国際コミュニケーション学会
- (2001) 「日本の訳語・中国の訳語」『関西大学東西学術研究所創立 50 周年記念国際シンポジウム '01 報告書 東と西の文化交流』関西大学出版部

第1部 言語文化論的アプローチ

- (2009) 『『電』のつくことば—「電話」を中心に』『19世紀中国語の諸相』雄松堂出版
- (2011) 「中国語を歩く—中国の街の漢字を読む」『東アジアの言語・文化・芸術』丸善出版
- (2012) 「近代日中の訳語の創造と受容」(日本語学会 2011 年度秋季大会シンポジウム報告)『日本語の研究』第8巻第2号
- 内田慶市 (2001) 『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部
- 王敏東 (1995) 『外国地名の漢字表記についての通時的研究』大阪大学提出学位論文
- 沈国威 (1994) 『近代日中語彙交流史』笠間書院
- 田中克彦 (1996) 『名前と人間』岩波書店
- 千葉謙悟 (2010) 『中国語における東西言語文化交流』三省堂
- 鳥井克之 (1988) 『現代中国語における外来語研究』関西大学出版部
- 莫邦富 (2008) 『中国ビジネスはネーミングで決まる』平凡社新書
- 彭広陸 (2005) 「中国語の新語における日本語からの借用語」『香坂順一先生追悼論文集』光生館
- 博報創名プロジェクト 莫邦富・寛裕介 (2005) 『中国語ネーミング開発ハンドブック』日本能率協会マネジメントセンター
- 宮島達夫 (2008) 「「テレビ」と「電視」—「電視」は和製漢語か」『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成』関西大学出版部
- (中国語文献)
- 高名凱・劉正琰 (1958) 『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社
- 高名凱・劉正琰他 (1984) 『漢語外来詞詞典』上海辭書出版社
- 史有為 (2000) 『漢語外来詞』商務印書館
- (2004) 『外来詞—異文化的使者』商務印書館
- 趨振環 (2002) 「从“得律风”到“电话”」『老电话』上海古籍出版社
- 陳麗君 (2005) 「“粉丝”一词的语言现象分析」『浙江旅游职业学院学报』第1巻第1期
- 李艶・施春宏 (2010) 「外来词语义的汉语化机制及深度汉语化问题」『汉语学习』第6期

【基本文献】

- ◎高名凱・劉正琰 (1958) 『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社
- 鳥井克之邦訳 『現代中国語における外来語研究』(関西大学出版部、1988)
- 中国における外来語の先駆的研究で、外来語とはなにかに始まり、外来語の歴史的回顧、現代中国語の外来語の来源、音声、語彙、文法の観点からの外来語の造語法の検討、さらには規範化の問題に及ぶ。

◎史有為（2004）『外来詞—異文化的使者』商務印書館

現在最も新しい、中国の外来語についての包括的な概説書。外来語の来源についての考証があるし、現代における現象にも注意している。

◎沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院

日本語起源の外来語について、日本に存在する多くの英華・華英字典、洋学資料に基づき、本格的に調査した最初の専門書。日本語借用語概説、研究史から、まだ本格的に漢語の移入が始まらない段階での日本探訪記録の語彙の考察、さらには日本語に対するロプシャイトの英華字典の影響の考察、英和辞典の役割等、多くの問題を提起している。

第2部 言語生活論的アプローチ
—社会・マスコミ・教育—

『『外来語』言い換え提案』とは何であったか

相澤 正夫

キーワード：カタカナ語 言語問題 言語政策 福祉言語学 公共性

1. はじめに

「外来語の氾濫」をはじめとして、日本語について日常生活レベルで指摘される大小様々な言語問題は、そのままでは言語政策的な研究の対象にはなりにくい。一般に、政策的研究は、(1) 公共的な問題への対応について、(2) 実践的な見地から研究することをその要件としている。言語に関する政策的研究もこの2点に留意し、言語問題の何を対象としてとりあげ、どのような方法で対処するのかを明確化して行う必要がある(田中・相澤2010)。

2002年から2006年にかけて行われた国立国語研究所の『『外来語』言い換え提案』は、一言で言えば、公共性の高い場面における分かりにくい外来語使用の問題に対象をしばり、分かりやすくするための具体的な方策を類型化して提案したものである。言語に関する政策的研究の、近年における典型的な事例とすることができよう(国立国語研究所「外来語」委員会2006)。

提案の大前提として、社会の民主的な運営のためには、社会参加に必要な情報の共有が不可欠であり、「だれもが分かる言葉を皆が使う」ことが実現されなければならないという基本認識があった(相澤2006)。情報弱者を作らないという点で、福祉言語学的な色彩の強い企画であると同時に、公共空間における言語使用のあり方を問う点で、その基盤において公共哲学的な発想と姿勢が問われるものでもあった(陣内2007、相澤2008、山脇2004)。

実施主体である国立国語研究所からすれば、調査研究の報告・公表にとどまらず、実際に社会に向けて提言・発信を行った点において、それまでの研究所の活動範囲から大きく一步を踏み出した企画でもあった。背景には、2001年4月に組織形態が独立行政法人に移行したことが確かにあった。

筆者は、この企画の全体に一定の責任ある立場に関わることになったが、当初から以上のことが見通せていたわけではない。国立国語研究所という場で言語生活研究あるいは社会言語学を標榜する調査研究に携わり、それなりの報告・公表活動は行っていたつもりであったが、それらとは全く次元・位相を異にする企画に携わっていることを痛感させられた。日本語研究は言うに及ばず、学問・研究一般、さらには社会に対する姿勢の立て直しが求められているのではないかと思うこともしばしばであった。

本稿では、ようやく対象化できる程度に過去のものとなった『「外来語」言い換え提案』を組上に載せ、この活動が何であったのかを振り返るとともに、言語問題への対応とそれを志向する日本語研究のあり方について、筆者の現在の考えを述べることにしたい。

2. 「外来語の氾濫」という言語問題一何を取り上げたのか

一般に「外来語の氾濫」が繰り返し言われる背景には、外来語が一定の限度や許容量を超えてあふれ出し、結果として好ましくない状況を招いているといった危機意識がある。国の言語政策の中核を担う国語審議会（2001年以降、文化審議会国語分科会が役割を継承）は、このような危機意識、すなわち外来語の増加が無視できないレベルに達しているとする立場から、対応策の基本姿勢に関する答申を行った（国語審議会2000）。具体的には、広く国民一般を対象とする官公庁や報道機関等における外来語・外国語の取扱いについて、個々の語の周知度や難度に配慮して、次のような3区分に従って対応するよう求めたのである。

- ① 広く一般的に使われ、国民の間に定着しているとみなせる語（ストレス、スポーツ、ボランティア、リサイクル、PTAなど）。
⇒ そのまま使用する。
- ② 一般への定着が十分でなく、日本語に言い換えた方が分かりやすくなる語（アカウントビリティ、イノベーション、インセンティブ、スキーム、プレゼンス、ポテンシャルなど）。
⇒ 言い換える。

- ③一般への定着が十分でなく、分かりやすい言い換え語がない語（アイデンティティー、アプリケーション、デリバティブ、ノーマライゼーション、ハードウェア、バリアフリーなど）。

⇒ 必要に応じて、注釈を付すなど、分かりやすくなるよう工夫する。

国語審議会答申では、広範な「国際化に伴う日本語の問題」の一つとして「外来語・外国語増加の問題」を取り上げ、「現状と問題点」「問題についての考え方」の順に審議内容の整理を行ったあと、特に「広く国民一般を対象とする官公庁や報道機関等」に向けて、上記の3区分による対応を示唆している。ここで適用の対象が「白書・広報紙等の公的な文書や多くの人を対象とする新聞・放送等」のいわゆる「公共媒体」に限定されたことは重要である。その後に行われた国立国語研究所「外来語」言い換え提案においても、基本姿勢として引き継がれることになったからである。

答申の趣旨は、分かりにくい外来語を分かりやすくするために、3区分のいずれかによって適切に対応することであり、示された語例はあくまでも答申時点における典型的な語例であると断っている。各方面における実際の運用は個別の事情によって変動しうるものであり、また、個々の語の定着度も時間の経過によって変化するものであるから、固定して考えられるべきものではないという柔軟な姿勢も示している。

このように、答申では「国民一般への定着度」が対応の際の判断基準とされているが、十分な定着とはどの程度をさすのか、個々の語の定着度をどう判定するのかなど、実際の・実践的な部面は官公庁や報道機関をはじめとする公共媒体の発信者側の判断に委ねられることとなった。

しかし、実際問題としてこのような判断を客観的なデータなしに行うことはきわめて困難である。国民の言語生活の実態を踏まえることなく恣意的に行うとすれば、危険であるとさえ言えよう。答申が、外来語問題に対する基本姿勢と対応のあり方を示したことは画期的であったが、語彙面に関わる実体計画（corpus planning）としては未だ不完全なものにとどまった。この点で、日本の一連の漢字政策が、早くから漢字という言語構造上の要素について、現代日本語の語彙を書き表す手段として必要十分な範囲を具体的に定めようとしてき

たこととは対照的である（田中・相澤 2010）。

外来語という語彙面の実体計画に踏み込むためには、策定の基盤となる客観的データが不可欠であったが、答申時にはそれが満たされていなかった。「国語および国民の言語生活に関する科学的な調査研究」を標榜する国立国語研究所においても、そのような計画策定の議論に耐えうるようなデータの蓄積が十分ではなかった。率直に振り返れば、研究者の側の内発的な問題意識が十分に醸成されていなかったことも一因であり、本格的な調査研究の開始には二つの外的な作用が必要であった。一つは、2001年の組織形態の独立行政法人化であり、もう一つは2002年の小泉内閣による「外来語」言い換え提案に向けた働きかけである（国立国語研究所「外来語」委員会 2006）。

当時、新たに導入された制度の下で、独立行政法人は国の省庁が企画・立案する政策の実施部門として位置づけられた。独立行政法人化により、国立国語研究所には、文化庁（国語審議会、文化審議会国語分科会）の国語政策に関わる事業の実施が求められることとなり、上述の外来語問題に対処するために必要とされる事業も、そこに包含される構図ができあがった。かねてより行政用語の適正化に熱心だった小泉首相の「鶴の一声」は、このような動きに最後の強力な一押しを加えたことになる（国立国語研究所「外来語」委員会 2006）。

3. 「外来語」言い換え提案一どのように対処したのか

3.1. 「外来語」委員会の設立

このように政治主導で始まった「外来語」言い換え提案プロジェクトであったが、その後の展開は「分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫」を社会に向けて提言・発信するための「総力戦」であった。まずプロジェクトの中核として設立された国立国語研究所「外来語」委員会（委員長は甲斐睦朗所長（当時））は、形の上では政策官庁に設置される審議会を模したその「ミニ版」と言えるものであるが、「設立趣意書」に盛られた活動理念は、次の3点に要約される（相澤 2006）。

- ①公共性の高い場面で外来語をむやみに多用すると、円滑なコミュニケーションに支障が生じる。

- ②特に官公庁・自治体、報道機関などでは、それぞれの指針に基づいて、言い換えや注釈などにより、受け手の理解を助ける必要がある。
- ③この提案は、そのための基本的な考え方と基礎資料を、具体的に提供するものである。

委員会の活動理念には、基本的に国語審議会答申からの連続性が確保されている。一方、言語研究機関のプロジェクトとして実施する以上、委員会の審議に供する客観的データの整備が何よりも優先されなければならないとの認識も強くメンバー間に共有された。さらに、議論の前提として、現代日本語における外来語の状況を広範かつ多角的に把握しておくことの必要性も確認された。このように、「議論の場」としての審議会的な要素と「情報供給の装置」としての研究機関的な要素との健全な結合の上に、プロジェクトの推進が図られた。言語問題への対応を意識した学術的基礎研究を基盤として、筋の通った説得力のある具体的な提案を行うことが目指されたのである。

3.2. 「日本語の現在」をとらえる調査研究の実施

このような目標設定の下に、日本語研究の専門的な知見の蓄積を生かして、外来語状況の実態把握を行う『『日本語の現在』をとらえる調査研究』という大規模な研究プロジェクトが、提案活動と連動して新たに開始された。このプロジェクトが重視したのは、①言葉そのものを対象とする「語彙調査」、②言葉を使って生活する人々を対象とする「世論調査」の両面から、バランスよく調査を実施することであった。すなわち、①語種の一つとしての外来語に着目する語彙論的手法と、②使い手の外来語使用意識を把握する社会言語学的手法とを総合して、問題群の整理と取り上げる対象の適切な位置付けを行おうとした。主観的、恣意的、一面的な意見の応酬によって論点が曖昧になり、委員会の議論が拡散することを避けたいと考えたからである。

①の語彙調査も②の世論調査も、委員会で検討対象とする語彙の選定にとって不可欠の調査である。問題とすべきは、外来語全体ではなく、官公庁・報道機関など公共性の高い組織が不特定多数の人に向けて使用していながら、一般にはなじみの薄い外来語である。そうした外来語を特定するために、①の語彙

調査では、省庁の白書、自治体の広報紙、新聞の3種を選び、その電子化データに基づいてカタカナ表記語を抽出し、複数の専門委員が各自の見識をもって検討候補語の絞り込みを行った。

このようにして選定された検討対象語を中心とする約400語に対して、②の世論調査では、国民各層を対象として「一般になじみの薄い外来語」を特定するための「定着度調査」を実施した。その結果、各語について、「見たり聞いたりする（認知率）」、「意味も分かる（理解率）」、「自分でも使う（使用率）」の三つの指標に基づいて定着度の実態把握ができるようになった（国立国語研究所2007）。

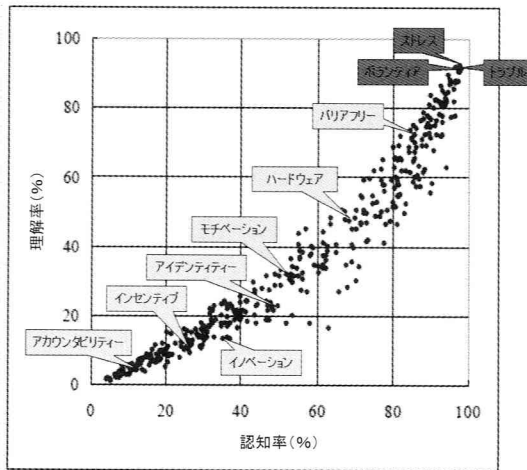


図1 外来語の定着度の違い

図1は、認知率を横軸、理解率を縦軸にとった約400語の散布図であるが、例えばこの中に国語審議会答申に示された代表語例を置くことにより、21世紀初頭における各語の現在位置が一目で確認できる。2000年の答申で「一般への定着が十分でない」とされた語の中には、実際に調査をしてみると、「バリアフリー、ハードウェア」のように既にかかなり定着が進んでいるものも含まれていることが分かる（相澤2010）。

委員会では、個々の外来語の定着度にこのような幅があることを無視すべきではないという判断から、定着度調査データのうち、特に「理解率」に着目し

て「外来語の分かりにくさ」の程度を下記のように4段階に分け（星印の数で段階の区別が一目で分かるよう表示）、それぞれの段階にふさわしい対応の仕方を提案している（国立国語研究所「外来語」委員会 2006）。

- ★☆☆☆ その語を理解する人が国民の4人に1人に満たない段階
- ★★☆☆ その語を理解する人が国民の2人に1人に満たない段階
- ★★★★☆ その語を理解する人が国民の4人に3人に満たない段階
- ★★★★★ その語を理解する人が国民の4人に3人を超える段階

実際の提案では、★☆☆☆から★★★★☆までの3段階に属する語を「分かりにくい外来語」として扱い、★★★★★の語は、すでに十分に定着している外来語であるとして、提案の対象語リストから除外している。

あわせて実施した世論調査には、2回に分けて行った「外来語に関する意識調査」がある。この中には、例えば、「外来語・略語の意味が分からず困った

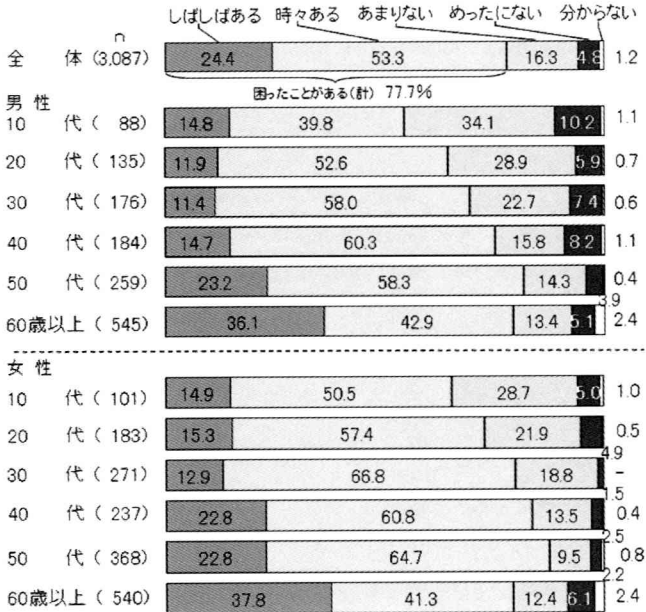


図2 外来語・略語の意味が分からず困った経験の有無

経験の有無」に対する回答など、さらにきめ細かな対応策の提案に繋がる情報が得られた項目も多い(国立国語研究所2007)。

図2から明らかなように、国民全体のほぼ5人に4人(77.7%)が困った経験があるとしているが(「しばしばある」と「時々ある」を合算)、男女を問わず、この傾向は高年層、特に50代で目立ち、60歳以上では「しばしばある」という回答が突出している。この質問項目は、高年層を「外来語弱者」として認識し、世代による理解度の違いに十分な配慮を求めるといった「福祉言語学的な姿勢」を打ち出す根拠となったデータとして貴重であった(相澤2006)。

同じ「外来語に関する意識調査」の中では、「外来語を分かりやすく言い換えてほしい分野」に対する回答も、検討対象語を絞り込む上で有益なデータとなった。図3を見ると、国民の約9割(89.5%)が一つ以上何らかの言い換えてほしい分野があると回答しているが、言い換えの要望の高さを見ると、分野は大きく二つのグループに分かれた。要望の高い分野は「政治・経済、医療・福祉、コンピュータ関連」など「現代社会を生きる上で不可欠の知識や情報を担う分野」に集中し、「ファッション、スポーツ、料理、音楽」への要望はきわめて低かった。後者は「新鮮なイメージや独特の雰囲気重視する分野」で

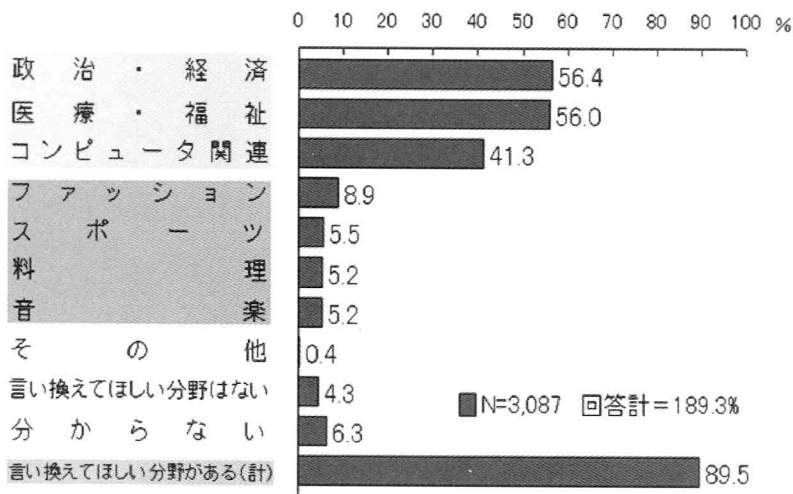


図3 外来語を分かりやすく言い換えてほしい分野

あり、むしろ外来語を積極的に使う理由がその辺にありそうな分野であることから、検討対象語から除外するのが妥当と考えた。しばしば「商業外来語」と言われるこのような分野の外来語について、言い換え提案になじまないという判断を調査データに基づいて下すことができたのは、それ自体が一つの収穫であった（相澤 2003、2006）。

以上は、「外来語」言い換え提案がどのように行われたのか、その手続きの特に重要な基盤をなす部分を紹介したものであり、もちろん全貌が提示できているわけではない。関連して実施された各種調査とその分析事例には既に公表されたものも多いので、ぜひとも参照されたい（田中 2006、国立国語研究所 2007）。

3.3. 「外来語」言い換え提案の実際

議論の場としての「外来語」委員会は、言語（日本語、英語、中国語）の研究者のほか、科学者、作家、翻訳家、通訳、辞書編纂者、報道機関の用語委員などから構成され、職業や専門領域ばかりでなくそれぞれの言語観、言語文化に対する姿勢もきわめて多種多様であった。「外来語の氾濫」に対する態度も、日本語そのものが崩されることへの危機感が先行する「伝統重視」の立場と、日本語による情報のやり取りや意思疎通の面での危惧が先行する「機能重視」の立場に大きく分かれることがあった（相澤 2006）。

しかし、最終的に「同時代に生きている人と人とのコミュニケーションに支障が生じている現状を放置すべきではない」という基本的な共通認識に立つことができたのは、一つには前述のような実態調査データが議論の方向付けに強い説得力をもったこともあるが、それ以上に委員会における議論が多方面からじっくりと丁寧に行われたことの結果であるように思われる。

一方、議論の成果としての提案は、「『外来語』言い換え提案」という名称のせいか、実用的な観点からの「言い換え語リスト」といった誤解が後を絶たず、しばしば提案語数が少なすぎて役に立たないのではないかと批判も受けた。実は「分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣い工夫についての提案」が当初の名称であったが、社会発信の際の便宜を考え、通称として「『外来語』言い換え提案」を採用した経緯がある。提案側の意図は「分かりやすく

するための言葉遣いの工夫」の部分にこそあり、そのために有効な留意事項を、次の①～⑥の六つに類型化して示すことにも力を注いでいる。

- ①語による理解度の違いに配慮を
- ②世代による理解度の違いに配慮を
- ③言い換え語は外来語の原語に対するものではないことに注意を
- ④場面や文脈により言い換え語を使い分ける工夫を
- ⑤専門的な概念を伝える場合は説明を付け加える配慮を
- ⑥現代社会にとって大切な概念の定着に役立つ工夫を

個々の外来語にはそれぞれに固有の背景事情があり、一律に機械的な扱いができるわけではない。分かりやすい言葉遣いを工夫するためには、それぞれの特性をとらえた上で、言い換え語を採用するのがよいのか、あるいは外来語に何らかの説明を付与するのがよいのか、一つ一つきめ細かな対応を考える必要がある。

①と②は、その外来語の理解度の状況を、例えばその時点における「定着度調査」など客観的なデータを参照して、正確に見極めることを求めるものである。特に②は、高年層を中心に世代的な「外来語弱者」が存在することへの配慮を求めるものであり、「福祉言語学」の具体的な実践に関わる事項でもある。

③と④は、その外来語の語彙論的な位置付けを、実際の用法に基づいて正確に把握することを求めるものである。③は、提案で示した「言い換え語」や「意味説明」があくまでも実際に日本語の中で使われている外来語に対するものであり、外来語の元の言語である原語の意味・用法をそのまま反映しているわけではないことに、また、④は、同じ外来語でも場面や文脈によって意味合いを変えることがあり、一つの言い換え語で全ての場合に対応できるわけではないことに、改めて注意を喚起している。

⑤と⑥は、その外来語の表す概念そのものに重要性が認められる場合について、適切な仕方での対応を求めるものである。⑤は、特定分野の専門的な外来語が無理な言い換えによってかえって混乱を招くおそれがあることに、また、⑥は、現代社会にとって普及が望まれる大切な概念を表す外来語が、例えば語

が長くて覚えにくいなど普及に不利な条件をもつ場合に、あえて言い換え語を新しく造語するなどして定着に役立つ工夫を試みることに、それぞれ注意を喚起している。

しかしながら、実際のマスコミ報道等では「個々の外来語にどんな言い換え語が当てられているか」にばかり目が向けられることが多く、社会に向けて意図どおりの内容を正確に発信することの難しさを味わうことにもなった。ここには、今後の言語教育・国語教育も含めた広義の言語政策の中で、語彙面の実体計画をどのように組み上げていけばよいのか、課題それ自体の困難さも深く関わっているように思われた。

4. 公共哲学と福祉言語学—今後の研究活動に向けて

国立国語研究所は、1948年の創立当初より「言語生活研究」の名の下で、言葉が実際の暮らしの中で使われる姿を科学的な調査研究に基づいて明らかにする仕事を推進してきた。「外来語」言い換え提案というプロジェクトの新しさは、このような国立国語研究所のよき伝統とも言える言語生活研究の流れの中で、公共媒体における外来語の使用実態と人々の外来語使用意識を科学的調査研究によって把握するとどまらず、さらに検討のための委員会を組織し国民各層の衆知を結集して、難解な外来語の言い換え提案にまで踏み込んだところにあると言えるだろう（相澤 2008）。

言語生活研究は、欧米の言語研究の潮流とは別個に、日本で生まれた独自の社会言語学研究である。今回の「外来語」言い換え提案は、社会への直接的な貢献を目指す点で、それをさらに一步前進させる企画となった。向かう方向は、日本の言語生活研究の開拓者の一人、徳川宗賢が最晩年に提唱した「ウェルフェア・リングイステイクス」（「福祉言語学」「厚生言語学」の意）の構想と軌を一にする。その核心にあるのは「社会の役に立つ言語研究」「人々の幸せにつながる言語研究」という理念であり、その理念に沿った研究活動の実践が求められているのである（陣内 2007、相澤 2008）。

実は、公共的なコミュニケーションにおける言語問題ばかりでなく、世紀の変わり目の頃から「公共性」それ自体の内実を問い直す「公共哲学」の活動が活発になっている。公共哲学を唱道する研究者の一人は、『『理念と現実』を統

合する学問」として公共哲学を定位した上で、その方法論の特徴を「社会の現状(「ある」)のリアルな分析と、望ましい(「あるべき」)社会の理想像の追求と、その理想の実現可能性(「できる」)の探索という三つのレベルを、区別しながらも切り離さず統合的に論考する」ことにあるとし、さらに「現実分析から出発しつつも『より善き社会』の理念を放棄しない社会学者と、理想社会を追求しながらもたえず『リアルな現実のなかでその実現可能性』を熟考する人文科学者や一般市民との対話や協調をめざす」ものであると宣言している(山脇2004)。

このような学問・研究一般の潮流は、現今の社会状況と決して無関係ではない。日本語研究が関係する領域においても、日本語そのものの体系や構造、あるいは日本語を使って営まれる社会生活の実態を解明するための調査研究を基盤としながら、さらにその先に「日本語の抱える現実の問題を見据えた総合的かつ実践的な研究分野」が必要とされているのである。

筆者は、このような具体的な研究分野の一つとして「福祉言語学」という名称の領域を想定し、その確立のための探索的基礎研究を積み重ねることの意義を訴えてきた(相澤2008)。着想の源は、上述したように、社会言語学者の徳川宗賢が「ウェルフェア・リングイスティクス」の考え方を提唱し、社会言語学に「人々の幸せにつながる言語研究」を追求したことにある。徳川の理念に一定の実体を与え、普及・定着させるためには、名称を「福祉言語学」としたうえで、その学術的内容を整備することが効果的ではないかと考えた。

現時点で、「福祉言語学」は未だ模索中の新しい研究領域である。ここで、筆者のこれまでの考察に基づき、「福祉言語学」に関わると思われる論点を整理すれば、次の4点にまとめることができる。

- ①民主的な社会運営は現代社会の大原則の一つであるが、現実には、そのために必要な人々の間の基本的な情報の共有や、専門家と非専門家との円滑なコミュニケーションに支障を生じる事態が発生しており、しばしば深刻な問題となっている。
- ②個人の自立と自己責任が問われる現代社会においては、その前提として社会参加に必要な情報から取り残された「情報弱者」を作らないことが重要

であるが、①に指摘したような言葉に関わる問題が「情報格差」を生む原因となっていることは現状において明らかであり、そのまま放置すべきではない。

- ③社会の情報化・国際化（グローバル化）・専門化が急速に進展する中で、②で指摘したような言葉の問題に起因する「情報弱者」の発生は、一部の人がだけに当てはまる特別な出来事ではなく、一つ間違えば誰もが該当者になりうるような、社会に一般的・普遍的な現象になりつつある。
- ④このような現代的な言語問題に対処するためには、例えば「情報介護」「情報介助」の視点に立った広範かつ実践的な言語研究が不可欠であり、「福祉言語学」はそれらの研究活動を包括する概念として有効であることから、一つの研究領域として確立するだけの価値がある。

一般に「福祉」の概念は、①最広義で「幸福、安寧」を指す場合、②広義で「平等ないし分配の公正」を指す場合（制度的には「社会保障」ないし「福祉国家」と重なる）、③狭義で「社会サービス」ないし「ケア」に近い意味で使われる場合（「社会福祉」と言うときの「福祉」など）の、大きく三つに分けられるという（広井 2011）。

徳川の提唱した「ウェルフェア・リングイステイクス」における「ウェルフェア」は、①の最広義の場合を指すものと考えられるが、筆者の想定する「福祉言語学」における「福祉」は、むしろ③の狭義の場合の「社会サービス」あるいは「ケア」に近いように思われる。上で述べたとおり、「情報介護」「情報介助」に相当する具体的・実践的な部面の「福祉」から着手し、それを充実させることを通して、やがては最広義の「福祉」につなげていこうとするものである。

5. おわりに

筆者は、「外来語」言い換え提案のプロジェクトに携わって以来、組織として行う事業に参画する場合であっても、否、むしろ組織として行う事業であるからこそ、個人としての言語観、コミュニケーション観、社会観を鍛えておく必要があることを痛感してきた。「外来語」言い換え提案の推進母体であった

独立行政法人国立国語研究所は既に存在しないが、新たな枠組みの中で、研究者個人、あるいは複数の個人の発意による共同態勢により、同様の活動がどのようにすれば持続的に可能になるのか、アカデミックな研究者コミュニティにおいても考える時機が来ていると感じている。

その意味で、近年、言語の「公共的な機能」や「分かりやすく使いやすい言語を追求すること」への積極的な言及や提言が、国語学・日本語学の担い手からなされていることには大きな意義があり、さらにこの方向に向かって議論を深めていくことが大切であると考え（金水 2012）。

【参考文献】

- 相澤正夫 (2003) 「日本語コミュニケーションにおける外来語使用の功罪」『日本語コミュニケーションの言語問題』(国立国語研究所)
- (2006) 『「外来語」言い換え提案』は何を目指しているか』『新「ことば」シリーズ⑩ 外来語と現代社会』(国立国語研究所編、国立印刷局)
- (2008) 『「福祉言語学」事始』『日本語科学』23 (国立国語研究所)
- (2010) 「外国語から外来語へ—言語・社会への定着過程を探る—」『日本語研究の12章』(上野善道監修、明治書院)
- 金水敏 (2012) 「日本語の『正しさ』とは何か—言語を資源として見る立場から—」『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』(日本語学会)
- 国語審議会 (2000) 『国際社会に対応する日本語の在り方』(国語審議会答申)
- 国立国語研究所 (2007) 『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』(国立国語研究所報告 126)
- 国立国語研究所「外来語」委員会 (2006) 『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』(ぎょうせい)
- 陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』(世界思想社)
- 田中牧郎 (2006) 「現代社会における外来語の実態」『新「ことば」シリーズ⑩ 外来語と現代社会』(国立国語研究所編、国立印刷局)
- 田中牧郎・相澤正夫 (2010) 「難解用語の言語問題への具体的対応—「外来語」と「病院の言葉」を分かりやすくする提案—」『社会言語科学』13-1 (社会言語科学会)
- 広井良典 (2011) 『創造的福祉社会』(筑摩書房)
- 山脇直司 (2004) 『公共哲学とは何か』(筑摩書房)

[付記]

本稿は、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「『福祉言語学』の創成・確立に資する研究モデルの探索」（研究代表者 相澤正夫、平成21～23年度）の成果の一部である。また、本稿の内容は、日本語学会2012年度春季大会シンポジウム「グローバル市民社会の日本語学」で発表した「言語問題への対応と日本語研究—「外来語」言い換え提案の場合—」をもとに、大幅な加筆修正を行ったものである。

【基本文献】

◎国立国語研究所「外来語」委員会（2006）『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』（ぎょうせい）

「外来語」言い換え提案について知りたいとき、まず手に取ってほしい実用的な一冊。176語の外来語について、言い換えや言い添えなど分かりやすく伝えるための工夫を示す。提案活動の現場情報も簡潔にまとめて提供し、読者の理解を助ける。

◎国立国語研究所（2007）『公共媒体の外来語 — 「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』（国立国語研究所報告126）

「外来語」言い換え提案のための基礎的調査研究の成果を満載した報告書。各語について、調査データ、背景事情、言い換えの論点の観点から記述する。また、外来語に関する意識調査の分析やコーパス言語学の分野に関連する論文を多数収録する。国立国語研究所ホームページで全文の閲覧が可能。

◎陣内正敬（2007）『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』（世界思想社）

「外来語」言い換え提案の意義を、広範な社会的・文化的背景のなかに位置付けて考えるための、見通しのよい「俯瞰図」を与える学術書。近年の外来語研究の新しい動きを踏まえ、あるべき外来語との向き合い方を示唆する。

日本語と韓国語の外来語の受容意識—イメージ調査の分析—

梁 敏鎬

キーワード：外来語のイメージ 言語意識 受容 定着 新鮮さ通減の法則

1. はじめに

日本と韓国は同じ漢字文化圏で類似した言語体系を持っている。しかし、最近、韓国は漢字の使用がほとんど見られなくなった。むしろ、グローバル化が進む中、日常で外来語に接する機会が増えてきた。そこで日韓対照という視座から外来語の受容とその変化について注目したい。外来語を研究する際には、外来語の概念について把握することが大事である。とりわけ、対照研究として外来語を論ずる場合、二国で使われる外来語が指す概念を把握することが非常に重要である。そこで、日本と韓国で用いられる外来語の概念を、先行研究をもとに次のように提示する。

榎垣 (1963)、石野 (1983)、石綿 (2001) をまとめると、日本における外来語は、外国から日本語に入って来たことばで、主に西洋系のものである。さらに、日本社会との同化程度によって、様々な段階の語が存在するという定義を導くことができる。一方、이희승 (1941)、김민수 (1973)、정희원 (2004) をまとめると、韓国における外来語は西洋に限らず外国から借りてきて、国語のように使う語である。ただし、임홍빈 (2008) によると、まず、外来語には国語に入ってきて時間が経ち、外来語の意識がなくなったことば、すなわち外来語としての意識が薄くなった帰化語がある。また、入ったばかりの外来語もあり、こういうものすべてを含む形で外来語を定義している。このように日本と韓国における外来語とは、「外国から入って来たことば」であることは間違いないが、いつ、どこから入ってきたことばが外来語であるかについては多少異見が見られる。しかし、ここでは日本と韓国の外来語を受容の面から対比的に把握するために、比較的新しいことばであり、西洋から入ってきたことば

に着目する。

外来語の「受容」という概念は、広義と狭義に分けて考えることができる。広義には、「自国に外来語を受け入れること」だけで「受容」と言える。一方、狭義には、自国に外来語を受け入れるだけでは完全に「受容」したとは言えず、「自国語として、しっかり取り込まれること」で初めて「受容」したと言えるだろう。このように外来語の「受容」を広義、狭義のどちらに捉えるかによって、外来語研究の範囲が異なってくる。本稿における「受容」は、ある語を外国から受け入れて、その語がどのように認知、理解、使用されているのか、という観点で問題にするものである。そのため、自国語への取り込みが深い段階のものから浅い段階のものまで、外来語として扱っていく。

異なる文化的な背景を持っている日本と韓国の外来語受容の歴史に関して概観する。外来語の受容と文化的な背景の関連性を探ることができると考える。次に個人が抱いている外来語の意識、特に外来語のイメージに注目して、両国で「外来語のイメージ調査」のデータに基づいて把握する。こうすることによって、外来語の受容実態と意識の関係が明らかになる。

2. 歴史的な背景と外来語の受容

外来語の歴史的な背景、特に文化・社会的に異なる背景を持っている日本と韓国の外来語の歴史については、注意深く考察しなければならない。なぜならば、両国の外来語の歴史的な背景が、その国の言語政策を抑制したり、促進させたりすることもあるからである。外来語をめぐるの両国を取り巻く歴史的・言語政策的な背景は異なる。そのため、それらが外来語の受容意識に影響を与えたり、外来語の使用実態と結びついたりして、国民の言語生活に大きく影響を与える可能性がある。そこで、日本と韓国で外来語の受容に影響を与える可能性がある変数として歴史と言語政策の面に着目した。

まず、日本の外来語の時代区分は、室町時代以降の日本史の時代区分と類似していて、大きく室町、江戸、明治以降の3つの時代に分けることができる。そして、外来語の時代区分の中には、主要言語（石綿（2001）ではソース言語）が含まれている。この主要言語はポルトガル語、オランダ語、英語の順で、時代ごとに一番強い力を発揮した国の言語である。高い水準の文化（H文化）か

第2部 言語生活論的アプローチ

ら低い水準の文化（L文化）に流れるように、外来語の流入の歴史も、同じ動きとなっていることが確認できた。一方、韓国は日本より西欧文物の吸収時期が遅く、受動的、間接的に外来語を受け入れたため、外来語の時代区分も短い。しかし、韓国の外来語の時代区分も朝鮮時代、強占期（日本強制占領期）、大韓民国時代のように3つの時代に分けることができる。日本は時代ごとに主要言語が分かれている。韓国でも朝鮮時代に、主要言語が存在しないことを除けば、時代ごとに日本語と英語の順に主要言語が存在する。ただし、韓国の外来語の流入の歴史は、H文化からL文化への流れに加えて、20世紀初に入ってきた日本語のように、異質な言語が完全に韓国語を覆うという形の征服による流れ方もある。

日本は室町時代以降、外国との交流や接触が続けられ、現在に至るまで外国や外国語に対して寛大な態度を取っている。このように開かれた態度を日本の言語政策的な立場から解釈することも可能であろう。一方、韓国の外来語に対する受容態度は鎖国や強占期の影響、加えて国語醇化運動などの言語政策により19世紀末から20世紀の後半までは消極的な受け入れ方や受動的かつ間接的な受容態度であったと考えられる。しかし、20世紀後半からは、日韓ともに英語早期教育に代表されるグローバル化が進み、若い世代を中心に外来語に対する意識、さらに使用にも変化をもたらしてきたが、一番大きな原因は韓国社会に広がっている英語への関心である。その一例として挙げられるのはTOEICブームである。現在韓国はTOEICの受験者の数が世界で一番多い国となっている。図1は日本と韓国のTOEICの受験者数の推移(2012年4月現在)を通時的に示したものである。

図1をみると両国ともに右上がりのグラフで、年々受験者の数が増えていることが分かる。ただし、日本と韓国の増え方については少し異なっている。

日本は1979年にはじめてTOEICが実施(3,000人)され、2000年には受験者の数が100万人を越えている。一方、韓国では1982年にはじめて実施(1,379人)された試験が、日本より少し遅れているものの、2002年に100万人を越え、2008年には200万人を超えた。日本の総人口の約3分の1に過ぎない韓国でこのようにTOEICの受験者の数が増えた理由は次のように考えられる。日本に比べて韓国はTOEICの活用度が非常に高い。たとえば、国家

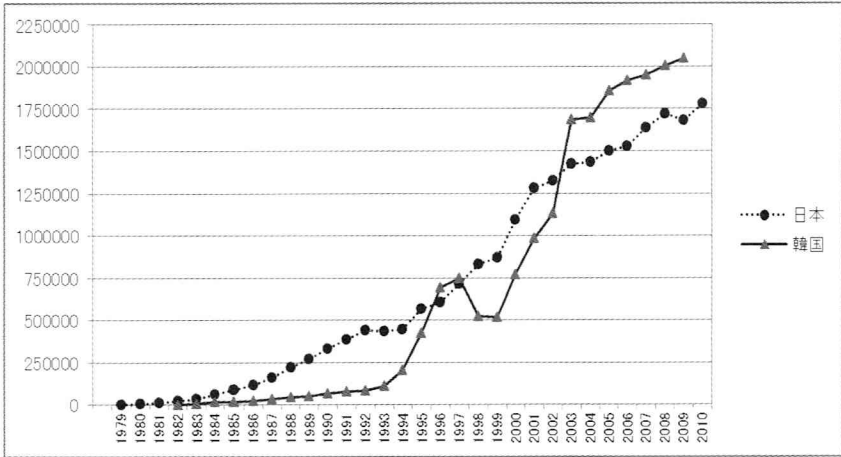


図1 日韓における TOEIC の受験者数の推移 (人)

試験で英語テストの代わりに TOEIC の成績を要求したり、1,000 社を越える企業で TOEIC の成績を入社の時に反映したり、高校や大学の入試でも TOEIC の成績で学生を選んだりする。このように韓国社会に広がっている英語ブームの影響で、9 割以上を占めている西洋系外来語の認知、理解、使用も増えてきたと考えられる。

もう一つの理由は TOEIC 成績の向上からも考えられる。アメリカ教育評価院 (ETS) によると、韓国の TOEIC の成績は 2005 年度の平均成績は 598 点で、非英語圏国家の中では最高であり、日本の 562 点より高い。さらに 2006 年度は韓国 601 点、日本は 570 点である。2000 年度以前の成績は日本が上に立ったり、韓国が上に立ったりして、成績の優位を決めるのは難しかった。しかし、韓国ではグローバル化とともに 1997 年に小学校から英語教育を必須とし、国民全体が英語に注意を払うようになったことから、日本より韓国で英語力がアップしたと考えられる。2008 年になり、李明博政権に入って、英語の公教育強化政策案を打ち出し、韓国の全体が英語教育の熱気に包まれている。さらに、2012 年は英語の作文能力と会話能力が含まれる国家英語能力評価試験 (NEAT) が実施され、2016 年からは大学入試にこの試験の成績を反映することになった。このような環境の中、新しい概念などが外来語としてそのまま入り込み、言い換えることもなく使用され、仮に言い換えられてもその語が

定着せずに、消えていく例がますます増えている状況である。近年、日本でも英語教育に力を入れているが、韓国では英語への関心があまにも高く、英語学習者や英語試験の受験者が増加している。

以上のことから外来語受容の歴史は、日本の方が韓国より深いのが、近年の英語からの受容は、日本よりも韓国の方が盛んなことから、両国で外来語の受容は変わりつつあると言えるだろう。

3. 実態調査による外来語の受容

3.1. 外来語の実態調査

この節では両国で2007年から2008年にかけて実施した外来語の実態調査の結果に基づいて分析をする。調査は任意標本抽出方式によるアンケート調査で、日本551名と韓国566名の大学生あわせて1,117名である。日本では東京、仙台、名古屋、大阪、京都の5都市で行った。一方、韓国ではソウル、大田、全州、大邱の4都市で行った。調査の内容は大きく分けて5つである。I「外来語の意識」、II「言語意識」、III「外来語のイメージ」、IV「外来語の使用」、最後に、V「フェイス項目」と分けられるが、ここでは外来語の受容に着目しているため、IV「外来語の使用」とIII「外来語のイメージ」を分析する。

調査で用いる外来語は、筆者本人が予備調査の目的で2007年6月に実施した「外来語の使用調査」で取り上げた73語の中から18語を選んだ。73語は日本の国立国語研究所が行った「定着度調査(405語)」と韓国の国立国語院による『国語醇化資料集(約21,000語)』と同院のホームページの「우리말 다듬기(2004-2006)」の結果に基づいて選定した。それらのうち、まず、日本の調査と韓国の資料集とで共通した168語を選び、さらに、国立国語研究所「外来語」委員会(2006)が取り上げた176語に入っている語から採った。この調査語の選定基準として、2007年の調査で得られた日本と韓国の外来語の認知率(聞いたこと、または見たことがあると答えた割合)を、低・中・高の3段階にわけ、各グループ6語ずつ選び出した。二国間の割合の違い(「ハイブリッド(하이브리드)」の場合、日本では高認知率)はあるものの、それぞれの低・中・高の平均認知率に基づいて分けた。以下の調査語を用いて外来語の受容度を算出してみた。

表1 2007年調査の認知率-対象語73語(%)

区分	外来語の認知率	日本	韓国
低	アーカイブ (아카이브)	23.4	11.4
低	タスクフォース (태스크포스)	10.4	13.3
低	カウンターパート (카운터파트)	10.3	14.6
低	コンプライアンス (컴플라이언스)	25.2	18.6
低	プライオリティー (프라이어리티)	12.9	19.1
低	フェロシップ (펠로십)	13.1	20.3
中	セクター (섹터)	67.6	46.4
中	ハイブリッド (하이브리드)	71.1	53.4
中	ワンストップ (원스톱)	34.4	55.1
中	コア (코어)	41.5	61.9
中	バーチャル (버추얼)	62.5	65.6
中	マスタープラン (마스터플랜)	55.9	72.9
高	マネージメント (매니지먼트)	86.4	90.3
高	バックアップ (백업)	63.2	93.3
高	インパクト (임팩트)	89.2	95.4
高	シミュレーション (시뮬레이션)	81.3	96.3
高	ビジョン (비전)	84.1	96.4
高	マルチメディア (멀티미디어)	82.6	97.3

3.2. 外来語の受容度

ここで扱う外来語の受容とは外来語の使用率をもとに算出した受容度から考えたい。18語の外来語を「聞いたことがない(以下未知)」「聞いたことがあるが、意味は分からない(以下認知)」「意味は分かるが使わない(以下理解)」「使う(以下使用)」のように4段階に判断してもらった。特にここでは外来語を使用することが、外来語を受容する最終段階であると考え、外来語の受容の各段階に点数を与え、同じ次元で外来語の受容度を計算した。このように外来語の受容度を計算することで、外来語の認知、理解、使用をばらして独立的に考察するのではなく、知らない新しい外来語の導入から使用までを、外来語の受容という一つの枠組みで測ることが可能になる。各外来語について、4段階の尺度をそのまま順に、「使用」に4点、「理解」に3点、「認知」に2点、「未知」に1点の得点を与えて「受容度」という形で数値化した。この数値化した得点をもとに、調査語または調査対象者ごとに平均値を求めた。また、調査外来語の中で、日本と韓国で外来語の平均受容度より低いグループには白丸(○)を、

外来語の平均受容度より高いグループには黒丸（●）の印をつけた。ただし、両国で受容度のズレが生じた語については、二重丸（◎）であらわす。外来語の受容度について日韓の共通点または、相違点について少し詳しく考察していくために、受容度をもとに図2のように散布図を描いた。

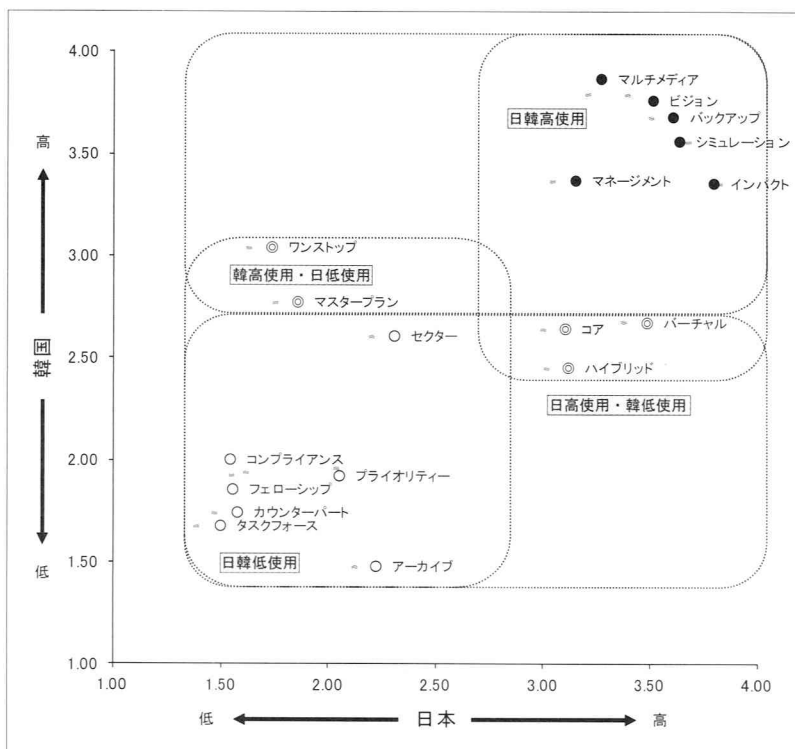


図2 日本と韓国における外来語の受容度(点)

散布図の見方として、x軸は日本の外来語の受容度を、y軸は韓国の外来語の受容度をあらわす。グラフの右側にいくほど日本における外来語の受容度が高くなり、上段にいくほど韓国における外来語の受容度が高くなることを意味する。図2の散布図から明確に4つのグループに分かれていることが、確認できる。下段左側の部分は日韓ともに低受容度外来語のグループで、上段右側の部分は両国での高受容度外来語のグループである。そして、中段右側の部分は、日本では高受容度外来語であるが、韓国では低受容度外来語のグループで

ある。逆に中段左側の部分は、韓国では高受容度外来語であるが、日本では低受容度外来語のグループである。図2から分かるように、「マルチメディア」「マネージメント」「インパクト」などは、日本と韓国ですでに定着して、使われている外来語である。一方、「アーカイブ」「カウンターパート」「コンプライアンス」のような外来語は、両国に入ったばかりの外来語で定着していない外来語である。また、「ハイブリッド」「バーチャル」のような外来語は、日本では定着に近づいているが、韓国では定着過程にある外来語であると言える。一方、「ワンストップ」「マスタープラン」は韓国では定着に近い外来語であるが、日本ではまだ定着していない外来語と言えるだろう。

3.3. 外来語のイメージ

人はことばに対して、様々な思いを抱いている。ことばに対する思いを言語意識として考えると、外来語を評価する側面や思っているイメージも存在すると考えられる。

日高(2001)は、和語は「親しみやすい」「やわらかい」「古くさい」「幼稚」、漢語は「格式が高い」「教養が深い」「堅苦しい」「難解」、外来語は「洗練された」「都会的」「新奇」「俗っぽい」などのイメージを喚起しやすいと述べている。このように外来語も何かしらのイメージが思い起こされていると説明している。特に外来語は、他国との接触などにより、自国で使われることばの中に大きな変化や影響を与えるものである。このようなことから、漠然と思い浮かべられている外来語のイメージについて述べる。外来語のイメージ評価語は、先行研究がほとんど見当たらないため、方言のイメージ調査で使われる評価語の中から外来語のイメージ調査に当てはまるような評価語を選び出した。特に、井上(1989)の方言イメージの3因子(知的、情的、郷愁評価)の項目から一部を借用した。また、残りのイメージ評価語については、外来語のイメージ調査に合わせて選定した。このような評価語の選定過程を経て、梁(2003)の調査で既に使った語種のイメージ評価語14語(7対)に、今回、好悪の評価語「嫌い-好き」2語(1対)を追加し、合わせて16語(8対)の評価語で外来語のイメージ調査を行った。日本と韓国における外来語のイメージ調査の結果については表2に示す。

調査内容は、「外来語について、どのようなイメージを持っているか」という質問に対して、例えば「ぞんざい-丁寧」という二項対立のイメージ評価語を与え、当てはまる番号に○をつけてもらった。1から5までの番号を与え、「非常にぞんざい」の場合は1に、「ややぞんざい」の場合は2に、「どちらともいえない」の場合は3に、「やや丁寧」の場合は4に、「非常に丁寧」の場合は5に○をつけてもらった。数値の与え方は、昇順にマイナスイメージからプラスイメージへ移行しているように割り振った。

表2 日本と韓国における外来語のイメージ (%)

No	プラスイメージ			マイナスイメージ		
		日本	韓国		日本	韓国
1	丁寧 (정중하다)	7.4	0.4	ぞんざい (거칠다)	22.9	20.2
2	上品 (품위있다)	21.1	22.8	下品 (품위없다)	7.3	13.5
3	実用的 (실용적이다)	50.6	52.7	非実用的 (비실용적이다)	20.9	12.9
4	カッコいい (멋있다)	54.1	33.3	ださい (촌스럽다)	4.4	7.6
5	あっさり (간결하다)	33.6	39.6	くどい (장황하다)	19.6	21.4
6	やわらかい (부드럽다)	36.8	35.0	かたい (딱딱하다)	24.5	18.1
7	親しみやすい (친근감있다)	28.3	23.7	親しみにくい (친근감없다)	37.7	34.7
8	好き (좋다)	30.1	23.4	嫌い (싫다)	11.4	16.8
	平均	32.8	28.9	平均	18.6	18.1

3.3.1. プラスイメージ

8つの評価語によって、日本と韓国で思い浮かべる外来語のイメージについて明らかにしたい。外来語のプラスイメージ平均は、表2に示したように、日本で32.8%、韓国で28.9%である。のちほど説明する外来語のマイナスイメージに比べると少し差が見られた。プラスイメージの評価語の中で、非常に大きな差を見せたものは、「カッコいい」と「丁寧」である。この2つのプラスイメージ評価語については、日本と韓国で、外来語に対するイメージの違いが明らかになった。

日本で5割以上が答えた評価語は「カッコいい」「実用的」の2つである。一方、韓国で5割以上が答えた評価語は「実用的」という評価語のみである。このような結果は、日本と韓国ともに外来語は「実用的」というイメージが強く思い浮かぶことを示唆する。なお、日本の場合は、外来語の「かっこ

いい」すなわち、外来語が持っている「洗練されている」というイメージが韓国に比べ、強い結果となった。言い換えれば、外来語のプラスイメージの中で、一番目立つ評価は、日本では「カッコいい」、韓国では「実用的」であることである。外来語の「かっこよさ」というものが、日本の学生が主に持っているイメージで、韓国の学生は外来語の「かっこよさ」よりは、実際の言語生活に役に立つ意味の「実用」というイメージを強く抱いていることが分かった。また、日本と韓国で差が出た評価語には、「丁寧」「好き」「親しみやすい」「やわらかい」があり、韓国より日本で優位な外来語イメージを持っている。一方、プラスイメージ評価語の中で、「あっさり」、「上品」は、日本より韓国で優位な外来語のイメージであることが分かった。日本の場合、「カッコいい」のイメージが目立っていて、他のイメージ評価語については僅差である。逆に、韓国で「カッコいい」という憧れが日本より少なかったのは、韓国では、外来語が「実用」的なものであり、すでに実際に多くの人が使っているからと考えられる。

3.3.2. マイナスイメージ

外来語のマイナスイメージでは、特に「非実用的」である評価語が日韓で差があらわれた。これは、外来語のプラスイメージで述べたように、韓国で外来語が「実用的」であるというイメージが圧倒的に強いいため、マイナスイメージで、日本と韓国で大きな違いが出たと考えられる。ここではまず、外来語のプラスイメージと同様に8つのマイナスイメージ評価語の平均を調べた。

その結果は、表2に示したように日本で18.6%、韓国で18.1%である。すなわち、両国間の差がほとんど見られなかった。そもそも回答の割合がプラスイメージに比べて少ないこともあり、日韓で差がはっきり現れなかったと考えられる。外来語のプラスイメージに相反する形ではあるが、表2に示したように、日本と韓国で5割を超えるマイナスイメージの評価語は見当たらない。ただし、日本と韓国ともに高い割合を示した評価語は、「親しみにくい」というイメージ評価語である。この「親しみにくい」というイメージ評価語が両国で一番高い割合を示した理由は、外来語が持っている性質が出たと考えられる。外来語とは他国から入ってきたことばであると定義されるため、他国という異質的な要素が、外来語に対するイメージに「親しみにくい」という意識をもた

らしたと言える。一方、両国で1割以下のマイナスイメージ評価語として「ださい」がある。日韓ともに「親しみにくい」というイメージを持っていながらも、「ださい」という情的なイメージは低い回答となった。言い換えれば、外国のもの、すなわち、外来語ということには距離感を感じながらも西洋系外来語であるため、新しいものに対する期待と憧れが「ださい」というマイナスイメージ評価を引き下げたと考えられる。

4. 外来語の受容とイメージの変化

4.1. 受容のパターン

「外来語の受容」の面から、日本と韓国の人々が抱いている外来語のイメージに着目し、その変化について考察する。二国における外来語の受容の度合いが外来語のイメージと連動しているため、外来語の受容度とイメージとの相関について説明する。

外来語の受容度の平均をもとに、調査対象者全員を高外来語使用者と低外来語使用者の2グループに分けた。このように2グループに分けた理由は、外来語の受容度によって、外来語のイメージがどのように変化していくのかを調べるためである。外来語受容度の平均は日本で2.54点、韓国で2.69点である。この受容度の平均得点をもとに、平均点より上回る人を、高外来語使用者とし、平均点より下回る人を低外来語使用者とする。このように高外来語使用者と低外来語使用者にグルーピングされたデータをもとに、外来語のイメージにどのような変化があらわれるのかについて説明する。図3は、外来語の受容度によって、どのように外来語のイメージが変化するのかをプロットした散布図である。

散布図の見方として、右上に行くほど割合が高くなり、右上から左下に下ろした対角線の右側は日本、左側は韓国で優位なイメージ評価語を表す。対角線に近いほど日本と韓国での差があまり見られないイメージ評価語を表す。一方、対角線から離れるにつれて、日本と韓国で差が大きいイメージ評価語となる。凡例の中で提示するが、印の形は外来語のイメージをあらわす。丸印(○と●)はプラスイメージを、三角印(△と▲)はマイナスイメージを指す。なお、印の色は外来語受容度をあらわす。黒く塗りつぶしたものは、受容度をもとにし

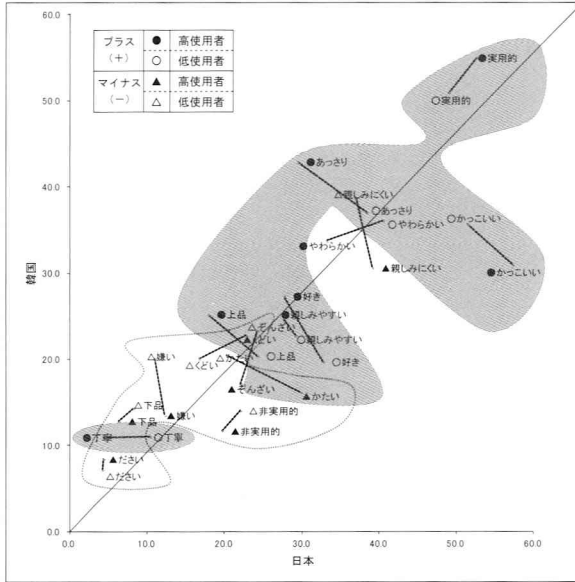


図3 外来語の受容度によるイメージの変化 (%)

た高外来語使用者で、色を抜いたものは、低外来語使用者を示す。このような記号をもとに、同じイメージ評価語間の差を分かりやすく示すために、同評価語間を点線で結んだ。結んだ点線の横方向の隔たりは日本の評価語グループ間の差の大きさを表し、縦方向の隔たりは韓国の評価語グループ間の差の大きさをあらわす。

4.2. プラスイメージの変化パターン

日本と韓国で外来語のプラスイメージの中心は「実用的」という評価語である。この評価語について、低外来語使用者と高外来語使用者の回答を点線で結んでみると、受容度による変化のパターンが明確にあらわれる。すなわち、低外来語使用者である(○)が高外来語使用者である(●)に移行することによって、「実用的」という外来語のイメージはさらに強くなる。すなわち、高外来語使用者の方が低外来語使用者より、良いイメージを持つようになる。

また、線の向きが「実用的」と同じである「やわらかい」というプラスイメージは、日本と韓国ともに高外来語使用者より、低外来語使用者の方が、より

強く「やわらかい」と思っていることが分かった。「実用的」というイメージは、外来語が微妙な意味合いを出せるという良い点があるため、外来語をよく使う人は、外来語の実用的な側面に気がしやすい。一方、「やわらかい」というイメージは、意味伝達機能として外来語を捉えるものではなく、情的なイメージとして捉えられているため、高外来語使用者より低外来語使用者の方が思い浮かべやすい結果になったと考えられる。

次に線の向きが一緒のグループである「好き」「あっさり」「上品」「親しみやすい」のプラスイメージについて見てみる。この4つのイメージ評価語は左上がりの斜線である。左上がりの斜線は、韓国では低外来語使用者（○）より、高外来語使用者（●）の方が、より強いプラスイメージを持っていることを意味する。逆に、日本では高外来語使用者より、低外来語使用者の方が、より強いプラスイメージを持っている。また、日本のイメージ変化をあらゆる線の横幅からみて「親しみやすい」という評価語を除けば、線の長さから見て大きな変化を見せたイメージ評価語とも言える。外来語のイメージ変化について、二国間で正反対の結果となった。

次に「カッコいい」というイメージであるが、線の向きは先に述べた4つのイメージ評価語と一緒にあるが、日本と韓国で受容度による変化のパターンが逆である。すなわち、日本では低外来語使用者より高外来語使用者の方が、「カッコいい」というイメージを強く持っている。一方、韓国では低外来語使用者の方が、高外来語使用者より「カッコいい」というイメージを強く持っていることが分かった。

最後に、「丁寧」というイメージは韓国では受容度によるイメージの変化は見られず、日本で高外来語使用者より低外来語使用者の方がより強く「丁寧」というイメージを持っていることが分かった。この結果を国ごとにまとめてみる。

日本の場合、8つのプラスイメージの中で、「実用的」と「カッコいい」という2つのイメージが、低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによって、プラスイメージが強くなった。逆に「やわらかい」「好き」「あっさり」「上品」「親しみやすい」「丁寧」の6つのイメージは、低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによって、プラスイメージが弱くなる。一方、

韓国の場合、8つのイメージの中で、「実用的」「好き」「あっさり」「上品」「親しみやすい」という5つのイメージが低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによって一層強くなることが確認できた。逆に、「やわらかい」「かっこいい」「丁寧」という3つのイメージは、低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによって、プラスイメージが弱くなるか変化が見られない傾向がある。

日本と韓国ともに、外来語のイメージと使用のパターンはそれぞれであるが、基本的に韓国の場合、外来語の使用が増加することで、外来語のプラスイメージは強くなる。一方、日本は外来語の使用が減少することで、外来語のプラスイメージが下がることが確認できた。

4.3. マイナスイメージの変化パターン

図3で示したように、マイナスイメージは三角印で、「親しみにくい」という評価語を除けば、日韓ともに3割を下回る低い割合を示している。プラスイメージに比べると非常に低い。その中で、「親しみにくい」というマイナス評価語は、割合が高い。日韓を通して、外来語のマイナスイメージの中で、一番思い浮かびやすいものは「親しみにくい」というイメージであると考えられる。

日本と韓国で、このマイナス評価語について、低外来語使用者と高外来語使用者の回答を点線で結んでみると、プラスイメージに比べるとそれほどではないが、受容度による変化のパターンが見られる。結んだ線の向きによって、いくつかの変化のパターンが見られる。

まず、「ぞんざい」「非実用的」「下品」という評価語は左下がりの斜線であるが、向きが急であるため、日本より韓国で変化が目立つイメージ評価語であると言える。このような左下がりの線から読み取れるのは、日本と韓国で低外来語使用者である△が高外来語使用者である▲に移行することによって、「ぞんざい」「非実用的」「下品」という外来語のマイナスイメージが下がっていくためである。日本と韓国で「ぞんざい」「非実用的」「下品」というイメージは、受容度によって変化が見られた。

次に、「くどい」「ださい」という評価語の線の向きは先に述べた3つの評

価値語と一緒にあるが、受容度による変化のパターンが先の3語とは逆である。すなわち、日韓で低外来語使用者より高外来語使用者の方が、「くどい」「ださい」というマイナスイメージが強い。ただし、この2つの評価語については、結んだ線の長さから見て、外来語受容度による大きなイメージ変化はないと見てよい。

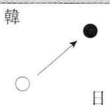
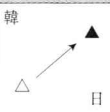
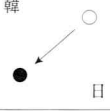
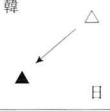
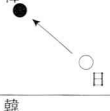
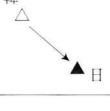
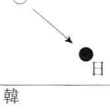
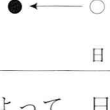
最後に線の向きが斜め右下がりのパターンである。このパターンに属する評価語は、「かたい」「親しみにくい」「嫌い」の3つである。線の長さや落差から判断して、日本と韓国ともに受容度によるイメージの変化が起きたものである。この結果を国ごとにまとめてみる。

日本の場合、8つのマイナスイメージの中で、「ぞんざい」「非実用的」「下品」という3つのイメージが、低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによって、マイナスイメージが弱くなる。逆に「くどい」「ださい」「嫌い」「かたい」「親しみにくい」の5つのイメージは、低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによってマイナスイメージが強くなる。一方、韓国の場合、8つのイメージの中で、「ぞんざい」「非実用的」「下品」「嫌い」「かたい」「親しみにくい」という6つのマイナスイメージが低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによって弱くなることが確認できた。逆に、「くどい」「ださい」の2つのマイナスイメージは、低外来語使用者から高外来語使用者に移行することによってマイナスイメージが強くなる。このように日本と韓国で、外来語のマイナスイメージと使用のパターンについてもそれぞれであるが、基本的に韓国の場合、外来語の使用が増加することで、外来語のマイナスイメージは弱くなる。一方、日本は外来語の使用が増加することで、外来語のマイナスイメージが強くなることが確認できた。

4.4. 外来語のイメージ変化による受容モデル

外来語のイメージ変化パターンをモデル化したものが表3である。表3の見方は、まず、変化パターンの一つのセルを図3のように置き換えて考えてみる。すると、横軸(x軸)は日本を、縦軸(y軸)は韓国をあらわすことになる。日本は右にいくほど値が大きくなり、韓国は上にいくほど値が大きくなる。これは両国での外来語のイメージの変化を示すもので、線の長さや傾きに

表3 外来語の受容度によるイメージ変化パターン

変化パターン	プラスイメージ 評価語	変化パターン	マイナスイメージ 評価語
 <p>韓 日</p>	<p>「実用的」 両国:低使用→高使用(Up)</p>	 <p>韓 日</p>	<p>「くだい」「ださい」 両国:低使用→高使用(Up)</p>
 <p>韓 日</p>	<p>「やわらかい」 両国:低使用→高使用(Down)</p>	 <p>韓 日</p>	<p>「ぞんざい」「非実用的」「下品」 両国:低使用→高使用(Down)</p>
 <p>韓 日</p>	<p>「好き」「あっさり」 「上品」「親しみやすい」 日本:低使用→高使用(Down) 韓国:低使用→高使用(Up)</p>	 <p>韓 日</p>	<p>「嫌い」「かたい」「親しみにくい」 日本:低使用→高使用(Up) 韓国:低使用→高使用(Down)</p>
 <p>韓 日</p>	<p>「かっこいい」 日本:低使用→高使用(Up) 韓国:低使用→高使用(Down)</p>	<p>* 丸印はプラス、三角印はマイナスイメージ * x軸は日本、y軸は韓国、線は変化方向</p>	
 <p>韓 日</p>	<p>「丁寧」 日本:低使用→高使用(Down) 韓国:低使用→高使用(Equal)</p>		

よって、日本と韓国の違いが分かってくる。さらに、イメージ評価語に外来語受容度によって白丸(○)と黒丸(●)であらわしているのも、外来語の使用によるイメージ変化の方向性も見えてくる。

まず、プラスイメージの評価語を見ると、両国ともに外来語使用が増加することで、プラスイメージが高くなるのは「実用的」というイメージである。また、両国ともに外来語使用が増加することで、プラスイメージが低くなるのは「やわらかい」というイメージである。一方、二国間で外来語使用の増加によるプラスイメージに差が出てきた語は、次のような評価語である。「好き」「あっさり」「上品」「親しみやすい」というイメージは、日本の場合、外来語使用の増加によってプラスイメージが低くなるが、韓国は高くなる。逆に、「かっこいい」というイメージは、日本の場合、外来語使用が増えることによって、プラスイメージが高くなるが、韓国は低くなる。この「かっこいい」という評価語の変化パターンに関しては、少し考えなおす必要がある。また、「丁寧」というイメージは、日本では外来語使用の増加に伴って低くなるが、韓国は外来語使用

の増加に伴って「丁寧」というイメージの変化は見られない。

一方、マイナスイメージの評価語の場合はどうだろうか。両国ともに外来語使用が増加することで、マイナスイメージが高くなるのは「くだい」「ださい」というイメージである。また、両国ともに外来語使用が増加することで、マイナスイメージが低くなるのは「ぞんざい」「非実用的」「下品」というイメージである。これは日韓ともに外来語使用が増えることによって、マイナスイメージは軽減されることである。一方、二国間で外来語使用の増加によるマイナスイメージに差が出てきた語は、次のような評価語である。「嫌い」「かたい」「親しみにくい」というイメージは、日本の場合、外来語使用の増加によってマイナスイメージが高くなるが、韓国は低くなる。

基本的に外来語使用が増えることで、「実用的」というプラスイメージは強くなっていく。さらに、韓国では「好き」「あっさり」「上品」「親しみやすい」というイメージについても、外来語使用の増加に伴って、プラスイメージは強くなる。ただし、日本の場合は外来語使用の増加によって、プラスイメージが強くなる評価語は韓国より少ない。また、外来語使用が増加することで、「ぞんざい」「非実用的」「下品」のように、マイナスイメージは弱まっていく。さらに、韓国の場合は「嫌い」「かたい」「親しみにくい」というイメージについても、外来語使用が増えるとともにマイナスイメージが弱くなっていることが明らかになった。

5. おわりに

従来の研究は、日本が韓国より外国に対して開かれた態度をとっていたため、外来語の認知、理解、使用率が高いというものであった。しかし、この研究では、閉ざされた態度をとっていたはずの韓国が日本より外来語の認知、理解、使用率、すべてが高くなったことが分かった。これは、両国で外来語に対する意識と態度の変化が起こりつつあることの反映と考えられる。

歴史的・社会的背景から考えてみると、日本は室町時代以降、外国との交流や接触が続けられ、現在に至るまで外国や外国語に対して寛大な態度を取っていた。一方、韓国は、外来語に対する受容態度は鎖国や日本強制占領期時代の影響、加えて国語醇化運動などの言語政策により19世紀末から20世紀の後

半までは消極的な受け入れ方や受動的かつ間接的な受容態度であった。しかし、最近、日韓ともに英語早期教育に代表されるグローバル化が進み、若い世代を中心に外来語に対する意識、さらに使用にも変化が生じてきたと考えられる。このような意識と態度の変化が外来語の受容に反映したと思われる。

基本的に外来語の使用が増加することで、外来語のプラスイメージは強くなり、マイナスイメージは弱くなるのが分かった。ただし、評価語によっては日本と韓国に差が出た。その理由として考えられるのは、日本の場合、そもそも外来語が持っていた肯定的なイメージ、すなわち外来語の新鮮なイメージがなくなり、プラスイメージとマイナスイメージが中和され、それに対する評価も薄れていくからだと考えられる。一方、韓国では外来語は、初期段階の外来語のイメージである新鮮さを保っていて、プラスとマイナスイメージが外来語の受容度によって変化しやすいからである。日本より外来語の受け入れが遅かった韓国にとっては、外来語に慣れておらず、新鮮な感覚で外来語に接していると考えられる。このように日本と韓国で外来語に対する新鮮さが違うため、このような結果となったと考えられる。

つまり、日本の場合、外来語が持っていた新鮮さや目新しさという性質がなくなり、特殊なものでなく、一般的なものとして認識されるようになったのである。それに対して、韓国では、初期段階の外来語の性質を保っていて、新鮮さや目新しさによるイメージの変化が外来語の受容度という変数によって変わるのである。

日本で敬語の変化の類型において、意味変化に関わる「敬意通減の法則」があるように、外来語のイメージの変化にも「新鮮さ通減の法則」のようなものがあり、日本では、この外来語の「新鮮さ通減の法則」が進んでいる状況であるが、韓国ではまだ新鮮さ通減が起きてないと考えられる。

【参考文献】

- 강신항 (2007) 『오늘날의 국어생활』 박이정
 국립국어연구원 (2003) 『국어 순화 자료집 합본』 국립국어연구원
 국립국어원 (2006) 「외래어 및 외국어 인지도 조사 보고서」 한국갤럽
 김민수 (1973) 『국어정책론』 탑출판사

第2部 言語生活論的アプローチ

- 리의도 (1993) 『오늘의 국어, 무엇이 문제인가?』 어문각
- 박용찬 (2005) 「우리말 다듬기 사이트의 운영 내용 및 과」 『새국어생활』 15-1
- 양민호 (2009) 「한국어와 일본어의 외래어 표현: 복사와コピー, 테이크아웃과持ち帰り」 한국일어일문학회 『언어표현을 통해서 본 한일문화』 제이앤씨
- (2012) 「한국과 일본의 외래어 수용에 따른 이미지 변화에 관한 연구」 『日語日文學研究』 82
- 이희승 (1941) 「외래어이야기」 『춘추』 2, 3 집
- 임홍빈 (2008) 「외래어의 개념과 범위의 문제」 『새국어생활』 18-4
- 정희원 (2004) 「외래어의 개념과 범위」 『새국어생활』 14-2
- 石野博史 (1983) 『現代外来語考』 大修館書店
- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
- 井上史雄 (1989) 『言葉づかい新風景 (敬語と方言)』 秋山書店
- 樺垣実 (1963) 『日本外来語の研究』 東京研究社
- 国立国語研究所 「外来語」 委員会編 (2006) 『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』 ぎょうせい
- 国立国語研究所 (2006) 『新「ことば」シリーズ 19 外来語と現代社会』 国立印刷局
- 陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』 世界思想社
- 玉村文郎 (1991) 「日本語のなかの外来語要素と外来語」 『日本語教育』 74
- 曹喜徹 (2003) 「韓国における外来語」 『日本語学』 22-8
- 趙南浩 (2005) 「現代韓国語における外来語の受容の様相の変遷」 『世界の〈外来語〉の諸相—標準化・活性化を目指す言語政策の多様性』 国立国語研究所
- 橋本和佳 (2006) 「Logistic 曲線による外来語増加過程のモデル化」 『計量国語学』 25-7
- 日高水穂 (2001) 「ことばとイメージ」 다니엘・ロング・中井精一・宮治弘明編 『応用社会言語学を学ぶ人のために』 世界思想社
- 堀井令以知 (1988) 「語感・言語意識・言語感覚」 『言語』 7-8
- 洪珉杓 (2007) 『日韓の言語文化の理解』 風間書房
- 梁敏鎬 (2007) 「外来語をめぐる意識に関する日韓対照研究」 『国語学研究』 46
- (2008) 「外来語の受容に関する日韓対照研究」 東北大学大学院文学研究科 博士論文
- (2009) 「外来語の歴史と政策から見た日韓対照研究」 『日本文化研究』 30 東アジア日本学会
- (2009) 「外来語のイメージに関する社会言語学的研究—日韓大学生のアンケート調査を中心に—」 『日本言語文化』 14 韓国日本言語文化学会
- 米川明彦 (1996) 「外国文化の移入と外国語」 『国文学』 40-11

米田正人(2006)「言葉に関する問題集―問 16 (他国の言語政策)―」『外来語と現代社会』
国立印刷局

【基本文献】

◎石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版

本書は外来語の研究において欠かせない必読書である。特に、外来語の研究を始める学生に勧められる。外来語の定義や表記、歴史、対照研究に至るまで様々な外来語研究を網羅している。

◎陣内正敬(2007)『外来語の社会言語学―日本語のグローバルな考え方―』世界思想社

本書は社会や文化の観点から外来語を研究したものである。言語内の要因を探る研究はある程度成果を挙げてきた。しかし、言語外的要因およびコミュニケーションの視座からの外来語研究は少なかったため、社会言語学的方法論からアプローチする研究者にお勧めする。

◎양민호(2009)「한국어와 일본어의 외래어 표현: 복사와コピー, 테이크아웃과持ち帰り」한국어일어일문학회『언어표현을 통해서 본 한일문화』제이앤씨

(日本語訳)

◎梁敏鎬(2009)「韓国語と日本語の外来語の表現: 複写とコピー, テイクアウトと持ち帰り」韓国日語日文学会『言語表現をとおして見る韓日文化』J&C

この研究は言語表現、特に外来語をとおして韓国と日本の言語文化を比較し、分析したものである。これまで外来語の使用に消極的であった韓国が日本より積極的な姿勢に変わったことが興味深く、今後の両国での外来語の行方をうかがい知ることができだろう。

新聞の外来語はどのように生まれるか

関根 健一

キーワード: 多用と増加 言い換えの試み 意味・用法の拡大 ゆれる語形

新聞の外来語を論じる上で必ず触れられるのが、「多用と増加」だが、新聞社ではそれを防ぐべく「言い換え語の策定」も講じられている。一方で、言い換え語の必要性すら意識されることなく意味・用法を拡大させる外来語も存在する。本稿では、そのいくつかを例示し、新聞の外来語の諸相を考える手がかりとして紹介する。また、新聞の外来語の表記について、現状と問題点を付記しておく。

1. 二つの側面

本論に入る前に、新聞記事に登場する言葉を言語研究の材料として使おうとするときに、前提として考慮すべきふたつの点を挙げておきたい。一点目は、新聞の言葉は、一定の規範に基づき、管理されて使用されているという点だ。新聞は時事・世相を伝えるものだから、ある語の世間一般での使用量と、紙面における出現量は当然、比例する。ニュースの中核になる語はもちろん、社会情勢を形容する言い回しが繰り返し使われることもある。それはその時代の言語生活を反映しているといっている。しかし、表記に関してはできるかぎり統一するようにしており、その選択の根拠においてその時点における世間一般での使用頻度の高さは必ずしも優先されない。不特定多数の読者を持つ新聞は、用字・用語について「世間より数歩下がった」保守的・伝統的な立場を取っているからで、新語・新用法の使用についても抑制的に対処しているのはいうまでもない。

新聞のページ数・記事量が増えるのに伴い、統一が必要な用字・用語の数は多くなり、規範を徹底する意識も高まる。新聞用語の統一を図る目的で日本新

聞協会に新聞用語懇談会が設置されたのが1953年で、各紙とも用字用語の管理が本格化したのはその前後からであること、1980年代に起こった新聞製作の技術的变化に伴って、単純な誤植がなくなった結果、表現や内容に関してより精度の高い校閲作業が要求されるようになったことなども、年代で比較する際には、考慮に入れる必要がある。

ただ、現在進行中の事実を速報する一般記事に比べ、一定の規範の管理内ではあるが、記者の視点から解き明かす解説記事、新聞社としての主張を展開する社説、記者個人の感性を前面に出すコラムなどでは、用語の選択については執筆者個人の性向が表れやすくなる。政治・社会・経済・国際・スポーツ・芸能といった、扱う対象によっても、使用される用語には偏りが出てくる。さらに、インタビュー・談話では、被取材者の意向に沿ったり、その口調を生かしたりするため、いわゆる地の文では用いない表現を使う場合もある。寄稿原稿も表記は基本的に社の取り決めに沿うよう依頼するが、規範からの逸脱については許容範囲は広がる。つまり、一口に「新聞の言葉」といっても様々であり、その切り取り方によっては、かなり差異が生じる結果になるということが二点目だ。

特に、外来語に関しては、「多用すべきでない」という規範意識と、「ほかに表現できない」という判断がせめぎ合う。記事の内容・性質、かかわっている記者の人数などにより、用いるか用いないかの揺れ幅が大きく、時系列の出現頻度のみ注目すると、傾向を見誤るおそれがある。

2. そのまま使うか言い換えるか

上記の2点を踏まえ、外来語「シンクタンク」を例にとって、その推移を見てみよう。この外来語が『広辞苑』に収録されたのは1983年の第3版からで、『コンサイス外来語辞典』には、「日本では昭和40年（1965）野村研究所が発足」と注記がある。読売新聞では、1970年1月10日朝刊で「財界がシンク・タンク構想」と使われているのが比較的早い用例だ。社会の複雑化、情報化が進み、専門的な分析や長期的な企画を担うものとして外来語「シンクタンク」は普及してきた。読売新聞記事の全文検索が可能な1987年からのデータベースを使って年別出現数を調べてみた（図1）。

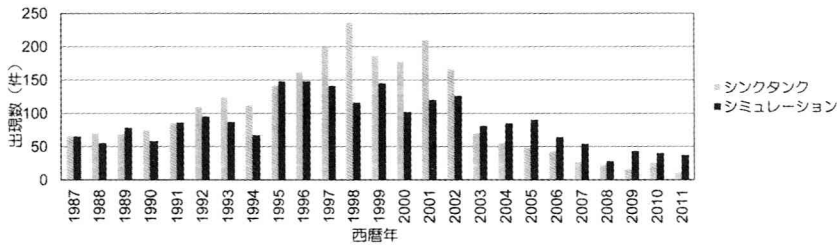


図1 シンクタンクとシミュレーションの出現数

図1の「シンクタンク」を見ると、80年代から年々、出現数が増加し、記事に登場する回数が多くなっている。世間一般での使用量に比例しているといえるだろう。ところが、2001年、2002年あたりをピークに、出現数は減り始める。これは、2003年に新聞記事を分かりやすくする一環として、言い換えを推奨する外来語を選んだ語のうちに「シンクタンク」が入ったためだ。2011年の記事中に「日本の調査研究機関が中国社会科学院と提携」と出てくるが、その機関自身のホームページでは「日本のシンクタンク」となっている。米国の政策決定に影響力を与える「シンクタンク」は「政策研究機関」と言い換えている。紙面上で出現数が減っているのは、その存在自体が減少したのでも、報道する意義がなくなったわけでもない。世間一般での使用量とは関係がないのである。

言い換え語の定着が進んだのは、読者にもそれに違和感がなかったからであり、「シンクタンク」という外来語の持つ「ありがたみ」が薄れ、「調査研究機関」「政策研究機関」で十分、実体を表せることが納得されたからだろう。紙上で「シンクタンク」の使用抑制が成功した背景にはそうした読者の支持があるわけで、新聞社の規範が世間一般の意識と足並みをそろえたといってもいいかもしれない。

「シンクタンク」が紙面に登場し始めたころは、その説明(訳)を「頭脳集団」とした例が多かったが、いささか直訳調で、実体が推測しにくかった。「調査研究機関」「政策研究機関」は国立国語研究所「外来語」委員会が提案したものだが、主眼が調査研究か、政策研究かで、言い換え語を使い分けることにより、「機関」の性格を明確に伝えられる。外来語の言い換えは一つに絞りが

れない難しさがあるが、換言すれば、多くの意味を一つの外来語が担っていることこそが、その分かりにくさの大きな原因といえる。適切に言い換え語を使い分ければ、それだけ理解度も進むといえる。

2011年の読売新聞で「シンクタンク」を外来語のまま使用しているのは、解説記事、引用、寄稿原稿での使用が10件、一般記事では2件で、そのうち1件は固有名詞である。一般記事で1件残ったのは「政府系シンクタンク『アハラム政治戦略研究所』」というもので、名称そのものが「シンクタンク」の説明になっているため、許容したものだろう。

言い換え推奨を決めても、実行が難しいものもある。「シンクタンク」とともに言い換え推奨語に挙げられた「シミュレーション」の出現数を見てみよう(図1)。

「シンクタンク」同様、増加傾向にあったのが、2003年を境に漸減するものの、減少幅は小さい。「シミュレーション」の言い換え語候補は、「想定実験」「模擬行動」「模擬訓練」「模擬実験」の4語で、近年では、原子力発電関係では「想定実験」、防災に関しては「模擬訓練」などと、使い分けられている。実際に何をするのが分かり、読者には親切な言い換えといえる。ただ、「心臓の鼓動のシミュレーション」「どのケースでどの選手を起用するかというシミュレーション」「衆院解散のシミュレーション」「津波のシミュレーションシステム」のように、いずれの言い換え語もびったりこない場合は、外来語のままで紙面に出ている。言い換え語として想定した範囲をしのぐ勢いで、この語の使用分野や用法が広がって来たのだろう。また、国立国語研究所の調査でも、理解度が6割近くとなっており、そのまま使っても抵抗感が少ない語であったことも、使用制限を緩める理由にはなっている。

また、「アメニティー」は、80年代から90年代にかけ、生活環境に関する意識の高まりとともによく使われるようになった語だが、使用制限を決める以前に、すでに記事には現れなくなっていたものだ。

新聞の外来語の出現頻度には、社会一般での使用実態を反映しつつも、新聞社内でも取り決めた規範により、一定の偏りが生じているといえる。その規範に基づいて策定される言い換え語は、外来語の多義性に対応できれば定着するが、言い換え語の意味領域を超えて外来語の使用が拡大してゆく場合、読者の認知

度・理解度次第では、外来語が生き延びる余地が生まれてくる。

3. 新聞は外来語を多用しているか

「新聞記事には外来語が多すぎる」という批判はしばしば耳にするところだ。新聞社に寄せられる読者の投稿でも、明治・大正期から現在に至るまで、繰り返し取り上げられるテーマとなっている。中には、外来語の発生源が新聞であるかのように論じられる場合もある。しかし、前項で述べたように、新聞記事の外来語の使用量は一般社会（取材対象）のそれに比例するものであり、取材対象で使用されている外来語をそのまま記事に持ち込まない努力の結果、雑誌・テレビなど同時期の他の媒体よりむしろ少なくなっている。田中（2006）は、公共性の高い媒体（新聞・白書・広報紙）の外来語の使用量は、雑誌に比べかなり低いと報告している。

「年々、外来語が増えている」とも指摘されることがある。20世紀後半の毎日新聞を10年間隔で調査した金(2011)によれば、各年の外来語(上位2000語)の比率が延べ語数、異なり語数とも3倍弱増加しているという。ただ、1970年以降に限れば、急激な増加傾向は見られない。関根(2003)の調査では、1972年と2002年の読売新聞1面、社会面、1969年、1998年、2002年全ニュース面の1ページあたり延べ語数では大きな変化はなかった。

1967年に『角川外来語辞典』、1972年に『コンサイス外来語辞典』が出版され、1950年代に4種類しかなかった外来語辞典は、1960年代15種類、70年代16種類、80年代63種類と数を増す。文化庁「ことばシリーズ」では1976年に「外来語」の問題を取り上げている。増加傾向が鈍化した背景には、こうした外来語に関する関心の高まりを受け、新聞界が1970年代あたりからその抑制的な使用法について特に意識するようになったこともあるように思われる。

それにもかかわらず、外来語が多い、増えているという印象を読者に抱かせるのは、なじみのない分かりにくい外来語が短期間に集中して現れ、理解が深まらないまま消えていくことがその一因ではないか。前述したように「アメニティー」は1990年代には新聞に登場しなくなった語だが、1999年1月の文化庁による「国語に関する世論調査」では、認知率は6割を超えていたものの、

理解度は31.5%にとどまった。福田（2006）では、朝日新聞における「デジタルデバイド」の出現数を調査したところ、1999年までは1件もなかったのが、2000年の沖縄サミットの議題に挙がったことで同年に95件を記録、その後は減り続け、記事からは姿を消しつつあると報告している。国立国語研究所が実施した外来語定着度調査（2003年2月）では、理解率は8.8%、60歳以上では3.1%しかなかった。（国語研調査では「デジタルディバイド」の語形を使用している）。

総数では変化はなくても、入れ替わりが多く、近年では特にニュースの中核になるような言葉が外来語であることも多いため、印象が強く残るものと推測される。

こうした外来語の「足の速さ」は、また、外来語全般への分かりにくさのイメージを形成していると考えられる。行政・業界・専門家が発信元になり、それまででない意味・概念が盛り込まれている場合、言い換え語の手当てが間に合わない。むしろ、言い換え不能であることを前提に発信されてくるものも少なくない。新聞では、その種の外来語については、説明や注釈を付けることで対処している。

国立国語研究所が調査した「白書、広報紙等における外来語の実態」（平成12年5月）には、白書に出てくる説明のないカタカナ表記語として「ゾーニング（する）、エマージング・マーケット、アウトソーシング」といった例を挙げているが、これらの語が、何の説明・注釈もなしに新聞に出てくることはまずない。一般的には、「アウトソーシング（外部委託）」のように、説明・訳語に当たる日本語を括弧書きで外来語の後に添える。また、「地方自治体の大型店の出店地域を規制（ゾーニング規制）」など、説明が長くなる場合は外来語の方を括弧に入れて添えることもある。高齢者の中には、意味が分かる分からない以前に、カタカナ表記が出てくるだけで拒否反応を起こすという人もいる。外来語の方を括弧内に納めることで、無理に読まなくてもよいという安心感が生まれるとすれば、この方法は有効だろう。括弧書きでなく、説明を修飾句として付けるやり方もある。

最近では、こうした方法では説明しきれない外来語も増えている。そのため、その外来語を取り出して説明するコーナーを設ける新聞も増えてきた。いわば、

書籍の脚注に当たる方法である。読売新聞では、紙どめクリップのイラストを付して、外来語に限らず、そのニュースを理解する上で欠かせない事項を簡略に解説している。ひと月に各面合わせ40～100前後、「クリップ解説」コーナーが載るが、そのうち外来語を含む言葉は3割から4割だ。例えば、2001年2月には、39項目のクリップが掲載され、そのうち外来語および外来語を含む混種語は20項目で、そこから、「サッカーくじ」「国際協力チーム」などを引いた「プルサーマル」「イネゲノム」「ケアマネジャー」「ソルベンシー・マージン比率」「ニューエコノミー」など15項目が「分かりにくい外来語」として取り上げられていた。

「プルサーマル」はこれ以降も2011年まで10回にわたり繰り返し取り上げられている（見出しは「プルサーマル計画」「プルサーマル発電」でも立項）。ニュースになるたびに、解説しているわけだ。対して、「イネゲノム」は1回だけ、2005年5月に解説が終了したときに再び載り、それ以降は報道されていない。「ケアマネジャー」は、国立国語研究所「外来語」委員会の言い換え提案に「ケア」が取り上げられたように、なじみのない外来語だった。クリップでも2009年まで7回立項された。それ以後も、記事本文中で「ケアマネジャー（介護支援専門員）」「介護プランづくりを担当していたケアマネジャー」などと補っていたが、2010年以降は説明なしで使われることが多くなった。介護用語として定着したととらえることができるだろう。

ところで、この「クリップ解説」には、アルファベット略語もしばしば登場する。2005年4月に取り上げられた用語のうち、カタカナ語は30%、アルファベット略語は10%だった（「MGローバー」「オートマチック（AT）二輪車の限定免許」のように、両方が使われているものは別々に数えた）。アルファベット略語は広義には外来語の一種ともいえるが、意味の類推が全く利かないこと、同表記異義語が多いことなど、カタカナ表記語と類似の問題点をより深刻に抱えている表記である。

4. 拡大する意味・用法

これまで例に挙げてきた外来語は、新しい（今まで日本、あるいは日本人の意識になかった）事物や概念を表すものだった。しかし、より注目すべきなのは、

類義の和語・漢語が存在するにもかかわらず、それらに替わって使われるようになった外来語である。橋本(2004)では、新聞社説で「イメージ」「ケース」「テーマ」「ルール」「ポイント」といった抽象語が1977年以降、増えていると指摘する。

金(2011)は、毎日新聞(1950～2000年)の社会面記事を調査し、1960年ごろから使われ始めた外来語「トラブル」の使用量の増加に注目、その類義語(争い、いざこざ、内輪もめ、不和、紛争など)が減少していく傾向を明らかにした。「トラブル」は1980年ごろまでに意味・用法を拡大させ、「<深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常的な事態>という抽象的な意味を獲得することにより、それぞれの意味・内容を個別に表す類義語の上位語の位置に立って」「それまでの新聞語彙にはなかった基本語として成立した」と分析した。その理由のひとつに、20世紀後半における新聞文章の概略的な文体への変化があると推測する。

社会の複雑化、情報化の進展などにより、以前には考えられなかったさまざまな「不正常的な事態」が出現し、それを的確に表現する既存の言葉が見あたらなかったため、用法が厳密には定まっておらず、意味内容を広く覆える余地のある「トラブル」に収斂していったとも考えられる。「トラブル」は、「危機的事態に至る可能性を持って顕在化した」もので、実際にはそこに至らず収束するかもしれないし、取り返しの付かない事態にまで陥るかもしれない。特に、その予測がつかない一報記事では、含意の広い「トラブル」は便利な言葉といえる。

「トラブル」は、「類義語が表し分けている意味的な違いに無頓着なのであり」「<<事態>>の詳しい内容がわからず、特定の下位語で表現できない段階でも、とりあえず『(何らかの)トラブル』と書いておけば済ませることができるという点で、記事の書き手(新聞記者)にとっては『都合のよい』単語であるということが出来る」という金の指摘は、現代の新聞文章に対する鋭い指摘である。

「トラブル」は、日本国語大辞典の用例を見ると、大正期には小説の会話文に用いられている。新聞における「トラブル」の「基本語彙化」は、すでに一般の話し言葉で類義語の上位語だったことが前提にあるかもしれない。複合語

「トラブルメーカー」も1930年の新語辞典に収録されている。「トラブル」は複合語に使用されるくらい「分かりやすい」外来語として、使用を抑制する意識が働かなかったのではないか。

新聞は新しい事物・概念を表すいわゆる「分かりにくい」外来語については避けたり、説明を付けたりする配慮をしても、「分かりやすい」外来語については、かたい漢語、古めかしい語感のある和語よりも、読み手には親切であるとの判断が働く場合もあるからだ。

「トラブル」と同様、当初取り入れられた意味・用法を超えて使われるようになった外来語は少なくない。本来、原語の持っていた範囲まで広がる場合もあれば、原語を離れ拡大する場合もある。「プログラム」は催し物の予定表、番組表を指して使われたが、現在は、原義にある行動や計画といった意味でも用いられる。献立の意の「メニュー」は英語経由で入ってきたフランス語だが、予定されている項目の意の「トレーニングメニュー」「抜本的改革のメニュー」などは日本語だけの使い方ようだ。

新しい意味・用法は、まず、寄稿原稿に出現し、一般原稿では引用文や談話の中に現れる傾向がある。寄稿者や引用元の表現を尊重したり、実際の話し言葉に近い雰囲気を出したりするということのほか、規範の適用が緩やかであることがその理由だ。そこから地の文に広がり、「新聞の外来語」として定着していく。

もとの意味・用法から離れ、別の意味を獲得して定着した外来語として、「メッセージ」を取り上げてみたい。

「メッセージ」は、送り手の目的や意図を伝えるために作成される文書、もしくはその内容を指す。具体的には、手紙や使者に託して送られる伝言・言づて、あるいは、声明文、声明内容を言うことが多い。「伊太利宰相ムツソリニ氏より我国の青年男女に対して熱誠を籠めたメッセージを贈られたるに…」(1926年9月15日 読売朝刊)など、後者の意味では、大正期から新聞に現れている。かつては、この「声明・声明文」の意で使われる例がほとんどで、「入居者が留守の場合は、(中略)来訪者のメッセージを伝えるといった秘書的な仕事もしてくれる」(1988年6月3日 同朝刊)といった「伝言・言づて」の意味の使用例は少ない。「家族が『171』にダイヤルし自宅番号を入力すれば、伝言

を聞ける」(2011年3月19日 同朝刊)のように、この意味では「伝言」が2000年以降も多く用いられている。

ところが、記事に現れる「メッセージ」には、この二つの意味には収まらない使用例が散見される。例えば次のようなものだ。

「劇作家としては、六十本近いミュージカルを発表し、一貫して愛と連帯のメッセージをうたい上げた」(2000年4月21日 同朝刊)。「(植樹式で)『サクラが大きく育つと、夕張を離れた人も喜んでくれると思う』と感謝のメッセージを読み上げた」(2010年5月9日 同朝刊)。

コミュニケーションにおいて、その送り手から受け手に伝達される情報が「メッセージ」であり、本来、幅広い意味を持っている。上記2例の「メッセージ」も、その意味の範疇には入るだろう。ただ、「伝言・言づて」「声明・声明文」には言い換えられない。見解を発表するという意味では「声明」に近いが、「声明」は従来、主として政治・外交関係の用語であり、こうした文脈で「声明」が使われることはなかった。「連帯のメッセージ」「感謝のメッセージ」の「メッセージ」は、「主義・主張が強く込められたあいさつ」とでも言ったらいいだろうか。

外来語「メッセージ」の出現数は金の毎日新聞調査では、1990年代から増加している。読売新聞でも同じ傾向だが、使用されている文脈を見ると、1980年代から、「声明・声明文」「伝言・言づて」では言い換えられない「メッセージ」が表れ始めている。

1986年には「メッセージ」は119件の記事で使われていて、「わが国からソ連政府に送られるメッセージの案文は～」といった外交関係の文脈での使用が多いが、その中で次のような使い方もあった。「総裁は自分の発言が誤解されかねないと思ったのか、直ちに留守部隊に連絡。広報課員が総裁の“メッセージ”をマスコミに伝えたわけだ」(10月3日経済面)。日銀総裁が誤解を生みかねない発言をし、広報課員が記者クラブを訪れて釈明に努めたという記事だが、この「メッセージ」は単なる「伝言・言づて」でなく、自らの主張を明確に伝える情報内容というところに力点がある。そのため、この語を特別な意味で用いていることを示す“ ”で囲んでいる。通常の使い方ではないと、記者自身が自覚している証拠だ。

1990年になると474件と増える。そこでは、「〈労働組合のない職場で働

く あなたへのメッセージ〉こんなタイトルのパンフ六十万枚が、90春闘のまっただ中、全国の家庭に配られ、電話相談を呼びかける」（1990年3月11日 同朝刊社会面）、『『日本の場合、作家性のある作品はあるが、思想性、メッセージを持っているものは少ないようですね』というのが森さんの感想だ」（1990年4月12日 同夕刊文化面）など、引用、談話の中で、主義・主張を強く含意した「メッセージ」の新用法が多くなっていく。

「メッセージ」の変容は、新聞の文章だけに表れたものではない。1956年から、毎年、成人の日にNHKが開催していた「青年の主張全国コンクール」は、1990年から「NHK青春メッセージ」に衣替えした。大上段に「主張」を振りかざすのが時代にそぐわなくなり、より自由に話してもらおうという意図があったようだ。

高校野球の選手宣誓に、山口県光高校主将が「あこがれの甲子園から全国の仲間たちへメッセージを送ります」と、「メッセージ」を使ったのは、1994年の第76回大会だった。

「メッセージ」が世間で認知され、広がっていたことを示している例といえるだろう。2000年代に入ると、こちらの意味・用法での用例の方が増えていく。

読売新聞の1990年3月のニュース面には21件、2010年同月には15件の記事で「メッセージ」が使われているが、1990年では半数が外交にかかわる「声明・声明文」を指しているのに比べ、2010年では3件に過ぎない。たまたま外交関係の記事が少なかったからではあるが、それを補うように、「声明・声明文」ではない「メッセージ」が多く使用されている。掲載面に注目すると、1990年ではスポーツ記事での使用例は1件もなかったが、2010年になると「高いハードルにも見える続投は、原監督が先発陣への期待を込め、奮起を促すメッセージだ」など、4件現れるのも、「メッセージ」の用法の変化を特徴づけている。

「メッセージ」がどんな語と入れ替わって使われるようになったかを検証するのは難しい。「主張」や「あいさつ」と入れ替えて通じる文もあるが、そもそも「主張」「あいさつ」は「メッセージ」の従来の用法からすれば類義語ではない。「メッセージ」の意味の中核である「コミュニケーションにおける情報」の中の一部を強調して取り出したのが、新用法「メッセージ」といえる。

試みに「主張」の出現頻度と比べてみる。「主張」はサ変動詞でも使われ、「メッセージ」よりも使用範囲が広い。1988年から2010年まで、各年「メッセージ」は3桁、「主張」は4桁の使用例があり、単純な比較はできない。権利意識の高まり、競争社会の進展など、「主張」の語が増え続ける要因は容易に想像できる。ただ、増加率では、「主張」が約5%なのに対し、「メッセージ」は約83%だった。むろんこれだけで、従来「主張」と表現していた意味領域の一部が「メッセージ」に変わったというには不十分である。類義表現を検討し、分析する必要があるだろう。また、似た意味を持つ「アピール」や「エール」などとの使用状況の違いも調べていけば、漠然と使い分けられているこれらの語群のいわば見取り図が作れるかもしれない。

ちなみに、「メッセージ」の新用法を反映した言い方に「メッセージ性」がある。「メッセージ」の必要条件ではなかった「主義・主張が明確に込められていること」「伝え手の思いが強く出ていること」を、「メッセージ」そのものが持つ主たる性質として捉えた表現とでも言えるだろうか。読売新聞では、「反戦や平和、人間性の開放などメッセージ性の強い作品」「沖縄サミットは、開催地のメッセージ性が際立った」などと使われているが、1998年に1件、99年に2件、2000年に3件と、使用例は少ない。毎日新聞（1987年1月1日～2012年2月17日）、朝日新聞（1984年8月4日～2012年2月17日）での使用例はなかった。辞書の用例にもまだ見あたらず、新聞が使用にまだ抑制的であるのは当然といえよう。

5. 語形のゆれ

外来語の語形の不安定さは、日本語表記の大きな問題点のひとつである。現在、外来語の表記の目安については、「外来語の表記」(1991年 内閣告示・訓令)があるが、これは「一般的に用いる仮名」(第1表)と「原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名」(第2表)の二本立てとなっていて、その結果生じる語形のゆれについてどこかに決めるという目的には使えない。新聞協会では、独自に表記原則を策定、用例を検討して、紙面上、また、テレビ・ラジオも含め、マスコミ間で大きく表記がゆれることのないようにしている。

新聞は従来、外来語を外国から日本語に取り入れられた言葉ととらえ、日本人が通常話す音韻の範囲で表すという立場をとってきた。「外来語の表記」第2表にある「ヴ」の表記を採用しないのは、日本人は一般に有声の両唇破裂音と唇歯摩擦音を区別して発音してはいないことが大きな理由だ。しかし、英語教育の普及や国際化の進展により、「日本人が通常話す日本語の音韻の範囲」自体が広がり、原音・原つづりに引かれた形の表記が世間一般で好まれるようになった。「外来語」でなく「カタカナ語」という言い方をする傾向があるのは、日本語として熟した外来語ではなく、外国語（主に英語）の音に近いカタカナに置き換えた語が多くなったからでもある。外国語の感じを残したままで取り入れ、その雰囲気を表記のうへでも表したいという気持ちが一般に強い。そうした現状を踏まえ、原則の見直しや用例の追加・変更が随時、行われている。

新聞各社の外来語表記は、日本新聞協会新聞用語懇談会で議論し作成した「外来語の書き方」（同会編新聞用語集収録）にもとづいている。「外来語の書き方」が最初にまとめられたのは1956年（昭和31年）だが、このときは、国語審議会報告「外来語の表記について」（1954年、昭和29年3月）に多く依拠し、用例の追加・修正はしたものの、表記の原則に関してはほぼ国語審議会報告を踏襲した。

その後、新聞用語集収録「外来語の書き方」は、用例の変更は随時行いつつも、「表記の原則」そのものは変えてこなかった。原則自体を見直したのは1996年（平成8年）版で、2007年（平成19年）版でも若干の手直しが行われた。その間、国語審議会は内閣告示「外来語の表記」（1991年、平成3年）をまとめている。前述したように、統一表記を決めるのには向いていないため、新聞の「外来語の書き方」の原則変更は、内閣告示「外来語の表記」とは直接関係なく行われたが、原則「セ・ゼ」だった表記を「シェ・ジェ」に変えるなど、協会の「外来語の書き方」は一部では結果的に内閣告示「外来語の表記」を取り入れた形になった。

外来語表記の統一は、「ゆれ」がある語形についてどれを採るかという判断に基づく。「ゆれ」が取まってしまえば、取り決めも不要になる。最初に作成された「外来語の書き方」の表記の原則に掲げられた19項目の中には、現在の書記習慣では廃れてしまったものもある。たとえば、「従来、原語のつづり

にひかれて『ン』『ツ』を添えて書き表したものは、なるべく『ン』『ツ』を使わない」とし、「コンミュニケ」→「コミュニケ」、「コッピー」→「コピー」の例が挙げられている。1950年代初期までは、新聞記事にも「共同コンミュニケを発表」（1952年）、「四十インニング無得点」（1953年）などと使われていた。しかし、改めて注意喚起する必要がなくなると判断されたからだろう、1996年（平成8年）版「新聞用語集」でこの項目は削除された。

ただ、「ハンマー」「サッカー」「ロイヤル」など、「ン」「ツ」を添えたり、「ヤ」と書いたりする表記が今でも慣用になっている外来語もある。意識されるされないにかかわらず、表記の「原則」には、慣用が定着したという理由による「例外」がつきものであり、結局は語ごとの個別の判断になってくるが、新規に入ってくる外来語表記がゆれないためにも、「原則」は立てておく必要がある。

1996年版新聞用語集で大きく原則が変わったのは、「セ、ゼ」→「シェ、ジェ」、「チ、ヂ」→「ティ、デイ」、「チュ、ジュ」→「テュ、デュ」だ。いずれも「慣用の固定しているものを除き」の条件付きである。「セ、ゼ」の例のうち、「セパード」や「ゼネレーション」などは、原則変更に伴い「シェパード」「ジェネレーション」になったが、「ミルクセーキ」や「ゼネラル」はそのままで、例外扱いとなった。原則「チ」「ジ」だったときも、用例には「ディーゼル」「ディレクタント」などが挙げられており、原則「ティ」「デイ」になってからも、「モチーフ」「イリジウム」は「例外」になっている。「例外」の語形で取り入れられる外来語が増え、相対的に「原則」の語形の外来語が少なくなったため、「原則」と「例外」を入れ替える処理をしたわけだ。

もっとも、「例外」の語形も、変更された「原則」の影響を受けずにはいられない。新聞用語では「ロマンチック」や「ドラマチック」は「チック」のままだが、一般には「ロマンティック」「ドラマティック」が好まれる。新聞でも筆者の表記を尊重する寄稿原稿に関しては「ティック」が目につく。1990年代後半から問題が顕在化した「ドメスティック・バイオレンス」は、この語形で一般化したため、新聞の表記も「ティック」になった。慣用が定着した「例外」となっている「～チック」を含む他の語も、今後「原則」通り「～ティック」に変更される可能性はある。

2007年版新聞用語集改訂審議でも原則変更が議論されたが、時期尚早とし

て従来通りの扱いとなったのが、英語の二重母音 [ei] [ou] にあたる発音の表記である。1954年国語審議会報告「外来語の表記」で、幾つかの例外を除き「エー」「オー」と長音で書き表すこととされ、新聞界ではそれに従ってきた。しかし、「エイ」「オウ」と書く方が、原音に近い発音であることから、一般に好まれるようになっていく。2007年版改訂の際には、「例外」より「原則」が多くなっている実態を踏まえ、原則そのものを見直すべきだといった意見もあったが、それは見送り、用例に、「レーン (lane)、レイン (rain)、メード (made)、メイド (maid)」の書き分けを追加したにとどまった。「アンチエイジング、クリエイティブ (クリエイター)、アフィリエイト (提携=サイト広告関連)、オウンゴール」といった表記も現れている。今後入ってくる外来語については、圧倒的に「エイ」「オウ」表記が多くなることが予想される。

日本語としての慣用重視から原音重視へという流れがそこにあるのだが、新聞でも、外国地名・人名に関しては、以前から原音に近い表記を原則としてきた。新聞用語集では、「外来語の書き方」と「外国地名の書き方」を別建てとし、異なる原則を立てている。最も異同が目立つのは、「ウイ、ウエ、ウオ」(外来語)、「ウィ、ウェ、ウォ」(外国地名)である。国語審議会報告「外来語の表記について」(1954年、昭和29年3月)の「『ウイ、ウエ、ウオ』はなるべく『ウイ、ウエ、ウオ』と書く」に基づき、現在まで一般の外来語に関しては「ウイ、ウエ、ウオ」を原則としている。一方で、「外国地名の書き方」は、最初の新聞用語集から「ウィ、ウェ、ウォ」が原則だ。

1954年の審議会報告「外来語の表記」はそもそも人名・地名は対象にしていなかった。国の施策としては、昭和33年文部省「地名の呼び方と書き方」を引き継いだ「地名表記の手引」(昭和53年教科書研究センター)があった。内閣告示「外来語の表記」は、これらを併せた形で、そこでは、「一般的には『ウイ』『ウエ』『ウォ』と書くことができる」「地名・人名の場合は『ウィ』『ウェ』『ウォ』と書く慣用が強い」と記載されていて、新聞の「書き分け」の裏付けになっている。

だが、「ウェストバージニア (地名)」と「ウエスタン (一般語)」、「ウィンドウズ (商標)」と「ウインドー (一般語)」と書き分けることに抵抗を感じる向きもあろう。以前は、「ウィ」「ウェ」「ウォ」と書いてあっても、実際には「ウイ」

「ウエ」「ウオ」と発音されていた。しかし、最近では、「ウオーキング」とあっても、「ウォーキング」と発音する方が多くなっている。

日本語の表記と発音は必ずしも一致するわけではないが、表音一致は一般に受け入れられやすい原則ではあるだろう。国語辞典の多くは第1表に準拠した表記だが、『広辞苑』は初版から「ウイ」「ウエ」「ウオ」表記を採用している。新聞の表記はどうあるべきか、二重母音表記の問題とともに、検討していかなければならない課題であり、現在、新聞協会では審議を進めているところだ。

新聞は現在、主要各紙で過去記事も含め、電子化が進んでおり、研究材料にしやすい条件が整っている。外来語に限ってみても、出現状況、言い換え語の採用、表記法の異同等、頻度や推移を観察するにはかっこうの材料がそろそろ。ただ、その際にはこれまで述べてきたような、新聞という媒体の特殊性を考慮に入れることが肝要だ。ある表記が、新聞社内の規範に基づいたものか、規範の不徹底さによるものか、ある用法が世間一般との意識の乖離を是正した結果変化したものか、世間一般の言語変化をそのまま取り込んだものかなど、慎重に分別したうえで、分析していく必要があるだろう。

【参考文献】

- 金愛蘭 (2011) 「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊 3
- 関根健一 (2003) 「新聞記事の中のカタカナ語」『日本語学』22-8 明治書院
- 田中牧郎 (2006) 「現代社会における外来語の実態」『新「ことば」シリーズ⑩ 外来語と現代社会』(国立国語研究所編、国立印刷局)
- 橋本和佳 (2004) 「読売新聞社説の外来語—増加と停滞を中心に」『同大語彙研究』6
- 福田亮 (2006) 「新聞記事の外来語」『新「ことば」シリーズ⑩ 外来語と現代社会』(国立国語研究所編、国立印刷局)
- 国立国語研究所 (2000) 『白書、広報紙等における外来語の実態』国立国語研究所
- 国立国語研究所「外来語」委員会 (2006) 『分かりやすく伝える 外来語言い換え引き』ぎょうせい

【基本文献】

- ◎石野博史 (1983) 『現代外来語考』大修館書店

現代外来語を巡る基本的な問題点を網羅した本。マスコミの立場から、外来語の正

第2部 言語生活論的アプローチ

用法の問題点についても、簡潔にまとめてある。

◎武部良明（1979）『日本語の表記』角川書店

外来語を含めた現代表記の実態を国語施策の歴史に沿って詳説してある。1991年内閣告示の「外来語の表記」について記述した同著者の「なるほど現代表記法」（1991）と合わせて読みたい。

◎日本新聞協会新聞用語懇談会（2007）『新聞用語集』日本新聞協会

新聞・放送・通信各社用語担当者で構成する用語懇談会が作成した用字用語辞典。「スタイルブック」「ハンドブック」「用語の手引」などと呼称される各社それぞれの用語集と比較すると浮かび上がる差異は、表記の問題点の在りかを指し示す。

放送の外来語－傾向と対策－

塩田 雄大

キーワード：放送 外来語 発音 表記 ゆれ

1. テレビの外来語は「多い」のか

外来語が用いられる量は、ふつうの会話よりも、テレビのことばのほうが多いと言われている。これを、簡単な計算によって確かめてみたい。

テレビで外来語がどの程度用いられているか、ということについては、いくつかの調査がある。ここでは、「外来語が1分間に何語表れるか（外来語出現頻度）」という観点から見てみることにする^(注1)。

2.5 語／1分間（1967年度のNHKテレビニュース [正午]

183本が調査対象（菅野謙・石野博史 1969）

2.7 語／1分間（1977年度のNHKテレビニュース [朝・正午・夕]

148本が調査対象（石野博史 1979）

3.6 語／1分間（1983年 [6月～9月]のNHK・民放のテレビ高視聴率番組

200本が調査対象（菅野謙 1983）

1983年の調査は、時代の変化によって外来語が増えたというよりも、民放のニュース・番組も調査対象に加えたことによって外来語の率が高まったと解釈すべきであろう。

ここから、20世紀後半のテレビにおける外来語の出現頻度を、きわめておおづかみに言えば「1分間あたり2語～4語」程度であると考えることができるだろう。

いっぽう、ふつうの話しことばではどうであろうか。国立国語研究所を中心としておこなわれた「言語行動の24時間型実態調査」を対象として取り上げてみると、延べ42時間（＝2520分）ぶんの録音記録（調査対象は日本語教

育・日本語学関係者)において現れている外来語は2078語(延べ)である(志部昭平・真田信治1980)。いささか乱暴なやり方ではあるが、ここから外来語の出現頻度を算出するならば、日本人の話しことばにおいては、2078語÷2520分で、「1分間あたり1語未満」となる。

やはり、テレビの言語ではふつうの会話に比べて外来語が多いと言えそうである。

なお、テレビにおける外来語出現頻度は番組のジャンルによる差が大きく、スポーツ番組では外来語が特に多いことが実証的に明らかにされている(菅野謙1983・1984、大島資生1995、石井正彦1999、塩田雄大2008b)。たとえば、1983年のプロ野球中継を対象にした試算では「1分間あたり10.8語(地名人名を含めると11.1語)」となっている(菅野謙1983)。

なお戦前については、1931(昭和6)年の157分のラジオ野球中継に「1分間あたり15語」の外来語が現れていたという記録がある^(注2)。それに対して1937(昭和12)～1945(昭和20)年のいくつかのラジオドラマを対象にした調査の結果では、これほど多くの外来語は用いられていない(塩田雄大2008b)。戦前は外来語が少なかった、ということを一律に言うことはできず、当時からジャンルによる違いはあったものと想像される。

これ以降、放送の日本語における外来語の問題を、おおまかに次の2つに分けて論じてみたい。

▽外来語使用／不使用の問題…外来語を使うか、和語・漢語を使うか

▽外来語の発音・表記の問題…外来語をどのように発音し、書き表すか

2. 外来語使用／不使用の問題

2.1. 「正確さ」と「わかりやすさ」

放送のことばは、正確である必要がある。事実関係に誤りがあつたり、曲解のおそれがあつたりしてはならない。同時に、放送のことばは、視聴した人が簡単に理解できるものでなければならない。このような「正確さ」と「わかりやすさ」の併存が、本質的に要求される。しかし、両者を併存させるのがむずかしい場合もある。

その一例として、「メセナ」ということばを取り上げてみよう。この外来語

に対して、国立国語研究所「外来語」委員会では、当初「文化支援」という言い換え語を提案していた（第2回「外来語」言い換え提案・中間発表、2003年8月）。これに対して、「メセナ言い換え語提案に反対する会」という組織が、2003年9月30日に発足した（毎日新聞（朝刊）2003年10月1日、朝日新聞（朝刊）10月1日、毎日新聞（夕刊）10月10日）。

「メセナには、見返りを求めない、社会貢献としての文化支援という意味がある。90年にメセナ協議会が発足したとき、日本語にできないかと考えたが、適切な言葉がなく、『メセナ』を使った経緯がある。文化支援という言葉では違う意味になってしまう」

（福原義春・企業メセナ協議会会長、朝日新聞（朝刊）2003年10月1日から）

おそらくこうした流れも受けて、第2回「外来語」言い換え提案・本発表（2003年11月）では「メセナ」を継続審議とすることを発表したのが、その後の第3回「外来語」言い換え提案・中間発表（2004年6月）では掲載を断念している。

「メセナ」は『『わかりにくい』が『正確な』』語、それに対して「文化支援」は『『わかりやすい』が『正確ではない』』語ということになる。

外来語の使用に関して、放送では、「外来語だからいけない」というような単純な考え方はとっていない。「正確さ」や「わかりやすさ」などを総合的に勘案して、使用／不使用をその都度判断している。

2.2. 放送と漢語・外来語をめぐる近現代の流れ

放送における漢語・外来語の使用状況を歴史的にとらえると、おおむね次のような傾向が観察できる。

戦前：漢語	わかりにくい漢語の言い換えが進められた
外来語	さほど制限されなかった
戦中：漢語	わかりにくいものも、多用された
外来語	言い換えの対象となった
戦後：漢語	「わかりにくさ」があまり問題視されなくなった
外来語	社会環境の変化によって、多用されるようになった

2.2.1. 戦前

日本でのラジオ放送は、1925（大正14）年に始まった。放送における外来語の使用に関して公的に規定した最も古い記述は、1935（昭和10）年の『放送用語の調査に関する一般方針』（社団法人日本放送協会）である。これは、1934（昭和9）年に発足した第1期放送用語委員会（正式名称「放送用語ならびに並 発音改善調査委員会」）での審議を経て正式に決定されたもので、耳で聞いてわかりやすい放送用語を探究してゆくのにあたって示された指針である。外来語に関して、まず一般的準則の一つとして「純日本語の表現形式を尊重する。」ということが示された上で、

「新語・流行語も適宜に採用して、語句の上に新鮮味を添へること。」
「外国語をそのまま採用する場合は、国語の全体的なリズムとの調和をはかること。」
「新たに外国語を国語に訳す必要に迫られた場合は、必ずしもその原義に拘泥せず、その一部をあらはして全体を示し得るものか、又は直観的なものを訳語として考案すること。」

『放送用語の調査に関する一般方針』（社団法人日本放送協会、1935（昭和10）年）

などといったことが明示されている（塩田雄大 2007c）。外来語の使用を戒めるような記述は、積極的にはなされていない。当時の放送用語においては、外来語よりも、耳で聞いてわかりにくい「漢語の整理」のほうが大きな問題と考えられていたことの反映であろう（塩田雄大 2007a）。

当時活躍していた言語研究者の間にも、外来語をさほど問題視しない意見が見られる。

「ラジオがわかるコトバを要求するのは至極当然の事ですから、この辺の問題に対しても、用語の選定において適当に考慮してゐるはずで。ラジオそれ自体も、アナウンサーとか、ニュースとか、ラジオコントとかいふやうに、だいたい外来語を普及させてゐます。これに対して格別文句をいふ人がないとするれば、結構なわけです。」
（佐久間鼎 1936）

また、国家として標準的専門用語を公的に選定^(注3)するのにあたって当時示

された以下の指針を見ても、「国語」を尊重しつつも、外来語・外国語のうち「よく通じる慣用語」「国際的用語」「適当な訳語のないもの」などは優先的にそのまま使うべきであることが明示されている。

資源局ニ於ケル用語撰定上ノ方針

(保科委員ヨリ参考資料トシテ供覧サレタルモノ)

資施C一〇〇六號

昭和八年二月一日

標準用語選定上ノ根本方針 (昭和五年十二月十六日特別委員会決定)

- 一 標準用語ハ平易簡明ニシテ理解シ易ク且語感善キモノヲ選フコト
- 二 普通ニ使用セラルル慣用語ハ甚タシク不合理ナラサル限り之ヲ尊重スルコト
- 三 国語ヲ尊重スルコト但シ外国語ニシテ普通ノ慣用語若ハ国際的用語トナレルモノ又ハ適当ノ譯語ナキモノハ寧ロ之ヲ尊重スルコト

[1934 (昭和 9) 年 2 月 6 日 第二回放送用語並発音改善調査委員会
席上資料]

実際の外来語の使用状況に関して、石綿敏雄 (1971) では外来語増加が著しかったのは 1935 (昭和 10) 年ごろが頂点で、太平洋戦争開戦以降は英語が敵性国家の言語とみなされたことによって外来語が急速に減少したと記されている。

「放送では外来語を乱用すべきではない」という公的見解のうち比較的早いものとしては、1940 (昭和 15) 年の以下の資料が指摘できる。

第二 外来語・外国語 (支那語を含む) を濫用しないこと。

之等はよほど耳慣れないと分りにくい場合が多いから、適當に譯すか又は簡単に説明をつける方がよい。

『放送ニュース編輯便覧』(日本放送協会業務局報道部編輯課) 1940.10

ただし、この「第二」の項に先立つものとして「第一 むづかしい漢語の書換へ」が挙げられており、この時点ではまだ、外来語より「漢語の問題」のほうが大きな問題としてとらえられていたことがうかがわれる (塩田雄大

2007b)。

この年には、日本社会では次のようなことが起こっている。

1940年

3月28日 カタカナ名の芸能人（ディック・ミネ、ミス・ワカナ、ミス・コロンビアなど）に対して、内務省が改名を指示（下川耿史 2001：p.113）

9月 東京駅をはじめとして国鉄の駅にあった「ENTRANCE」「STATION MASTER」「WC」などの外国人向け英語表示版が撤去される。また、プラットホーム→「乗車廊」、ロータリー→「円交路」と改称（大石五雄 2007：p.49）

「米式蹴球（現代のアメリカンフットボール）」が、「米式」という表現を含んでいるという理由で「鎧球（がいきゅう）」に改称（大石五雄 2007：p.31）

9月13日 日本野球連盟から各プロ野球球団に、チーム名の英語禁止が通達される（後藤光将 2009）

10月 文部省が米英風の校名を禁止、フェリス和英女学校→「横浜山手女学院」、プール高等女学校→「聖泉高等女学校」、東洋英和女学校→東洋永和女学校など（大石五雄 2007：p.23）

10月22日 『東京日日新聞』が募集した日常生活での外国語和訳を発表、フライ→「洋天」、サイダー→「噴出水」、ゴルフ→「芝球」など（講談社編 1989：p.248）

10月31日 タバコ「ゴールデンバット」が「金鷄」に、「チェリー」が「桜」に改名（岩波書店編集部 2001：p.324）

このような背景の中で、それまでの「放送用語においては、外来語よりも漢語のほうが大きな問題をかかえている」という考え方が、1940年以降に変わってゆく。

2.2.2. 戦中

日本放送協会の第2期放送用語委員会（正式名称「ニュース用語調査委員

会)、放送用語並発音改善調査委員会の後身)が1940(昭15)年から1944(昭19)年にかけてまとめた資料として、『放送用語備要』というものがある。これは、放送におけるわかりやすさなどの面で問題となったことばを五十音順に整理した上で基準・言い換えなどを示したラジオ放送担当者用の部内向け手引き書で、約8,000項目が掲載されている。

この資料において、外来語(地名・人名・固有名詞を除く)および外来語を含む混種語のうち「言い換え」が付されているものを抜き出してみたところ、191項目となった(その一覧は塩田雄大2007bに掲載)。これらは、基本的に「放送では言い換えたほうがよい」ということを公的に推奨するものであったと考えてさしつかえない。

この191項目の中には、「アナウンサー」「ニュース」という語も含まれている。「アナウンサー」を「放送員」と言い換えることに決まったのは1942(昭和17)年のことである(佐藤孝1942)。また、1943(昭和18)年4月1日以降「ニュース」を「報道」と言い換えるように決定したことが、4月13日の放送用語委員会の席上で報告されている(浅井真慧1990、塩田雄大2008a)。「敵性語」を言い換える動きの1つである。

当時の陸軍では、国威の発揚から(保科孝一(1942)の表現では「軍の威厳を保つといふ建前から)外来語(=「敵性語」)の使用が控えられた戦時中であっても、兵器名・部品名に難しい漢字・漢語が多すぎるものが「国運の進展に障害となつてゐ」たために、兵器名の簡易化が進められた(榎垣実1942)。例えば、「生硬な漢語名を世間慣用のものに改めたもの」として、次のような例が挙げられている(塩田雄大2008b)。

極軟鋼鍍錫→ぶりき	纏絡機→ウインチ	制動機→ブレーキ
輻履→スポーク受	牝螺→ナット	傳聲筒→メガホン
孤光燈→アーク燈	扛起器、扛重器→ジャッキ	輪削機→フライス盤
…		(保科孝一1942: pp.65-68)

ここでは漢語から外来語に言い換えられていることがわかる。つまり、実利面で言えば、「外来語は場合により漢語よりも耳で聞いてわかりやすい」側面があることを、当時の軍部でも認めていたことが推察される。

その一方で、公的な放送では「殲滅」「轟沈」「撃退」などの漢語が、幅を利かせていたのである。

2.2.3. 戦後

戦後になると、アメリカ英語からの外来語が爆発的に増える。日本放送協会では、外来語だけの用語集を作成して使用指針を示すことになった。

『外来語集』（日本放送協会）は、1953（昭和28）年3月に出版された資料で、おもな外来語約3000語について放送での使い方の基準を示している。すべての項目に、以下のように○・△・×のいずれかが付されている。

○は、放送用語として適当と考えられるもの

△は、専門用語として使う場合の外は避けたいもの

×は、放送用語としてはなるべく避けたいもの

△モーション motion E [スポーツ] 動作

○モーター motor E 電動機

×モーター・スクーター motor-scooter E エンジンをつけた二輪車

『外来語集』（日本放送協会 1953年）

個々の外来語に対して、このように具体的に使用可否を示すことで、急増した外来語に対応しようとしたのである。

なお、この『外来語集』は1960（昭和35）年9月の第7版まで出されたが、その後はこのような外来語の使用基準を個別に示す資料はまとめられていない（浅井真慧 1981）。

上記のような方法論は、「個別規定方式 [=個々の外来語について、これは放送で使ってよい、これは不可、ということ個別に指定する方法]」と呼ぶことができる。いっぽう、1960年より後の時期には、外来語は「理念提示方式 [=一般論として『外来語は使いすぎないのが望ましい』という理念を示したうえで、個々の語の使用可否判断については個人（番組・ニュース制作担当者）に委ねる]」に基づいて取り扱われてきたと言える。このことは、日本語における外来語の増加ペースが1960年代後半にピークを迎え、1語1語に対して使用可否を示す「個別規定方式」では対応しきれなくなったことと関連し

ているものと思われる（塩田雄大 2007b）。

3. 外来語の発音・表記の問題

外来語に関して放送に特有の問題として、表記と発音の一致・不一致の問題が指摘されている（石野博史 1975）。たとえば manager を外来語として書き表す場合、テレビ放送の画面表記では「マネージャー」、新聞では「マネジャー」と書かれることが多い。音声言語を用いる放送の側としては、日本語としては〔マネージャー〕と発音することばだから「マネージャー」と書くという論理に立っている。いっぽう新聞のほうは、「マネジャー」という「書き方」が慣用的に定着しているという判断に基づいている。この「マネジャー」と書かれた文字列を、そのまま〔マネジャー〕と読むべきなのか、あるいは〔マネージャー〕と読むほうがよいのかについては、あまり態度をはっきりとさせる必要がない。

放送では、外来語の発音とカナ表記に関して、「表音一致」の姿勢を保ってきている。

原則として発音は表記に一致させるものとする。

ただし、ヴァ行音の場合などは、表記と発音が一致しなくても差し支えない。

「外国語・外来語のカナ表記 II. 原則」

『NHK ことばのハンドブック 第2版』（日本放送協会 2005年）

そのため、発音と表記の「不一致」があるような外来語については、きわめて敏感に調整・対応している。また、社会での発音実態・表記実態と、放送での規定との間に違いが出てきた場合には、規定のほうを再検討する必要が出てくる。

以下では、「ウエブ」と「ウェブ」を中心として、「発音と表記の不一致」の問題に関する事例を紹介する。

3.1. 「ウエブ/ウェブ」の発音・表記を例に

[wi] [we] [wo] という音を含む外来語を日本語で書き表す際に、放送ではおおむね次のような方針で発音・表記を決めている。

一般名詞：〔ウイ〕〔ウエ〕〔ウオ〕と発音し、「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書く 例 ウイスキー ウエディング 地名・人名：〔ウイ〕〔ウエ〕〔ウオ〕と発音し、「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書く 例 スウェーデン ミルウォーキー

しかし社会では、一般名詞の一部に「ウイ」「ウエ」「ウオ」という表記を用いたものも増えている。たとえば、「ウエブ／ウェブ」が挙げられる。これは、原則に従えば放送では「ウエブ」と書くことになるが、個別の例外として「ウエブ」と書くことにする、というような規定を定めることも可能である。類例としてサッカー関連の「アウエー」などは、かつては「アウエー」と発音し表記していた時期もあったが、現在では「アウエー」とすることになっている。

「ウエブ／ウェブ」に関する「発音と表記の不一致」の問題をめぐっては、2006年からNHK放送用語委員会で検討がおこなわれている。

検討にあたって、外来語の表記と発音に関して、4つの調査が実施された。

	調査形態	調査内容
A. 全国無作為抽出調査 (1)	全国満20歳以上の男女2000人、層化副次(二段)無作為抽出法、調査員による個別面接聴取法、2006(平成18)年2月10日～13日、1369人(68.5%)回答	「クリエイター／クリエイター」「エープリルフル／エイプリルフル」 発音と表記の不一致に関する意識について
B. 全国無作為抽出調査 (2)	全国満20歳以上の男女2000人、層化副次(二段)無作為抽出法、調査員による個別面接聴取法、2006(平成18)年4月7日～10日、1379人(69.0%)回答	「ウエブ／ウェブ」「ウオッチ／ウォッチ」 発音と表記の不一致に関する意識について
C. 音声認識調査	全国満20歳以上の男女、回答者が音声CDを聴取し回答する方式、2006(平成18)年4月7日～16日、全国282人回答	「ウイスキー／ウイスキー」「ウエブサイト／ウェブ～」 「ウエルダン／ウエルダン」「ストップウォッチ／～ウォッチ」など53項目 発音と表記の不一致に関する意識について
D. アナウンサー調査	NHKアナウンサー544人、質問票をメールで送信し、メールまたはファクシミリで回答を得る方式、2006(平成18)年9月13日～27日、305人(56%)回答	「B. 全国無作為抽出調査(2)」調査と同様の内容

ここでは、「ウエブ／ウェブ」の使用現況をめぐって、「B. 全国無作為抽出調査 (2)」と「C. 音声認識調査」の結果を中心に取り上げる。

3.1.1. 「全国無作為抽出調査 (2)」の結果

「ウエブ／ウェブ」に関して、表記(Q1目にする形 Q2書く形)と発音(Q3耳にする形 Q4発音する形)の各側面から尋ねてみたところ、いずれの面でも、原音に近い形として位置づけられる「ウェブ」のほうが、「ウエブ」よりも、高く支持されていることがわかった(Q6「ウオッチ／ウォッチ」の目にする形についても同様)(表1)。たとえば「Q3 どちらをよく耳にするか」では、「ウエブ」の支持率が14%、「ウェブ」が42%である。

ただしこの結果の解釈にあたっては、この調査の形態を念頭に置いておく必要がある。これは、調査員が質問文を読み上げながら、回答者に対して「ウエブ ウェブ」と書かれた紙も提示している。つまり、調査員からの〔ウエブ〕〔ウェブ〕という音声刺激と、「ウエブ ウェブ」という文字刺激が同時に与えられている。このような場合、文字刺激の影響のほうが比較的強くなることは否定できない。特にQ3とQ4の結果の読みとりには、注意が必要である。

属性別に見ると、「ウェブ」(および「ウォッチ」)の回答の傾向に関して、年代差と学歴差が特に大きいことがわかった(表1、図1・2)。若い年代では、また大学卒の集団では、「ウェブ」(および「ウォッチ」)を支持する率がより高くなっている。

これに対して、一般論としての外来語の発音のしかた(Q7)や発音と表記の不一致(Q8)に対する意識に関しては、年代差・学歴差はある程度観察されるものの、「ウエブ／ウェブ」ほどの大きな差は見られない(表1、図3～6)。おだやかな傾向として、若い年代では、また大学卒の集団では、原音主義的な回答(Q7「2 もとの外国語の発音に近い発音をするのがよい」、Q8「3 「書いた文字」と「発音」が一致しないことがあってもしかたがない」)が占める割合が大きくなっている。

なお、男女差・地域差・都市規模差については、いずれも目立った傾向は観察されなかった。

第2部 言語生活論的アプローチ

表1 全国無作為抽出調査(2)〔2006(平成18)年4月7日～10日〕

Q1 パソコンなどを使ったインターネットサービスを表す“ことば”について、うかがいます。大きい「エ」の「ウエブ」と、小さい「エ」の「ウェブ」、どちらをよく目にしますか。	全体 (1379人)	20歳代 (163人)	30歳代 (236人)	40歳代 (229人)	50歳代 (284人)	60歳以上 (467人)	大学卒 (422人)	高校卒 (734人)	中学卒 (220人)
1 “ウェブ”のほうをよく見かける	7	7	6	8	9	6	8	8	4
2 “ウエブ”のほうをよく見かける	46	76	75	62	39	16	66	44	10
3 どちらともいえない	10	10	10	13	11	9	11	11	6
4 このことばを知らない	23	2	6	10	25	43	6	24	50
{わからない}	14	4	3	7	16	26	9	13	30
Q2 では、ご自身で紙に書くとしたら、どのように書きますか。									
1 “ウェブ”と書く	9	7	4	9	13	8	9	9	6
2 “ウエブ”と書く	51	81	81	67	44	23	74	50	13
3 どちらともいえない	4	4	4	4	5	3	4	4	3
4 このことばを自分で書くことはない	25	7	8	16	25	44	8	27	51
{わからない}	11	2	3	4	13	22	5	10	27
Q3 次に、この“ことば”を耳で聞か場合について、うかがいます。大きい「エ」で発音する「ウエブ」と、小さい「エ」の「ウェブ」、どちらをよく耳にしますか。									
1 “ウェブ”のほうをよく耳にする	14	16	15	21	13	9	18	15	5
2 “ウエブ”のほうをよく耳にする	42	76	67	49	38	17	61	40	14
3 どちらともいえない	10	4	11	12	12	10	11	11	6
4 このことばを聞いたことがない	21	1	5	10	22	41	5	23	46
{わからない}	13	3	3	7	14	23	5	12	30
Q4 では、ご自身では、どのように発音しますか。									
1 “ウェブ”のように発音する	14	13	13	17	19	10	14	15	10
2 “ウエブ”のように発音する	46	78	73	60	38	19	68	43	14
3 どちらともいえない	4	4	3	4	5	4	4	4	2
4 このことばを自分で言うことはない	26	4	8	16	27	47	9	28	50
{わからない}	10	1	3	3	12	19	4	9	24
Q6 腕時計を表す“ことば”について、うかがいます。大きい「オ」の「ウォッチ」と、小さい「オ」の「ウオッチ」、どちらをよく目にしますか。									
1 “ウォッチ”のほうをよく見かける	27	13	16	31	35	32	25	28	30
2 “ウオッチ”のほうをよく見かける	53	78	77	58	50	31	66	54	22
3 どちらともいえない	11	7	6	7	10	18	7	11	20
4 このことばを知らない	1	0	0	0	0	3	0	0	5
{わからない}	7	2	1	3	6	15	2	6	24
Q7 ふだんの日本語の会話の中で、外来語を口に出して言う場合、どう発音するのがよいと思いますか。お考えにいちばん近いものをお答えください。									
1 日本人が発音しやすいように発音するのがよい	44	39	36	41	48	50	40	46	49
2 もとの外国語の発音に近い発音をするのがよい	23	28	32	28	22	16	32	24	6
3 場合によって発音しわけるのがよい	16	23	25	23	13	8	20	17	7
4 どう発音してもかまわない	10	8	6	6	15	13	7	11	15
{わからない}	6	2	1	2	3	13	1	3	23
Q8 カタカナで「チーム」と書いて、これをそのまま「チーム」と読む人と、「ティーム」と読む人がいます。また、「アルミニウム」と書いて、「アルミニウム」と読む人がいます。このように、「書いた文字」と「発音」とが、一致しないことについて、どのようにお考えですか。お考えにもっとも近いものをお答えください。									
1 「書いた文字」と「発音」は、一致することが望ましい	36	31	31	35	37	39	34	36	37
2 「書いた文字」と「発音」は、なるべく一致することが望ましい	24	29	28	29	25	18	29	25	15
3 「書いた文字」と「発音」が一致しないことがあってもかたがたがない	33	37	39	34	33	28	36	34	22
4 この中にはない	1	1	1	0	0	2	0	1	3
{わからない}	6	3	1	1	4	13	1	4	23

(96)

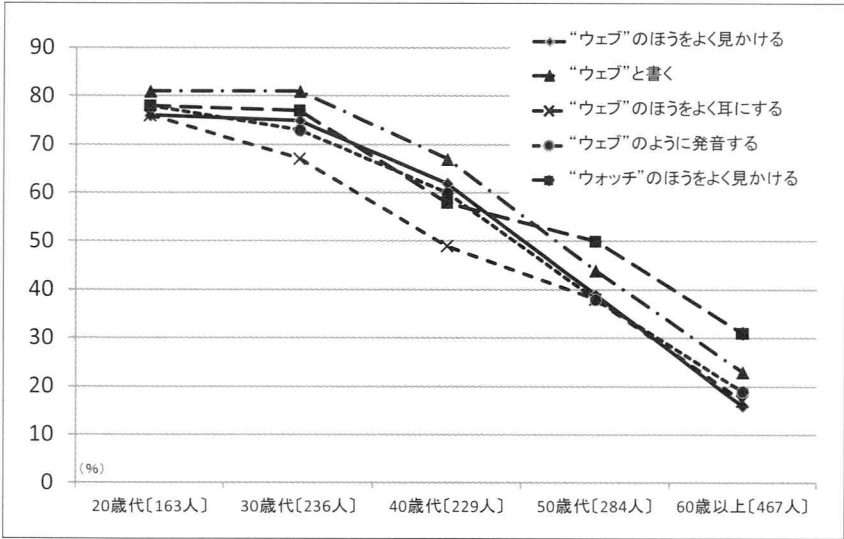


図1 全国無作為抽出調査(2)での「ウェブ」「ウオッチ」(年代差)

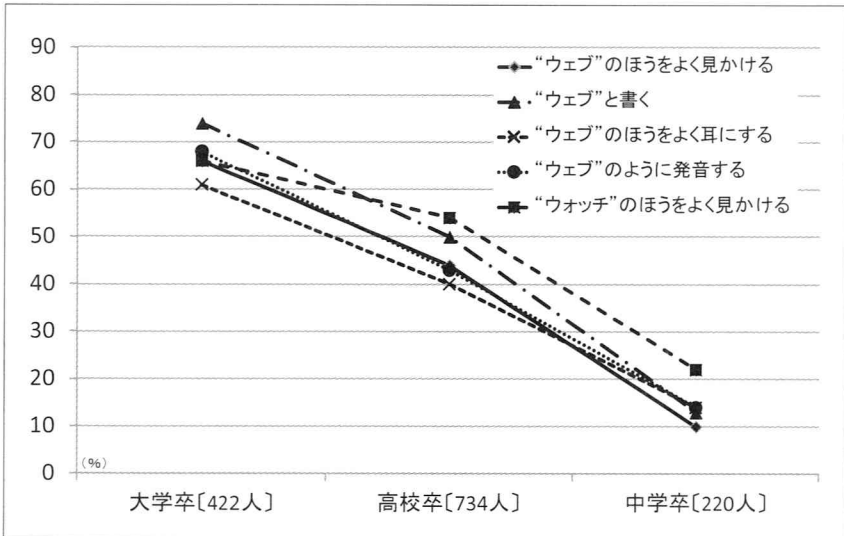


図2 全国無作為抽出調査(2)での「ウェブ」「ウオッチ」(学歴差)

第2部 言語生活論的アプローチ

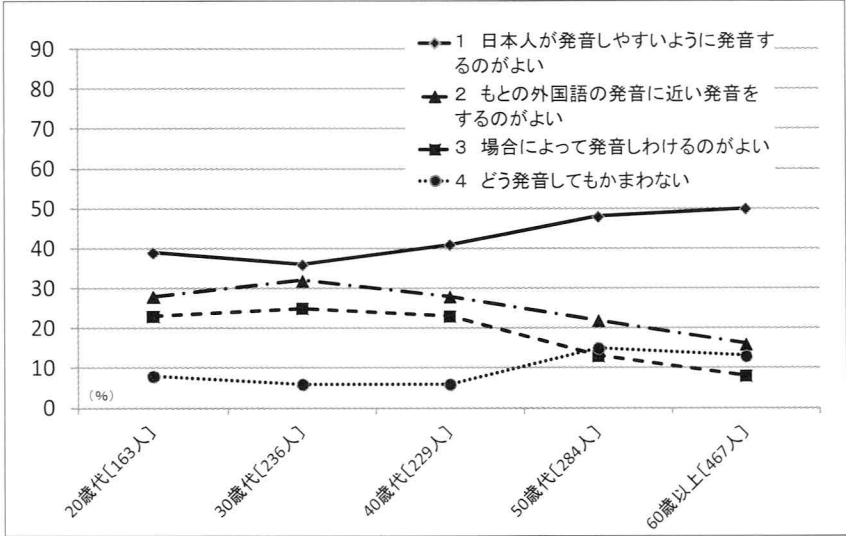


図3 全国無作為抽出調査(2)での外来語発音意識(Q7)(年代差)

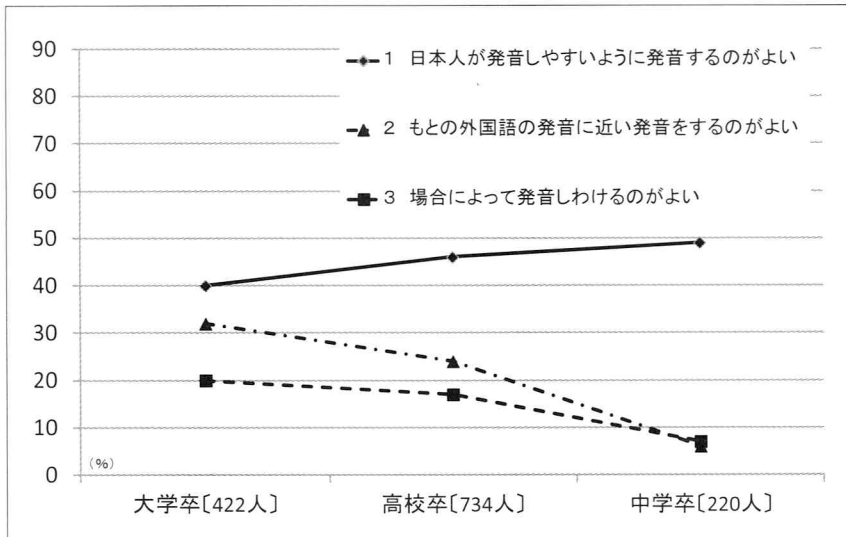


図4 全国無作為抽出調査(2)での外来語発音意識(Q7)(学歴差)

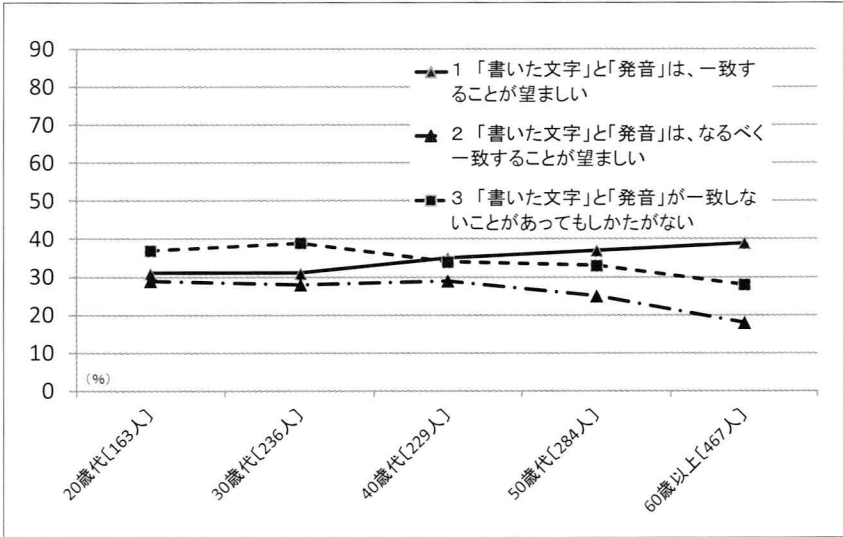


図5 全国無作為抽出調査(2)での「発音と表記のずれ」意識(Q8)(年代差)

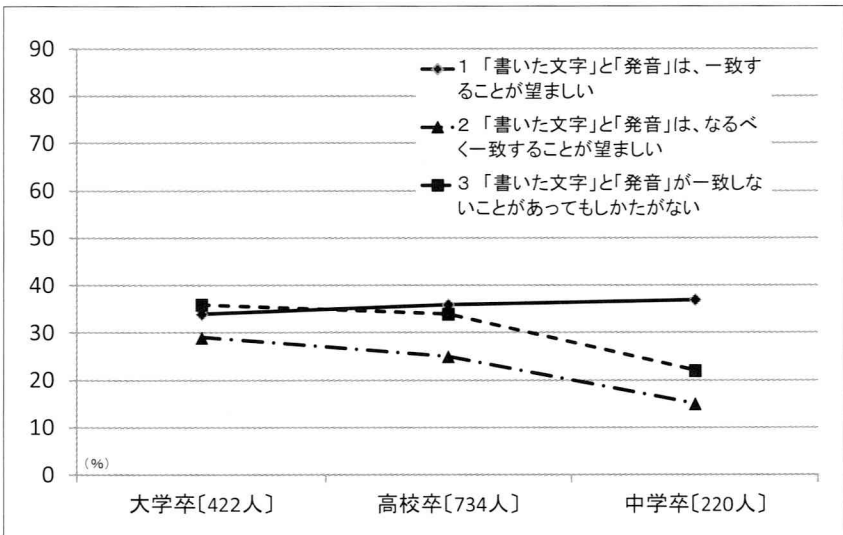


図6 全国無作為抽出調査(2)での「発音と表記のずれ」意識(Q8)(学歴差)

3.1.2. 「音声認識調査」の結果

NHK 放送文化研究所で調査用の音声 CD を作成し、それを全国 282 人の回答者に郵送して、各自で聴取のうえ回答してもらった。音声 CD の吹き込みは、元アナウンサーがおこなった。回答用紙には、「ウエブ／ウェブ」などといった文字刺激はいっさい示されていない。つまり、純粋に音声刺激のみによる調査である。

全国 282 人は、各県 6 人（20～39 歳男・女、40～59 歳男・女、60 歳以上男・女それぞれ 1 名ずつ）で 47 都道府県から集めた。調査したのは、「発音と表記の不一致」にかかわる 53 項目と、言語意識にかかわる 7 項目である。

ここでは、「ウエブ／ウェブ」の結果を紹介する。集計結果をまとめたのが表 2 である。

まず、ほとんどの人が、〔ウエブサイト〕と〔ウェブサイト〕とを音声として聞き分けていると認識していることがわかる(Q37-a)。よく聞く形としては、「2 どちらも聞いたことはあるが、どちらかといえば最初のほうの発音(=〔ウエブサイト])をよく聞く」が比較的多く回答されている(Q37-b)。自分で発音することに関しては、回答が完全に分散している(Q37-c)。

次に属性差を見てみると、年層差が目を引く。Q37-b と Q37-c について、回

表 2 音声認識調査〔2006（平成 18）年 4 月 7 日～16 日〕

インターネットの… (←回答欄に記載)				
Q 37-a [ウエブサイト] [ウェブサイト] (←音声で提示)	全体 [282 人]	20～39 歳 [94 人]	40～59 歳 [94 人]	60 歳以上 [94 人]
1 両方とも同じ発音に聞こえる	7	5	9	9
2 それぞれ別の発音に聞こえる	93	95	91	91
Q 37-b [ウエブサイト] [ウェブサイト] (←音声で提示)				
1 最初のほうの発音しか聞いたことがない	21	10	22	31
2 どちらも聞いたことはあるが、どちらかといえば最初のほうの発音をよく聞く	30	13	35	41
3 どちらも聞いたことはあるが、どちらかといえばあとのほうの発音をよく聞く	23	39	19	11
4 あとのほうの発音しか聞いたことがない	18	37	17	0
5 両方とも聞いたことがない	8	1	5	17
Q 37-c [ウエブサイト] [ウェブサイト] (←音声で提示)				
1 最初のほうの発音しかしたことがない	22	11	30	24
2 どちらも発音するが、どちらかといえば最初のほうのように発音する	24	11	23	38
3 どちらも発音するが、どちらかといえばあとのほうのように発音する	12	17	12	9
4 あとのほうの発音しかしたことがない	26	54	21	3
5 このことばは自分では使わない	16	7	14	26

(%)

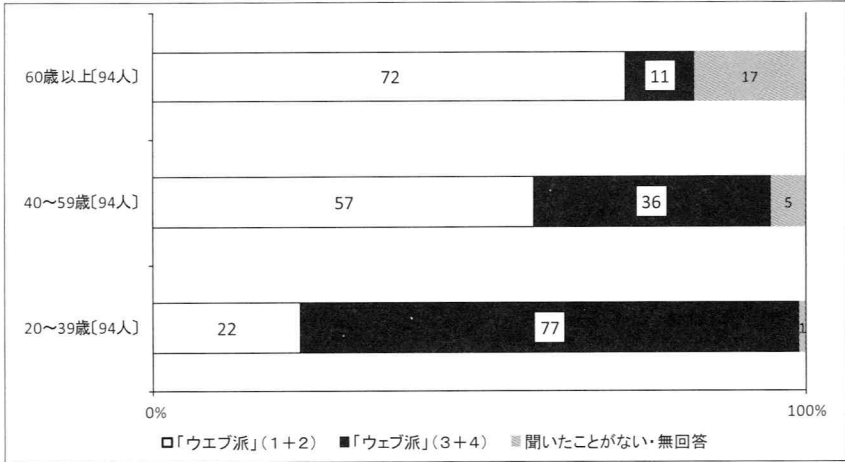


図7 音声認識調査[37-b よく聞く形](年層別)

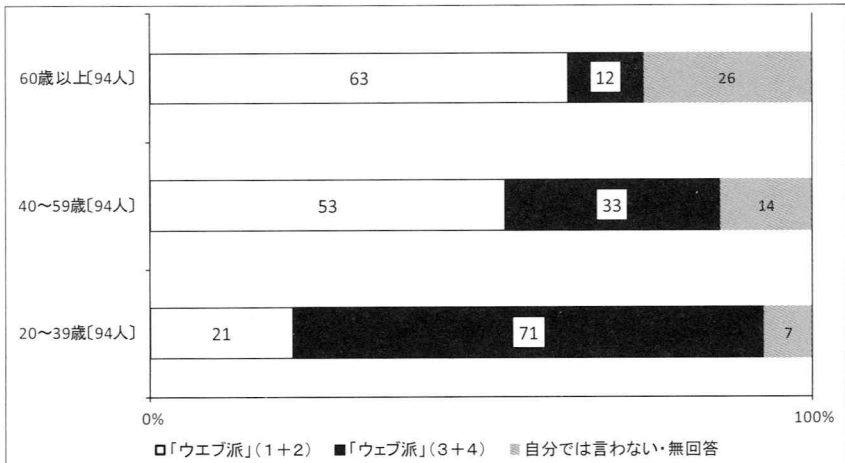


図8 音声認識調査[37-c 自分で発音する形](年層別)

答1と2を足し合わせて「ウェブ派」、回答3と4を足し合わせて「ウェブ派」として年層別に見てみると、両方の設問に関して、40歳以上では「ウェブ派」が過半数であるが、39歳以下では「ウェブ派」が圧倒的に多いことがわかる(図7、8)。

なお、男女差・地域差(現住地および小学生時在住地)については、いずれも目立った傾向は観察されなかった。

3.1.3. 「全国無作為抽出調査(2)」と「音声認識調査」の比較

さきほど文字刺激の影響について言及したが、それについて簡単に考察してみたい。「全国無作為抽出調査(2)」とまったく同じ質問形式でおこなった「アナウンサー調査」(3.1参照)の結果も加えて対照してみる(図9)。

この対照から、文字刺激も伴った場合(「全国無作為抽出調査(2)」および「アナウンサー調査」)には「ウェブ」を支持する人が主流になるが、音声刺激のみの場合(「音声認識調査」)には「ウエブ」がかなりの位置を占めるようになることがわかる。

3.1.4. 調査結果を受けて

NHKの放送用語委員会では、この一連の調査結果をもとに議論をおこなって、最終的に以下のような決定を下した(山下洋子2006a、同2006b)。

○ウェブ ×ウエブ	(2006.10.6 放送用語委員会決定)
-----------	-----------------------

この決定の背景のひとつに、音声認識調査の「耳にする形」の結果において、全体として「ウェブ派」(41%)は「ウエブ派」(51%)よりも少なかったものの(図9)、20～39歳では「ウェブ派」(77%)のほうが圧倒的に多かった(「ウエブ派」は22%)ことがある(図7)。つまり、時間の経過に従って、将来的には「ウェブ派」の占める割合がさらに大きくなることが予想される。現状だけを重視するならば、「[ウエブ]という発音が現在広く流通しているのだから『ウエブ』と書くことにする」という選択肢もありうるのだが、将来を見越して、「[ウエブ]と発音して『ウエブ』と書く」ことに決定したのである。

この事例は、一般名詞に対する「ウエ」という表記の適用を、あくまで個別の例外として認めたものである。一方で、今後はこのような例がさらに多くなると予想され、それぞれに対する個別の例外規定では対応できなくなることが考えられる。そのためNHKの放送用語委員会では、外来語の発音・表記をめぐって現在の「原則」の見直し作業をおこなっている(塩田雄大2006、田中伊式2006、山下洋子2011、同2012a・2012b)。

このような検討作業をおこなうためには、現況を正しくとらえるための継続的な言語調査の実施とそのデータ分析が、不可欠なのである。こうしたデータ

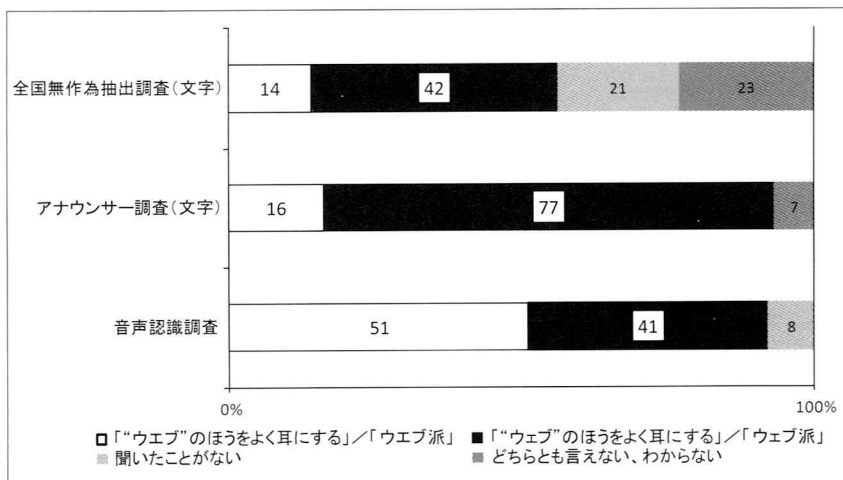


図9 「よく聞く形」(各調査比較)

をもとに、放送用語の使用規定の改訂は進められてゆく。

日本語に関する現状把握と規定調整の積み重ねから、だれにでも好まれる、すっきりとした（上質の日本酒のような）日本語を醸し出してゆくのが、わたしたちの目指すところである。

注

- 1) ここでおこなう試算は、きわめて便宜的なものであることを了承されたい。「1語」というものをどのように定義するかという問題に加え、全体として話す速度が速くなれば全体の語彙量が多くなり、その場合には外来語の出現頻度（実数）も当然多くなる。また、和語・漢語との出現比率（割合）も考えなければならないのが本来である。しかし、ここで掲げた菅野謙・石野博史（1969）、石野博史（1979）、菅野謙（1983）の各調査では「外来語」のみがおもな調査対象となっており、和語・漢語を含めた全体の言語量がわからず、割合も算出できない。

なお、国立国語研究所において精密におこなわれた『テレビ放送の語彙調査』では、「平均値」というものの扱いについて慎重な姿勢を取っており、1分間あたりの外来語出現頻度の平均値に相当するものについての明示的な記述は見つけることができなかった。

- 2) 「文藝春秋オール読物号」昭和六年十二月号—「早慶大野球戦放送記」は「名アナ

第2部 言語生活論的アプローチ

ウンサー」松内則三氏の放送の速記であるが、試合時間二時間三十七分（157分）に用ひられた外来語総数2,368語で、一分間平均15語用ひられてゐる。」（荒川惣兵衛1932）

3) 内閣資源局の附属機関として「資源審議会」というものがあり、材料・エネルギー関連の用語不統一による事務能率低下を解消するために、1930年から1939年にかけて「薬品」「燃料、油脂、塗料及顔料」「機械」「金属類、鉱物類及土石類」「電気」について標準用語を制定・明示した。これらの用語集は内閣告示として公布され、各官庁に対して使用が奨励された。

【参考文献】

- 浅井真慧（1981）「放送のことばのあゆみ（2）～放送用語調査研究資料解題～」『文研月報』31-10
- （1990）「放送用語委員会審議の変遷（2）“語る文章”の理想もむなしく<ニュース編・その2>」『放送研究と調査』40-2
- 荒川惣兵衛（1932）『外来語学序説』
- 石井正彦（1999）「番組ジャンルの特徴語とジャンル間の関係」『テレビ放送の語彙調査Ⅲ—計量的分析—』国立国語研究所報告115
- 石野博史（1975）「放送における外来語の問題」NHK総合放送文化研究所編『放送用語論』日本放送出版協会
- （1979）「テレビニュースの用語10年間の変化（1）—外来語—」『文研月報』29-7
- 石綿敏雄（1971）「現代の語彙」阪倉篤義編『講座国語史 第3巻 語彙史』大修館書店
- 岩波書店編集部（2001）『近代日本総合年表 第四版』岩波書店
- 榎垣実（1942）「戦争と日本語」『日本語』2-5
- 大石五雄（2007）『英語を禁止せよ—知られざる戦時下の日本とアメリカ—』ごま書房
- 大島資生（1995）「番組のジャンル」『テレビ放送の語彙調査Ⅰ—方法・標本一覧・分析—』国立国語研究所報告112
- 菅野謙・石野博史（1969）「ニュースの中の外来語」『文研月報』19-6
- 菅野謙（1983）「テレビ高視聴率番組の外来語」『放送研究と調査』33-12
- （1984）「よく見られているTV番組のことばの性格～東西二〇〇番組の分析～」『放送研究と調査』34-6
- 講談社編（1989）『昭和二万日の全記録 第5巻』講談社
- 後藤光将（2009）「テニス用語の邦語化に関する研究」『明治大学教養論集』440

- 佐久間鼎 (1936) 「ラジオと国語問題」『教育』4-12 (佐久間鼎 (1942) 『日本語のために』(厚生閣) に再録)
- 佐藤孝 (1942) 「大東亜戦争と放送用語」『放送研究』昭和 17 年 7 月号
- 塩田雄大 (2006) 「外来語の発音とカタカナ表記 ～[エイ・ケイ・セイ]などを中心に～」『放送研究と調査』56-3
- (2007a) 「漢語の読み方はどのように決められてきたか 戦前の放送用語委員会における議論の輪郭」『NHK 放送文化研究所年報 2007』第 51 集
- (2007b) 「放送における外来語 —その「管理基準」の変遷」『言語』36-6
- (2007c) 「最初の放送用語基準 ～1935 年『放送用語の調査に関する一般方針』作成の背景」『放送研究と調査』57-7
- (2008a) 「アクセント辞典の誕生 放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか」『NHK 放送文化研究所年報 2008』第 52 集
- (2008b) 「放送でのスポーツのことはば —外来語の扱いを中心に—」『日本語学』27-9
- (2012) 「放送用語のハンドブック」『日本語学』31-8
- 志部昭平・真田信治 (1980) 「語彙調査とその分析」『特定研究「日本語教育のための言語能力の測定」研究報告書』国立国語研究所日本語教育センター
- 下川耿史 (2001) 『増補版 昭和・平成家庭史年表』河出書房新社
- 田中伊式 (2006) 「外来語の発音とカタカナ表記 (2) ～「wi/we/wo」などを中心に～」『放送研究と調査』56-5
- 保科孝一 (1942) 『大東亜共栄圏と国語政策』(統正社) (桜井隆監修 (2008) 『日本語教授法と言語政策 大東亜共栄圏と国語政策 (保科孝一)』(冬至書房) として復刻)
- 山下洋子 (2006a) 「外来語の発音とカタカナ表記 ～調査報告から～」『放送研究と調査』56-9
- (2006b) 「カタカナ表記について ～ウェブ/ウエブの表記を検討～」『放送研究と調査』56-12
- (2011) 「外来語の表記と発音について」『放送研究と調査』61-12
- (2012a) 「外来語の表記・発音について 「ウィ・ウエ・ウオ」か「ウィ・ウエ・ウォ」か」『放送研究と調査』62-4
- (2012b) 「外来語の発音・表記について～[wi][we][wo]と二重母音[ei]～」『放送研究と調査』62-9

【基本文献】

- ◎ NHK 総合放送文化研究所編（1975）『放送用語論』日本放送出版協会

放送用語全般に関して体系的に著された国内随一の本。少々古いが、基本的な問題意識は現代となんら変わるところがない。

- ◎ NHK 放送文化研究所日本語プロジェクト編（2003）『つかいこなせば豊かな日本語』日本放送出版協会

個別のことばに関する放送での使い方について、NHK放送文化研究所の研究者がまとめた本。なお、この本の出版以降も、同種の執筆がNHK放送文化研究所・放送用語のHP（<http://www.nhk.or.jp/bunken/kotoba/index.html>）上で継続的になされている。

- ◎ NHK 放送文化研究所編（2005）『NHK ことばのハンドブック 第2版』日本放送出版協会

外来語の標準表記を含め、放送でのことばの使い方（運用）などについて示した実用書。放送のことばのハンドブックに関する来歴については塩田雄大（2012）参照。

日本語学習者の外来語意識—日本語教育における外来語教育を考える—

中山恵利子

キーワード：日本語学習者 外来語意識 日本語教育 外来語教育 カタカナ語

1. 日本人の外来語意識

外来語は日本語である。我々日本人は学校で日本語の語種として、和語、漢語と並んで外来語というものを習う。外来語は日本語である。その証拠に、たとえば英語出自の外来語を外来語の発音で日本語がわからない英語話者に話しかけても通じないことが多い。まして外来語のカタカナ表記を日本語がわからない人に見せて理解してもらおうとは思わないであろう。英語が話せる日本人でも、うっかり外来語の意味で使ってしまうと、英語の意味と違っていたために通じなかった、ということもある。外来語は、出自こそ外国語であるが、その発音も表記もそして意味や用法も日本語の体系の中にあるからである。

しかし、どれほどの人が、外来語は日本語である、と明確に認識しているのだろうか。

「外来語」を『広辞苑第六版』で引くと、「外国語で、日本語に用いるようになった語。狭義では、漢語を除く。伝来語」とある。この「外国語で」というくぐりほどのように解釈すべきなのであろうか。周囲の日本人に尋ねると、「外来語とは、外国語のことであり、日本語に借用されるようになった語である」と読み取る人が少なくない。つまり、外来語はもともと外国語であり、日本では借り物の存在だという解釈である。そして、そのように理解すると、「外来語は外国語である」という意味が先行することとなる。

確かに外来語には「外国語」まがいのものも含まれている。国立国語研究所(2007)の外来語定着度調査によると、「ストレス」「トラブル」「プライバシー」のように認知率、理解率、使用率ともに高く、すでに日本語の中に定着していると言える外来語から、「キュレーター」「フィランソロピー」「トリアージ」

のように3つの程度が低く、まだまだ定着しているとは言いがたい語まで様々なレベルのものが存在していることが見て取れる。定着度が低いものは、表記や発音は日本語化されているものの、語彙体系の片隅にいて、まだ多くの人から認められていない語であるので、「外国語である」と言いたくもなろう^(註1)。

また、普段からよく耳にするものに、例えば「ネック」を日本語で言うとな何になる?」「彼は「プライオリティー」とか「コンプライアンス」とか横文字をすぐに使いたがる」といった表現がある。「ネック」や「プライオリティー」、「コンプライアンス」という外来語は日本語なのであるから、「日本語」を日本語で言うとな何になる?」「彼は「日本語」とか「日本語」とか横文字をすぐに使いたがる」という文は意味上破綻している。が、多くの日本人はこの表現をおかしいと思わず自然に受け止めるであろう。わかりにくい外来語に出合ったとき、外来語をむやみに使う人を揶揄するとき等、無意識のうちに、外来語は外国語として扱われている^(註2)のである。

そして、このような日本人の感覚からいえば、『広辞苑第六版』の外来語の意味説明にさほど問題を感じることはないであろう。

本稿では、上述したような、外来語が日本語だと思われているのか、外国語だと思われているのかという、人により語により揺れ動く意識を「外来語意識」と呼ぶこととする。そして、まずは日本語学習者の外来語意識について調べ、その意識がどのように形成されたのかを検討した上で、日本語教育における外来語教育について考察していきたい。

2. 分析の対象

2.1. 調査の概要

日本語学習者の外来語意識を窺い知ることができる調査として中山(2006)がある。これは、日本語教育の現場においてカタカナ教育(カタカナ文字とカタカナ語の教育)がどのように行われているのか実態を把握するために実施したものである。調査は2005年8月から10月にかけて日本語教育機関の地域の集密度を考慮して抽出した全国の日本語教育機関198機関を対象に、日本語教育機関用1部、日本語教師用5部、日本語学習者用10部を1セットにして郵送し行った。回収率は、機関用29.3%(58部)、教師用21.3%(211部)、

学習者用 24.2% (479 部) である。本稿は学習者用の調査結果を中心に、また教師用の調査結果は抜粋して、論を進める。調査にご協力いただいた機関、教師、学習者の方々に感謝申し上げる。

2.2. 調査対象者の内訳

調査対象者である日本語学習者の属性については、調査票のフェースシートで 10 項目にわたり調べているが、ここでは本稿に必要な背景に絞って述べる。国籍は表 1 に見る通り、「中国」が 5 割、「韓国」が 2 割となっており、母語別 (表 2) にみると「韓国・朝鮮語」が若干増える程度でほぼ変わらず、「英語」は 4.2% である。所属先は「大学学部」が全体の 3 分の 1、「日本語学校等」が 3 割弱、「交換留学等」が 2 割弱である。日本での日本語学習歴は「1 年未満」が 4 割弱、「1 年以上 2 年未満」が 3 分の 1、「2 年以上 3 年未満」が 14% と年数の少ない学習者が多い。英語については、学習経験があるものが 9 割を超え、ないものは 7% に過ぎない。学習歴は「6 年以上 10 年未満」が 5 割弱、「10 年以上」が 25% 強であり、日本の学制で考えると「中学・高校 6 年」以上の英語教育を受けている学習者が約 4 分の 3 を占める。

表 1 国籍別人数と割合

(上段：人 下段：%)

中国	韓国	台湾	アジア他	北米	オセアニア	中南米	欧州	アフリカ	中近東	その他	無回答	計
238	96	19	61	13	4	10	29	6	1	1	1	479
49.7	20.0	4.0	12.7	2.7	0.8	2.1	6.1	1.3	0.2	0.2	0.2	100

表 2 母語別人数と割合

(上段：人 下段：%)

中国語	韓国・朝鮮語	英語	それ以外の言語	無回答	計
238	111	20	109	1	479
49.7	23.2	4.2	22.8	0.2	100

2.3. 分析の対象とする質問

学習者の外来語意識を探るために本稿で対象とする質問は以下の通りである。

質問 22 日本語の中でカタカナ語が使われていることについて、どう思いますか。【後述の質問B】

質問 23 質問 22 の理由（「よい」「よくない」の理由は選択式、「どちらでもない」の理由は記述式）

質問 24 カタカナ語について感じていることがあれば、どんなことでもいいですから書いてください。【後述の質問A】

まず、ここで用語について説明しておく。中山（2006）では、外来語ではなくカタカナ語を用いている。カタカナ語とはカタカナ表記される語の総称であり、外来語とは限らない。したがって、回答の中には「ケータイとか別に携帯と書いたらいいのにカタカナで書くのはよくないと思います」「むずかしい漢字などはカタカナを使ってもいいと思う」というように漢語のカタカナ表記に言及しているものもある。本稿では、そのうち、外来語と読み替えられるカタカナ語を分析対象とするので、学習者の回答を引用する場合は、「カタカナ語」を「外来語（カタカナ語）」と書きなおすこととする。質問文は手を加えずそのまま引用する。また、学習者の回答の文法や表記の間違いは、意図を変えない程度に訂正を加える。

調査票の質問 24 では、学習者に「カタカナ語について感じていることがあれば、どんなことでもいいですから書いてください」と尋ねている。これは自由記述であり、最後の設問であるので、回答はよほど何か言いたいことがある場合に限られるだろうから回答者数は少ないだろうと予想していたが、予想に反して、479 人中半数を超える 255 人（53.2%）が回答している。本稿では、この質問に対する回答から「学習者の外来語意識」を探ることとし、以下、この質問を「質問A」と呼ぶ。この質問を対象とする理由については次節で述べる。質問Aに回答した 255 人の母語の内訳は次のとおりである。

表3 質問A回答者数の母語別人数と割合・全数の母語別人数と割合(表2)・
全数における回答者の割合

※「無回答」は除外

	中国語	韓国・朝鮮語	英語	それ以外の言語	計
回答者数(%)	134(52.5)	68(26.7)	8(3.1)	45 (17.6)	255
全数(%)	238(49.7)	111(23.2)	20(4.2)	109 (22.8)	479
回答者数/全数%	56.3	61.3	40.0	41.3	53.2

母語別に全数における回答者数の割合(表3の最下段)をみると、「韓国・朝鮮語」の学習者は111人のうち6割強の68人が回答しており、「中国語」を抜いて最も割合が高いが、「英語」や「それ以外の言語」が母語の学習者は4割と、文章を書くことを回避する傾向が見られた。元より20人(4.2%)と少ない「英語」は8人となり、回答者255人に占める割合は3.1%と極端に少数になるため、分析では必要な場合にのみ取り上げることとする。

3. 日本語学習者の外来語意識

3.1. 学習者の外来語評価

質問Aの記述内容を外来語に対して肯定的か否定的かという評価で分けると、表4のようになる。

表4 外来語評価

(上段:人 下段:%)

肯定的	否定的	両方	その他	不明	計
60	155	23	12	5	255
23.5	60.8	9.0	4.7	2.0	100.0

「肯定的」というのは、「私は外来語(カタカナ語)が好きです」「外来語(カタカナ語)は日本語ですので、授業のときにもっとたくさん勉強したいです」「外来語(カタカナ語)は英語の勉強に役立ちます」等の、外来語の存在をよしとする意見である。「覚えにくくて話しくく少し面倒ですが、勉強しなければならぬものです」といった消極的な受容や「勉強しやすい辞書を作ってほしい」といった要望、「私は母国で英語を勉強して来たので日本語よりも外来語(カタカナ語)の方がわかりやすいです」という意見も「肯定的」とした。

次に、「否定的」というのは、外来語の存在をよくないとする意見(91人)と、外来語は難しいとする意見(64人)を合わせたものである。前者には「外

来語（カタカナ語）は必要ないと思う。なくすべきである」「日本語で表現できることはカタカナで新しい言葉を作る必要がないと思います」「外来語（カタカナ語）を使いすぎると日本語が減じるかもしれないと思うのです」「英語と発音がちょっと違います。だから学生にとって外来語（カタカナ語）が英語の勉強の邪魔になると思います」といった意見がある。後者は「もとの言葉と違う発音をするから難しい」「外来語（カタカナ語）は難しくて覚えにくいと思います。書くとき間違いやすいです」という外来語そのものの難しさについての意見である。

また、「両方」とは「肯定的でもあり否定的でもある」「易しい場合もあるが難しい場合もある」というような意見である。例えば、「日本にないコトバには外来語（カタカナ語）を使ってもいいと思うけど、英語を勉強するには確かに邪魔だと思います」「専門用語はかなり難しいと思います。でも、英語と似ている言葉は覚えやすいです」といった意見である^(注3)。「その他」は「流行語の中には特に外来語（カタカナ語）が多いと思います」というように、評価を下していないものであり、「不明」は質問の回答になっていないものである。

表4を見ると、外来語に関しては否定的意見が155人と肯定的意見60人の2.6倍近くに上ることが分かる。中山(2006)では、この質問Aの前の質問22で、「日本語の中でカタカナ語が使われていることについて、どう思いますか」という質問(以下、質問Bとする)を479人に対して尋ねているが、その回答は「よい」121人(25.3%)、「よくない」177人(37.0%)、「どちらでもない」139人(29.0%)、「わからない」34人(7.1%)、「無回答」8人(1.7%)となっている。「よい」と「よくない」の差は1.5倍にも満たない結果を得ているにも関わらず、自由記述で大差が出たのは興味深い。

表5 質問Bと質問Aの回答者数と割合

※質問B「わからない」「無回答」、質問A「その他」「不明」は除外

質問B	「よい」			「よくない」			「どちらでもない」		
	121			177			139		
質問A	65			102			74		
%	53.7			57.6			53.2		
質問A	肯定	否定	両方	肯定	否定	両方	肯定	否定	両方
回答者数	33	19	11	11	81	4	14	44	7
%	50.8	29.2	16.9	10.8	79.4	3.9	18.9	59.5	9.5

質問Bで「よい (121人)」「よくない (177人)」「どちらでもない (139人)」と回答した人のうち、質問Aに回答しているのはそれぞれ65人 (53.7%)、102人 (57.6%)、74人 (53.2%)と、いずれも55%前後であり、回答率に大差があったわけではない(表5の上3段)。しかし、下3段を見ると、質問Bと質問Aとはずれが見られる。例えば、質問Bで「よい」と回答したのに質問Aで否定的意見を書いている人は3割近い。同じく質問Bでは「どちらでもない」と回答したのに質問Aで否定的意見を書いた人は6割近くに上り、質問Bでの回答の如何に関わらず、質問Aでは否定的意見を書いた人が少なくない。つまり、「日本語における外来語使用」についての評価とは関係なく、自由記述では外来語に対して否定的意見を書いた人が多かったことが分かる。

質問Bで「どちらでもない」と回答した139人には理由を書いてもらっている。それによると、日本語における外来語の使用の是非については、「今まで日本人が日常生活で使いなれているので」「カタカナ語も日本語ですので、外国人としては自然に受け入れることになります」という回答があり、日本人や日本語に対する遠慮やよそ者意識が働いたとも考えられる。また、「私の国にも外来語はたくさん入っていますから」「言葉はいつも新しく作られるものだから」という回答からうかがえるように、言葉はそういうものだという認識が作用していたことも考えられる。しかし、外来語そのものに対する自分自身の感想となると別だ、ということなのであろう。そういう意味では、学習者の外来語に対する意識が如実に表れているのは、質問Aのほうだと言えよう。なお、質問Aについて母語別に分布を見たが、「英語母語話者」がより否定的であった(8人中6人と75%が否定的意見を書き、肯定的意見を書いた学習者はいなかった)以外は、表4の分布とほぼ同じであった。

3.2. 学習者の「外来語」意識

質問Aに回答した255人の意見のうち、学習者が「外来語(カタカナ語)」を「日本語」と考えているのか「英語/外国語」^(注4)と考えているのか、という外来語意識を窺い知ることができたものは142人(55.7%)の意見であった。その外来語意識を以下の4つに分類し、内訳を表6にまとめてみた。

①「外来語は英語だ」

- ② 「外来語は英語ではない」
- ③ 「外来語は日本語だ」
- ④ 「外来語は日本語ではない」

表6 学習者の意見から窺える外来語意識 人 (%)

	肯定的	否定的	両方	その他	計
英語だ	8 (21.1)	22 (57.9)	8 (21.1)	0 (0.0)	38
英語ではない	2 (5.9)	27 (79.4)	4 (11.8)	1 (2.9)	34
日本語だ	20 (74.1)	3 (11.1)	4 (14.8)	0 (0.0)	27
日本語ではない	3 (7.0)	38 (88.4)	2 (4.7)	0 (0.0)	43

表6によると、「外来語は日本語ではない」と考えている学習者が43人(142人中30.3%)と最も多く、次いで「外来語は英語だ」(38人、26.8%)、「英語ではない」(34人、23.9%)、「日本語だ」(27人、19%)と続く^(注5)。以下、それぞれの意識を支える中心的な意見を取り上げて分析していく。

3.2.1. 「外来語は日本語ではない」と考えている意見

「外来語は日本語ではない」と考えている人43人のうち、否定的意見を述べているのは38人と9割弱を占める。意見は次の2つに大別される。「英語から来た言葉は必要じゃありません。日本語の言葉があるから。日本語の言葉が使われなくなると思う」というように和語・漢語の類義語があるなら、外来語は不要とする意見と、「本当に日本語が失われると感じています」というような、外来語の存在や多用が「日本語」を破壊するという意見である。

以上の意見に使われている「日本語」とは、和語・漢語のことであり、そこに英語から来た「外来語」は含まれていない。また、「日本語なのに、なぜ英語から来た外来語(カタカナ語)を使うのかわかりません。外来語(カタカナ語)なんかなかったらいいと思います」と外来語の存在そのものを否定する意見や、「日本語ですか」という厳しい一言のほか、「日本語の勉強の邪魔になる」という意見も少数ながら見られる。これらの意見からは「外来語」はまったく「日本語」として認知されていないことが見て取れる。

ここに分類した意見は、「外来語は英語だ」と明記していないため、「日本語ではない」としたが、「外来語は日本語ではない」という単なる否定ではなく、

「外来語は日本語ではなく、英語だ」という考え方に限りなく近いと言えよう。

3.2.2. 「外来語は英語だ」と考えている意見

「外来語は英語だ」と考えている人38人は少々意見が分かれる。否定的意見が22人と6割弱、肯定的意見が8人で2割強、肯定も否定も両方という意見が同じく8人で2割強である。中心的意見は否定的意見となるが、ここではすべての意見を取り上げよう。

まず、否定的意見は大きく次の2つに分かれる。1つは「英語なのにそれを変えて日本語だといっているのはよくない。むずかしいですよ」、「なぜ外国語をカタカナで書いているのかわかりません」と、「外来語」は「英語(外国語)」だという理由でその存在を否定している意見である。もう1つは「カタカナの代わりに英語で表記したらいい」「外来語(カタカナ語)の上に英語でルビを振ったらいいかもしれない」「英語の発音に近づけてほしい」といった、「外来語」は「英語」に回帰せよという提案や要望である。英語表記を希望する声は少なくない。これは「日本語」の文の中に英単語をちりばめることとなり、表記だけでなく発音も「英語」にしたらいい、という提案なのであろう。

また、2割強の肯定的意見は、「私は英語を勉強してきたので、日本語よりも外来語(カタカナ語)のほうがわかりやすいです」「勉強するのはちょっと難しいけれど、英語の勉強にも役立つから、もっと多くの外来語(カタカナ語)を勉強したいです」「外来語(カタカナ語)を一つ覚えたら英語の単語を一つ覚えたような気がして嬉しいです」というものである。1つ目の意見においては「日本語」の中に「外来語」は含まれていないことがわかる。これらの意見はどのような意識から生まれているのだろうか。「外来語」は「日本語」であり「英語」とは全くの別物だという意識があれば、「外来語」を英語学習と結びつけることはしないであろう。「外来語」がもともと「英語」だと思っているために、両者に類似点を見出し、「英語」学習と関連付けてしまうのではないか。そのように考えると、これらの意見は「外来語は英語だ」という意識がその根底にあると言えよう。

さらに、2割強を占める「両方」の意見から一つ紹介しておく。「外来語(カタカナ語)でしか表せないものもあるが、外国語(特に英語)をいっぱい引用

すると、本来の日本語が失われるかもしれない。何年かあとで日本語というのはカタカナで英語（外国語）をあらわしたものだと呼ばれるかもしれない」と、笑うに笑えない「日本語」の未来を予測している。この意見においても「外来語」は「英語（外国語）」である。

3.2.3. 「外来語は英語ではない」と考えている意見

「外来語は英語ではない」と考えている34人のうち8割近くの27人が否定的意見を述べている。意見は大きく2つに分かれる。1つは「外来語（カタカナ語）は英語の言葉と違うからとても困ります」という意見に代表される、「英語」との乖離を問題視しているものである。乖離していると挙げられているのが発音に集中している点が特徴的である。もう1つは、1つ目の意見の延長で、「英語と発音が違うので、英語の勉強によくないと思います」「外来語（カタカナ語）がなかったら、たぶん日本人の英語は上手になるだろう」という意見であり、英語と乖離している「外来語」が英語学習の邪魔になるというものである。

これらの意見に述べられている「英語と違う」ということは「英語ではない」ということである。しかし、ここでの「英語ではない」は「英語ではなくて日本語だ」という別の選択がある意見ではなく、「本物の英語ではない」という単なる否定である。「外来語」が「日本語」だと思っていたら、「本物の英語ではない」などとわかりきった指摘はしないであろう。「外来語」の出自が「英語」だと考えているからこそ、違いが気になり、「本物の英語ではない」と言いたくなるのである。そのように考えると、この「英語ではない」は実は「外来語は英語だ」という意識から派生したものだと言えよう。

3.2.4. 「外来語は日本語だ」と考えている意見

「外来語は日本語だ」と考えている27人のうち、肯定的意見は20人（74.1%）に上る。「形が美しい。日本語をより日本語らしくする語だと思う」という手放しの褒め言葉があった。アンケート調査でなければ「日本語をより日本語らしくする」根拠を聞きたいところである。「ときどき難しいですが、日本語のパーツとして必要だと思います」と「日本語」として容認する意見のほか、「勉強したい」という前向きな意見が少なくない（20人中11人）。前向きな意見

には、「外来語（カタカナ語）も日本語ですので、授業のときにもっとたくさん勉強したいです」という積極的な意見と「日本語を勉強し始めた以上、いくら勉強しにくくてもやるべきだと思います」という少々あきらめを伴った消極的な意見とが半々である。

3.2.5. まとめ

以上、日本語学習者の外来語意識を「外来語は日本語ではない」「外来語は英語だ」「外来語は英語ではない」「外来語は日本語だ」の4つに分類したが、「外来語は日本語ではない」と「外来語は英語だ」の境は明確ではなく、「外来語は英語だ」として一つに括れるものである^(注6)。したがって、「外来語は英語だ」と「外来語は日本語だ」と思っている人数の割合は81人：27人で、3対1となる。つまり、「外来語は英語だ（外国語だ）」という外来語意識を持つ日本語学習者が「外来語は日本語だ」という意識を持つ学習者の3倍と、明らかに多いことが分かる。

ここで、外来語意識が外来語学習に与える影響について指摘しておこう。外来語意識が読み取れた142人の意見のうち、外来語に対して「勉強したい」という前向きな意見を書いている学習者が13人いるが、そのうち11人までもが「外来語は日本語だ」という意識を持っている学習者であった。つまり、「外来語は日本語だ」と外来語を日本語として受容する意識が外来語の学習意欲を高めていると考えられるのである^(注7)。

3.3. 学習者の外来語意識の形成要因

前節で見てきたような「外来語は英語だ」という意見が大半を占める日本語学習者の外来語意識はどのように形成されたのであろうか。

何よりもまず、彼らが来日して、街を歩き、日本人と話をし、買い物をし、新聞雑誌を読み、テレビを見て、と日々日本社会で生活していることが最大の要因であることは間違いないであろう。周囲にあふれかえっている外来語を見て、「量が多いと日本語が失われる」と危惧している学習者は少なくない。

2つ目の要因として日本人の影響も考えられる。次は、ある学習者の回答である。「日本語を勉強し始めた時、外来語（カタカナ語）の意味は全然分から

なかったので、日本人に笑われたことがあります。『英語を勉強したことがないのか』とか『英語が話せますか』とか聞かれたこともあります。しかし、日本人は外来語（カタカナ語）と英語の発音が全く違うことを知らないので、私に笑われることもあります。これは最初の頃の話です。この回答に見る日本人は、まさしく「外来語は英語だ」と思っており、文面からはそのような日本人は1人ではなさそうである。また、この学習者も「外来語は英語だ」と思い込まれているため、英語との違いに言及している。日本人の影響はその他にも、「日本人でさえ意味がわからない外来語（カタカナ語）を使うより自国語を使う必要があるのではないかと思う」というように、外来語は日本語ではないから日本人もわからない、という回答にも見られる。日本人から「英語だ」と教わり、日本人もわからないものが「外来語」なのである。

3つ目の要因として、日本語教師の影響が考えられる。「調査の概要」で述べたように、中山（2006）では211人の日本語教師にも調査を実施している。その調査では「カタカナ語を教える際に、どのような点に注意すべきだと思いますか（複数回答可）」（以下、質問C）と尋ねている。その結果、「原語とのずれ」を挙げた教師が169人と8割に上り、最多であった^(注8)。「原語とのずれ」を教えるためには、「原語」を教えることとなる^(注9)。つまり、「外来語」の正体は「英語（外国語）」なのだという説明から出発することになる。原語を教えることにより「外来語は英語だ」という意識を教師が植え付けている^(注10)、と言えるであろう。

他にも学習者が「外来語は英語だ」と考えるに至った要因はあるだろう。しかし、日本語教育における外来語教育を考える際に、最も問題になるのは教師の影響において他にはない。

4. 日本語教育における外来語教育

4.1. 原語を教えるとは

教師用調査票の話が続けよう。調査票には「カタカナ語に関して学習者から何か意見を言われたことがあれば、どのような些細なことでもかまいませんのでご記入ください」という設問があり、これには211人中半数を上回る112人が記入している。そのうち4割に上る45人が「原語とのずれがあり、困る」

等と言われたと回答している。しかも、45人中37人(82.2%)は、先述の質問Cで「原語とのずれ」を教育上の注意点として挙げている。学習者が「原語とのずれ」に困っているからこそ教えよう、という考え方なのであろうか。例えば、「原語とのずれにとまどい、不自然感を持つ学生がいる。日本語の語彙であるという意識をもたせるようにしている」と回答している教師でも「原語とのずれ」を教えている。「原語とのずれが理解しにくいので、原語を考えず日本語として覚えた方がよい」と学習者に言われたと回答している教師も、学習者の提言に耳を貸さず「原語とのずれ」を教えている。

中山(2006)の調査は、日本語教育機関とそこに所属する教師、学習者に対して行ったものであるので、教師が教えている学習者のおおよその母語内訳は表2のとおり、「中国語」、「韓国・朝鮮語」合わせて7割強、「英語」は5%弱である。非英語圏の学習者の中には、「原語」に疎い者もいるため、多くの現場でこの教え方は通用しないはずである。むしろ、回答者が他機関で教えている可能性もあるだろうし、担当しているクラスは全員が「原語」が理解できる、という可能性もあるだろう。しかし、たとえクラス全員が「原語」を不自由なく扱えたとしても、「外国語(日本語)」を勉強するのに他の「外国語(英語)」を介して学ぶ必要があるのだろうか。

外来語が出現したら、まずは原語を教える、というような教え方を母語に関係なく、入門や初級の早い段階でしてしまうと、学習者には「外来語は日本語だ」というより、「外来語は英語だ」と印象づけてしまうであろう。そしてそこから、「外来語は日本語ではない」とか「外来語は英語ではない」といった考えを持たせてしまう。3.2.5で指摘した通り、『「外来語は日本語だ」と認識している学習者のほうが外来語学習に意欲的である」ということであれば、「外来語は英語だ」と考える学習者を増やすことは、外来語学習に多大な負の影響を与えるのではないだろうか。

4.2. 外来語教育とは

前節でみたように、「原語」を教えることにより、外来語は「英語だ」「日本語ではない」「英語ではない」と認識させ、「外来語嫌い」を増やしている結果に陥っているのであれば、外来語教育を見直さなければならないであろう。

そもそも「原語」を教え、「原語との違い」を説明することが日本語教育における外来語教育なのであろうか。「原語」を教え、「原語とのずれ」を教えたところで、外来語を使えるようにはならない。外来語を理解し、使えるようにするためには、日本語の中でその外来語がどのような意味で、どのような用法で使われているのかを教えなければならない。また、外来語は、原語とずれていないものは意味くらしいもの（それすらずれていることも多々ある）であり、表記も発音も用法も日本語の体系の中にあり、原語と違うのが当然なのであるから、一つ一つ原語とのずれを挙げる必要もないのである。原語と同じか違うか、ではなく、日本語でこうだ、と説明すれば、原語に疎い学習者には負担にならないし、原語を理解している学習者は自身で違いを感じ、必要ならば質問してくるだろう。表記にしても、英語からカタカナ語にする、完璧ではない膨大なルールを覚えるくらいなら、初・中級レベルでは一つ一つ暗記して覚えていくほうが確実である。カタカナ表記は「耳で聞いても書けない」し「原語を見ても書けない」ので「覚えるしかない」と最初に学習者に伝え、観念してもらうしかない^(注11)。英語からカタカナにするおおよその表記ルールはある程度日本語が上達し、語彙量が増えてから必要な学習者にだけ教えても遅くはない。さらに、カタカナ表記を見ながら発音すれば、「原語」発音にはならないであろう。「原語」を先に教えてしまうから「原音」に引っ張られた発音になるのである。

教師用調査の質問Cで、教える際に「原語とのずれ」に注意せず、かつ「日本語の語彙としての意識」に注意すると回答した教師は211人中17人(8.1%)に過ぎない。その中には、「私自身が帰化した日本人ですのでカタカナはほとんど暗記して覚えました。やっぱり難しいです」と学習者の経験を持つ教師がいる。その人の学習方法は「暗記」である。我々が外国語の単語を一つ一つ暗記するのと同様、日本語学習者も日本語の単語を一つ一つ意味や表記を暗記し、用法を覚え使えるようにするのが、最も確実で、最も近道なのである。

5. おわりに一原語主義からの脱却を求めて

漢語には出自を求めないのに、外来語ばかりにいつまでも出自を明らかにさせようとすることにより、日本語学習者に「外来語は英語だ」という意識を持

たせ、否定的意見を言わせてしまう。これは日本語を教える日本語教師として問題がある、と言わざるを得ない。

「外来語」を教える際に、真っ先に「原語」を教え「原語とのずれ」を教えることを「原語主義」と呼ぶならば、日本語教師はそろそろ「原語主義」から脱却してもいいのではないだろうか。特に、初・中級レベルの最初の段階での導入が肝要かと思われる。日本語の表記で導入し、日本語における意味や用法を説明し、カタカナ表記を見て発音練習をし、書く練習をするというように徹底的に「日本語の語彙」として教えたらどうだろう。英語のこの単語と同じだと思う学習者がいたら、「そうですね。でも、英語ではなくて日本語なんですよ」と言うだけでいいだろう。知識を導入するのは、日本語の単語として覚えるという姿勢が確立した中級後半以降からでも十分間に合う。

そうすれば、「外来語」と聞くだけで困った顔をする学習者や、上級になっても外来語の発音だけはなぜか不自然だという学習者は今よりは減るのではないだろうか。「原語主義」を脱却し「日本語の語彙」としての教育を行ってくれる教育機関や教師が増えることを願う。

注

- 1) 外国語と外来語の境を引くのは難しい。国立国語研究所(2007)は認知率、理解率、使用率を用いて定着度を測っているが、何%以上なら外来語、などという線を引いているわけではない。筆者自身はカタカナで表記されたり、日本語の発音体系の中で発音されたりしたときに、それはすでに「外来語」になっていると考えているが、定着しているかどうか、理解されるかどうかは別問題である。
- 2) しかし、外来語には、「ボタン」や「ガラス」のようにもとは外国語だと認識されなくなっている言葉も存在する。外来語すべてが外国語扱いられているわけではなく、語により人によって何を外国語と思い、何を日本語と思うのかは揺れている。
- 3) 「難しいが肯定的である」という意見は、評価がより強い「肯定的」が後件に来ているため、「肯定的」に分類した。また、「肯定的であるが難しい」という意見は「両方」に入れた。「易しいが否定的である」「否定的であるが易しい」という意見はなかった。なお、「肯定的でもあり否定的でもある」という意見でも、「否定的要望」が記載されている場合は「否定的」とした。例えば、「類義語で表せることにカタカナ語を使うと人の迷惑になる。カタカナ語をなくしてはいけないが、今より減らしてほしい」と

というような意見である。

- 4) 「外来語」の出自は英語とは限らないため、正確には「外国語」であるが、大半を占める英語を代表として扱い、以下、「英語」と略す。
- 5) 分類は、意見を見てわかる範囲で行った。「本当に日本語が失われると感じています」だけなら「日本語ではない」に分類し、「外国語（特に英語）をいっぱい引用すると、本来の日本語が失われるかもしれない。何年かあとで日本語というのはカタカナで英語（外国語）をあらわしたものだと呼ばれるかもしれない」は「外来語」＝「英語（外国語）」という図式が読み取れるため、「英語だ」に分類している。「日本語ではない」と「英語だ」に分類される意見はつながっており、明確な区別はできない。
- 6) 「外来語は英語ではない」に分類された中でも「外来語は英語だ」と思っている学習者がいるかもしれないが、文面から読み取ることができないため、ここでは除外した。
- 7) これに類した調査結果が堀切（2010）にある。11人の英語母語話者を対象にしたインタビュー調査で、「外来語」を「日本語」としてとらえた場合は肯定的感情につながり、外来語を積極的に使用しようとする、という結果を得ている。
- 8) 「日本語の語彙であるという意識」は96人（45.5%）に過ぎない。
- 9) 教師が教えるまでもなく、教材のリストに記載されていることも多い。
- 10) 教師が植え付ける前に学習者自身が思い込んでいる場合もある。しかし、その場合でも、教師がそれを打ち消すのか、それとも強化するのか、により学習者の考えは左右されるであろう。
- 11) カッケンブッシュ（2005）によれば、初めて見聞きした英語をカタカナで表記する場合、日本人でもバリエーションが幾通りもできる、という。

【参考文献】

- カッケンブッシュ 寛子（2005）「外来語の表記に求められる原音主義の妥当性について—個人差の要因の検討から—」『第3回日本語・日本語教育学会』論文集
- 国立国語研究所（2007）『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』国立国語研究所
- 中山恵利子（2006）『日本語教育現場におけるカタカナ教育の実態調査』平成17-18年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号17520358 平成17年度研究成果報告書 阪南大学
- 新村出編（2008）『広辞苑第六版』岩波書店
- 堀切友紀子（2010）「英語を母語とする日本語学習者の外来語使用行動の実態とその背景要因」『言語文化と日本語教育』39号

【基本文献】

- ◎国立国語研究所 (1990)『日本語教育指導参考書 16 外来語の形成とその教育』国立国語研究所

原語が語形、発音、表記の上でどのように日本語化されるのか、という点について豊富な具体例を示しながら説明しており、日本語教師の知識の形成には非常に役立つ研究である。ただ、最後の章に付された、英単語からカタカナ表記をさせる、という練習問題は対象者の選定や例外の扱い等に注意が必要である。

- ◎彭飛 (2003)『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴』凡人社

「こうして中国人学習者に指導するノウハウの本一漢字と外来語編」という副題どおり、中国人学習者を対象とした教師用指導書で、前半が漢字指導、後半が外来語指導となっている。外来語については、中国人が理解しにくい「外来語と和語・漢語の意味の違い」について 46 項を取り上げ、調査結果を考察している。学習者が悩むのは類義語の意味の使い分けであり、日本語教育においてはその指導が不可欠であるという指摘は意義深い。ただし、「キー」と「鍵」、「ショッピング」と「買い物」のような具体的なものごとを表す語を多く取り上げ、「チャンス」と「機会」、「ケア」と「手入れ」のような抽象的な意味を表す語が少ない点が残念である。

- ◎中山恵利子・陣内正敏・桐生りか・三宅直子(2008)「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』138号 日本語教育学会

手前味噌で心苦しいが、これは、現行のカタカナ教育について日本語教育現場の実態調査(本稿で利用した中山(2006))を行い、問題提起をしたものである。留学生のカタカナ苦手意識は、ひらがな、漢字と同様のカタカナ文字教育、和語や漢語と同様のカタカナ語教育を施していない日本語教育側が生み出していると指摘した点が新しい。しかし、最終章に言及しているとおり、この研究は実態の把握に過ぎず、効果的な教授法や教材を作り上げることが課題である。

国語教育における外来語—コーパスによる類型化を通して—

田中 牧郎

キーワード：語彙教育 教育基本語彙 教育用語 語彙レベル コーパス

1. はじめに

国語教育における外来語の扱いは、長らく、原語調べをはじめとした外から来た言葉と見た扱いが続いてきたが、近年は、和語や漢語との役割の違いや使い分けなど、日本語の語彙として取り上げるようになりつつある。この変容は、日本語の語彙における外来語の占める位置が大きくなってきたことによるものだと考えられるが、その扱いはまだ不十分である。本稿では、国語教育における外来語の取り上げ方の現状について、現代日本語における外来語の実態や国語以外の教科を含めた教科書における外来語の実態と突き合わせてその問題点を整理した上で、今後どのような方向に向かうことが期待されるのかについて、考えてみたい。現代日本語や教科書の語彙の実態把握には、近年整備が進んだ「コーパス」を用いる。

2. 国語教育における外来語の扱いの現状

2.1. 学習指導要領

学習指導要領や検定教科書における外来語の扱いを調査した陣内(2007)は、小学校・中学校・高等学校いずれにおいても、その比重が非常に軽いこと、語種としての外来語の知識を与える域を出ていないことを問題視している。

陣内の調査の後、小学校・中学校については、2008年に学習指導要領が改訂され、それに基づく新しい教科書も使われ始めているので、今回改めて調査を行った^(注1)。新しい学習指導要領では、外来語の扱いに二点変更が加わった。ひとつは、小学校に外国語活動の教科が新設されたことにより、外国語としての英語への導入に外来語を取り上げるものであるが、この点は英語教育の問題

になるので本稿では扱わない。もうひとつの変更点は、中学校の学習指導要領・国語に、次のような一項が加わったことである。

慣用句・四字熟語などに関する知識を広げ、和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感を磨き語彙を豊かにすること。

改訂前の学習指導要領には、中学校において外来語に関する記述は全くなかったが、小学校の国語では、「和語・漢語・外来語などの区別について関心をもったりできるようにする」という記述があり、今回の改訂でも不変である。新しい学習指導要領では小学校で、和語・漢語・外来語の基本的な知識を身につけた上で、中学校で、和語・漢語・外来語を使い分けることと、それによって語感を磨いて語彙を豊かにすることが謳われるようになったのである。語感を磨き語彙を豊かにすることは、語彙教育の基幹に位置付けられるべきことであり、その文脈に、和語・漢語と並んで外来語が位置付けられた意義は大きい。

2.2. 国語教科書における外来語教材

学習指導要領の中に外来語の扱いが明示されたことにより、中学校の国語教科書における外来語教材にも変化が見られる。ここでは3社の教科書について改訂前後で比較してみた^(注2)。

例えば、M社版では、前回の改訂版である2006年版では、1年生で、和語・漢語・外来語の特徴についての知識を教える内容が中心であったが、今回の改訂版である2012年版では、取り扱う学年を3年生に上げて、和語・漢語・外来語の使い分けや言い換えの例を通して、語種によって印象が違ってくることや、適切な語の選択を考えさせる内容になっている。また、S社版、K社版においても記述量を倍増させ、M社版と同じ方向で充実を図っている。このように、いずれの社においても、知識提示にとどまらず、和語・漢語との使い分けや言い換えを取り上げることで、語彙教育の素材として外来語を扱おうという転換の姿勢がはっきりと打ち出されている。

2.3. 国語教科書の「注意する語句」における外来語

ところで語彙教育の素材に外来語を扱うことは、外来語や語種が主題となる教材だけではなく、他の様々な教材に使われている外来語によっても可能な

ずである。和語や漢語が、教科書中の多くの教材の語彙を取り立てることで多角的に扱われていることを思えば、外来語についても同様のことが期待されよう。そこで、国語教科書の主要な教材に付けられている「注意する語句」の情報を調査してみることにした。これは脚注欄などに、一部の語句が本文から抜き出されているもので、意味調べや類義語や対義語の調査あるいは短文作成などを喚起していることから、教室活動や生徒の自学自習において取り立てて扱われる語彙だと考えられる。2.2 で言及した3社の中学校教科書の2012年版3冊ずつについて、この扱いがなされている語句を語種別に集計したところ表1のようになった。なお、「肝に銘じる」など慣用句のものは、それ全体を一語と扱って集計した。

表1 中学校国語教科書における「注意する語句」の語種

教科書 \ 語種	和語	漢語	外来語	混種語	計
M社版	127	122	0	19	268
S社版	105	124	1	31	261
K社版	109	137	1	43	290

表1から明らかなように、どの社の教科書も、和語と漢語が多く取り上げられているのに対して、外来語はS社版とK社版に1語ずつ（「スター」「マニュアル」）あるだけである。混種語は、そのすべてが和語と漢語の構成要素からなるものである。つまり、教材において語句に注意が向けられる際に、外来語はほとんど無視されているのである。先に見た外来語教材は充実を見せ始めたとは言え、語彙教育の素材としては依然として外来語は無視されており、指導要領が謳う「語感を磨き語彙を豊かにする」素材に加えられていないと見ざるを得ない。

2.4. 教育基本語彙表

語彙教育の分野には、教育（学習）すべき基本語彙表を定めて、語彙指導の基盤としようという伝統的な領域がある。20世紀初めの英語教育におけるソーンダイクの研究が著名であるが、その影響を受けて、日本語においても、第二次大戦中に阪本(1943)が出され、戦後に2度改訂され、近年も、甲斐(1982)、国立国語研究所(2000)、同(2009)、井上(2001)など研究が続けられている。

国立国語研究所（2009）は、その種の教育基本語彙表7種をデータベース化したものであるが、そこに収録されているものから外国人を対象とするものを除いた6種について、その収録語彙を語種別に調査した。その結果、外来語の比率は、2.9～6.4%であり、概して、高い学年までをも対象にするほど、また収録語数が多くなるほど、さらに発表年が新しいものほど外来語率は高くなっていくという傾向が確かめられた。中学校までを対象とする語彙表は3種あるが、その外来語比率は3.2～6.4%であり、この数字を基準として、2.3で見た中学校国語教科書での「注意する語句」において、外来語が全くとってよいほど扱われていない実態を評価すると、教科書の扱いが軽すぎるということが問題視されよう。

そもそも、このような教育基本語彙表は現在、外来語に限らず、教科書の編集や学校での語彙指導に十分に活用されているとは言いがたい。活用への努力を現場が怠っているということもあるかもしれないが、語彙表のあり方や活用方法についての基礎的な研究が十分に行われていないという問題が大きいのではないだろうか。特に、多くの語彙表で、語の選択基準やレベルへの配属基準が具体的に示されていないなかったり、五十音順の単語リストにとどまり意味や文脈への関連づけが工夫されていなかったりするの、教育基本語彙表をどのように使ってよいかを分かりにくしている最大の原因だと思われる。

しかし、こうした問題は、近年、日本語学の分野で整備されてきた「コーパス」による調査をもとに語彙表を作っていくことで改善することが期待できる。外来語についても、日本語の語彙におけるその位置をコーパスによって具体的に突きわめながら、教育への応用を考えていくことができるようになっていくと考えられる。次節では、その方向での研究例を示していこう。

3. コーパスでとらえる外来語の位置

3.1. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と「学校・社会対照語彙表」

日本語の語彙において外来語がどのような位置にあるのかについて、教育に役立てることを目的として明確にとらえた研究は、従来ほとんどなかった。語彙調査は、戦後まもなくから国立国語研究所によって行われてきたが、いずれも雑誌や教科書といった特定の媒体を対象としたものであり、その調査結果は

日本語の語彙全体を代表しているものではなかった。しかし近年は、コンピューター技術を導入することで、一度に広範囲の媒体を対象とした語彙調査を行うことが可能になってきた。国立国語研究所が2011年に公開した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』^(注3)は、現代日本語の書き言葉の様々な媒体をバランスよく対象としており、現代の書き言葉を代表していると言ってよい。コーパスとは、電子化された資料という意味でも使われるが、言語学の用語として厳密に使う場合は様々な媒体からバランスよくサンプルが採られ、誰でもが利用できて調査や分析を迫試できる電子化資料を指す用語である。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』が公開されたことにより、誰でもが様々な目的に応じた語彙調査を行うことが可能になった(山崎2009)。語彙調査の結果から受動的に教育への応用を考えるのではなく、教育への応用を目的として独自に語彙調査を企画できるようになったのである。

コーパスをめぐるこのような研究状況を踏まえ、筆者らは、国語教育・国語政策にコーパスを役立てる目的で調査と研究を行い、報告書とデータ集にまとめた(田中ほか2011)。ここではそのデータ集に納めた「学校・社会対照語彙表」を用いることにする^(注4)。この「学校・社会対照語彙表」は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』が含む媒体のうち、「図書館書籍」「出版書籍」「雑誌」「新聞」「知恵袋」「ブログ」の6種について語彙調査を行い、独自に作成した小・中・高等学校の全教科の「教科書コーパス」についても語彙調査を行い、社会一般の書き言葉で使われる語彙と各教科の教科書の語彙とを対照できるようにしたものである。

3.2. 語彙レベルから見た外来語

「学校・社会対照語彙表」には、上記の6種の媒体ごとに、次のような手順で設定した「語彙レベル」の情報が付与されている。

- 1 各媒体の語彙を、出現度数の高い順に配列。
- 2 上位の語から順に、その度数を累積していき、累積度数が当該媒体の延べ語数の何パーセントを占めるかというカバー率(累積使用率)を算出。
- 3 カバー率に一定の基準を設けて、語彙をレベルaからレベルeまでの5つに区画^(注5)。

最も高頻度のレベル a には基本的な語彙がきて、b→c→d→e と低頻度のレベルに進むにしたがって、より周辺の語彙がくるようになる。このようなレベル設定は、2.4 で見た教育基本語彙表でも行われているが、一つ一つの語がなぜそのレベルに入るのかの根拠が明確でないという問題があった。コーパスによるレベル設定は各レベルへの語の配当の根拠が明確であるという利点がある。コーパスによる語彙レベルは各媒体での使用実態を表すもので、それ自体が教育に利用されることを想定しているものではなく、このレベルをもとに語彙の性質を研究する材料になるものである^(注6)。

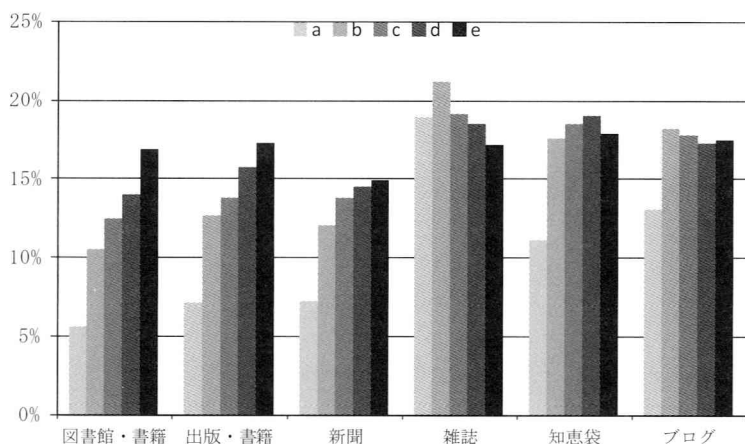


図1 媒体別・レベル別の外来語の比率

「学校・社会対照語彙表」の語彙レベルの情報をもとに各媒体別・レベル別に外来語の占める比率を調査したところ、図1のようになった^(注7)。図1からはまず、外来語の比率は全体として、「雑誌」「知恵袋」「ブログ」で高く、「図書館書籍」「出版書籍」「新聞」で低いことが分かる。前者の3媒体と後者の3媒体の違いがどこにあるかを考えてみると、前者は、私的で日常的な話題が取り上げられやすく、娯楽性も高く、仲間うちへの情報提供という性質が強いものに対して、後者は、公共的で社会的な話題が多く、まとまった内容を不特定多数の人に伝える性質が強いと考えられる^(注8)。このことから、前者に多い外来語には、私的な日常語性や仲間うちの言葉という性質があるのではないかと考えられる。外来語率がひととき高い雑誌は、レベルbの比率が最も高く、他の

レベルはあまり差異はなく、また、最も基本的な語彙の層であるレベルaでもその比率が高いという、他の媒体にはない特徴を持っている。雑誌の多くは流行・趣味・仕事・学術など比較的狭い分野で専門性を追求する内容を持っていることから、外来語には専門語性があると見ることができよう。

一方、外来語率が総じて低い、「図書館書籍」「出版書籍」「新聞」では、 $a \rightarrow b \rightarrow c \rightarrow d \rightarrow e$ と進むにつれて外来語率が高くなっていく特徴が共通し、特に「図書館書籍」で顕著である。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「図書館書籍」は、公共図書館に共通して所蔵する書籍、すなわち、多くの人に読まれるべきものとして選ばれた書籍のリストから選択されたサンプルから構成されており、教育の場で扱う必要性の高い語彙が反映している性質が、他の媒体に比して高いと考えられる。

3.3. 意味分野から見た外来語

語彙レベルのほかに、日本語の語彙における外来語の位置を考える際の重要な観点に、意味分野がある。意味分野によって外来語が深く浸透しているところと、あまり入り込んでいないところがあるからである。語彙を意味分野から

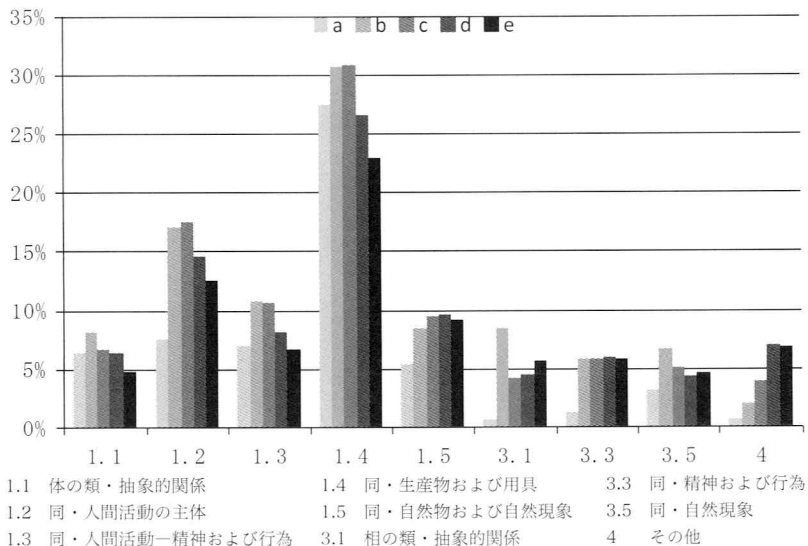


図2 図書館書籍における意味分野別・レベル別外来語率

とらえる際には、シソーラス（意味分類体辞書）を用いるが、日本語のシソーラスの一つに、国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』がある。「学校・社会対照語彙表」には、このシソーラスの意味番号を「分類語彙表番号」として添えているので、これを用いて意味による外来語の分布を見ていくことにする^(注9)。

図2は、「図書館書籍」に出現した語彙について、分類語彙表番号が示す「類」「部門」別に、語彙レベルごとの外来語率を示したものである。これによると、外来語率は「1.4 体の類・生産物および用具」が突出して高く、しかも基本的なレベルである a・b あるいは c などでも高い。この部門は、衣食住をはじめとした生活にかかわる物品などを指す名詞が分類されているところである。外来語率が次に高い部門は、「1.2 体の類・人間活動の主体」であり、ここには仲間や職業あるいは社会や組織にかかわる名詞が分類されている。ただし、この部門ではレベル b・c では外来語率が高いものの、最も基本的なレベル a では際立って低くなっている点が 1.4 の場合と異なっている。それ以外の部門は、外来語率は総じて低く、特に 3.1 から 4 といった、「相の類」「その他」では低い。しかも、これらの類では、レベル a の外来語率が極端に低く、基本的な語彙の層には外来語がほとんど入り込んでいない。

3.4. 和語・漢語と比較した外来語の位置

以上、語彙レベル、意味分野の観点から外来語の位置を概観してきたが、具体的な語彙項目に焦点をあてて細部を見ることで、外来語の位置や性質はよりはっきりと見えてくる。ここでは、外来語率が最も高い「1.4 体の類・生産物および用具」の部門の中でもその高さが際立つ（50.0%）中項目「1.46 機械」の中から「1.460 灯火」を、外来語が少ない部門である「1.3 人間活動・精神および行為」の部門の冒頭の中項目「1.30 心」の中から「1.307 意味・問題・趣旨など」を取り上げよう。

まず、「1.460 灯火」に分類される語彙のうち、「学校・社会対照語彙表」に掲出されているものは、和語 6、漢語 21、外来語 16、混種語 0 である。外来語は、和語よりも多く、漢語に次ぐ位置にある。灯火のように、近代化以後に新しい器物が多く取り入れられた意味分野の語彙では外来語の比重が高い。ただ、

日常生活で触れる具体物の名称であれば、その語彙も生活を通して習得される場面が多く、学校での語彙教育として取り立てる必要性はあまり高くないという意見もあるかもしれない。指導の必要性がより高いのは、日常生活で触れる機会の少ない抽象的な意味を表す語彙である。

抽象的な意味分野には外来語は少ないが、その例として、「1.3070 意味・問題・趣旨など」について、語種別・レベル別の語数を示すと表2の通りである。

抽象的な意味を表す語彙では、漢語が多くを占める場合が多く、この「1.3070 意味・問題・趣旨など」においてもその傾向が著しい。外来語に注目すると、確かに少数派にとどまってはいるが、すべてのレベルに入り込んでおり、特にレベルcでは和語よりも数が多いなど、決して無視してよい位置にあるとは言えないだろう。外来語はそれが少ない意味分野であっても、語彙体系の中で重要な位置を占めているものが多いと見るべきで、語彙教育の素材として積極的に扱っていくことが求められるであろう。

表2 「1.3070 意味・問題・趣旨など」の語彙（語種・レベル別）

語種 レベル	和語	漢語	外来語	混種語
a	5	15	2	0
b	4	17	2	0
c	3	25	9	0
d	6	22	3	0
e	9	34	2	1

4. 国語教育での外来語の扱いを考えるために

4.1. 語彙体系における位置の確認

前節までで、コーパスを用いて現代日本語における外来語の性質や語彙体系の中での位置を確かめながら、それらに見合った外来語の指導が求められることを述べてきた。本節では、そのことについてさらに具体的に検討し、教育への応用について踏み込んで考えていく。その事例には、前節の終わりで見た「1.3070 意味・問題・趣旨など」の語彙を引き続き取り上げる。

『分類語彙表 増補改訂版』では、この分類項目は、さらに22の「段落」に下位区分されており、そのうち9つの段落に外来語が含まれている。その中から、このあと事例として取り上げる4つの段落について、レベル別に語彙を

表3 「1.3070 意味・問題・趣旨など」における外来語を含む段落（部分）

段落 レベル	1.3070-05	1.3070-12	1.3070-16	1.3070-22
a	主題、話題、 テーマ	大体	構想、筋	理念、観念、 概念、イメー ジ
b	題、題材	概要、要約	ストーリー	表象
c	本題、 トピック	大綱、大概、概略	プロット、粗筋、 筋書き	イデー、内包、 フィーリング
d	画材	大要、ダイジェスト	想、大筋	心象、外延
e	話頭	大意、大略、概要、 要略、アブストラクト、 レジュメ	曲想、筋立て	

一覧にしてみよう（表3）。

はじめに段落1.3070-05の語彙について考えてみよう。この段落のレベルa～cの7語について、「学校・社会対照語彙表」から「図書館書籍」以外の媒体も合わせてレベル情報を引用すると、表4の通りである。空欄になっているところは、その媒体にはその語が使用されていないことを示す。

表4 段落1.3070-05の語彙の媒体別の語彙レベル

語 媒体	図書館書籍	出版書籍	新聞	雑誌	知恵袋	ブログ
主題	a	b	c	b	b	b
話題	a	a	a	a	a	a
テーマ	a	a	a	a	b	a
題	b	c	d	b	d	b
題材	b	b	b	b	e	c
本題	c	d		c	c	b
トピック	c	c	c	b	d	b

まず、表3で最も基本的なレベルaに入っていた「主題」「話題」「テーマ」の3語について、表4の情報を見てみよう。「話題」は6媒体すべてでレベルaであり、基本度がきわめて高いということができよう。これに対して「主題」は、レベルaは「図書館書籍」に限られており、基本度はあまり高くない。そして外来語「テーマ」は、「知恵袋」を除きレベルaであり、「話題」に準じて基本度が高いということが出来る^(注10)。

4.2. 教科書での使用状況の確認

基本度が高い語は平易なものも多く、教育の場で取り立てる必要性は高くはないとも言えるが、抽象的な意味を表す語彙の場合は、そうした語も小学校など低学年においては指導の対象とすべき語もある。また、ある語を指導する際に、意味の説明や言い換えの手段として用いる語として、その使い方を工夫すべき語もあるだろう。上記の3語について言えば、例えば、「主題」を指導対象とする際に、より基本度の高い「話題」や「テーマ」を指導手段に用いることが想定される。

「学校・社会対照語彙表」には、小学校から高校までの全教科の教科書（2005年版）を対象とした「教科書コーパス」に対する語彙調査の結果をもとに、初出学年（小学校_前半、小学校_後半、中学校、高校の4段階）と、特徴語となっている教科^(注11)、および中学校と高校を合算した教科別の出現度数が示してある。表4で取り上げた7語について、これらの情報を抜き出してまとめると、表5のようになる。表5を見ると、「主題」「話題」「テーマ」いずれも多く教科でよく用いられることが確認でき、特に次の二つのことが注目される。

表5 段落1.3070-05の語彙の教科書での状況（数字は出現度数）

教科書語	初出学年	特徴語である教科	国語	数学	理科	社会	外国語	技術家庭	芸術	保健体育	情報
主題	小_後	国社外芸	49	0	0	67	65	0	73	0	0
話題	小_前	国外	108	1	15	6	20	0	3	0	2
テーマ	小_後	国理社外芸情	137	2	118	143	22	12	32	8	43
題	小_前	国	19	1	4	1	0	0	1	0	0
題材	小_後	国芸	20	1	1	17	0	1	9	0	1
本題	高		2	0	0	0	1	0	0	0	0
トピック	高	国外	10	0	0	1	20	0	0	0	0

注目すべきことの第一は、基本度が特に高い「話題」と「テーマ」を比べると、外来語「テーマ」の方が、教科書ではより広い教科でより多く用いられている点である。これは、一般用語としては同程度のレベルでありながら、教科書の用語としての重要性は、「話題」よりも「テーマ」の方が勝っていることを示

している。このことを根拠に、小学校低学年などでは、外来語「テーマ」それ自体を、指導対象として取り立てる意味があると考えられることもできよう。

第二に注目されるのは、一般用語としての基本度がやや低い「主題」について、それが特徴語となる四つの教科での出現度数が、いずれもきわめて多いという点である。ほぼすべての教科に出ている「テーマ」と違って、特定教科でのみ頻出する「主題」は、教科の専門性が高いと考えられることから、それが表す専門概念がそれぞれの教科において指導されなければならないのではないかと考えられる。

「主題」という語の各教科での扱われ方を調べると^(注12)、まず、国語科では、文章の構成や作文の方法を学習する際に、また外国語科では、英語の文章構成を学ぶ際に、この概念が詳しく説明されており、いずれも高校で扱われている。一方、社会科では、土地利用図の一つとして、道路図とか人口図など特定の主題について描いた「主題図」という用語が繰り返し使われ、芸術科では絵画や音楽の「主題」が扱われており、これらの教科では中学校から登場している。そして、それらの専門概念を説明したり言い換えたりする記述には、次のように「テーマ」という外来語が使われているのである。

テーマを決めて表現した地図を「主題図」、多面的に表現した地図を「一般図」というんだよ。(中学校・社会)

その文章(または話)で何を伝えたいか、この「何」にあたる事柄が、主題である。主題は「テーマ」「話題」「トピック」とも呼ばれる。(高校・国語)

このように、一般用語としては一見同じ位置にあると見える「主題」「話題」「テーマ」にも、コーパスを用いて詳しく調査をするとその違いが見出され、教科書の用語としても異なる層にあることが判明する。こうした実態を踏まえた上で、どの語を指導対象として取り立て、その指導手段としてどの語をどのように運用すべきかなどについて、考えていくことが望まれよう。上に挙例した高校の国語教科書の記述では、「主題」に対して「テーマ」「話題」「トピック」が、すべて同じ意味の言い換え語として出てくる。確かに、上述したように「テーマ」という語を、「主題」という語の指導手段に用いるのは適切であるが、「話題」は学習用語としての性質が弱く、後に見るように「トピック」は別の概念に深く関わるため、ここですべてを同じように並記してしまうのは、適切でない。

低学年において多くの教科に共通する基本的な学習用語として「テーマ」を指導し、高学年で教科別に専門的な学習用語として「主題」を指導すべきであり、「主題」を指導する際にその手段として「テーマ」を用いるのがよいのではないか。このような体系的・整合的そして段階的な語彙指導のあり方を追求していくような研究や実践を試みていくことが求められるのではないだろうか。

4.3. 教科書の用語の種類

「主題」「話題」「テーマ」が属する段落 1.3070-05 には、もうひとつ「トピック」という外来語がある。表4・表5によれば、図書館書籍のレベルはc、教科書では高校が初出であり、国語科と外国語（英語）科で特徴語となっている。

段落は、文章の中でまとまった内容を表している一区切りであることが望ましい。内容的につながった幾つかの文で組み立て、段落全体として一つのことを述べるようにしよう。そのためには、一つの段落内部を、言おうとすることを一口に述べた文（トピック・センテンス）とそれを具体的に補足・説明した文とで構成することが必要だ。（高校・国語）

メイン・アイデアを簡潔に表現した文は、トピック・センテンス（topic sentence）と呼ばれ、しばしばパラグラフの冒頭に現れます。（高校・英語）

これらの例ではいずれも、文章の構成を学ぶ部分で、「トピック」は段落で主張していることの意味を意味しており、それを表す文を「トピック・センテンス」という用語で重要概念として提示している。それぞれの教科書では、この記述の後に「トピック」という語が単独で何度か出てくるが、いずれもこの意味のものである。4.2で引用した国語教科書の記述のような「主題」「テーマ」「話題」と簡単に入れ換えられるような「トピック」の使い方は、教科書ではきわめて少ない。語彙教育においても、「トピック・センテンス」という国語科や英語科の専門概念を学習する際に、「トピック」の語を取り立てることに意義がある^(注13)。

表3に示した他の三つの段落には、ほかに外来語が7語含まれている。その7語について、媒体別の語彙レベルと、教科書の初出、特徴語となる教科を一覧にしたものが表6である。特徴語となる教科がある「ダイジェスト」「アブストラクト」「ストーリー」「イメージ」「イデー」のうち、「アブストラクト」

は、英語 abstract を含む文献名が多くのデータの典拠として引かれているものであるため除外し、他の4語について、教科書での使用例を具体的に調べてみよう。

まず、「イデー」は、社会科でプラトンのイデア論を学習する際に限って頻出するものであり、教科の専門用語と扱ってよいものである。一方「イメージ」は、特徴語となる芸術や情報だけでなく、多くの教科で多用されており、特定の教科の専門用語としてではなく、学習基本用語の位置にあるものと考えられる。ちょうど、「テーマ」が、「主題」という語の指導手段になったように、「理念」「観念」「概念」「表象」「心象」など、より抽象的で難しい語を指導する際の指導手段の語として「イメージ」を用いることも考えられる。

表6 段落 1.3070-12・1.3070-16・1.3070-22 の外来語

語	媒体 図書 書籍	図書館 書籍	出版書籍	新聞	雑誌	知恵袋	ブログ	初出 学年	特徴 教科
ダイジェスト		d	d	c	c	e	c	中	情
アブストラクト		e			d		e	高	社
レジュメ		e	e				e	高	
ストーリー		b	b	b	a	b	a	小_後	外情
プロット		c	c		e	e	e	高	
イメージ		a	a	a	a	a	a	小_後	芸情
イデー		c	e		d		e	高	社
フィーリング		c	d		b	d	d		

次に、「ダイジェスト」は、「要約文(ダイジェスト)を作る」(高校・情報)のように、「要約(文)」と同じ意味で使われており、「ストーリー」も、「イラストを見ながらストーリーの要点を述べ」(中学・英語)のように、「(粗)筋」と同じ意味で使われている。この2語は、情報科や外国語科の特徴語となっているが、教科の専門用語ではなく、一般用語として外来語を多用しがちな教科(注14)に入り込んだと考えるべきであろう。

4.4. 教育用語の類型化

以上、コーパスから得られる、語彙レベル、意味分野、特徴教科、教科書で

の意味用法といった情報をもとに、教科書で用いられる外来語を類型化できることを、具体的事例に沿って述べてきた。教育の場で、積極的に取り立てるべきものとしては、「テーマ」「イメージ」のような、基本度が高く幅広い教科で用いられ、他の重要用語を説明する手段としても積極的に活用されるべき、「学習基本用語」と称することのできる語彙と、「トピック」「イデー」のような、学習基本用語に比べて基本度が低く特定の教科で教科学習の重要概念として用いられる、「教科専門用語」と称するのが適切な語彙との、二つの類型に分けることができる。学習基本用語は、学習の基盤となる語彙として、国語科で中心的に扱っていくべきであろう。教科専門用語は、教科学習の中で概念習得を目指して扱われるものであるが、国語科としても、各語のそうした特徴を把握しておき、他教科の学習と連携した語彙教育を志向していくことが望まれるのではないか。このほかに、「ダイジェスト」「ストーリー」のように、教科書に入り込んでしまう一般用語としての外来語もあるが^(注15)、この類の語は取り立てて扱う必要性は低いものと考えてよいであろう。コーパスの情報に基づく語彙の類型化は、外来語に限らず、漢語・和語をも射程に入れて考えることができるものである。

表6で、教科の特徴語になっていない外来語が3語あったが、それらはどのように考えればよいだろうか。まず、「フィーリング」は、教科書に全くなく、雑誌における語彙レベルがbとなっていて他を圧して基本的なものになっているが、これは、3.2で見た、仲間うちの言葉という性質を持っていることを示していよう。この性質をもつ外来語は、学習用語として取り立てて指導すべき語でないだけでなく、公的な場面では安易に使わない方がよいといった指導を行うことも場合によっては考えられる。また、「レジュメ」「プロット」は、周辺的な語としての性格が強いが、「雑誌」「知恵袋」「ブログ」よりも、「図書館書籍」「出版書籍」で基本的なレベルになっていることから、教育における重要度はやや高いのではないか。実際に、2012年版の中学国語教科書の中には、「レジュメ」という用語が、研究発表の仕方を学ぶ教材で多く使われるようになったものがある。「ダイジェスト」「ストーリー」が一般用語として教科書に流入したのとは異なり、「レジュメ」は教科専門用語として教科書に積極的に取り込まれ始めたものと言え、教育上の重要性は高いと考えられる。

5. おわりに

本稿でははじめに、国語教育において、いまだ外来語が軽視されていることを見たが、そう扱われる背景には、外来語が持つ次のような二つの性質があると考えられた。第一に、具体物を指す語や日常語が多いため、わざわざ教育の場で取り上げる必要性が意識されにくかったという点である。第二に、基本度がかなり低く、語彙の周辺に位置付いているために、語彙体系上重要でなく、やはり取り上げる必要性が意識されにくかったという点である。この二つの性質は、確かに多くの外来語にあてはまるが、外来語全体に及ぶ性質ではなく、詳しく調査していくと、抽象的な意味を表す外来語も少なくなく、基本度が高いものや語彙体系の中で重要な位置を占めるものもあることが明らかになった。このように、外来語としてひとくくりにして扱うのではなく、外来語のなかを類型化して、語彙教育で扱う必要性の高いものを見きわめ、その類型に応じた取り上げ方を工夫していくことが必要だろう。

語彙を総合的に類型化し、語彙教育への応用を目指す試みは、外来語に限らず、漢語・和語についても、国語教育学でも日本語学でも、従来ほとんど行われてこなかった。しかし、本稿の事例で示したように、コーパスに基づく語彙調査を行って分析を深めていくことで、この方向の研究を進展させることは十分に期待できる。

従来、漢語や和語の教育は漢字教育と一体化して進められる面が強く、漢字から独立したところで語彙教育を実践していくことは現実には難しい。その点、外来語は、漢字とは切り離されたところで扱うことができるので、本稿で述べたような新しい方向の研究を展開しやすいという利点があるように思う。外来語の研究から、語彙教育研究の新しい地平が開けてくるのではないだろうか。

注

- 1) 高等学校についても指導要領は改訂されたが、これに対応した教科書は2012年春時点ではまだ使用されていないので、今回は調査対象としなかった。
- 2) 調査対象にした教科書は、光村図書出版、三省堂、教育出版の各社が編集発行している、2006年版と2012年版の中学校国語教科書である。
- 3) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の設計は前川(2008)、利用のための情報は、

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ など。

- 4) 「学校・社会対照語彙表」についての情報は、<http://www2.ninjal.ac.jp/tokuteiseisaku> など。
- 5) 単語を認定する基準は国立国語研究所が規定する短単位に従い、コンピューターによる自動形態素解析をUniDicとMeCabを用いて実施した調査である。レベル分けのものさしにカバー率を用いることで、規模の異なる媒体を対象としても均質なレベル分けが可能になる。なお、短単位、UniDic、MeCab、カバー率についての説明も合わせて、この調査の詳しい手法については、田中ほか(2011)に記した。
- 6) 教育基本語彙表は、専門家の見識による語彙選定とレベル配当であるという点に価値がある。本稿で提示するコーパスによるレベル分けは、それとは異なり、語彙の使用実態調査に基づいているところに価値がある。語彙の実態調査に基づいて語彙をレベル分けして外来語の性質を考えようという研究に、樺島(2004)がある。
- 7) この図は、田中ほか(2011)のp.80の表をグラフ化したものである。
- 8) 雑誌やブログにまとまった内容を不特定多数の人に伝えるものがあつたり、書籍や新聞に娯楽性の強いものがあつたり、ここに述べたことにあてはまらない例外ももちろんあるが、全体的傾向はこのように認められよう。
- 9) 『分類語彙表増補改訂版』では、多義語には複数の番号が当たっている。「学校・社会対照語彙表」には、それをひとつの見出し語に並記した「統合版」と、別々の見出し語を立てた「分割版」とがある。ここでは「分割版」を用いるが、現在のコーパスでは語義ごとに使用度数を数えることができないので、いずれの語義にも総合度数が掲出されてしまうという問題がある。
- 10) 田中ほか(2011)に収録する「BCCWJ主要コーパス語彙表」には、各媒体における出現度数を示しているが、同じレベルaでも、「話題」「テーマ」と「主題」との間には度数の大小に大きな開きがあり、このことから基本度がきわめて高い「話題」「テーマ」と、それほど高くない「主題」に違いがあると言える。
- 11) 「特徴語」は、図書館書籍と各教科別の教科書における語の出現度数を統計的に比較し、有意に一方に偏っている場合に、その特徴語であると見なす方法で、特定していった。詳細は、田中ほか(2011)に記した。
- 12) ここでは、教科書コーパスの対象となっている2005年版を調査した。
- 13) 「主題文」というtopic sentenceの訳語も国語科と英語科で使われており、この場合に限れば、「トピック」と「主題」は置き換えられる。しかし、先述したように「主題」は全教科を見わたすともっと広い意味を持っており、topicの訳語が「主題」だと考えるわけにはいかない。
- 14) 情報科、外国語科のほか、技術家庭科に、一般用語としての外来語が登場する場合

が多い。

- 15) 教科書の外来語には「一般用語」「学習基本用語」「教科専門用語」の三つの類型があることになるが、このような三区分の考え方は、バトラー（2011）においても、英語の場合と日本語の場合の双方について、示されている。

【参考文献】

- 井上一郎（2001）『語彙力の発達とその育成—国語科学習基本語彙選定の視座から』明治図書
- 甲斐睦朗（1982）『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』光村図書
- 樺島忠夫（2004）『日本語探検—過去から未来へ—』角川書店
- 国立国語研究所（2000）『日本語基本語彙—文献解題と研究—』（国立国語研究所報告 116）明治書院
- （2004）『分類語彙表 増補改訂版』（国立国語研究所資料集 14）大日本図書
- （2009）『教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—』（国立国語研究所報告 127）明治書院
- 阪本一郎（1943）『日本語基本語彙 幼年之部』明治図書
- 陣内正敬（2007）『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』世界思想社
- 田中牧郎・相澤正夫・斎藤達哉・棚橋尚子・近藤明日子・河内昭浩・鈴木一史・平山允子（2011）『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』（特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班報告書）
- バトラー後藤裕子（2011）『学習言語とは何か—教科学習に必要な言語能力—』三省堂
- 前川喜久雄（2008）「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」『日本語の研究』4-1
- 山崎誠（2009）「国立国語研究所における諸研究—語彙調査の系譜を中心にして」『国文学 解釈と鑑賞』74-1（至文堂）

【基本文献】

- ◎国立国語研究所（2000）『日本語基本語彙—文献解題と研究—』（国立国語研究所報告 116）明治書院
- 大正時代から平成 10 年ごろまでに作成された教育基本語彙表の類 122 件について、見開き 2 ページずつで解説したもの。語彙教育において、何が問題にされ、どのような取り組みがなされてきたかが一望できる。
- ◎樺島忠夫（2004）『日本語探検—過去から未来へ—』角川書店
- 日本語の語彙と表記について、歴史をたどり、未来を展望している。語彙調査デー

第2部 言語生活論的アプローチ

タを用いて、語彙をレベルに分けて、和語・漢語と対比した外来語の位置を明確にしている。

◎石川慎一郎（2008）『英語コーパスと言語教育』大修館書店

コーパスを用いた語彙教育が進展している英語教育分野の、コーパス入門書。コーパスの意義や、コーパスを語彙教育に役立てる具体的方法が、分かりやすくまとめられている。日本語の研究者にもじゅうぶん参考になる。

あとがき

企画の発端は、2011年5月末、神戸大で開催された日本語学会だった。激しい雨の中の学会だった。シンポジウムの休憩時間、書籍展示会場は半ば雨宿りの場と化していた。陣内と田中にやや遅れて相澤が加わり、学会ならではの話の輪ができた。声をあげたのは陣内だった。外来語研究は新しい段階に入った。「外来語研究の新展開」で論集を編むというのはどうだろうか。

編者三人には共通点があった。「外来語」が生んだ縁である。2002年から2006年まで国立国語研究所「外来語」委員会で一緒に仕事をした。委員会の下支えをする作業部会のメンバーだったから、審議資料の準備も含めて外来語について徹底的に議論をした。議論の中身はそれぞれの知識や経験を総動員しても間に合わないくらい、時に厄介で手強いものだった。外来語研究は新局面に入ったのだ、そんな言葉が誰からともなく出てきたことを思い出す。

ここ10年ほどの日本語外来語研究は目覚ましい発展を遂げている。従来からある国語学的研究に加えて、社会言語学的・言語政策的研究や言語教育的研究がなされてきたことがその研究の多様性をもたらし、その展開に寄与している。外来語現象は日本語、日本文化、日本社会にわたる学際的な性格を持っており、文化接触、近代化、国際化、さらには高齢化という社会問題とも関連している。このような広い視野を有した新しい外来語研究像を提示し、外来語をめぐって、新しい日本語研究の姿を提示する。そこで、ここ10年ほどの間で外来語研究のさまざまな面で活躍している第一線の研究者に論考を寄稿してもらい、多様なアプローチを提示した外来語研究書の刊行を企画する。

猛暑の夏、本書の刊行企画書に掲げる「趣旨」の文言が固まった。そして、そもそもの発端から4か月後の9月20日、次々と内諾をいただいた執筆予定者に向けて、出版社おうふうから正式に企画書が発送された。執筆テーマの枠組みは編者からそれとなく示されたものの、具体的な内容はもちろん執筆者の裁量に任せられた。制約があったとすれば、2012年秋の刊行、したがって原

あとがき

稿の締め切りは2012年3月末日、くらいだったであろうか。

とはいえ、一般に原稿の締め切りほど辛いものはない。編者も内心では原稿の遅れを心配していた。しかし、これは失礼な見込み違いだったと言わざるを得ない。原稿依頼から提出までが、予想外にスムーズだったのである。これは正直なところ嬉しい誤算であった。また、当初のテーマから変更になったケースもあったが、いずれもよい方向に動いたものばかりであった。

原稿の到着後は、にわかには編者の出番が多くなった。最初の読者として新鮮な原稿をくまなく読んでいくのは、実に楽しい作業だった。気付いたことは何でも編者のあいだで一旦は共有し、必要とあれば執筆者の方々にコメントをお返しした。このような編者と執筆者とのやり取りの中で、論文の内容がそれぞれに確定していくと同時に、本書の構成も最終的に「目次」のような形に落ち着いていった。

以上が、ほぼこの一年間の出来事である。執筆者の皆様には、刊行の趣旨にご賛同のうえ、窮屈な日程のなか創見に満ちたご論考をお寄せいただいたばかりでなく、編者のコメントにもその都度きわめて誠実にお応えいただいた。編者一同、この場を借りて心より感謝申し上げる。

本書は、一回限りのチーム編成で臨んだ「代表戦」のように思える。初めてチームメートになった方々もあれば、既に旧知の方々もある。しかし、例外なくこの機会を大切に、力をふるってくださった。編者として何よりもありがたいことである。一期一会ということをおぼえずにはいられない。

最後に、困難な出版事情のなか、本書の編集・出版を二つ返事で引き受けてくださった(株)おうふうの坂倉良一さんにも、改めてお礼を申し上げたい。外来語で言えば「チェンジ・オブ・ペース」、メール連絡を駆使した緩急巧みな編集術で、気が付けば予定どおり刊行の秋がそこに来ている。

2012年8月 猛暑の夏に

陣内 正敬
田中 牧郎
相澤 正夫

●編者紹介

陣内正敬（じんのうち・まさたか）関西学院大学教授

『外来語の社会言語学—日本語のグローバルな考え方—』（世界思想社、2007年）、『社会言語学』（共著、おうふう、1992年）

田中牧郎（たなか・まきろう）国立国語研究所准教授

「言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表などの作成と活用」（『人工知能学会誌』24-8、2009年）、「難解用語の言語問題への具体的対応—『外来語』と『病院の言葉』を分かりやすくする提案—」（共著、『社会言語科学』13-1、2010年）

相澤正夫（あいざわ・まさお）国立国語研究所教授

『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』（共著、ぎょうせい、2006年）、「外国語から外来語へ—言語・社会への定着過程を探る—」（上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院、2010年）

●執筆者紹介

金愛蘭（きむ・えらん）早稲田大学常勤インストラクター

『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』（阪大日本語研究 別冊3、大阪大学、2011年）、「外来語『トラブル』の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」（『日本語の研究』2-2、2006年）

茂木俊伸（もぎ・としのぶ）鳴門教育大学准教授

『国会会議録を使った日本語研究』（共著、ひつじ書房、2008年）、『講座ITと日本語研究1 コンピュータ利用の基礎知識』（共著、明治書院、2011年）

米川明彦（よねかわ・あきひこ）梅花女子大学教授

『集団語の研究 上巻』（東京堂出版、2009年）、『新 日本語—手話辞典』（全日本ろうあ連盟、2011年）

小川俊輔（おがわ・しゅんすけ）広島経済大学准教授

「日本社会の変容とキリスト教用語」（『社会言語科学』13-2、2011年）、「九州地方における『天国』の受容史—宗教差、地域差、場面差—」（『日本語の研究』8-2、2012年）

編者・執筆者紹介

井上史雄 (いのうえ・ふみお) 明海大学教授、東京外国語大学名誉教授

『日本語ウォッチング』(岩波新書、1998年)、『経済言語学論考一言語・方言・敬語の値打ち一』(明治書院、2011年)

荒川清秀 (あらかわ・きよひで) 愛知大学教授

『近代日中学術用語の形成と伝播』(白帝社、1997年)、『中国を歩く 辞書と街角の考現学』(東方書店、2009年)

梁敏鎬 (やん・みんほ) 全州大学研究教授

「外来語をめぐる意識に関する日韓対照研究」(『国語学研究』46、2007年)、「韓国語と日本語の外来語の表現: 複写とコピー、テイクアウトと持ち帰り」(韓国日語日文学会『言語表現をとおして見る韓日文化』、共著、J&C、2009年、韓国語)

関根健一 (せきね・けんいち) 読売新聞東京本社紙面審査委員会用語幹事

『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』(共著、ぎょうせい、2006年)、『ちびまる子ちゃんの敬語教室』(集英社、2007年)

塩田雄大 (しおだ・たけひろ) NHK 放送文化研究所専任研究員

「アクセント辞典の誕生 放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか」(『NHK 放送文化研究所年報』52、2008年)、“Constraints on language use in public broadcasting” (Patrick Heinrich and Christian Galan (eds.) Language Life in Japan: Transformations and Prospects, London: Routledge, 2011)

中山恵利子 (なかやま・えりこ) 阪南大学教授

「介護現場のカタカナ語」(『日本語科学』13、2003年)、「カタカナ教育の扱われ方」(共著、『日本語教育』138、2008年)

外来語研究の新展開

2012年10月20日 初版一刷印刷

2012年10月25日 初版一刷発行 定価は、カバーに表示してあります。

編者 ©陣内正敬

田中牧郎

相澤正夫

発行者 坂倉良一

印刷所 電算印刷(株)

発行所 (株)おうふう

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-4-5

Tel. 03-3295-8771(営業)

03-3295-8774(編集)

(振替)00140-2-665242

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。

ご意見、ご感想がございましたら、小社編集部までお寄せ下さい。

ISBN978-4-273-03698-0 C1081

ISBN978-4-273-03698-0

C1081 ¥2000E

おうふう

定価 **本体2000円** +税



9784273036980



1921081020000

外来語研究の 新展開

総論	外来語研究の意義	陣内 正敬
第1部	言語文化論的アプローチ—構造・歴史・語彙交流—	
	〈構造〉	
	外来語の基本語化	金 愛蘭
	文法的視点からみた外来語—外来語の品詞性とコロケーション—	茂木 俊伸
	〈歴史〉	
	言葉の西洋化—近代化の中で—	米川 明彦
	キリシタン語彙の歴史社会地理言語学—oratio オラシヨを例にして—	小川 俊輔
	〈語彙交流〉	
	日本語の世界進出—グーグルでみる外行語—	井上 史雄
	中国における外来語受容の歴史的・地域的変異	荒川 清秀
第2部	言語生活論的アプローチ—社会・マスコミ・教育—	
	〈社会〉	
	「『外来語』言い換え提案」とは何であったか	相澤 正夫
	日本語と韓国語の外来語の受容意識—イメージ調査の分析—	梁 敏鎬
	〈マスコミ〉	
	新聞の外来語はどのように生まれるか	関根 健一
	放送の外来語—傾向と対策—	塩田 雄大
	〈教育〉	
	日本語学習者の外来語意識—日本語教育における外来語教育を考える—	中山恵利子
	国語教育における外来語—コーパスによる類型化を通して—	田中 牧郎